

子ビク口昌英

昭和二十一年



昭和二十一年 かんぽう

目次

ポーランドへ	(1 / 2 / 3 / 4)	6
アンナ	(5 / 6)	24
キジ猫	(7)	30
いたずらな子供たち	(8)	38
ボイテック一家	(9)	43
日本大使館	(10 / 11)	54
タクシー	(12)	68
肉屋	(13)	74
新しい家	(14 / 15)	80
アメリカンスクール	(16 / 17)	94
デザイナー	(18 / 19)	108
スターレミヤスト	(20 / 21)	132
買物	(22 / 23)	155
エバ	(24)	167

再会
船荷
愛
グダンスクへ
船荷の整理
パーティー

(39 / 40 / 41)	(35 / 36 / 37 / 38)	(31 / 32 / 33 / 34)	(30)	(28 / 29)	(25 / 26 / 27)
269	247	210	202	190	175

ポーランドで苦樂をともにした妻子に

ポーランドへ 1

それが、僕のことでもめていることは、よくわかっていました。毎日、毎日、ご主人と奥さんが大きな声で議論をしているのです。僕は部屋の隅で小さくなり、尻尾を丸めて聴いていました。

「それはわたしだつてチビクロは可愛いわよ。できることなら、一緒に連れて行ってやりたいと思うわ。でも行き先が北海道や沖縄ならともかく、ポーランドなのよ、ワルシャワなのよ。この東京から一万キロメートル以上も離れた、地球の裏側にある国なんですからね。そこを良く考えなくっちゃ」

これは奥さんの声です。いつもはやさしい声なんです、が、議論をするときはちょっと刺々しくなつて、僕の繊細な耳にガンガン響きます。僕は奥さんが話すたびに、耳たぶを折り曲げ、音量を少し絞って聴いていました。

「でも、チビクロが僕らの本当の子供だつたら、それでも東京に残していくかい。ミコちゃんとひろしくんは一緒にポーランドに行くことになっているんだし、チビクロだけ残して行けないよ。チビクロは、生まれた時からわが家にいるんだし、犬とはいいいながら、わが家の一員みたいなものじゃないか」

これは僕のご主人の声です。なんとなめらかで、どっしりと重みのある、いい声なのでしょう。僕は耳をピンと立てて聴きほれます。僕が口がきけたら、

「さんせいー」

と叫びたいくらいです。

それに、ご主人の鼻の上に輝いている金縁の眼鏡の立派なこと。僕は一生のうちで一度でもいいからあんな素敵な眼鏡をかけて大通りを歩いてみたいと思っています。そうしたら、道を行く人がみんな振り返って、「なんて素敵な犬だろう」

と感心するにちがいありません。

時として、ミコちゃんとひろしくんがこの議論に参加することがあります。二人とも決まって僕の味方なので頼もしい限りです。

「ママ、チビクロも連れて行って上げましょうよ。チビクロも一回くらい海外生活を味わわせてあげなくっちゃ」

これが小学一年生のミコちゃんです。ミコちゃんは、丸い顔で丸い目をした可愛い女の子です。でも、僕がミコちゃんの靴をちょっとかじったりするだけで、

「チビクロ、お止め！」

と大声を上げて僕のことをにらみつけます。そのときは、顔が四角になり、目が三角になります。

「チビクロが行かないんなら、僕だってポーランドなんかに行きたくないな。ママはチビクロがかわいそうじゃないの」

これが、今年五つになるひろしくんです。ひろしくんは、色が白くて脚が長くて、なかなかカッコいい男の子です。いつも僕にエサを持ってきてくれるのですが、時々、

「オマチ！」

と言つて、ズイブン長いこと待たせることがあります。そんなときには、すこし憎らしいと思うことがあります。

「いつもママだけが悪者にされちゃうんだから。ママだつてなにもチビクロが憎くて連れて行かないなんて言っているんじゃないのよ。あんな遠いポーランドまで犬を連れて行くのは、それはそれは大変なことだから、言っているのよ。それなのにだれもわかつてくれないんだから・・・」

もう奥さんは半分泣き声です。目尻につつすら涙がにじんでいます。ご主人は困つたような顔をして黙つてしまいました。人間の社会には、泣く女と児童には勝てない、ということわざがあるようですが（ご主人が良く口にしますから）、ご主人を見ているとこれがもっともだということがよくわかります。そんなわけで、僕は一匹だけ東京に置いていかれることになってしまいました。

2

ポーランドへ出発する日の前日、ご主人は、僕を犬小屋ごと通りの向こう側にある、ご主人の両親の家に預けに行きました。

「母さん、チビクロはお風呂が好きなんです。申し訳ありませんが、週に三回はお風呂に入れてよくブラッシングして下さい。それに、お豆腐にカツオブシをまぶしたのが大好物なんです。豆腐もカツオブシも高くなりましたが、たまにはご馳走してやってくださいね」

「ご主人は、僕の頭をなでながら、お母さんに頼んでいます。」

「お前に言われなくなつて、チビクロのことなら、わたしや何だつてよく知っていますよ。生まれたときからの長いつきあいだもの、ねえチビクロ。ほら、今日からここがお前のおうちだよ。引越しのお祝いにちゃんとお豆腐にたつぷりカツオブシをまぶしたのを用意しましたよ。ミコちゃんもひろしくんも遠い遠いところへ行つちまうんじゃ、おばあちゃんさびしいですからね。これからはお前だけが頼りだよ、わかつたわね、チビクロ」

「ご主人のお母さん、つまりミコちゃんひろしくんのおばあちゃんは、僕を膝の上に抱き上げ、僕のほっぺにチュッとキスしました。僕は、お返しに長い舌を出しておばあちゃんのほっぺたをペロリとなめてあげました。梅干しばあさんなんて近所の子供たちが悪口を言っていますが、決して梅干しの味はしませんでした。いつだったか、ひろしくんが転んで泣き出したとき、涙でいっぱいのはっぺたをなめてあげたことがあります、そのときの味にそっくりでした。」

奥から真っ白いハの字髭を生やした、ご主人のお父さん、つまりミコちゃんたちのおじいちゃんも出てきて、

「ほ、チビクロ来たか。今日から、わしらが可愛がつてやるからな。明日は空港までわしらと一緒に見送りに行くかね？」

と、髭をしゃきながら言いました。

「クーン、クーン」

僕は一生懸命に尻尾を振りました。

「よし、よし、わかったわかった」

おじいちゃんは目を細めました。そして僕の目を覗き込むようにして言いました。

「明日、お前たちがポーランドへ行ってしまうのも知らず嬉しそうに尻尾を振っておるが、チビクロも不憫なやつじゃ」

このおじいちゃんが、これでも人間の世界では有名な心理学者といつのですから、僕には理解できかねます。

3

こんなにすがすがしい、いい匂いのする朝はめったにありません。どこからともなく心をわくわくさせるような香りがただよってきます。ああ、これは春の香りです。もつそろそろ二月の終りですから春がすぐ近くに来ているに違いありません。僕は思いきって鼻の先を空中につきだして胸いっぱい素敵な匂いを吸い込みました。そのとたん、今日がご主人一家の出発の日なのだということがひらめきました。気持ちがちまちシャンと引き締まりました。

「そうだ、今日は僕にとつてとっても大切な日なんだ。うかうか過すわけにはいかないんだ」

僕は、犬小屋から出て、その前をせかせか歩きまわり、あれこれと思案をめぐらせました。

「飛行機の出発は午後十時三十分だから一時間前に空港に着くとして、タクシーには七時頃来てもらえばいい

な

とご主人が言っていたのを思い出しました。それにご主人一家が行くポーランドのことも繰り返し繰り返し頭のなかではんすうしてみました。これは商社員のご主人が、奥さんやミコちゃん、ひろしくんと話し合っているのを聞きかじった、文字通りの耳学問です。

それによるとポーランドは、日本の北の端よりもっと北にあるとても寒い国らしいのです。冬には皆んな厚い毛皮のコートを着、毛皮の帽子をかぶっている国らしいのです。日本には、山が多く、どこへ行っても山が見えるのにくらべて、ポーランドにはほとんど山がなく、どこも平たい国らしいのです。

飛行機で行っても、ポーランドへ行くには二十時間もかかるらしいのです。僕は、ご主人の車で箱根や日光や鎌倉まで連れて行ってもらったことがありますが、それ以上遠くへは行ったことがありません。それにこんなことを言うのは恥ずかしいのですが、これまで一度も、新幹線にも飛行機にも乗ったことがないのです。

でも、二十時間ぐらいで着けるのなら大したことはなさそうです。なんと言っても一日もかからないのですから。いつだったかご主人に日光に連れて行ってもらったとき、帰りの道路がひどく混んで十時間もかかって帰って来たことがあります。あの二倍程度なら大したことはありません。僕は車のなかではいつもぐうぐう眠ることにしていますから、十時間かかるうと三時間で済もうと大した差はないのです。とにかく食べ物さえ買えば二十時間車にゆられても平気だという自信があります。

・・・でも、今度は食べ物を買える保証がありません。僕はこの日は、おばあちゃんが出してくれる食事を朝昼晩おなかいっぱい食べました。

「チビクロったら、体は小さいのに良く食べること。最初からこの調子ならうちに置いてもなんの心配も要らなそうね」

おばあちゃんは感心しています。

それにもう一つ心配なのは、ポーランドは寒い国で二月でも厚い毛皮のコートが必要と言つことです。でも、その点なら、僕はもともと毛皮を着ているようなものですし、なんとかなりそうです。

五時過ぎにはあたりはすっかり暗くなりました。六時半頃僕はそつと犬小屋を抜け出ました。こんなときには、僕みたいな真つ黒の毛並みはとても好都合です。通りを渡つてご主人の家に行き、玄関脇の暗闇のなかに身を潜めました。幸い、だれの目にもつかなかったようです。

七時きっかりに二台のタクシーがやって来ました。おじいちゃんとおばあちゃんも、やって来ました。玄関口に積み上げてあつた手荷物を皆んなが手分けしてタクシーのトランクに積み込み始めました。

おばあちゃんが、

「ヤスオ」

とご主人の名前を呼びました。

「お前のところにチビクロは戻っていないかい。一緒に連れて行こうと犬小屋へ行つてみたらいないんだよ。晩ごはんをあげたときにはちゃんといたんだがねえ」

「いや、戻っていませんよ。今ごろどこへ行つたんでしょね」

「まったく困つたわねえ。もう捜す時間もないし、せつかく見送りだというとき、チビクロは、いなくなってしまうんだから」

おばあちゃんは、ためいきをつきました。

「チビクロ、いなくなっちゃったの。じゃ、僕ちよつと捜してくる」

赤と黒のチェックのオーバーコートでめかしこんだひろしくんは、おばあちゃんの家の方へ走り出ししました。

「ひろし、もう時間がないのよ。飛行機に遅れちゃうわよ。チビクロはおばあちゃんが後で見つけて下さるわ。この間もしばらくいなくなつてたけど、ちゃんと帰ってきたでしょ」

奥さんがひろしくんの後ろからあわてて追いかけていきます。ひろしくんは小さい割にはずばしっこいのです。

「僕、チビクロが、見送りに来ないならポーランドなんかには、行かない」

「ひろし、そんな聞き分けのないことを言うもんじゃないよ」

これは、ご主人の声です。

ああ、僕としては、どんなに辛かったことでしょう。できれば、

「ここにいろんだよ、ひろしくん、ワン」

と飛び出して行きたいところでした。しかし、それでは僕の計画がおじちゃんになりかねません。僕はみんなが騒いでいるすきに、物陰から飛び出し、すばやくタクシーのトランクに忍び込みました。積まれたスーツケースの一番後ろに小さなすき間があったので、見つからないように、そこに身を鰐のように細くしてうずくまりました。

やっと、ひろしくんもなつとくして、戻って来たようです。トランクの蓋もボタンと閉められました。周

りは真つ暗になりました。ガクンと一揺れしてタクシーは走り出しました。

狭いトランクの中には、ご主人一家の匂いが充満しています。積み込まれたスーツケースや細々した手荷物から、日頃からなじみの匂いがしているのです。この匂いを嗅いでいるだけで、安心できます。

時々急カーブをきるのでしょいか、体がいきなり右へ引っぱられたり、左へ連れ戻されたりしますが、真つ暗闇のなかではとりたててやることもないので、例によってウトウトしていました。

どのくらい走ったのでしょうか。車がゆっくりと止まりました。皆んなが、降りている物音が伝わってきます。トランクの蓋が開きました。明るい光がさつと差し込んで来ました。ここで見つけたら、元も子もありません。僕は細めていた体をもつと細めて、光の当たらないところに身を隠しました。タクシーの運転手が、大きなスーツケースをよっこらしよと持ち上げ地面に降ろすためにちよつと横をむきました。

そのわずかの隙に、僕はすばやくトランクから飛び出し、さつとタクシーの下に潜りこみました。幸いだれにも気付かれなかったようです。

ご主人一家は、それぞれ手荷物を持って、空港の大きなビルディングへ向かって歩き始めました。その二十メートルほど後ろから僕はこっそりついて行きました。

ご主人は、ビルの中の受け付けのカウンターへ行き、そこに座っているおそろいの赤いスーツを着た女性と話し始めました。背広の胸のポケットから、大きな財布を取り出し、そこからさらに切符のようなものを取り出して、その女の人に手渡しました。大きなスーツケースやバッグなどを預けたりしています。きっと飛行機に乗る手続きをしているのでしょう。あまりその近くに行くと思わなくてしまつので、二十メートルほど離れた柱の陰から見ているのですが、それだとはつきりしたことは、良くわかりません。

空港の時計はもう九時四十分になっています。このまま、ご主人一家の様子を遠くからぼんやり見ていたのでは、せっかくの計画もおじゃんになりかねません。

確かご主人一家の乗る飛行機の出発は十時半のはずです。僕はとにかくそこらじゅうを走り回って空港の様子を探ることにしました。空港のロビーはまだかなり混んでいます。人と人の足の間をうるちよるとせわしなくはいくぐり、荷物の山の上をびよんびよん跳び超え、あっちのカウンターこっちのカウンターを嗅ぎ回りました。それこそ足を棒にして走り回ったあげく、僕は大笑見をしました。どうも人間と荷物とは別の入り口から飛行機に乗せられるらしいのです。それに人間が乗り込む方の検査は、とても厳しくて、それこそネズミ一匹、入り込むすきがないようです。小さいとは言え、ネズミより十倍以上は大きい僕に入り込むチャンスはないも同然です。

とすれば、チャンスは一つしかありません。

僕は、先ほどご主人がいたカウンターに引返しました。カウンターはずらりと並んでいます。どのカウンターにも、きれいな女の人が座っていて、乗客から荷物を受け付けています。まず荷物を秤の上に乗せると、重さ何キログラムという表示がでます。重さを量り終わると女の人はボタンを押します。すると荷物の下のベルトが動きだし、荷物は後ろの穴の中に吸い込まれて行くのです。

見渡すと、幸い一つのカウンターのランプが消えており、係の女の人が座っていません。僕は小走りにそこへ行き、近くに人影がないことを確かめて、素早く、荷物を量る台の上に飛び乗り、カウンターの下に潜りこみました。だれにも気付かれなかったようです。僕はそこで一息入れてから、今度は一気に壁に開いている穴へ向かって突進しました。穴の中に飛び込んだ瞬間僕はたちまち足を取られ、すってんころりとひっ

くり返り、そのままスーッと滑り落ちて行きました。まるで奈落の底に落ちて行くような感じがしました。やっとこさ止まったところでよろよろしながら立ち上がると、そこは長い滑り台の一番下でした。さきほど飛び込んだ壁の穴から先は滑り台になっているのです。同じ様な滑り台がたくさんあって、さまざまな形をした荷物が次々に滑り降りて来ます。下では、男の人が待ち構えていて小さな運搬用の車の上に荷物を載せています。僕の滑り台にはだれもいなかったので助かりました。

僕は、見つからないように急いで物陰に隠れ、鼻をピクピクうごめかしました。数千、数万の匂いの中から、たった一つの匂いを選び出すのです。

クンクン、クンクン…… ありました！

ご主人のスニーカーの匂いです。僕の匂いも混じっています。先ほどのタクシーの狭いトランクの中で付いたのです。もうそのスニーカーは、十五メートルも向こうの運搬車に積まれて、今しも、動き始めようとしています。

僕は、あっちの物陰、こっちの物陰に、巧みに隠れながら、長く数珠つなぎになった運搬車の跡を追いました。運搬車はやがて屋外に出ました。そこは、見渡す限り遠くまでだっ広く、長い光の帯のような、滑走路の誘導灯がどこまでも続いています。蛇行しながら進む運搬車のすぐ後ろから僕はとことことついて行きました。

運搬車は大きな飛行機のお腹の下で止まりました。見上げるとそのお腹のところに大きな黒い口がぱっかり開いています。

その中へ運搬車から荷物の積み込みが始まりました。どうやったらその中にうまく忍び込めるのでしょうか。

運搬車に一人、お腹の中にも一人おじさんがいて、荷物をきちんと収納庫に整理しているのです。僕は窮余の一策を思いつきました。

僕は、運搬車から荷物を持ち上げているおじさんの後ろにこっそり回り、いきなりお尻にガブリと噛みつきました。

「イテェー！」

おじさんは大声を上げ、両手でお尻を押さえながら後ろを振り返りました。もちろんその時には、僕は運搬車の下に身を隠しています。

「どうしたんだ？どうしたんだ？」

飛行機の中からもう一人のおじさんも降りてきました。

「いや、いきなりなにかにお尻をガブリとやられたんだ。こんな所に犬がいるわけもないんだが、イテテテ……」
「なに、いきなりガブリだつて？こんなところで？どれどれ」

飛行機から降りてきたおじさんが傷口を調べています。

僕は、申しわけないと思いますが、この隙を利用しないわけにはいきません。素早く、運搬車の屋根にかけ上り、飛行機の収納庫目がけてジャンプしました。やっとこさでしたが、入り口の端に前足がかかりました。必死の思いで、体を持ち上げ、収納庫の中に入りこむのに成功しました。思ったより、広いところでした。すでにたくさんの荷物が積み込まれています。これなら、簡単に見つけられそうにありませんが、念のため、一番奥の、大きな棚の下に潜りこみました。

さきほどのおじさんが、収納庫の中に戻って来て、作業を再開しました。じっと息を潜めているとご主人

の匂いがすぐ近くにやって来ました。ご主人のスーツケースやバッグが積み込まれたにちがいありません。

やがて、作業が終わったとみえて、おじさんはいなくなり、収納庫のドアがピツタリ閉ざされました。もう周りは鼻をつままれてもわからない闇になりました。

キーン。ジェットエンジンが唸りをたて始めました。飛行機がゆつくりと動き始めたのがわかります。ジェットエンジンの音が一段と高くなりました。ちょうどスピードを出すのが好きなご主人が車のアクセルをぐいと踏み込んだときの感じに似ているなと思っていると、今度は、体が空中に放り出されたような感じになり、そのまま身体ごと床にぎゅーっと押し付けられ、なんとなく後ろへ引つ張られるような感じがします。それがしばらく続いたあとは、エンジンの音は少し違いますが、ご主人の自動車に乗っているのと同じで違わなくなりました。いえ車より揺れが少なく、自分の犬小屋に寝ているのとあまり変わりなくなりました。

「ジェット機は、富士山よりずっと高いところ飛ぶんだよ」

ひろしくんが、いつだったかご主人の郷里の長崎に連れて行って貰った後で、飛行機に乗ったことのない僕に、自慢そうに話してくれたことがありました。真つ暗の収納庫の中では、右も左も、上も下も、富士山の上なのか海の上なのか、なにもわかりません。なにもわからないので、例によって眠ることに決めました。起きているとお腹も空いてくるに違いありませんし、これから二十時間も、なにも食べられないのですから、とにかく、眠るに限るというものです。

もうあれから何時間たったのでしょうか。

あたりは相変わらず真つ暗で、ジェットエンジンの音が鈍く響いています。

お腹が猛烈に空いてきました。喉が乾いてひりひりします。しかし、今さら弱音を吐くわけにはいきません。どんなに辛いことがあっても我慢しようと決心して飛行機に潜りこんだのですから。

真つ暗の収納庫の中で慰めになるのはご主人一家のスーツケースの匂いだけです。ご主人の頼もしい匂いや、奥さんのくすぐったい匂い、ミコちゃんやひろしくんの甘ったるい匂いが漂って来るのです。

それに匂いと言えば、僕の頭を狂わせそうなソーセージとベーコンの匂いがどこからともなく漂って来ます。

よほどそのありがを探り出して食べようかと思いましたが、そんなことをしたら見つかってしまうだけだと思い直し、あきらめました。

——犬は食わねど高ようじ

——痩せ我慢 負けるなチビクロ ここにあり

いろいろな口からでまかせのおまじないを唱えましたが、一向に効き目がありません。もうお腹が空いて目から火花が出そうになった頃、ドスンと大きな音がして、飛行機のスピードが、急ブレーキをかけたときのようにぐぐーっと落ち、僕は壁にぐいぐい押し付けられました。どうやら、地上に降りたようです。やがて飛行機は止まってしまいました。

しばらくすると収納庫のドアがガラリと開きました。続いてなにやら聞き慣れない人間の言葉が耳に飛び込んで来ました。入口から入ってくる空気が、やけに冷たく感じられます。僕はブルブルと身震いしました。

と、金髪の男の人がのそつと入って来て、荷物を運び出し始めました。ご主人の匂いもすうつと遠のいて行きました。僕は、金髪の男の人が、反対側の荷物をかついでいるすきに、ドアから、エイヤとばかり地上に飛び降りました。ちよつとつんのめりましたが、大丈夫です。素早く運搬車の下に潜り込みました。

そこから飛行機を見上げると、今しも乗客がタラップを降りてくるところです。その中にご主人一家の元気な姿も見えます。ご主人の金縁の眼鏡がキラリと光っています。僕は、飛び出して行つてご主人にじゃれつきたい思いにかられましたが、飛行場というところは入ったり出たりするのがとても面倒なところだといふことがよく分かっていましたので、じつと我慢していました。

ご主人一家はタラップの下で待っていたバスに乗り込んでいます。と、そのとき、僕が潜り込んでいた運搬車がいきなり動き始めました。こうなれば運搬車の下に隠れたままついて行くより仕方ありません。右に左にカーブを切る車の下に隠れて走るなんてなかなか難しいことです。前輪を注意深く見、曲がる方向を間違えないように気をつけながら、僕はただ走り続けました。

ところが走ることにあまりに一生懸命になっていたので、運搬車が急停車したとき、思わず車の前に飛び出してしまったのです。

「アッ」

思つたときは、もう遅すぎました。

「オッ」

「ヤッ」

僕に気付いた運搬車の運転手が鋭い叫び声を上げました。大勢の人が一斉に振り返り、僕の存在に気付くと口々に何やらわめきながら、突進して来ました。言っていることはさっぱりわかりませんが、僕を捕まえようとしていることはよくわかります。こうなればもう逃げるよりありません。

僕は必死になって走りました。ここで捕まってしまったらこれまでの苦勞も水の泡です。

走りながら振り返ると、兵隊さんやおまわりさんや、いろんな格好をした人が五十人も追いかけて来ます。この追いかけてこを、空港の展望台から眺めている人もいます。その中には僕を応援してくれている人もいます。

僕は生まれつきかけっこは得意で、急カーブを切ったり、急停止もお手のものなので、いつもだったら、人間に追いかけられたぐらいで困ることはないのですが、何といても今はお腹が空き過ぎています。走っているうちにふらふらして来ました。

飛行場はだだっ広くて、どこまで走っても体を隠せるようなものが見つかりません。僕は、ひーひーあえぎながら、走り続けました。

と、ドタドタした人間の足音に混ざって、それに比べたら十倍も軽やかですばしっこそうな足音が聞こえて来ました。もう、追いつかれてしまいそうです。

「おい、そのチビくん」

僕の耳にはつきりそう聞こえたのです。それは懐かしい犬語ではありませんか。僕は驚きました。振り返

ると、五メートルもないところに、僕の三倍もありそうな、すらりと形姿のいいシェパード犬が追いかけて来ているのです。人間は、それより五十メートルも離れています。

「チビくん、そのまま真直ぐ走り続けなさい。僕はこの空港の警備犬なんだ。だからこつして君を追いかけるければならないけれど、決して君の敵ではない。僕の言う通り走りなさい。そうすれば、君は飛行場からうまく逃げ出せるはずだ。そ、そこは、右!」

僕は指示されるままに、右に曲がりました。いったいこの犬が本当に味方なのかどうかわかりませんが、こうなればこの犬に頼ってみるほかに手はないと思ったからです。

時々、シェパードは、ウーワンワンとおどすような吠声を上げるのですが、その都度小さな声で、

「チビくん、今度は左」

とか、

「そのまま、真直ぐ」

とか、やさしく助言をくれるのです。

「このままあと百メートル真直ぐ行くと、金網のフェンスがある。そこに君なら通り抜けられる穴が一つだけ開いている。そこから逃げなさい」

後百メートルか。広い飛行場をもう半分以上走ったに違いありません。僕は最後の力を振り絞って走りました。シェパードは僕と並ぶようなところを走っています。

「お見かけするところ、その監察札のついた首輪にしても、君はポーランドの犬ではないようだね。あの飛行機で密航して来たようだね。ポーランドには、不案内のようだから、うまくフェンスの外へ逃れたら、その

付近に住んでいるブードル犬のアンナ嬢に連絡を取りなさい。彼女は親切だから、きっと君の力になってくれるはずだ」

僕に今にも噛みつかんばかりのふりをしながら、シェパードはこう言うてくれたのです。目の前にフェンスが迫って来ました。確かに僕がなんとかすり抜けられそうな穴が開いています。

僕は、そのままのスピードで、その穴に突っ込みました。毛がひっかかり、針金の先にいくつも塊が残りましたが、そんなことを気にする余裕はありません。

フェンスの直前で急停止したシェパードは、穴の間から、鼻先を突き出して、いかにも残念そうに低くウーと唸っています。が、その実、

「チビくん、よく頑張った。達者だな。僕はマーテックって言うんだ。アンナにもよろしく伝えてくれ」と言うてくれたのです。

「マーテックさん、本当にありがとう。お陰で助かりました。僕は日本から来たチビクロと言います」

僕は、弾む息の下からやっとそれだけ、言いました。見れば先ほど僕を追いかけて来た人達は、百メートルも向こうで完全にへたばって座り込んでいます。マーテックは、僕のほつを振り返り振り返り、その人達のほつへと引き返して行きました。

アンナ 5

フェンスの外で僕はしばらく休みました。空きつ腹でいきなり全力で走ったので、体中の力が抜き取られたような感じです。それに先ほどは何でもないと思ったのですが、よく見ると金網を潜り抜けた時すこばかり引っかけたとみえて、右肩のところに血がにじんでいます。なめようとしても、そこまで首が回りません。ずきんずきんと傷の痛みが空きつ腹に響きます。

辺りを見回すと枯れた草地在ががり、ところどころに雪がまだ融けずに残っています。すっかり葉の落ちた木がぼつんぼつんと立っています。その少し向こうの方には、茶色を帯びた林があり、うつすらと雪をかぶっています。

マーテックが、言っていました。ここはもうポーランドなのでしょうか。日本の景色とまったく違っています。日本ではもう春の匂いがしていたのに、まだ、冬の匂いだけしかしません。

僕はマーテックが言っていたブードル犬のアンナを捜すことにしました。そこで四つん這いのまま首筋を伸ばし、空中に口を突き出して、

「アンナさーん」

と、遠吠えしました。最初は、僕の発音で通じるか心配でした。ただマーテックの言うことが全部わかったので、僕の発音でも大丈夫だろうと思い直しました。

「アンナさん」

僕は、二度、三度遠吠えを繰り返しました。

と、

「だーれ、わたしのことを呼んでいるのは」

遠くから雌犬の声が返って来ました。よくわかる犬語です。

「僕、チビク口って名前の犬です。空港の警備をしているマーテックさんにあなたのことを紹介して貰ったのです。僕はつい今しがた日本という国から着いたばかりです。お腹が空いて死にそうですし、今夜泊まるどころありません。すっかり困っているんです」

「えっ、日本から？日本ってずつつと遠いところにある国なんでしょう。その日本から？」

「そうです。その日本から」

「まあ、それはお疲れでしょう。ポーランドへようこそ。でも日本の犬も、わたしたちと同じ言葉を話すのですか」

「ええ、どうもそうらしいですね。こつやってあなたとなに不自由なくお話しできるのですから」

「いつだったか、通りで日本人が話しているのを立ち聞きましたことがあつたけれど、何を言っているのか、まったくチンブンカンブンだったわ」

「つい今しがた空港でポーランド人に追いかけられたんですが、何を言っているのか、僕には何もわかりませんでした」

「人間って偉そうなことを言っているけど、あんがい遅れているのね。その点犬族のほうが進んでいるって

わけね。日本の方ともこんなに簡単にお話しできるんですもの。あら、いけない。あなたはチビクロっておしゃったわね。あなたが、お腹を空かせているのも忘れてすっかり長話してしまつて、ごめんなさいね。わたし、今そちらに行けないので、わたしの家にやつて来て下さらない。わたしの声のする方へ真直ぐに駆けていらつしゃれば、すぐわかりますよ」

僕はアンナの声に導かれて、枯れ草の野原を横切り、小さな木造の家の傍を通り抜け走っていききました。薄く雪をかぶった林の中の小道をしばらく行くと、大きな石造りの家が、目の前に現われました。

「チビクロ、こつちよ」

その大きな家の裏手からアンナの声がします。急いで裏に回るとそこには、大きな木がいつぱい生い茂った広い庭があり、建物の半地下になったガレージの前に、ほっそりと姿のいい白いプードルが鎖につながれて立っていました。

それが、アンナでした。僕はアンナがあまりに美しい雌犬なので、すっかり気後れしてしまいましたが、車の通り道になっている舗装した通路伝いに、そのまま歩調を落とさず、アンナのそばまで走り続け、思い切つてアンナの鼻の頭に自分の鼻の頭をこすりつけました。これが僕らの仲間の、はじめましての挨拶です。ポールランドでも同じ様な挨拶が通用するのか、最初は不安でしたが、同じ犬語が通用するのなら、この挨拶も通じるのではないかと思つて、思い切つてやつてみたのです。

アンナが、うれしそうに鼻の頭をこすり返して来たときは、本当にほっとしました。それにアンナはピンと伸ばした、美しい尻尾を、威勢よく左右に振っているではありませんか。これは最高級の歓迎のしるしです。鼻だけこすり返しても、尻尾がだらしなく垂れていたり、そのこすりつけた鼻で相手の匂いを胡散臭げ

にくくん嗅ぎ回ったりするのは、けっして友好的な態度とは言えません。そんな犬とはそれ相応のつきあいをしなければなりません。

「早速ですけど、チビクロはお腹がぺこぺこなんですよ。どうぞ、これを食べて下さい」

初対面の挨拶もそこにアンナは、アルミボールによつた肉の塊を勧めてくれました。

ああ、二十数時間ぶりに口にする食べ物です。遠慮している時ではありません。僕は勢いよく、肉に飛びつきました。

なんとおいしい肉でしょう。こんなにたっぷりこんなにおいしい肉を食べたのは初めてでした。ポーランドに出発する前に、奥さんが、

「お友達の話だと、ポーランド料理って、あまりおいしくないらしいのよ。困るわア」

などと、ご主人と話しているのを聞いたことがあります。この肉に関する限り日本の油っぽい肉よりよっぽどおいしく、しかも量がたっぷりです。ご主人だつてこんなにいい肉をこれだけたっぷり食べたことは滅多になかったに違いありません。

僕がおいしそうに食べているのを、傍らからアンナは満足そうに見ていましたが僕の右肩に血がにじんでいるのに気付くと、

「まあ、かわいそう、こんなところを怪我して」

と、やさしくなめてくれました。

食事が終わると僕も犬ごころが着いて、アンナに日本からポーランドへやって来たいきさつを話す余裕が生まれました。僕が飛行機に忍び込んで、密航して来たことを話すと、

「まあ、チビクロって勇気があるのね」

アンナが感じ入ったようにため息をつくので、僕もなんだかすっきり嬉しくなって、日本にいたときよりも言葉がなめらかに飛び出してくるしまつです。ここが日本から一万キロメートルも離れたポーランドという国で、今日知り合ったばかりの友人と話し合っているなんてまったく思えないほどです。

「そんな訳で、僕は飛行場でご主人一家とはぐれてしまったんです。だから、これから、どうしても捜し出さなければならいんです。でも、右も左もわからないポーランドで、いったいどうして捜し出したらいいのか、すっかり途方に暮れているんです」

僕の話しを聞き終わるとアンナは、

「チビクロ、心配しなくてもいいわよ。ご主人を捜し出すまで、いつまでもわたしの小屋に泊まって下さってもいいし、わたしも近所の仲間に連絡をとって、あなたのご主人一家のことをいろいろ調べて貰ってあげるわ。今日は疲れたでしょうから、早めに、休んで下さい」

と励ましてくれるのでした。

時刻はまだ三時半ということでしたが、あたりはもう暗くなってきました。僕はアンナの言葉に甘えて、その晩は、ガレージの中に作られたアンナ用の木箱に泊めてもらうことにしました。

夜になると、サラサラと音を立てて小雪がちらつき、寒さも一段と厳しくなってきましたが、アンナと体をすり寄せて眠りましたので、少しも寒くありませんでした。

翌朝、目を醒ますと周りはいしんと静まりかえっています。アンナは僕に体をびつたりと押し付けて眠っています。スヤスヤいい寝息です。柔らかい匂いがします。僕は幸せな気持ちで、アンナの寝顔を見つめていました。

ガレージのドアには、アンナが外へ出られるように、小さな出入り口がついています。そこから、外を見ると、どこもかしこも真っ白です。きつと夜中じゅう雪が降ったに違いありません。こんなにたくさん積もった雪を見るのは初めてです。すっかり嬉しくなると、僕はガレージの外へ出、真っ白い雪の上でピョンピョン跳びはねて遊びました。雪はサラサラしていて、少しも体にはくっつきません。

しばらくすると、アンナも起き出して来て、僕と一緒に飛んだり跳ねたり、ころげまわったりし始めました。鎖につながれているアンナは、ガレージからあまり遠くには来られません。後ろ足で立ち上がり、ボンボンとじょうずに飛び跳ねます。僕もアンナに合わせて後ろ足で立ち上がり、前足を合わせてボンボンと飛び跳ねました。僕たちの周りに白い雪が舞い上がります。とても素敵です。

その時でした。

「クリーッ」

いきなり大きな音が頭の上から落ちて来ました。いえ、本当にクリーッと言われたのかどうかはつきりしません。なにしろ聞き取れないポーランド語で言われたのですから。でも、どなられたことははっきりわかりました。思わず、首をすくめ、僕は、とっさに走り出しました。後ろから、怒鳴り声が追いかけて来ます。

アンナが、あわててガレージの中へ走り込むのが眼の端に映りました。

三十メートルも走ったところで後ろを振り返って見ると、石造りの家の窓から、顔中ひげだらけのおじさんが、上半身を乗り出すようにして、僕に向かって右腕を高く振り上げ、大声でなにやらめきちらしているのです。

僕は、安全のために、それからさらに二十メートルぐらい離れたところにあった、大きな木の後ろに隠れて、アンナの家をつかいました。

しばらくすると、さきほどのひげのおじさんが庭に現われ、嫌がるアンナをガレージから引きずり出して家の中に連れ込むのを見えました。アンナのかぼそげな悲鳴が聞こえて来ます。アンナはきつとおきゅうをすえられているでしょう。僕のうかつさのために、なんの罪もないアンナに迷惑をかけてしまい、申し訳なさで、胸がはちきれそうになりました。

これでは、アンナのところへ戻って行くわけにもいかなくなりました。せつかく、頼りになる友達ができ、安心して泊まれる場所が見つかったと思えたのも束の間、僕は、真つ白く雪の降り積もった、右も左もわからないポーランドの町に、またしても一匹だけポツンと放り出されてしまったのです。

キジ猫 7

昨晚お腹いっぱい食べたので、それほど空腹は感じません。しかし、このまま木の下に座り込んでいたの

ではどうしようもありません。僕は立ち上がり歩き始めました。どこへ行くと言つ当てはないのですが、

——犬も歩けば棒に当たる

そう思つて、人間の匂いのもつと強くする方へ向かつて歩き始めたのです。

林を抜けて、しばらく行くと、人家が次第に増えてきました。道に沿つて歩いて行くと石畳の大きな通りに出ました。驚いたことに馬が荷馬車を引つ張つて走つていゝのです。シャンシャンと鈴が鳴つていゝ。馬の吐く息が白く見えます。御者が「ビジョービジョー」と大声で掛け声をかけていゝ。荷車には僕の毛並みのように真つ黒な石炭がいっぱい積んであります。ご主人が西部劇映画が好きで、僕もいつのまにかファンになつて、テレビで何度か馬車にはお目にかかったことがありましたが、本物の馬車を見るのは生まれて初めてです。僕はすっかり氣に入つて、馬車の後ろから馬の歩くまねをしながら、ついて行きました。

幾つもの角を曲がり、やがて石造りの大きな屋敷が、両側に立ち並んでゐる大きな通りに出ました。一つ一つの屋敷は、緑色のペンキを塗つた金網の塀に囲まれていゝ。馬車は、そのなかの一つの建物の前で止りました。御者は、御者台から降りて、大きなスコップで石炭を下ろしにかかりました。僕は初めて見る光景なので感心して見ていました。

「ソコノオ若ケー」

いきなり後ろから声を掛けられました。驚いて振り返ると、丸々と太つた大きなキジ猫が、緑の金網の塀の上から僕を見下ろしてゐるのです。

「この辺りではあまり見掛けない顔だが、いったどこからおいでなかつた」

犬に向かつて、こんなふうになを掛ける猫など日本ではこれまでお目にかかつたことがありません。日本

の猫と来たら、犬の姿さえ見れば、すぐそこそと物陰に隠れてしまつのです。僕はちょっとむっとして、「どこから来ようと僕の勝手じゃないか。第一、僕が日本から来たと言つたつて、君には日本がどこにあるか知つちやあいないでしょ」

と言ひ返しました。

「なに、日本だと。そいつはこのワルシャワの中にあるのかね」

ほれ見ろと思ひました。ワルシャワはポーランドの首都です。それくらいのことはこの僕でも知つています。と言つても、これはご主人からつい最近聞きかじつたことなのですが。ところがこのキジ猫ときたら日本がワルシャワの中にあるのかと聞く始末です。日本はポーランドの中にだつてありはしないのに。

「君が物を知らないのには呆れちゃうね。日本はワルシャワどころか、ポーランドの中にさえないんだよ。ずつとずつと遠いところにある別の国なんだよ」

「お若けーの、日本がワルシャワにないつてことはわかつたよ。それだけわかりや沢山だ。お前さんの口のききかたから察するに、日本つてのは、あまり礼儀作法のうるさくない国みたいだね。わっしは、お前さんが、なんとなくお困りのようだと思つて、ちょっと声を掛けただけのことで、別に、日本のことが知りたくつて声を掛けただけじゃござんせん」

これには、僕も参りました。ポーランドでは、どうも猫も犬も対等に口をきくらしいのです。

——郷に入らば郷に従え

そう思つて僕はあつさり兜を脱ぎました。

「失礼な口をきいて悪かつた。謝ります。お察しのように、僕はこの辺りはもちろんのこと、ワルシャワのこ

とはまったく知らないんです。良かったら少しばかり教えてくれませんか」

「そうくりゃ一肌脱ぎやしょう。わっしのすみかはこの奥でござんす。遠慮せずに、ちよっと寄っていきやせんか」

キジ猫が案内してくれたのは、石造りの屋敷の裏庭にある、樅の木の下の小さいレンガ積み的小屋でした。見掛けは、今にも崩れ落ちそうな感じなのですが、レンガがうまく積まれていて、びくともしません。中は結構広くて、ボロ布がびっしり敷き詰められており、温かくて快適です。

「こんなものしかありやしません、口にあってら嚙ってみて下さい。隣の家からちよいと失敬して来たソーセージの切れ端でござんす。少々古くなつてはおりやすが」

朝からなにも食べていないので言われてみると、お腹が空いていました。僕は遠慮なくご馳走になることにしました。固いことは固いのですが、よく嚙むとおいしさが口中に広がってくるようなソーセージです。昨日の肉といい、今日のソーセージといい、日本で食べたものより、おいしいのです。これは空腹なせいだけではありませぬ。嚙り終わっても腹いっぱいというわけにはいきませんでした、なんとなくお腹が落ち着いた感じになりました。

「すっかりご馳走になりました。ところでキジ猫さん、こんなことを聞いてはなんです、お察しするにあなたは、いわばノラ猫暮らしをしているようですね。こんな寒い時季にノラ猫暮らしは大変じゃありませんか」
「なーに、別にーしたこたあありやしねえよ。まあ、飼猫に比べりや食うのに少々不自由もするけれど、なにをやるにも自由だし、飼い主の機嫌を取る必要もない。要するにわっしの性分にあつてゐるんでさあ。それに食い物だつてこの近所を一回りすりゃ、まあまあ物が手に入るし、この家のおかみさんは親切なお人で、

時々テラスに肉の切れ端とか、魚の尻尾を置いて下さる。それにいよいよ食つに困りや、鳩でも雀でもこの近くにやわんさといるんで、ちよいとひつつかまえればいいわけだし、まあそれほど心配することあねえんだよ。飼い主のご機嫌とりをしなきゃならない飼猫に比べれば、ここじゃノラ猫のほつがよっぽど高級な身分つてところであ」

確かに毛の艶も悪くありませんし、丸々と太っていますし、キジ猫の言う通り食生活はそれほど悪くなさそうです。今やノラ猫同然の僕としては、この話を聞いて、少し安心しました。と、キジ猫はギョロリと僕の顔を見て、

「お若けーの、安心なすっちゃいけませんよ。ノラ猫に比べりゃ、ノラ犬は、よっぽど歩が悪いのですぞ。ご覧のとおりワルシャワの屋敷や家は、ほとんど金網の高いフェンスで囲まれている。猫なら、その上によじ登るのはお茶の子さいさいだが、犬にはそんな芸当は死んでもできやしねえ。それにワルシャワの人間は、ノラ猫にはやさしいがノラ犬には冷てえと来ている。肉を恵んでくれる人など、太鼓を叩いて捜したつていやしねえ。その上、犬と来た日にゃ、動作がのろいので鳩や雀を捕えることなんぞ金輪際できやしねえ。たいていのノラ犬は、のたれ死にするか、保健所の犬殺しにひつつかまって注射で殺されるか、二つに一つつてとこだね。お前さんも、石炭を下ろすところなんぞ、のんびり見物なんかしているとすぐ犬殺しに捕まちまうて、注射ブスッではい一巻のお終わりつてことになりかねませんぜ。そう思つてさっきはちよつと声をお掛けしたつて訳がすよ」

「そうでしたか。そうとも知らず、生意気な口をきいてすみませんでした。ご親切には心から、お礼を言います。ところで僕はさっきも言つたように遠いところから来たものですから、こここの人間の話している言葉が

なにひとつわからないのです。よかったら僕にこの言葉を少し手ほどきしてただけませんか」

「人間の言葉なんぞ覚えたって何の役にもたちゃしねえよ。人間って奴はどいつも偉そうな顔をしてのべつまなくしゃべりまくっているがその内容ときた日にゃ、どうでもいいくだらねえことばかり。役にたつことなんぞ、これっぽっちも言っちゃいねえ。まあ、強いて役に立つことといやあ、こつちおいでとか、あっちへ行けとか、食事ですよ、といった程度。これしきのことなら別段教えてもらわなくて、人間の顔付をよく見てさえおれば、すぐ飲み込めるつてもんさ」

「キジ猫さん、実を言うと僕はご主人を捜しているのです。日本から追いかけて来て、はぐれてしまったんです。見つけるためには、少しは人間の言葉がわからないと・・・」

「犬というやつはこれだから始末に終えない。朝から晩までご主人、ご主人で、頭がいっぱいなんだから。お前さんみてえに、半ばノラ犬同然の身でありながら、なおかつご主人のことばかり考えている。その点、ノラ猫とは考え方がまるつきり反対ですぜ。わっしの辞書にはご主人という言葉は金輪際ありやしませんぜ。まあ、しかし、犬の悲しい習性とお前さんの悲しそうな顔を前にして、なにも教えないというのも、酷というものだろうから、少々実物教授をして差し上げやしょう。この家のおかみさんと娘さんは、揃いも揃っておしゃべりときている。さきほど、娘さんが買い物から帰って来たところだから、おそろく今ごろは台所のテーブルあたりに座り込んでふたりして夢中になっておしゃべりをしている最中のはず。このふたりの話を聞いていれば、ワルシヤワで暮らす上で必要な言葉は全部出てくること請け合いときたものだ。それじゃ、さっそく台所の窓の下まで行って、ちよつくら様子をうかがってみやしょう」

キジ猫に促されて、一緒に窓の下に行くと、幸い窓が少し開いていて、女の人の話し声が聞こえて来ます。

「あの低いかすれた声がおかみさんの声で、高くて滑らかなほうが娘さんの声だ。どれどれ、わっしが、同時に通訳してあげましょう。今娘さんが言ったのは、今日も肉屋に行つたけれど、とても長い行列だったの。この寒空の下で二時間も待たされたのよ。その挙句、豚肉も牛肉も売り切れてしまつていて、一切れもないの。買えたのはソーセージだけ。まったく頭にきちゃうわ、という意味だ。この中で重要な単語を拾つと、今日、肉屋、豚肉、牛肉、買い物に行く、長い行列、無い、ソーセージ、二時間、売り切れてつとこかな。今日がジシャイ、肉屋がメンソー、豚肉がスハブ、牛肉がフィレ、買い物に行くがクーピツチ、長い行列がドウジョ。コレイカ、無いハニエマ、ソーセージはクバーサ……」

「今おかみさんは何と言つたのです」

「本当にこの頃は買いたいものは品切れ、あると思えば長い行列、その上なにもかも値上がりしてしまつて、買うに買えない。ああ、大変な世の中になつたものだねえ、と言つたんだよ。ここで重要な単語は、この頃、品切れ、思う、何もかも、値上がり、大変、世の中……」

こうして絶好の教材に恵まれた上に、なかなか教えることを心得たキジ猫の特訓を受けたおかげで、二時間もすると、ふたりの話の内容がおぼろげながらわかるようになってきました。

「キジ猫さん、今おかみさんが言ったのは、ところで今夜のおかずは何にしようかねえ、毎日、ソーセージをゆでたのにポテトばかりじゃあきちゃうし」ってことじゃありませんか？」

「おや、これは驚いたね。お前さんはなかなか飲み込みが速いねえ。それだけわかりやてゝしたものだ。この近所に、半年ほど前にどこかの外国から引越してきた人間一家がいるんだが、揃いも揃つて飲み込みが悪くて、今もつてチンプンカンプンときている。人間つてのは語学の才が乏しいのかねえ。それに比べりゃ、お

前さんは大天才ってところだ。いやおみそれしやした」

キジ猫に褒められて、僕は少し照れ臭くなりましたが、これからポーランドで生きていくとすれば、ポーランド語を知らないではおられないと思い、必死になって覚えようとした結果なのです。嬉しさもひとしおです。言葉さえわかれば、なんとかポーランドでもやって行けそうです。

その夜は、キジ猫のすみに泊めて貰うこととなり、夕食はキジ猫が近所から仕入れて来た肉の切れ端を分けて貰いました。夕食の後もポーランド語の特訓のおさらいをしてもらいました。

夜更けになるとまた、白い雪が降って来ました。明日の朝も、そこらは真っ白になっているに違いないと思いつき眠りにつきました。

翌朝、安心して眠ったせいかわすっかり寝坊してしまいました。

起き上がると、キジ猫は、朝飯前に一稼ぎしてきたよと、目の前に、一羽の雀の死体を並べ、朝飯にと勧めてくれました。雀を食べたことなどありませんでしたが、贅沢は言っておれません。食べてみると、羽が邪魔になりましたが、結構いけました。

キジ猫にはすっかりお世話になってしまいましたがいままで、居候を決め込むわけにもいきません。朝飯が済むと、僕はキジ猫にお礼を言つてまた独りポツチの、ご主人捜しの旅に出ることにしました。別れ際に、キジ猫が、

「お若けーの、くれぐれも気をつけてな。なにか困ったことが起こったら、いつでも遠慮せずになつしの所へ引返して来るんだぜ」

と言ってくれたのが、僕にとっては、なによりも心強く思われました。

いたずらな子供たち 8

雪に白く覆われた裏庭から表通りに出ると、屋敷の前の歩道の雪はすっかり片付けられています。雪が降り止むと、それぞれ自分の家の前の歩道の雪かきをする事になっていくらしいのです。

キジ猫が、保健所の犬殺しに気をつけろと注意してくれたので、僕は道路を歩きながらすれちがう人間の一人一人の匂いを二十メートルも前から注意深く嗅ぎ分けました。犬殺しには犬の匂いが染み着いているものです。日本で犬殺しの匂いを嗅いだことが一度あるので、よく覚えています。

ところが、すれちがう人がみんな犬殺しみたいな匂いをするのです。どうも日本人のあつさりした匂いと違っています。まさか、すれちがう人がみんな犬殺しとは思えませんが、用心するにこしたことはないと思います。僕は歩道のはしっこを通ってすれちがう人をやり過ごしました。歩道は広く車道より広いところさえあります。だから、歩道の端に身を寄せておきさえすれば心配ありません。

ところで歩道の端を通りながら気付いたことは、かなりあちこちに、ほっかほかの犬のフンが落ちていくということです。それに歩道にそびえたっている葉の落ちた街路樹の根元から、それぞれ違った犬のオシッコの匂いが、ここはおれの縄張りだと言っているのです。僕は緊張しました。他の犬の縄張りのなかを、挨拶もしないで通り抜けたりすると、吠えたてられても噛みつかれても、仕方がありません。オシッコのかかっている幹の高さがいろいろと違います。これは犬の大きさが違っていることを示しています。この様子だと、

この通りには、ずいぶん沢山犬がいるようです。このことと、人間から犬殺しみたいな匂いがすることと関係があるのかもしれませんが。

いずれにしても、あまり怖じけづいて歩くと、かえって馬鹿にされて、脅かされなくてもいいのに、脅かされかねません。僕はできるだけ胸を張って尻尾を高く立てたまま歩くことにしました。と、目の前にいきなりブルドックの顔がぬうつと現われたではありませんか。毛皮の厚いオーバーコートを着た若い女の人に連れられて、とある家から出てきたのでした。僕は、つきり、このブルドックに吠え立てられるものと思いい、あわてて両耳を後ろへ倒し肩をすぼめました。ところが、ブルドックは、僕のほうをちらりと見ると、「やあ、お初にお目にかかるね。君も散歩かい」

と言って、そのままさっさと通り過ぎて行くではありませんか。

僕はちよつと拍子抜けしました。日本でなら、犬と犬とが出くわしたら、ワンワンキャンキャンと決まって喧嘩です。強い犬と出会ったら尻尾を巻いてすぐ退散するよりありません。

しばらく行くと、歳をとったおばあさんに連れられた、僕の四倍もありそうなボクサー犬がやってきました。今度こそ吠え立てられるかも知れない。僕はいつもの癖で、さつと身構え、尻尾を高く立てました。ところが、このボクサー犬も、

「やあ、お初にお目にかかるね」

と言って、そのまま通り過ぎて行くではありませんか。

——ところ変われば犬変わる

同じ犬語を話していても、日本とポーランドとはこんなに違うのです。僕は、これまで、他の犬に会う

たび、肩をすぼめたり、きつと身構えたり、キャンキャンとところ構わず吠合っていた自分のことが、なんだかとても情けなく感じられて、しばらく、その場にぼつとしたまま立ち止まり、悠々と通りすぎて行くボクサー犬の後を見送っていました。やがてボクサー犬の姿も通りの角の向こうに見えなくなったので、僕はまた歩き始めました。

他の犬に脅かされる恐れもないということがわかったせいか、何だか少し落ちついて周りの町並を観察出来るようになりました。

東京の町並と違って、一軒一軒の家の造りも大きく、建物と建物の間隔がかなり広く取ってあります。道幅も広く、人影も少なく、自動車の数もそんなに多くないので、何となくのんびりしています。東京の道を歩くときは、何となく身構えて、人に蹴飛ばされたり車にはねとばされたりしないように、いつも肩肘張って歩いていたものですが、そんな必要はまずないようです。とくに東京では道路を横断するときは、それこそ命がけで渡ったものですが、ここなら歩道を歩くような気安さで渡れます。いつかご主人に連れて行ってもらった、信州の片田舎のようにのんびりしています。そういえばあの田舎の道を、ミコちゃんやひろしくんと、前になり後になり鬼ごっこをして遊んだものです。それにしても、ご主人一家は今どうしているのでしょうか。無事に捜し出すことが出来るでしょうか。

こんなことを思ったので、ついつい気がゆるんだのでしょうか。僕は危うくともない目にあうところでした。

ふと気がつくと、僕の前の方から、十二、三歳になる男の子が三人、道路の幅一杯に広がって歩いて来るのです。三人とも手を後ろに回しています。何かを隠し持っているようです。何となく嫌な空気が漂ってい

ます。そのまま歩いて行つてやり過ごすかとも思つたのですが、危ない橋を渡ることもないと、引き返すつもりで後を振り返つて見ますと、同じ年格好の男の子が三人、後ろからも僕の方へ近づいて来ているのです。皆んな僕をじつと見詰めています。知らぬ間に狭い路地に入り込んでいたようで、道幅は十メートルもなく、おまけに両側には緑色のペンキを塗つた、人の背丈よりも高い金網のフェンスがあり、脇へそれるわけにもいきません。

とにかく、ちよつと様子が変です。僕は前へ行こうか、後ろへ行こうかと少しためりました。しかし、まよとそのまま前へ歩き続けました。三人の男の子が側へ来たら、いきなりその間を走り抜けようと思つたのです。僕と男の子たちの間隔が五メートルになり、三メートルになり、二メートルになったとき、僕はいきなり、一番右端の男の子と二番目の男の子の間めがけて、突っ込みました。一人の男の子は、後ろに隠し持つていた長い棒を、いきなり僕の行く手に振かざし、もう一人の男の子は、大きな網を僕の頭上から振り下しました。僕は、きわどく身をかわし、今度は後ろの方へ走りました。後ろでも、三人の男の子がめいめい長い棒切れを道路一杯に広げてたちはだかっています。しかし、ひるんではおれません。僕は、棒の上を飛越えるつもりで突っ込んで行きました。

——ビューン

いきなり、僕の足を払つように長い棒が襲つて来ました。その上をなんとか飛越えると、その後ろに回つた男の子が棒を振かざしています。僕は右に走り、左に走り、必死に逃げ回りました。ビューン、ビューン。耳元をつなりを立てて、棒が通り過ぎます。何度、ぶたれそうになったことでしょう。男の子たちは、声も立てず、目を光らせながら、僕をめがけて棒を振り回し、一步一步僕を道路の片隅に追いつめるのです。男

の子たちが作った棒の囲いを破るのは絶望的に見えます。息が切れてきました。棒がかすったのか肩の辺りがズキズキします。

もうこうなったら一か八かやってみるより仕方ありません。

僕は網を持った男の子めがけて真直ぐに走りました。男の子が網をかけようと振り上げた瞬間、僕は思い切って、その子の顔めがけて飛びかかりました。

「キーン」

男の子が叫び、僕を避けようとのけぞり、その拍子にストーンと尻餅をつきました。僕はその子の上を飛び越えて一目散に走りました。男の子たちはあっけにとられたのか、だれも追いかけて来ません。僕はそれでも息の続く限り走り続けました。

どれだけ走ったのでしょうか。どこをどう走ったのかも全然覚えていません。僕は目が回って倒れそうになりました。どこか安全な隠れ場所はないでしょうか。このまま道路にしゃがみ込んだりしたら、またいたずらな子供たちに捕えられかねません。フラつく足でしばらく走っていると、やつのことで道路脇に縦の木の繁みが見つかりました。ここなら誰にも見つかる心配はなさそうです。僕は、最後の氣力を振りしぼって、その下にもぐりこみ、その途端その場にのびてしまいました。

ボイテック一家 9

「ママ、こんな所に子犬が寝ているわよ」

「マア、どうしたんでしょね、今時こんなところで寝てるなんて」

「なんだかチビクロに似てるみたい」

「こんな所にチビクロがいるわけがないでしょ。さあ、ミコちゃん、早く行きましょ、遅くなるわよ」

どこかで聞いた声です。いえ、まぎれもないミコちゃんと奥さんの声です。僕は嬉しくなって、立ち上がろうとしたが、肢に力が少しも入らないのです。ミコちゃんと奥さんはずんずん行ってしまいます。僕はあわてて、

「ワン」

と吠えようとしてました。でもどうしたのでしょうか。声が出ないのです。たちまち、ミコちゃんと奥さんの足音は遠のいて行ってしまいました。

「パパ、樅の木の下に犬が寝てるよ」

「ひろし、触ったりしちゃ駄目だよ。触るとかみつかれるぞ」

今度はひろしとパパの声です。どうして僕がひろしくんを噛んだりするでしょう。

「でも、チビクロみたいだよ」

「こんなところにチビクロがいるはずがないだろう。さあ、ひろし、早くしないとママたちに遅れてしまうぞ」

「主人やひろしくんは僕の事を忘れてしまったのでしょうか。」

「僕はチビクロですよ。ワンワン」

僕はそう吠えようと思いました。しかし、やっぱり声は出てこないのです。起き上がろうとしても、肢にはちよつとも力が入りません。僕が必死になって起き上がるうとしていているうちに、ひろしくんとご主人はそのままどんどん行ってしまつてはありませんか。

——待って下さい、待って…………

声にならない声を張り上げているうちに僕の両目から涙があふれて来ました。僕は皆んなに見離されてしまったようです。ほんとうの独りぼっちになつてしまったのです。

こんなに遠いポーランドまで苦勞して追いかけて来たのに、皆んな、チビクロがこんな所にいるはずがないと決め込んでしまつて、どんどん通り過ぎて行つてしまふのです。

涙が止めどもなく溢れて来ます。みるみる涙で水たまりが出来、いつの間にか涙の川が出来ました。涙の川は、ずっと遠くまで流れて行き、端の方は霞みの中に消えています。その霞みの中からキラキラ光るものが見えて来ました。良く見るとそれは小さな星で出来た船でした。船はゆつくりと僕の方へ近付いて来るのです。船の中には、ピカピカと光る服を来たきれいな女の人に乗っています。僕はこの女の人に見離されたらもうおしまいだと思い、一生懸命尻尾を振りしました。とうとう僕に気付いたのでしょうか。その人はこり笑いました。そして、僕の前で船を止めると降りて来て、僕をやさしく抱き上げてくれました。

「まあ、かわいいそうに、こんなに怪我をして」

女の方は、柔かい手で背中をさすってくれました。たちまち傷の痛みが和らぎました。僕は抱かれたまま星の船に乗せられました。星の船は滑るような速さで進んで行きます。女の方の胸に抱かれているとほんの

りお乳の匂いがします。懐かしい匂いです。僕はすっかりいい気持ちになっていつの間にかぐっすり眠り込んでしまいました。

もうあれからのくらいたったのでしよう。とてもいい気持ちです。まだ女の人に抱かれているのでしょうか。僕はそっと右目を片方だけ開けて周りを見回しました。

そこは女の人の胸ではありませんでした。僕は柔かい布の上に寝ていたのでした。どうも木の箱の中に入られているようです。さっきの女の人が入ってくれたのでしょうか。首を回して上を見上げると、僕を見降ろしている二つの小さな青い目と出くわしました。その目が僕の目に合うとニッコリ笑いかけて来ました。

「マートカ、早く来て犬が目をさましたよ」

それは威勢のいいポランド語でした。

「そうお、良かったわね、ボイテック。どれどれ」

僕を見降ろす青い目が二つ増えました。その顔には見覚えがあります。さっき僕を抱き上げてくれた女の人そっくりです。ぷーんと匂ってくるお乳の匂いもさっきと同じです。僕は嬉しくなって立ち上がり、尻尾を振りました。

「おやまあ、すっかり元気になったみたいだね。さっき樅の木の下で見付けた時はすっかりのびていたのに。お腹が空いているんですよ。さあ、これをお食べ」

女の方は小さな皿の上に肉の切れ端を乗せて、僕の前に置いてくれました。僕は遠慮なくご馳走になりました。

「マートカ、この犬、うちで飼うことにするの?」

ボイテックと呼ばれる子が尋ねました。

「そうね、怪我しているみたいだから傷が直るまでうちに置いて上げましょうね。でもさっき鑑札を見たら、ポーランドのじゃなくて日本のをつけていたわ。きつとこの辺りに新しく引越して来た日本人の飼い犬じゃないかしら。飼い主はきつと心配しているでしょうから早く飼い主を捜しだして返して上げなければいけないわ。早速明日にでも心当たりに聞いて見ましょうね」

「そう、返しちゃうのか。残念だな。せつかくいい犬が見付かったのに。この犬、一体何という名前なんだろうね、マートカ。うちに置いて上げる間だけでも、名前がないと不便だから、僕、この犬に名前をつけてあげたいな。マートカ、いいでしょ」

「それはいいわよ。可愛い名前をつけて上げたら」

「じゃ、僕、ヤンという名にする」

「ヤン？　可愛くていい名じゃない」

「じゃ、これから、君のことをヤンと呼ぶよ、チビ犬くん。僕はボイテックっていうんだ。よろしく」

ボイテックは僕に向かって話しはじめました。

「僕、男の子だよ。間違わないでね。時々僕のこと女の子と間違える人がいるんだけど、僕、とってもいやなんだ」

「そういわれて見るとボイテックは色白の上に金髪がふさふさと肩まで垂れており、女の子みたいな感じもします。」

「僕、もう五つになるんだ。毎日すぐ近くの幼稚園に行っているんだよ。ヤン、ちょっとこっちへ来てもらん。」

ほら、このちっちゃなベッドでスヤスヤ眠っているのが僕の弟のヤーチェックだよ。この間産まれたばかりなんだ。まだ何にもいえないんだ。時々ニコニコって笑うけれどね。可愛いでしょ。それからあそこでお料理してるのが僕のお母さん、マート力って呼ぶんだよ。さっき、マート力がヤンのことを、僕んちの前の樫の木の下で見付けて、ここに連れて来てくれたんだよ。覚えてるかい。マート力はねえ、お料理がとて上手いんだよ。今チキンのローストを作っているんだよ。いいにおいでしょ。後でヤンにも、僕の分を少し分けて上げるからね。おいしくって、ほっぺたがおっこちそうになるよ。

「もうしばらくしたらタトゥーシュが帰って来るよ。つまり僕のお父さんだけだね。タトゥーシュは、サッカーがとてもうまいんだ。球を蹴飛すと、まるでロケットみたいだよ。僕だって時々ブーンってやるけどね。でもタトゥーシュみたいにはいかないな。サッカーってね、案外難しいんだよ。日本でもサッカーやる？ヤンはやったことある。あるんなら、僕と今度一緒にやろうね」

ボイテックはおしゃべりと見えて次から次へといろんな事を話しかけて来ます。僕はボイテックの話を聞きながら、ご主人一家は本当に僕の側を通り過ぎて行っただろうか。あの涙の川や星の船は一体どこへ行ってしまったんだろう。僕を抱き上げてくれた人がマート力だったのなら、さつき着ていたピカピカのドレスをマート力はいつ着替えのだろうなどと頭の中でいろいろ考えていました。

—— リーン、リーン

突然玄関の呼鈴がなりました。

「あつ、タトゥーシュだ」

ボイテックが玄関に走って行きました。僕もその跡を追いかけて行きました。玄関の所で、大きな四角い

メガネをかけて四角い顔をした男の人がボイテックを抱き上げて盛んにキスしています。

「タトウーシユ、ちょっと見て。これが今日うちに来た、日本の犬のヤンだよ」

「日本の犬だって?」

タトウーシユは、ボイテックを下に降ろすと足下にいる僕を四角いメガネの奥から丸い目をしてみつめました。そのとき玄關に現れたマートカが、これまでのいきさつをタトウーシユに話しました。

「フーム、それは珍客だね。どれどれ」

タトウーシユは大声で言いながら、僕を抱き上げ、首の鑑札をしげしげと見詰めました。その間を利用して僕もタトウーシユの顔をすぐ近くからしげしげと観察しました。下から見たときは髪がフサフサしているように見えたが、頭の頂上の所の髪はかなり薄くなっています。その代わり、頬から顎にかけて焦茶色の髭がもじやもじやと生えています。

「ナールホド。これは日本の犬だ。鑑札に東京と書いてある」

タトウーシユがしゃべるともじやもじやの髭の間に赤い唇が透けて見えます。タトウーシユは僕の顔を覗きこみながら、

「どうやって、ポーランドへ来たんだね、おチビくん」

タトウーシユはまるで人間に話しかけるように僕に話しかけてきました。

「飛行機でやってきたんです。ウーワンワン」

僕はまともに答えました。だってこんなに親身に話しかけてくれる人はあまりいないからです。

「そうかい、飛行機でね」

タトウーシユはうなづきました。僕は一瞬あっけにとられました。
なぜって？

タトウーシユには、僕の言った事が分かったらしいのです。でも今のは偶然なのかも知れません。僕は念のため、

「飛行機の収納庫にこつそり忍びこんできたのです」

とつけ加えました。

「なるほど、収納庫に隠れて、密航して来たと云うわけだね」

タトウーシユは何でもないようにうなづいているではありませんか。人間で犬語がこれほど分る人に会った事はまだありません。僕はびっくりして目玉をぐるぐる回しながら、

「タトウーシユさんは犬の言葉が分るのですか？」

と尋ねました。

「おや、そういわれてみればそうだね。君の言っている事がよく分るな。これはおかしい」

タトウーシユは鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして、僕の顔を覗きこみました。

「お前がポーランド語を話しているわけでもないみたいだし………キヤーッ」

いきなりタトウーシユが両手を放したので、僕は空中に放りだされ、床板の上につんのめるような形で落ちました。僕が危つく立ち直った時には、タトウーシユは台所に戻っていたマートカの肩を両手でつかまえて前後に揺すっていました。

「ハ、ハンナ、ち、ちょっと、僕は今もう、その、いや、実に、驚いた」

「まあ、一体何を言ってらっしゃるの、私にはさっぱり分らないわ」

「落着いて、落着いて」

「落着いて欲しいのは、あなたの方よ。一体どうしたの」

「ぼ、僕には、犬の言葉が分るらしいんだ。このおチビさんが言った事が今わかったんだ」

「まさか？そんなこと嘘でしょ。ありえない事よ」

「エッ、タトウーシユ、犬の言葉が分るの。いいなあ、それでヤンは何と言ったの」

「いや、このヤンが言うには、飛行機に忍び込んでポーランドへやって来たというんだよ。ネ、そうだろう、ヤン」

タトウーシユは僕の方を振り返ってまるで人間の子供に尋ねるみたいに尋ねました。僕は嬉しくなって、

「ワン」

と吠え、尻尾を威勢よく振りしました。

「それ御覧。ヤンがワンと言って尻尾を振っている」

「どんな犬でも、ワンと言って尻尾ぐらい振りますわ」

「君は実に疑り深い質なんだな」

「まあ、あなた、疑り深い質だなんて、失礼ね。だって世の中には、ありえる事とありえない事があるのよ」

「じゃ、試して見よう。僕が何かヤンに聞いてみて、ヤンが何と答えたかを当てて見せれば、君だって信じるに違いない」

「どうして当たったか分るのよ」

「マート力はなおも食いますが、タトウーシユはマート力の言葉を無視して、僕の目を覗き込むと、おチビさん、君の本当の名前はなんだね」

と尋ねました。

「チビクロと言います」

「今、この犬は、自分の名前はチビクロっていいますって答えたんだ」

「私には、ただワンワンと言ったようにしか聞きとれなかったわ」

「僕にも、ワンワンとしか聞きとれなかった」

ボイテックも小首をかしげました。

「じゃ、僕がこの犬の本当の名前を呼んで見ることにしよう」

タトウーシユはそういって、大きな声で僕の名前を呼びました。

「チビクロー」

「ワンワンワン」

僕はこの時とばかり大声で返事をし、後ろ足で立ち上がってピョンピョン跳ね、さっきより三倍も激しく

尻尾を振りました。

マートカの顔付きが少し変って来ました。

「フーン」

といった面持ちです。

「じゃ、あなた、飼い主はどうしたのか聞いてみて」

僕は奥さんの言うことが分るので、

「ポーランドまで追ってきたんですが、空港ではぐれてしまいました」

と答えました。

「空港ではぐれてしまったらしい」

タトウーシュがポーランド語で言い直しました。

「じゃ、チビクロ、飼い主の名前は？」

「ご主人と奥さんとミコちゃんとひろしくん」

僕は答えました。

「ゴシュジンとオクサンとミコちゃんとヒロシクンという四大家族らしい」

「あなた、でたらめを言ってるんじゃないでしょうね」

マート力はぎつとタトウーシュの顔を睨みつけました。

「と、とんでもない。この犬がそういうんだよ」

タトウーシュは口と目玉を丸くしながら答えました。

「わかったわ。あなたにはこの犬の言葉が分るらしいわねえ」

とうとうマート力もタトウーシュの意外な才能を認めたようです。

「でも、どうして今になって急に犬の言葉が分るようになったのかしら？」

「うん、僕にもよく分らないけど、両親から聞いたところだと、僕は生まれた時から五才くらいまで、いつも数匹の犬と一緒に育てられたらしいんだよ。だから潜在的に、人間の言葉と同時に犬の言葉も覚えていたん

じゃないかな。今まで眠っていた才能が、今日このチビクロに会って突然花開いたとも考えられる」

「でも、そんなことってありうるのかしら……」

「現に、僕がこうして……」

タトゥーシユとマート力は、僕の事はそっちのけにして、どうして突然犬語が分るようになったかについて難しい議論を始めました。しかし、そんな事は僕にとってはどうでもいいことです。とにかく犬語が分る人に巡り会えたという事は、百万の援軍を得たようなものです。僕は嬉しくて小躍りしたい気持ちを押えながら延々と続く議論を我慢して聞いていましたが、とうとうしびれを切らして、

「ワンワン、タトゥーシユ。僕はご主人と奥さんとミコちゃんとひろしくんに一刻も早く会いたいです。何とかしていただけませんか」

僕はマート力と鼻がくっつかんばかりに顔をくっつけて議論しているタトゥーシユのズボンの裾を引張って一生懸命に頼みました。

「そ、そうだ。つまらない議論をしてかんじんのチビクロの事を忘れていた」

タトゥーシユは、もう一度僕を抱き上げると、

「分かったよ、チビクロ。明日早速、日本大使館と言つところへ連れて行って上げよう。そうすれば、明日のうちにもゴシユジンやオクサンやミコちゃんやヒロシクンに会えるかも知れないよ」

この言葉で、僕の前途はいつぱんにパツと明るくなりました。

その夜は、ボイテックのベッドの側で眠りましたが、うまくいくと明日にでもご主人一家に会えるかと思うと嬉しくてなかなか寝つけない程でした。

日本大使館 10

翌朝目を覚ますともう窓からキラキラ輝く朝日が眩しい程に差込んでいました。

「もしもし、おはようございます。私グルジンスキーですが、今日、急に大変大切な用事が出来ましたので、申しわけありませんが、休暇をとらせていただきます」

タトウーシュが勤め先に電話をかけています。

「さあボイテック、早く毛皮のコートを着るのよ。お外は零下五度なんですからね」

マートカがボイテックをせき立てています。

「コートを着たら、チビクロにこのお肉を上げて頂戴。あなた、チビクロの皮ひもをちょっと捜して来てくださいな。確か地下室の納戸にあった筈よ。私、ヤーチェックの乳母車の用意をしますから」

あわただしい朝です。皆んなが手分けして忙しく働いています。地下室から上がって来たタトウーシュが、僕の首に立派な皮ひもをつけてくれました。

いよいよ出発です。

しばらく歩くと住宅街から、両側にビルの立並ぶ大通りへ出ました。大きな並木が通りの両側にそびえています。ゴーツと大きな音を立てながら赤い色をした電車が走って来ました。

「さあ あの電車に乗ろう」

タトゥーシユは皆んなをせきたてて電車に乗りこみました。僕は生まれて初めて市街電車の客になりました。なんだか落ちつきません。ぐるりと周りを見回すと電車の前の方に痩せた背の高い犬が腰を降ろして、僕の方を見ています。僕はいつもの癖で、

「ウー」

と唸り声を上げてしまいました。その途端、お尻に、目から火が出るほどの痛みを感じました。

「キャン」

僕は悲鳴を上げました。とまたお尻に目から火が出るほどの痛みが来るのです。驚いて振りかえるとタトゥーシユが皮ひもの端で僕のお尻をぶっているのです。僕は尻尾を後ろ足の間に巻き込み、首を垂れて黙り込みました。するとタトゥーシユは振りあげていた皮ひもを下しました。

「あの犬を御覧。じつと静かにしているだろう。人の大勢いるところでは、吠えたり唸ったり、人の迷惑になるような事はしてはいけないんだよ、チビクロ」

確かに電車の前の方に座り込んでいる痩せた背の高い犬は、顔色ひとつ変えず、すましこんでいます。電車の中では、やたらにウーとか、キャンとか言っではいけないようです。とにかく、生まれて初めて皮ひもでぶたれたので文字通り骨身にしみてよく分かりました。僕も、お尻のいたいのを我慢していずまいをただし、痩せた背の高い犬のようにきちんと座りました。

電車の窓は僕の背丈よりずいぶん高いので窓から見えるのは、高いビルの屋上の方と並木のとっぺんとキラキラ輝く空ばかりです。並木のこずえには一枚の葉っぱもついていません。次から次へと複雑にからみあった木の枝のモザイクが消えては現れます。どれほど多くの並木を見たことでしょうか。僕には、一万本も

見たように思えました。

「やあ 一二で降りるんだよ」

タトゥーシユが言いました。降りたところは人通りのかなり激しいところでした。車がひっきりなしに走っています。よくよく見ると運転手が左の方に座っています。しかも車は道路の右側を走っているのです。僕は面くらってしまいました。日本とは全部あべこべだからです。日本にいる時には、まず右の方を見てから左の方を見て横断歩道を渡ったものでしたが、ここではまず左を見てから右を見なければなりません。いつもの癖で右を最初に見て横断歩道に飛出してしまい、タトゥーシユにいきなり皮ひもで引き戻されてしまいました。見ると左の方から車が突っ込んで来ていたのです。

電車の停留所から大通りにそって四、五分歩き、スリッパ屋さんの角を右に折れ、やや狭い、なだらかな下りの坂道に入りました。通りの両側には、車がいっぱい駐車しています。でも、ここも歩道が広くて、大きな並木が植わっており、歩くスペースは十分あります。角から五十メートル程行ったところで、タトゥーシユが立止まり、右側の三階建の建物を指差しながら、

「ここが、日本大使館だ」

と皆んなに教えてくれました。そう言われて門柱を見上げると、四角いプレートに金色で、

「日本大使館」

と書いてあります。僕は胸がときどきしてきました。日本と言う文字があるのですから、ここには日本人が住んでいるに違いありません。もしかしたら、ご主人や奥さんやミコちゃんやひろしくんも、ここにいるのかも知れません。

石の階段を四、五段上ったところに入口があります。タトゥーシユがブザーを押すと、入口の黒いドアが開きました。中に入ると受付けに、少し年を取ったポーランド人の女性が座っています。タトゥーシユが、「領事関係のお仕事をなさっている方にお会いしたいのですが」

と尋ねると、受付の女性は、すぐ電話で連絡をとってくれ、皆んなを受付のすぐ右手にある応接室に案内してくれました。毛皮のコートを皆んなが脱ぎ終わらぬうちに、タトゥーシユに劣らぬくらい顔中に真黒な髭を生やした日本人が応接室のドアを開けて入って来ました。

「どんなご用件でしょうか」

驚いたことに髭の男の人は、日本人のくせにポーランド語でそう尋ねたのです。タトゥーシユは、

「実は、昨日、この犬が、私の家の近くの樅の木の下で伸びていましたね。家内が可愛そうに思い家に連れて帰り介抱してやっただんですが、鑑札を見ると日本の鑑札をつけているんです。それで日本人のお宅に飼われていた犬ではないかと思い、こうしてお伺いしたわけでして。大使館の方では、何か心当たりはありませんか」

と切り出しました。

「ふーむ。日本の鑑札ですか。どれどれ。なるほど。確かにそうですね。でも、ワルシャワには、日本人は二百五十人も住んでいるんですからねえ……一軒一軒に電話して、お宅の犬は行方不明になりませんでしたかと聞きまわるわけにもいきませんし……何か他の手掛かりはありませんか。例えば、飼い主の氏名とか？」

「それなら分かっていきます。この犬が言うには、飼い主はなんでも『シユジン』と言うのです。」

「いや、そんなことは決して。ただ自分でも不思議でならないんですが、昨日から、急に犬の言葉が分るようになりましてね」

「まさか、あなた。人間に犬の言葉が分るなんて。そんなこと私、大学でも習わなかったし、日本のテレビ番組でも見たことはありません。それは絶対に間違いです」

「いや、間違いではありません。私が犬の言葉が分るってことは、ここにいる家内も、私の息子も、ちゃんと認めているんですよ」

「それはきつと奥さんや息子さんは、あなたのおっしゃることですから、信じたふりをなさっているんじゃないんですか」

「えー、私も最初は全く信じられませんでした。でも、どうも内の主人ときたら、本当に犬の言葉がわかるらしいんです。あなた、この方の前で、昨日私に証明してください。さうしたように証明してお上げになったら」

「マート力が助け船を出しました。」

「それじゃ、ちょっと実験をしてお目にかけます。このチビクロに——そうそうこの犬はチビクロっていうんです——このチビクロにこれまで日本で何という通りに住んでいたのか聞いてみましょう。チビクロが何と答えるか。私は日本へは一度も行ったことはありませんから、通りの名前なんて何にも知りません。もし、チビクロが日本の地名を答えられたら、私がチビクロの言っていることが理解出来ると言うことになりませんか？」

「ふーむ。じゃ、とにかくやってみて下さい」

「チビクロ、これまでお前は何という通りに住んでいたのかい？」

僕は、頭をひねりました。だって、僕は、通りに住んでいるノラ犬ではなくて、ちゃんとご主人の家の犬小屋に住んでいたのですから。

「僕は通りにじゃなくて、ご主人の家に住んでいました」

と僕は答えました。

「いや、それは分かっている。じゃ、その「シュジン」の家は何という通りにあったのかい」

なんだ、そういう意味か。とはいっても、僕はこれまで通りの名前なんて気にもとめていなかったで、全く思いだせません。どこか出掛ける時でも、通りの名前を覚えるよりも、お菓子屋さんの角を曲がって、花屋さんの横を通り抜け、僕のオシッコの臭いのする電信柱のところを左に曲がるとお肉屋さんがある、というふうに覚えておく方がよっぽど実用的で便利だからです。僕は首をかしげながら、何とか通りの名前を思い出そうと脳味噌を絞りました。しかし、どんなに一生懸命になって思い出そうとしても、一度もはつきり覚えたことのないことを思いだせる筈がありません。

「どうしても 思い出せません」

僕は、力なく答えました。タトゥーシュは明らかにがっかりしたような顔をして、

「ふーむ」

とあごをさすりました。

「一体、この犬は何と答えたんですか」

髭の日本人が聞きました。

「いや、通りの名前は思いだせないと言っています。これまで「シュジン」の家にいただけ」

「アッハッハッハ、いい加減にして下さいよ。大使館は忙しいんですから、そんな話にかまってる暇はありませんよ。それはどんな犬でもご主人の家にいたでしょうよ。別に犬が喋らなくても、そのくらい誰にだって分りますよ」

「もう一回だけ試させて下さい。いいことを思い付きました。チビクロは、飛行機に乗ってやって来たと言っていますから、何時発の飛行機に乗って来たのか、ちょっと聞いてみます」

タトゥーシユは真剣な顔付きをして僕の方へ振り向くと、

「チビクロ、いいかい。もう一回だけ尋ねるけど、何時発の飛行機に乗ったんだい？」

と僕の顔を覗き込むようにして聞きました。飛行機の出発時刻か。これなら、何とか思い出せそうです。そうそう、あの出発の日は、朝から飛行機の出発時間に合せて、一日あれこれ動き回ったのです。七時にタクシーが来て、飛行場に着いて、空港の時計が九時半を回っていたのであわててカウンターに忍び込み………そうです。思い出しました。

「あの一夜の十時三十分の飛行機です」

僕は、確信を持って答えました。

「この犬は、夜の十時三十分発に乗ったと言っていますが、さつきも言ったように私は一度も日本へ行ったことがないのでそんな便があるかどうか全く知りません。この犬が答えた通り繰返しただけです。時刻表があつたらちよつと確かめていただけませんか」

髭の日本人は、ハテナといったような顔を見ると、

「少々お待ち下さい」

「といって奥に引込みました。しばらくすると分厚い時刻表を覗き込みながら現れ、

「確かに十時三十分発のJALってのがありますなあ」

「それじゃ、私が犬の言葉が分るってことを分かっていただけましたか」

「まあ、全部信ずるというわけにはいきませんが……それで、この犬の飼い主の名前は分かっておりますか」

「それは、さっきも言った通りゴシユジンです」

「エッ？ さっきあなたがいった「ゴシユジン」というのは、人の名前のつもりでいったんですか。それは、日本語で飼い主という意味ですよ」

「でも、その飼い主の夫人は、オクサンといいます」

「オクサンというのは夫人のことですよ」

「でも、娘さんはミコちゃん、息子さんはひろしくん」

「ちょっと待って下さい。ミコちゃんという娘さんに、ひろしくんという息子さんですか。ちょっと在留邦人の届出簿を調べてみましょう」

髭の日本人は、もう一度部屋を出でいき、今度は大きな帳簿を持って現れました。

「残念ながら、ミコちゃんとひろしくんという子供のいる家族の届けはありませんね。えーと、この犬を見付けたのは、確か昨日とかおっしやいましたね。それじゃ、この犬の飼い主一家はまだ在留届けを大使館に出していないんじゃないですかね。しかし、いずれにしましても、近いうちに在留届けを提出に来るはずですよ。そのときは、ご連絡して差上げますから、この紙に住所と電話番号を書いておいて下さい」

「そうですか。それでは宜しくお願ひします」

タトゥーシユもマートカも力なく答えました。皆んなうなだれて大使館を出、今来た道を戻り始めました。その時です。

僕の鼻がキンコンカンコンと鳴り始めました。僕は、思わず走り始めていました。いきなり僕が走り始めたので、皮ひもはタトゥーシユの手からすっぽり抜けてしまいました。

「チビクロー！」

タトゥーシユはあわてて僕を追掛けて来ます。でも、僕はそのまま全速力で走り続けました。

向うから、懐かしい人影が近付いて来るのです。大人が二人、子供が二人。厚いコートを着ていますが、この匂いをかぎ間違えるような僕ではありません。それは、まぎれもなく、ご主人と奥さんとミコちゃんといろしくんの匂いです。僕は、ワンワンと歓声を上げ、尻尾を小旗のように振りながら走って行きました。

「ワンワン」

僕はご主人の胸に飛びつきました。ご主人はいきなり僕に飛びつかれて、ひっくり返りそつになり、二、三歩よろよろとしたあげく、やつとのことです。立ち直りました。

僕は今度は、奥さんの胸に飛びつきました。奥さんは驚いたように、

「マアマアマア」

と叫びました。

僕は、続いて、ミコちゃんの胸に飛びつきました。ミコちゃんは、物の見事にストンとシリモチをつきました。

最後に僕は、ひろしくんに飛びつきました。ひろしくんは、待ち構えていたかのように僕の両前足を取る

と、

「チビクロー！」

と叫びました。

「チビクロー!?」

「ご主人と奥さんとミコちゃんが驚いて一斉に叫びました。

「そんな筈が……………」

とご主人がいいかけました。

「まさかチビクロがこんなところに……………」

奥さんもいいかけて、両手を開きかけた口にかぶせました。

「ほんとにチビクロだわ!」

今度はミコちゃんが、シリモチをついたまま叫びました。

「ほんとだ、チビクロだ!」

「ご主人と奥さんが一緒に叫びました。

その時、ちょうどタトゥーシユがはあはあ息を弾ませてやって来ました。僕は、

「これが、僕のご主人と奥さんとミコちゃんとひろしくんです」

と紹介しました。

「エッ、これがチビクロの飼い主一家なのかい」

「今日は、奥さん」

「今日は「ご主人」

「今日は ミコちゃん」

「今日は ひろしくん」

タトウーシユは一人一人の手を握って挨拶しました。ご主人も奥さんも、ミコちゃんもひろしくんもポーランドの男の人が、オクサンとか、ゴシュジンとか呼んだり、ミコちゃんひろしくんと言いながら、手をきつく握ってさかんに振回すので目を丸くしましたが、それでも、手をぎゅっと握り返して挨拶を返しました。奥さんは、手の甲にチュツとキスされて少し赤くなりました。

そのうち、マートカとボイテックもやって来て握手を始めました。マートカからほっぺたにチュツチュツとキスされて、ミコちゃんとひろしくんは跳び上がりました。

タトウーシユがこれまでのいきさつを説明し始めました。

「実はチビクロを昨日、私の家の近くで妻が見付けまして、今日、日本大使館へ連れて来たところなんです」
タトウーシユは、身振り手振りを交えて話のですが、ご主人たちには何も分らないらしく、きょとんとした顔で聞いています。ポーランドに着いたばかりでポーランド語は全く分らないらしいのです。タトウーシユは、なおさら一生懸命になって、

「このチビクロは」

と僕を抱上げ、

「あなたがた一家を慕って、飛行機に忍び込んでポーランドまでやって来たんですよ」
と、説明しました。それでも、ご主人は、

「この人一生懸命説明してくれているらしいんだけど一体何を言っているんだろっ、ねえ、ママ」

と傍らの奥さんに話し掛ける始末です。ニコちゃんも僕をタトゥーシュから抱きとって、

「チビクロ、どうしたのよ。どうしてこんな所にいるの？」

と僕の顔を必死になって覗き込むのです。人間って何て不便な動物でしょう。僕は、そう思いながら、タトゥーシュに、

「今タトゥーシュが話したことは、僕のご主人には何も分らなかったようです。すみませんが、もう一度さっきの大使館へ引返して、髭の日本人に通訳してもらったらどうでしょうか」

と提案しました。タトゥーシュも、

「それはいい考えだ」

と深くうなづき、皆んなして、日本大使館へ戻ることになりました。

11

大使館では、先ほどの髭の日本人が通訳をやってくれました。

ご主人は、タトゥーシュが僕の喋ることが分るのでびっくりしましたが、タトゥーシュが話すポーランド語を僕が分るのを見て二度びっくり、あんなに大きなご主人の目玉を見たのは、その時が初めてでした。これなら本物の目玉焼が出来そうです。

話はこんなふうに進みました。

「ご主人、チビクロが飛行機に忍び込んだのは分りましたが、実はポーランドへ発つ前に、チビクロを私の父母の家に預けてきたんです。そこから飛行場まで、一体どうやって行つたのかチビクロに聞いて下さい」

僕にはご主人の日本語は良く分りますので、僕はタトウーシュに犬語で説明します。

「今、ご主人は、僕が飛行場までどうやって行つたかと聞いています。僕は、あの夜お祖父さんの家からこっそり逃出して、ご主人の家の前の暗闇に隠れ、タクシーが来るのを待っていたんです。そして、皆んなのスキを盗んでタクシーのトランクへ忍び込み、こっそり飛行場まで行つたんです」

僕が説明すると、今度はタトウーシュがそれをポーランド語に直して髭の日本人へ伝えます。それを、髭の日本人が日本語へ訳すとご主人一家が最後にナールホドというわけです。しかし、残念ながら、この髭の日本人の日本語訳は余りうまくありません。とどころタトウーシュのポーランド語訳と違つところがあります。そんな時には、僕はタトウーシュに向かって、

「今、髭の日本人が、手荷物のトランクの中に隠れた、といいましたけれど、タクシーのトランクに隠れた、と直すように言つてくれませんか」

と頼みます。するとタトウーシュが、髭の日本人にポーランド語で説明して、正確な日本語に直るというわけです。こんな面倒臭いやり方でしたので、僕の長い旅行の一部始終を話し終えるのにずいぶん長くかかってしまいました。僕もいささかたびれましたが、皆んなが僕の話を目を丸くして聞いてくれるので、実をいうと大変得意でした。

「チビクロって凄いのねえ。アタシ独りでなんか、とてもポーランドに来られないわ」

「ミコちゃんが僕に頼ずりしてくれます。」

「チビクロは、ウルトラマンみたいに何でもできるんだね。スゴイナ。」

ひろしくんは、僕の頭を何度も撫でてくれます。僕はもう嬉しくなって、ワンワン吠えながら、そこらじゅう転げ回りたいところでしたが、人のいる所で人の迷惑になることをすると、タトウシユにもう一度皮ひもでお尻をぶたれるかも知れないと思い、電車の中の痩せた背の高い犬のようにすましこんでいました。

「ほんのしばらく会わないうちに、なんだかチビクロったら、凄く大人になったみたい。」

今度は奥さんがいいました。

「うん、長い冒険旅行をやったんでぐつと成長したみたいだな。もう立派な雄犬だ。ポーランドで早くお嫁さんを見付けてやらなくちゃいけないな。」

僕はすましこんでいましたが、頭の中が少しポーツとなり、気付いて見ると我知らず尻尾を盛んに振っているのです。

タクシー 12

ご主人の話によると、昨日新居に落ちついたので、家族揃って大使館へ在留届けを出しに来たところだったのです。そこにちょうど僕とタトゥーシュー一家が来合せたというわけです。なんという偶然、僕にとってはなんという幸運でしょう。

髭の日本人が在留届けの係りの人だったので在留届けも簡単に済みました。ご主人は、タトゥーシュー一家に何度もお礼を言つて、僕を引取りました。もちろん、僕もタトゥーシュー一家に何度もお礼を言いました。タトゥーシューもマートカも僕との別れを惜しみ、遊びに来るように何度も念をおしました。ボイテックは、「つまらないの」

と半分むくれていました。

大使館からは、タクシーを呼んで家へ帰ることになりました。さんざん待たされたあげくやつて来たのは、丸っこくてぼてぼてした感じのとても旧式の車でした。こんなオンボロ車には、東京ではお目にかかったことがありません。でも運転手は、丸いくしゃくしゃした顔のとても親切そつなおじさんでした。タトゥーシューがポーランド語で行先を何度も運転手に念をおしてくれました。

盛んに手を振ってくれるタトゥーシュー一家を後に、車は走りだしましたが、ガタガタ、ギシギシ盛んに音がします。耳をすますと、

「アア ヤンナツチャウナ

アア ヤンナツチャウナ

オイラハ トシヨリ オンボロ グルマ

今日モ 朝カラ走リッパナシ

タマニヤ ユツクリ 昼寝ガシタイ

アア クタビレタ クタビレタ」

車が鼻歌を歌っているのです。

「ご主人一家が乗っている車がくたびれて居眠りでもした日には大変です。運転手が居眠りしても事故になるというのに、走っている車が居眠りしたらどうなるというのでしょうか。僕は後肢で、車のお腹のあたりを少しひつかいて、いいました。

「車のオジサン、変な歌を歌うのはよして、真面目に走って下さいよ。事故になったら大変じゃないですか」とすると歌の調子が変わりて変って、

「何ヲ オッシャル チビイヌサン

コレデモ ワッシハ 四十年

鼻歌 ウタツテ ヒタバシリ

無事故デ 元氣ニヤツテキタ

歌エバ 心ガ 浮キタツテ

走ル元氣ガ ワクノダヨ」

僕は、なるほどと思いました。黙ってぶすつとしてゐるよりは、鼻歌でも歌っている方がよほど元気が湧いて長生きも出来るというものでしょう。僕もついタクシーの調子に釣られて歌いだしてしまいました。

「ナルホド ヨーク ワカッタヨ

僕モ 歌ナラ 大好キサ

イッショニ 歌オウ ワンワンワン」

「チビクロ 何を唸ったり、タクシーの床を引掻いたりしてんのよ」

「ミコちゃんが不思議そうな顔をして尋ねました。僕は、どうも調子に乗りすぎる癖があります。僕が急に黙り込むとタクシーの方から話しかけてきました。

「オチビノイヌクン キミノナハ

チビクロサンツテ イウノカイ

ドウシテ キュウニ ダマリコム

ドウシテ イッショニ ウタワナイ？」

このタクシーときたら、何でも歌にしまつらしいのです。僕は仕方がないので小さな声でいいました。

「今はちよつと大きな声が出せないんだよ。よかつたら、得意な歌を歌って聞かせてくれませんか」

「ソウカイ ソレジャ イキマシヨウ」

タクシーは 咳払いをひとつすると歌い始めました。

「ワッシハ ワルシャワデ 一番

古イトイワレル タクシー

ワルシャワガ 戦争デ 灰ニ

ナル前カラ 走ッテル

アル時市街戦にマキコマレ

鉄砲ノ弾ガオナカニ五発

ミゴト命中 死又思イ

ソレデモ メゲズニ ヒタスラ 走り

オ客助ケテゴホウビ タント」

「それ本当のこと？」

僕は、こっそり聞きました。

「ソウダヨ モチロン ホントノコトサ」

タクシーは、急に真面目そつな声で歌い始めました。

「コノアタリデモ 戦争ノトキニハ

ズイブン 大勢ノ人タチガ死ンダ

今デハ 建物モ並木モ

見違エルホド 立派ニナリ

人々ハ シアワセソウニ歩イテイルケド

ホラ ゴランヨ アノ建物ヲ

入口ノトコロニ 小サナ 祭壇ガアッテ

美シイ花ト小サナロウソクガ ソナエテアル

アソコデモ 罪モナイ五十人モノ人ガ

ドイツ軍ニ ハムカッタコトヘノ

見セシメノタメニ

一人一人 鉄砲デ射殺サレタ

ダカラ 今デモ アアシテ

ワルシヤワノ人タチハ 花ヲソナエ

殺サレタ人タチノタメニ

イノリヲササゲテイルノサ

コノマチニハ ソンナトコロガ

数エキレナイホドアル

ゴラン アノ角ヲ曲ガツタトコロニモ

マタ別ノ祭壇ガアリ

小サナロウソクガ揺レ

美シイ花花ガソナエラレテイルノヲ

タクシー自身も、亡くなった人々の霊を慰めるかのように、静かなしんみりした調子でそこまで歌い終わつた時、エンジンの音もパツタリと止み、車もすうつと止まってしまいました。

運転手はあわてて、あちこちの計器を回したり引張ったりしましたが、エンジンは時折、グスングスンと

音を立てるだけで、なかなか始動しません。

「どうも、またエンジンがいかれちゃったみたいだな、これじゃ修理に二、三日かかりそうだ。よわっちゃったな」

運転手はひとりごとを言つと客席を振りむいて言いました。

「お客さん、申し訳ないが、エンジンの故障です。ここで降りていただけませんか」

「ご主人も、先ほどからの様子で、運転手が何を言いたいか、すぐ合点がいったらしく、

「それじゃ、ここから家まで近いようだから、幸いここに地図もあることだし、歩いて帰ることにしよう」とタクシー代を払って先に降りました。僕が降りようとすると、タクシーが、

「アバヨ サヨナラ チビクロ君

ワカイツモリデ 走ッテイテモ

ワツシモ ドウヤラ ジュミヨウノヨウダ

オソラク ニ度トハ アエマイガ

君ハ 元氣デ ガンバリナ」

「タクシーさんも、元氣だしなよ。そんな弱気なことはいわなくて大好きな鼻歌でも歌うんだよ」

僕はしおれ切ったタクシーのおじさんを一生懸命励ましました。

「ワカッタ、ワカッタ」

とうなづくタクシーを後にして、僕は、ご主人に引かれて歩き始めましたが、その後ろから、タクシーの歌う歌が聞こえてきました。

「アバヨ サヨナラ チビクロ君

ハゲマシテクレテ アリガトウ

ヨルトシナミニャ カテナイガ

セイゼイハシルサ コンカギリ」

肉屋 13

電車通りをしばらく行くと、ある店の前に長い人の行列ができていました。

「まあ、ずいぶん長い行列ね。一体何を売っているのかしら」

奥さんがつかつかと歩いて行って、店の中を覗き込みました。

「まあ、お肉屋さんよ。日本のお肉屋さんとは全く違うわねえ。重たいドアを開けてお店の中に入って買ってみたい。外からじゃショーウィンドーも見えないわ。でもお肉買うのにこんなに並ばなければならないのかしら。お店の中も人が一杯で、入り切れないので外までこんなに並んでいるのよ」

「ポーランドは肉不足で、肉を買うには並ばなければならないとは聞いていたけど、こんなに長い行列とはねえ」

「ご主人も感心しています。」

「もう飛行機で持ってきたカップラーメンもほとんど食べちゃったし、お料理の材料が何も無いから、何か買っ

て帰らなくっちゃならないんだけど、あなたどうする？」

「そうだねえ。今から並らんだんじゃ、二時間以上かかりそうだね。まだカップラーメンが少し残っているの
で、今夜もあれで我慢するか」

「でも、チビクロにあげるものが何もないわ。まさか、ラーメンじゃ可愛そうだし。せつかくチビクロに巡り
会えたのだから何か美味しい物でも買ってあげて、お祝しなければ」

「それじゃ仕方がないから並ぶことにするか」

「ご主人一家と僕は一番後ろに並びました」

行列に並んでいるポーランド人が振りかえって物珍しそうにじろじろ見ます。

「まあ、日本人かしら。あの二人の子供ときたら、本当に可愛いわねえ」

「髪の毛が真黒くて全然ちぢれてないのねえ。素敵だわ」

「目の色も黒くて、まん丸くて」

とめいめいいろんなことを言っています。

僕らの後にもたちまち行列が出来ました。中にはミコちゃんとひろしくんのところへやって来て、頭を撫
でるおばさんもいます。ミコちゃんとひろしくんはちょっぴり嫌そうな顔をして首をちぢめました。

ある男の人は大きなローディポップ（アイスクリーム）を持って来てミコちゃんとひろしくんにくれまし
た。ミコちゃんが覚えたてのポーランド語で、

「ジェンクーエン」（ありがとう）

と言つと周りの人が一斉にどつと歓声をあげました。

「なかなか 発音が綺麗だ」

とか、

「まあ感心ね。あの子ポーランド語が話せるんだね」

とかいつているのです。

僕のところにも、僕の背丈の三倍もありそうな黒い筋肉質の犬が挨拶にやって来ました。

「君は、日本からやって来たのかい」

「そうです」

「僕はミルボというんだ。この近くに住んでいる。これからよろしく頼むよ」

「僕は チビクロと言います。こちらこそよろしく」

「僕は、いつもご主人のお供をして肉を買いに来るんだ。ほら、二人前に並んでいるあのメガネをかけた白い髪のお婆さんが僕のご主人さ。肉をかうのがご主人の役目なんだ。一緒に住んでいるご主人の息子さん夫婦は共稼ぎで、二人とも仕事に行かなきゃならないんで、いつも僕のご主人が肉を買いに来るってわけさ。たいてい二時間は待たなきゃならないんだ。でもご主人は僕のためにいつも美味しい骨を一本よけいに買ってくれるし、こうやって他の犬と世間話をしていればいいんだし、二時間ぐらいわけはない。それにもう三月、春も近いしね。真冬の霊下十度以上もある、風の強い日はさすがに大変だけどさ」

「そんな寒い日にも並んで待つんですか」

「お肉を食べずにすませられれば別だろうけれどさ。朝の七時半の開店を待つて、真冬に徹夜して待つ人もいるんだよ。毛皮のコートを着て毛布にくるまって……」

ミルボの話によると肉不足はもうずっと長いこと続いていて、ますますひどくなってきたというのです。その分だけ肉屋の前に並ぶ時間が増えて、この分でいけばそのうち一日中肉屋の前に並びっぱなしになるかも知れないなんて冗談をいうのです。

こうやってミルボと話込んでいるうちに行列は少しずつ前に進み、ミルボのご主人の番になりました。ミルボはとんでいってお婆さんのそばに並びました。

お婆さんは、丸々太った女店員に、

「牛肉二キログラム、豚肉一キログラム、ベーコン二キログラム、それに大きな骨一本」と注文しています。

見るとカウンターの後ろに大きな牛や豚の肉の塊が幾つもぶら下がっているのです。注文があると女店員はその塊をフックからはずしてきてマナイタの上に置き大きなナタで、エイヤッとはかり骨ごと切取るのです。日本の肉屋とは確かに全く様子が違います。ご主人一家も目を皿のようにしてその有様を見ています。いよいよご主人一家の番になりました。奥さんは少々もじもじしながら、

「牛肉三百グラムに豚肉五百グラム」

と英語で注文しました。

「エッ、何だって、わかんないね」

丸々太った女店員は首を傾げています。

そこでご主人が、牛肉の塊を指差して、指を二本立てました。

女店員は分かったというかのようにニッコリ笑うと手頃な牛肉の塊をフックからはずして来て、大きなナ

タでドスンと音を立てて肉を切取り、その塊を秤の上に載せました。秤の針は三キログラム百を差しています。

その肉をすばやく紙で包むと、女店員は、

「他に注文は？」

と振返りました。

「ご主人は肉の塊の大きさにびっくりして、盛んに指を三本立て、

「三百グラム、三百グラム」

と叫んでいます。すると女店員は、豚肉の方を指差して、

「これが欲しいのか」

と聞いています。ご主人は豚肉も欲しいのでそうそうと言い、今度は指を五本全部立てました。

ドスン、ドスン

女店員は、さつきよりもっと大きく肉を切取り、秤の上に載せました。目盛りは五・二キログラムを差しています。

その肉もたちまち紙に包みこまれ、ご主人の目の前にドスンと置かれました。ご主人は顔を真赤にし、違う、違うと手を盛んに振りました。女店員は、そんなご主人には全く無頓着に、小さな紙の上に五百五十ズオティと書いてご主人に手渡し、会計の係りの所へ行って代金を払って来るように言っています。どうも、ポールランドでは、キログラム単位でしか肉を買わないらしく、指を五本立てると、店員には五キログラムの注文としか思えないらしいのです。僕はあまりの行き違いに驚いて、

「違います。女店員さん。ご主人は五キログラムじゃなくて五百グラム注文したんですよ」

と思わず叫んでしまいました。

僕が後ろから、いきなり大声を出したのでご主人は跳びあがり、目を丸くして僕の方を振り返りました。僕は必死になって、女店員がご主人の五本の指を五キログラムと取違えていると訴えました。そんな僕を見てご主人は大きくうなずき、

「そうか。チビクロはお肉をたっぷり食べたいんだな。分かったよ。それに五百五十ズオティってことは日本円に直せば四千円足らずってことだし、東京でお肉を買うのに比べれば目茶目茶に安い。せつかく二時間以上も並んだことだし、このまま全部買って帰ることにするか」

と奥さんに同意を求めました。

そんな訳で、その日は八キログラムの肉を買って帰ることになりました。ご主人が五キログラム、奥さんが三キログラムの包みを手分けして持ちましたが、

「手がぐたびれるほど、お肉を買ったことなんてこれまで一度もなかったわ」

奥さんはなんとなく戸惑ったような、なんとなく幸せそうなこれから始まる新しい生活に対して不安と期待をないまぜたような調子で呟きました。

新しい家 14

電車通りを右に折れて、並木がたくさん植わっている歩道の広い通りを暫く行くと、道の両側に大きな屋敷が立並んでいます。肉屋を出てからもう十分も歩いたでしょうか。ニコちゃんが、右手前方の大きな建物の一つを指差して言いました。

「チビクロ、あれがワタシたちの新しいお家よ」

三階建ての見上げるように高い立派な建物です。

「チビクロ、これが僕たちのお家なんだよ。上から下まで全部僕んちなんだから、すごいでしょ」

ひろしくんは、右手をゼーンブと言つようにぐるりと回しました。僕は、建物の一部だけをご主人一家は借りたのかと思つたのに、何とその全部を借りたということです。東京の家に比べたら、チワワとセントバーナードぐらいの差があります。

玄関のドアは、分厚い樫の木で出来ています。ご主人がとりだしたキーホルダーには、長さが五寸釘程もある鍵が三本もついています。ドアに三つも鍵がついているのです。おまけに鍵穴の中で二回ずつ回さなければ鍵はあきません。なんと嚴重に出来ているのでしょうか。これではなかなか泥棒も入れそうにありません。ご主人もどの鍵とどの鍵穴が合うのかまだ覚えていないらしくいちいちガチャガチャ試しながらやっているのです。ドアが開くまでずいぶん時間がかかりました。

「ギーッ」

分厚い割りには、ドアはスムーズに開きました。

「ウアーイ」

「ミコちゃんひろしくんが家の中にとびこみました。僕も負けずにその後を追いました。」

「チビクロ、見てくらん。ここがサロンだよ。ずいぶん広いでしょ」

「ミコちゃんと昨日ここで鬼ごっこをしたんだよ。広いから面白いよ」

走りまわっているミコちゃんひろしくんの跡を僕も追いかけてましたが、確かにこのサロンだけで、東京のご主人一家の家の周りを一回りするほどあります。家具付ということで、ソファやサイドボードなど一通りのものはそろっています。

「チビクロ、家の中を案内してあげるから一緒についておいで」

「ミコちゃんとひろしくんが先に立って家の中を案内してくれることになりました。」

一階はこの大きなサロンの隣が食堂とキッチンになっています。サロンかららせん型の階段を上ると二階には、大きな寝室が一つと、小寝室が二つ、それに広い洋式のお風呂場があります。

「この大きな寝室がパパとママの、その隣がひろしの、そのまた隣がワタシの部屋なの。ワタシたち昨日からもう一人で寝てるのよ」

「ミコちゃんが得意そうに説明してくれます。」

三階にも、もう二部屋大きな部屋があつてその両側に納戸がついています。シャワールームもあります。まだ、日本から船荷が届いていないせいでどこもガラガラ、広い部屋が余計広く見えます。

「チビクロ、もうこれでおしまいと思つてしょ」

これ以外に部屋があるのでしょつか。三階から上にはもう階段もついていないのです。

「さ、チビクロ、ついておいで」

ミコちゃんとひろしくんが勢いよく階段を下りていきました。一階のサロンの階段のかげに、白いドアがあります。

「チビクロ、この向うに地下室があるんだよ」

「地下室ってこわいんだから」

ミコちゃんとひろしくんはいかにももったいぶつたしぐさで白いドアをゆっくり開けました。少しカビ臭いような冷たい空気がすつとドアの間から入って来ました。そこから地下に向かつてコンクリートの階段がつながっています。

ミコちゃんとひろしくんは、するりとドアから忍び込むと、足音も立てないように薄暗い階段を下りて行きます。僕もミコちゃんたちに調子を合せて階段を下りて行きましたけれど、地下室には何もこわいものがないことは先刻わかっていました。地下室から吹きあがって来た空気をちよつと嗅げば、地下室に何があるかぐらい僕には全部わかってしまつのです。

ミコちゃんがひろしくんの耳元でなにかさやいています。きつと何かいたずらを思いついたに違いありません。

カランカラン

突然つんばになりそんな大きな音がしました。

「キヤーツ オバケダー」

「ミコちゃんひろしくんが悲鳴をあげました。僕もあわてて階段をかけ上りました。」

「アハハハハ」

「ミコちゃんとひろしくんが笑っています。」

「ごめんなさい。チビクロ。おどかしちゃって」

「ジュースの空き缶をミコちゃんが蹴っただけだよ。オバケなんていないよ」

「チビクロ、早く下りていらっしやいな」

僕は少しすねたような顔をして階段の上にはばらくじっとしていましたが、頃合を見て、尻尾をふりながら二人の所へ下りて行きました。

地下室は大きなガレージになっていて、車がたつぷり二台は入りそうです。その他にも、洗濯室、作業室、物置き、食料庫等いろんな部屋があります。なにしろ一階、一階が東京の前の家と同じ広さがあるのですから、部屋が沢山あっても不思議ではありません。

「チビクロにも一部屋あげられるわねえ」

「それじゃ僕ママを呼んで来るから待っててね」

ひろしくんと呼ばれて下りて来た奥さんが、四畳半程もある部屋を僕の部屋に決めてくれました。東京の犬小屋に比べるとその何十倍もありそうです。地下室とはいいいながら空気が乾燥していて少しもじめじめしていません。それどころか空気が乾燥し過ぎていて、鼻先が物に触れると、そのたびにピリッ、ピリッと静電気が走ります。犬の鼻先は特に敏感にできていますので、ジュースの空き缶のカランカランよりよっぽど

この方がこたえます。奥さんが上から持ってきてくれたダンボールの箱に布を引いた僕のベットに寝そべって部屋をぐるりと見渡すと天井の所にパイプ管が二、三本走っていますがなかなかいい部屋です。これなら安心して休めそうです。

「チビクロももうすっかり落着いたようだな」

「ご主人も地下室に下りて来てダンボールの箱の上から覗き込みました。」

「それじゃひとつ、食事の前に久し振りにチビクロをお風呂に入れてやるか」

「ワタシも一緒に入る」

「僕も」

そこで、二階にある風呂場へ行き、ご主人にミコちゃんとひろしくんと一緒に、僕の大好きなお風呂に入ってもらったことになりました。

湯船は、畳一畳程もあります。三人と一匹で一緒に入っても平気です。お湯は下から沸かすのではなくて、フランクフルトソーサー並の大きな蛇口からドゥーッと音をたてて出てくるのです。蛇口の所を少しじると、シャワーに切換えることも出来ます。

ミコちゃんが、たっぷりシャンプーをつけてくれたので、僕はシャンプーの泡で真白になってしまいました。

「これじゃ、チビクロじゃなくてチビシロだ。今から、チビシロって呼ばうかしら」

「うん、そうしよう。チビシロ、ちょっとこっちをこらん」

ミコちゃんとひろしくんがこんなことを言いだすので、僕はあわてて体を揺すって泡を振り飛ばしました。

「キーン」

「チビクロ、もうチビシロなんて呼ばないから、そんなに泡をとばさないで」

僕は体を揺するのを止めましたが、まだ体のあちこちに残っている白い泡を、大急ぎでなめ始めました。

「チビクロったら、やっぱりチビクロって呼ばれるのが好きみたい」

当然ですよ。だって僕は生まれた時からチビクロなんだから。そう思って僕は、

「ワン、ワン」

と吠えました。

「わかったわよ、チビクロ。もう決してチビシロなんて呼ばないから」

「僕も 絶対チビシロって言わない」

二人が請合ってくれたので僕はやっと安心しました。

充分お湯で暖まり、シャワーを浴び、湯あがりに体中をブラッシングしてもらいました。長い長い旅の疲れもこれですっかり取れました。

「まあ、チビクロ、すっかりきれいになったわね」

奥さんが顔を出しました。

「もう食事の用意ができたんだけど、今日はチビクロと巡り会えた特別の日だから、下の食堂でチビクロと一緒に食事を取りましようよ。さあ、皆早く下りていらっしやい」

食堂に下りて行くと、皆の皿の上にはこんもりするほど大きなビーフステーキがのっていました。僕の皿にも、それに負けない位の大きな肉の塊がありました。八百グラムのつもりで八キログラムもの肉を買った

おかげで、その晩は、ご主人一家も僕も食べきれないほどの肉の御馳走にあずかることになったわけです。本当に美味しい、そして本当に素敵な夕食でした。

その夜は、新しい家の新しい部屋の新しいベッドだったのですが、ポーランドへ来て初めて安心してぐっすり眠ることができました。何といったってご主人一家と久し振りに同じ家で一緒に寝るのですから。

15

翌朝目を覚ましたとき、僕には自分がどこにいるのかすぐには思い出せませんでした。辺りが真暗なので、まだ飛行機の収納庫の中にいるかのような気になり、胸がキュツと締め付けられました。昨日、ご主人一家に巡り会い、ご主人一家が住むことになった家の地下室で眠っていることを思いだし、たちまち元気を取戻しました。

「そうだ。僕はもうご主人一家と一緒になんだ」

そう思うと、うれしさが込上げて来て、僕は思わずブルブルと首をふらずにはおれませんでした。

まだ朝が早いのでしょうか。地下室の中は真暗です。半地下室なので、地面スレスレのところに窓が切ってありガラスがはめこまれているのですが、そこから、明るい光は全く差込んで来ません。しかし、まだ暗いからといって、もう一度眠る気もしません。そこで僕は起きだして、地下室の中を探検して見ることにしました。

僕が眠った部屋は、僕の日本での犬小屋に比べたら、それこそ、小犬と、石炭を運んでいた馬ぐらいの差があります。僕の部屋のすぐ隣には、自動車がたっぷり二台は入りそうなガレージになっています。きっとご主人は自動車を買ったらここに入れるつもりなのでしょう。ガレージを挟んで、僕の部屋の向い側には、食料貯蔵庫があります。引越して来て間もないせいか、そこには今は何もおいてありませんが、そこに漂っている空気や、棚についたシミから様々なお酒、ハム、ソーセージなどの肉製品、バター、チーズなどの酪農品、玉葱、キャベツなどの野菜など様々な食品がそこに置かれていたことが僕にはすぐ分りました。そこにはそのうちに様々な食品が置かれることになるでしょう。でも、そうなったら、今日の様に、食料庫のドアは開けっ放しにしておいてほしくないな。だって、ハムやソーセージなんて、僕の大好物をいつでも食べて下さいと言わんばかりにしておくのは酷と言つものです。

ガレージの奥では、大きなガス・ボイラーがひくい声でうなっています。確か、ここから家中に温かい温水を供給して部屋を暖房しているとのことでした。その脇を抜けると、もうすこし先にドアがあります。そのドアも半開きになっています。僕は、興味をそそられて、その部屋に入っていききました。そこは、どうも作業室になっているようでした。部屋の真中に、分厚い木の作業台が置かれていて、それに、万力やグラインダーががっしりと取りつけてあります。大きなノコギリやハンマー、ペンチ等が壁に掛かっており、部屋の一番奥のところには、作り付けの棚箱があつて、その中には、様々なビンや、作業用の小道具、植物用の肥料の入った袋、バスケット、壊れた懐中電灯、巻尺、ブリキ製のオモチャの自動車、花の鉢などが、ごちゃごちゃに並べてあります。

その中で、僕の目を引いたのは、星形の真鍮製の飾りのついた立派な犬の首輪です。恐らく、僕より三倍

もありそんな犬のものに違いありません。あの飛行場で僕を救ってくれたシェパードのマーテックにならよく似合うことでしょう。僕は、その首輪をよく見ようと思って後足で立上がり、木の棚箱に足をかけ、首輪をくわえてぐいとひっぱりました。

と、その瞬間、棚箱がギィーといって、回転を始めたのです。僕は、あわててとびのきました。

棚箱は、ちょうど半分ほど回転して、止まりました。驚いたことに、その棚箱の後ろに、人間が一人入り込めそうな穴がぽっかりと開いたのです。そこからごく微かに、カビ臭い空気が流れ込んできます。一体、こんなところに、どうしてこんな穴があるのでしょうか。僕は少し怖くなって、元どおり棚箱を戻そうかと思いましたが、鼻先を突出して、辺りの匂いを嗅いでみても、それほど身に危険の及ぶような匂いは漂ってきません。僕は勇気を奮い起こして、その穴の中を探検して見ることにしました。なにしろ、日本からポーランドまで一匹でやってきたぐらいなのですから、こんなことで、怖気づいていたのでは、チビクロがすたるといふものです。

穴の中に入ってみると、そこは階段になっています。階段を十段ぐらい下がると、小さな部屋になっています。極々小さな部屋で、人間一人がなんとか横になれるぐらいの広さしかありません。もうずいぶん長いこと、ここに人が来たことはなさそうです。でも、ずつつと前に人がそこに住んでいたことは明らかです。アルミニウム製の粗末な食器や壊れたコップの破片、蠟燭のしよく台、蠟のたれた跡などがそれを証明しています。こんなところに一体誰が住んでいたんだろう、といぶかしくいますと、部屋の隅の小さな穴のところに、ちらつと動く気配がしました。ハッとしてよくみると、二つの赤い光るものが、僕の方をじっと見詰めているようなのです。

僕は、思わず後ずさりをし、体を低くして、ウーと唸りました。と、その赤い光るものが、二、三度パチパチと明滅しました。

「君、一体誰。この辺りでは見掛けない顔だな。何か用なの」

キィキィ甲高い声が聞こえてきました。その赤い光るものは、どうやら生き物の目のようです。僕も、ほっとして胸をなでおろし、

「僕はねえ、昨日から、このお屋敷に住むことになったチビクロって犬だけど、君は一体誰なの」

と尋ねました。

すると、穴の中から、一匹のドブネズミがピョンと飛出てきました。

「僕はね、この辺りをすみかにしている、ドブネズミのロンっていうんだ。君は、どうして、こんなところにやってきたの。ここは僕らの専用の部屋なんだから、絶対に譲れないよ。もし、力ずくで奪うっていうんなら、僕らにも覚悟があるからね」

「そんなつもりはないよ。僕は地下室に専用の広い部屋を貰ってあるから、別に、こんな部屋に住む必要はないんだ。ただ、こんなところに、どうして、こんな小さな部屋があるのか不思議に思っ、て、ちょっと覗いてみていたところよ」

「本当に、それだけかい。間違いないね」

「絶対に」

「それなら、わかった。近くに住むことになったわけだから、これから仲よくしていこうよ。それじゃ、僕の家族を紹介するよ」

ロンが後ろを振り向いて、長い尻尾をひとふりすると、さっきの穴から、次々にドブネズミが飛出して来、僕の周りは、たちまちネズミだらけになってしまいました。

「君が力に訴えようとしたって、これだけ数が多いのを見たら、あっさり諦めたことだろうね。だけど、僕は、人間ほど馬鹿ではないから、簡単に力に訴えたりしないんだ。君たち犬だって、人間ほど馬鹿じゃないだろう」

僕は、人間が馬鹿だ馬鹿だというロンの話に少しばかりむっとして、

「どつして、君は人間は馬鹿だ馬鹿だっていふんだい。人間は君が考えるほど馬鹿じゃないよ」

「君は、戦争を知らないからだよ。ほら、この部屋にこびりついているこのどす黒い血の跡を見たまえ。この部屋で暮らしていたユダヤ人が、殺された時に流した血だよ。僕らはこの部屋から、自由に地下水道に出入りできる。そこでも多くの人々が戦い、お互いに傷付けあつて死んでいったんだ。僕のお祖父さんのひいお祖父さんのそのまたひいお祖父さんのひいお祖父さんのその百倍ぐらい前のお祖父さんの時代からの言伝えではね、戦争中にこの狭い部屋にユダヤ人が三人も隠れ住んでいたんだ。十歳になる男の子とその両親の三人だったらしい。このワルシャワが解放されるたった一週間前にドイツ兵に発見されて、ここで射ち殺されたんだ。四年間もこんな狭いところに隠れて生きていたのにね。男の子だけは、ほら、この右手にある一人やつと通れる抜穴から逃げのびたんだ。マイクという、その子を逃がしてやるために、父親と母親が両手を広げてドイツ兵の銃の前に立ちはだかったんだ。この両側の壁に、両手をこうやってぐつと突つ張つて、二人して、雨アラレと降ってくる自動小銃の弾を受け止めたんだ。その男の子はね、ここから拔出して、地下水道の中に一週間も隠れていて、ワルシャワがドイツ兵の手から解放された日に救出されたんだ。もうすつ

かり骨と皮だけだったけれどね。その後、アメリカに渡って、風のうわさでは、すごく偉い政治家になっているってことだよ。君も、その穴をちょっと覗いてみないかい」

僕も興味をそそられて、その穴のところへ行ってみました。右手の壁のところに、レンガをとりはずしたような形で、人が横になってやっと通れそうな穴が開いていました。僕にとってはゆうゆう通れる大きさです。

「や、こつちだよ」

僕は、ロンの案内で、その穴の中に入りこみました。誰が、こんな穴を掘ったのでしょうか。しばらく、同じような大きさの穴が続いています。どこからともなく、水の流れる音が聞こえてきました。やがて、その音が次第に大きくなり、目の前に地下水道が現れました。大人でも立って歩けそうな広い水道の中を濁った水がドウドウと音を立てて流れ、モウモウと湯気が立っています。その水流の側に、なんとか歩けそうな突出たところがあります。ロンがそこに、ピョンと飛び降りました。僕も、真似してボンと飛び降りましたが、下が湿っていたせいで、スルリと滑り、危うく水流の中に落っこちそうになりました。と、一緒にいたきたロンの家族が、一斉にその長い尻尾を僕の体に巻きつけて、引戻してくれました。こんなところで流れの中に落ちてもしたら、一体どうなったことでしょう。僕は、ほっと胸をなでおろしました。

「滑り易いから、注意しなよ、チビクロ」

ロンが後を振り返って、注意してくれました。僕は用心しながら、ロンの後について行きました。上の方から明るい光が差込んでいるところに出ました。そこには石の階段がついています。

「チビクロ、ここから、外へ出ることができるんだ。さあ、おいで」

ロンは素晴らしいスピードで階段を上っていきます。僕も遅れてはならじとその後を追掛けました。階段を上り詰めると、そこから、朝の光とすがすがしい空気が流れ込んでいきます。

「ここから、雨水が流れ込むところなんだけど、格子が壊れているから、君だって外へ出られるよ。一緒に出てみようか。お前たちはここで待つておいで」

ロンは、家族にそこに残るようにいました。僕はロンと連れだって、地下水道から外へ出ました。そこはどこかの大きなアパートの傍らでした。

「こっちへ来てごらん。ここからなら、君の家が見えるよ」

アパートの端を回ると、ずつつと通りが続いており、両側に建物が立っているのが見えます。

「ほら、あの左側の、端から三番目の三階建てのグレイの建物が、君の、そして僕のすみかだよ」

確かにあの建物です。でもそこまで五十メートルもあります。まだ、朝が早いせいか、ひっそりと辺りは寝静まっています。きっとご主人一家もまだ、眠っているに違いありません。

「フウーッ」

ロンが、気が狂ったようにかけだしました。その後から、白黒のブチのある太めの猫が、それにおとらぬスピードで追掛けていきます。ロンは、たくみに身をくねらせ、ジグザグを描きながら逃回ります。しかし、身を隠す所がないので、ロンは次第に、アパートの壁の方へ追詰められていきます。

僕は、ハッとして我にかえり、猛然とブチ猫のところまでかけていき、精一杯大声をだして、

「ウーウー、ワン。止める、止める」

と叫びました。

ブチ猫は、ジロリと後を振り返ると、

「オヤ、ここらでは見掛けない顔だね。あなたは、犬じゃないのかい。だったらどうして、ドブネズミなんかの肩をもつかい。こいつらは、ドブの中でもうろついていりゃいいものをこんな朝早くから堂々と、私の縄張りの中をのし歩いている。ブチ猫ニーナの顔が立たない。ちょっとこらしめてやらんことにや。悪いことはいわないから、邪魔だてしないでくださいよ」

「僕は、昨日から、あの左側の三階建ての建物に住むことになったチビクロという犬だけど、今日のところは、僕に免じて見逃してくれませんか。同じ町中に住んでいることでもあり、力づくで、あなたとケンカする気にもなれないし」

「まあ、今日のところは、見逃してやりましょう。しかし、このつぎ、この辺りをうろろしていたら、許さないからな、このドブネズミ」

ニーナは、悪態をつきながら、のっそりとアパートの中へ入っていきました。

ロンは震えながら、身を丸めています。

「さあ、ロン、急いですみかに戻ろつよ。そろそろ、僕のご主人一家も目を覚ましそつだし……………」

今度は、僕が先頭に立つて歩きはじめました。さっきまでの元気もどこへやら、ロンが首をつなだれて、僕の後からついてきます。マンホールの割目のところから中に入ると、そこで待っていたロンの家族が、うなだれたロンを取囲んで、一体どうしたのかと聞いています。ロンの説明を聞くと、皆んなものすごく興奮して、ニーナの悪口をまくしたてはじめました。ロンの家族のうちでも、ニーナの犠牲になったドブネズミが少なくとも五匹はいるとのことでした。

「人間は、人間を殺し、ネコはネズミを殺す。地上の平和はいずれにぞある」

ロンが、その騒ぎの中で、哲学者めいたつぶやきをもらしたのが印象的でした。

僕は、もってきた地下水道を引き返し、ロンの家族に別れをつけて、地下室へ戻りました。半分開いた棚箱をもどすのに、一生懸命棚箱を押してみましたがビクともしません。そこで、もう一度、真鍮の飾りのついた首輪を口でくわえて、ぐいと引張ってみると、棚箱が、ギィーと動いて、元のようにぴったりと穴をふさぎました。

もう、半地下の窓ガラスから朝の光が差込んでいます。

おや、ミコちゃんとひろしくんの足音が近付いてきました。

僕はあわてて、自分の部屋にとってかえし、ダンボールの箱の中につずくまって寝たふりをすることにしました。だって、到着したその翌朝から、家を抜出したり、ドブネズミと仲良しになったなど知られたくありませんでしたから。

アメリカンスクール 16

「チビクロったら、まだ眠っているの」

「ポーランドにきたら、チビクロもお寝坊さんになっちゃたのかな」

ミコちゃんとひろしくんが僕の部屋の入口から覗いています。僕は、出来るだけ知らん顔してためきない

りをきめこんでいました。

「ミコちゃんどうする。チビクロ起こしちゃおうか」

「でも、チビクロは散々苦勞してやっとなたしたちに巡り会えたんだから、きつと疲れているのよ。今朝は、このまま寝かせておいてあげましようよ」

二人は僕のダンボールの箱の上から覗き込みながら、ヒソヒソ声で話しあっています。

これ以上心配かけたくありません。僕は、こっそり片目を開け、いきなり飛起きて、

「ワン」

と叫びました。

「まあ、チビクロったら、起きていたのね。寝たぶりなんかして」

「お早う、チビクロ」

僕は、ダンボールの箱から身を乗出して、二人のほっぺを代わる代わるなめて上げました。これがいつもの朝の挨拶です。こんな挨拶をするのも久しぶりです。やっといつもの習慣を取りもどした感じです。

「チビクロ、今日からあたし、ワルシャワのアメリカンスクールへ行くのよ。チビクロも連れてって上げるから、早く朝御飯を済ませてね」

「さあさあチビクロ、朝御飯よ」

いつの間にか奥さんが、大きな皿の上に大きな肉の塊をのせてミコちゃんの後ろに立っていました。朝からこんな大きな肉の塊の御馳走なんて生まれて初めてのことです。でも、こんな御馳走なら何時だって大歓迎です。

「ブッブー」

朝御飯を食べおわらないうちに玄関のほうから自動車の警笛が聞こえてきました。

「ジェンニードーブリ、パヌ。みなさんおはようございます。お迎えに参りました」

男の人の声がします。僕はまだにぎりこぶしほどもある肉の塊を残していたのであわててこくんとのみみました。ところがそれが喉につかえてしばらくは息もつけません。

「チビクロ、どうしているの早くいらっしやい」

返事どころではありません。目をしろくろらせて後ろ足で立ちあがり、前足で口のあたりを一生懸命ひつかきまわしたあげく、やっとのみこめました。目から涙はでるし、息は詰まるし、やはり食い意地は程々にしたほうがよいようです。

「チビクロ、置いていっちゃうよ」

奥さんの催促です。僕はちよつぱり情無い顔付きで階段を上っていきました。

玄関の前には、ピカピカに磨かれた黒い大きなカッコいい車が止まっていました。昨日乗ったタクシーに比べたら、ブラッシングのいきとどいた若いコリー犬と泥塗れの少し年老いたマルチーズ位の差があります。その傍らに三角形のおむすびを逆さにしたような顔をした男の人が立っています。紺色の背広を着て、角張った紺色の帽子を深々と被っています。おまけにネクタイも紺色です。両方のめじりが少し垂れ気味で、なんだか眠たそうな顔をしています。ご主人を先頭に玄関の階段を下りていくとその男の人が車のドアをいきよいよくパツと開けてくれました。

「ワタシは、アドミヤックと申します。どうぞよろしく」

運転手が片言の日本語で自己紹介をしました。ご主人が自分の商社の運転手のアドミヤックさんだ。長年日本商社に勤めているので、少し日本語が話せる。今日はミコちゃんをアメリカンスクールへ連れて行って貰うために来てもらったと奥さんたちに紹介しています。奥さんやミコちゃんやひろしくんも覚えてたのポーランド語で、

「ジェンドープリ、アダミヤックさん」

と挨拶をしています。僕も負けずに、

「ワンワン」

と挨拶しました。アダミヤックさんは、両方のめじりを益々下げて、大きな口を開けて笑いながら、

「ジェンドープリ」

と二人一人にあいさつを返しました。もちろん僕にも長い体を折曲げるようにして、

「ジェンドープリ」

といってくれました。その間にひろしくんはすばしこく車に乗込み、

「ワーこれは本物のメルセデスベンツだ。スケーナー。僕のミニカーよりよっぽどカッコいいや」

そういいながら、後ろの座席でピョンピョン跳びはねています。僕もひろしくんと同じ様に、そこらじゅう走りまわってピョンピョンやりたいところでしたが、昨日電車の中でタトゥーシユに皮ひもでいやというほどぶたれたことを思いだし、車にも静かに乗り静かにしていました。

「ひろしく、車に乗ったらチビクロみたいに静かにしなければだめよ」

奥さんがひろしくんに注意しています。

車が動きだしました。ものの十メートルも行かないところで、

「アッ」

奥さんが大きな声で叫びました。いきなり耳元で大声をたてられたのでアダミヤックさんは驚いて飛上がり、頭をゴツンと天井にぶつけました。奥さんはそんなことには見向きもせず窓の外をみながら、

「ストップ、ストップ」

と叫びました。アダミヤックさんはあわてて車を止めました。

「一体どうしたんだい」

「あなたたちよつと右側の建物を見てよ。ひろしと同年位の子供たちが建物の中にも広いお庭にも一杯だわ。そうよ。ここは間違いなく幼稚園よ。ほら、すべり台もあるわ、ブランコもあるわ」

「なーんだ。我家の斜め筋向いが幼稚園だったってわけだ。これはいい。ひろしの幼稚園をどこにするか、散々頭を悩ましていたのに、燈台下暗し、とはこのことだね」

「ぴつたりよ。正しくおあつらえ向きとはこのことよ。ひろし。あなたの幼稚園が見つかったのよ。さあ、いらつしゃい」

「おいおい、どうするんだ。先にアメリカンスクールへ行ってきたほうがいいんじゃないかい」

「まだ充分時間があるわ。善は急げよ。アメリカンスクールに行く前にちよつと頼んで見ないこと」

奥さんは、さつさと車を降りると、ひろしくんの手を引張るようにして先頭を切って歩き始めました。

奥さんの鼻息が嵐のように荒くなっているのを見ると、

——百万人として我行かん

の気がまえのようです。こうなったら奥さんを止めることができる人は誰もいません。ご主人もそのことは良く知っていますから、ミコちゃんともどもその跡を追掛けます。僕も負けてはおれません。たちまち奥さんより先にでて幼稚園の玄関先まで一気に走って行きました。

振返ると、運転手のアダミヤックさんは、メルセデスベンツの傍らで、右手で頭を押えながら口をポカンと開けて後ろから皆を見えています。車をたった十メートル走らせただけで頭は嫌というほどきつく天井にぶつけさせられるや、お客には皆降りられてしまつやで、さぞかし驚いたのでしょうか。本当に大きな口です。おむすびの逆三角形に口の丸、これはどこかで見掛けたマークです。そうそう、確か、公衆便所にかいてありました。なんでも逆三角形のマークが男用、丸のマークが女用を意味することでした。逆三角形に丸のマークが重なるとそれはきつと男女兼用ということになるのでしょうか。もっとも僕ら犬族には公衆便所は余り関係ありませんが。

幼稚園は、道路の曲り角にあつて例によって緑色の背の高いフェンスに囲まれています。大きな庭にはたくさん木が植わつており、ひろしくんと同じ年頃の子供たちが手を取りあつてダンスをしたり、砂場でトンネルを作つたり先生を囲んでお話を聞いたりしています。一番奥まつたところに二階だての建物が立つており、左側の道路から入るようになっています。奥さんが呼鈴を押すと若い女の人が出てきました。

「ジェンドーブリ」

ご主人一家が口を揃えて、挨拶しました。その女の人は髪の高い見かけない家族がドアの前に立っているのに驚いたのか、目を皿のように大きくして、

「モメント」

というところというまに奥に引込んでしまいました。しばらくすると主人よりもっと年をとったように見える背筋のぴんとはった女の人が出てきました。さっきの若い女の方は、その人の後ろに隠れて心配そうに様子を伺っています。

奥さんはニッコリ笑つと、

「ジエンドーブリ」

といいながら、手を差延べました。

「ジエンドーブリ」

中年の女の方はその手を握つて、ちょっとだけ笑みを浮かべました。奥さんはひろしくんをその人の前に押出していいました。

「この子をこの幼稚園に入れてください」

それは日本語でしたので、女の方は首を傾げながら、

「ニエロズミエム（分りません）」

といいました。奥さんにはその言葉の意味が分りませんでしたので、今度は奥さんのほうが首を傾げています。僕には『なんのことが分りません』といっていることが分りましたがどうすることも出来ません。すると奥さんは、庭で手を取りあつてダンスをしている子供たちの方を指差しました。それからいきなり女の人とひろしくんの手を取つて、音楽に合わせて足をリズムカルにはねあげたり、ステップをふんだりしてみせました。女の方は、合点がいったとみえてポーランド語で、

「それではこの子をこの幼稚園に入れたいのですか」

と尋ねました。僕は皆がきょとんとしているのを見かねて、

「ワン！」

と吠えて尻尾を盛んに振りしました。

「そうだ。チビクロはポーランド語がわかるんだ」

「ご主人が叫びました。」

「チビクロ、今この女の人はひろしくんを幼稚園に入れたいのかときいたのかい。もしそうだったら、ワンと一つだけ、もしそつでなかったら、ワンワンと吠えてくれ」

さすがにご主人です。僕を見る目があります。

「ワン」

僕は激しく尻尾を振りしました。嬉しくて、もっとワンワンワンといたいぐらいでしたが、ハイのときはワンというようにということでしたから、ワンとだけいつてその代わり激しく尻尾を振ったのです。

「ご主人は女の人の方へ向直ると、」

「ターク、ターク（そうです、そうです）」

盛んに首を縦に振りました。

「でもこの幼稚園には、外国人は一人もいないし、入れることは出来ません」

そういうと女の人は首を左右に振りしました。

「どうも入れることは出来ないといっているみたいだな」

「ご主人は僕の方に振り返りました。僕も力なく、

ワン」

とうなずきました。奥さんは、

「プロシエ、プロシエ、お願いします。なんとか入れてください」

ポーランド語と日本語をちゃんぽんにして盛んに頼み込んでいます。女の人はそれでも首を左右に振りつけています。しかし、ご主人一家はいつこうに帰るそぶりを示さないので、女の人が尋ねました。

「あなた方はどこの国の人ですか。ヒンスカ？ ベトナムミーズ？」

「ベトナムミーズ？ あら、ベトナム人かつて聞いているのかしら」

奥さんは一言つぶやくと、突然叫びました。

「ヤポンスカ！日本人！ヤポンスカ！」

女の人の目が急に輝きました。

「ヤポンスカ？」

「ターク、ターク」

「ワンワンワン」

僕は後ろ足で立上がり、尻尾を盛んに振りました。

「ターク！」

女の人は大きくうなずくと、後ろで様子を伺っていた若い女の人に入園用の書類を取ってくるようにといいました。ものの三十秒もしないうちに若い女の人が書類を持って来ました。中年の女の方は、その書類を

「ご主人たちに示しながら、右手に持った鉛筆で書入れるまねをしました。」

「どうも入園手続きのために書類に書入れるようにいつてゐるみたいだな」

「ワン」

僕はかんぱつを入れず相槌を打ちました。ご主人は僕にっこりし、女の人に向直つて、

「ユトロ、ドブジェ？（明日でいいですか）」

と聞きました。

「ターク」

女の方はこっくりして初めてにっこり笑いました。にっこり笑つと十歳位若くみえます。僕は嬉しくなつてその場を三回ぐるぐる回りました。女の方は僕の方を見ると、

「お前は、日本から来たのかい」

と尋ねました。

「ワン」

「さつきから見ていると、お前さんが通訳をやっているみたいだけれど、なかなかおりこうさんなんだね。この子が幼稚園に入ったら、時々一緒に遊びにいらしゃい。私がこの幼稚園の園長だから、日本からの感心な犬として子供たちにも紹介して上げるからね。私はね、日本人を見るのも日本の犬を見るのもうまれて初めてなのさ。だから、入れて上げる気になったんだよ」

といつて園長さんは僕の頭を軽くなでてくれました。僕は、園長さんから思いがけないお誉めの言葉とお招きとをいただいたのです。すっかり嬉しくなり、目を細めてその柔かい手の感触を味わいました。

「ジェンクーエン」

「ありがとう」

「さようなら」

「ドビゼニア」

皆でお礼をいって幼稚園を出ました。逆さおむすびの運転手のアダミヤックさんは、ベンツの運転席でこっくりこっくりと居眠りをしていました。

「ミコちゃんがアメリカンスクールに入る前にひろしくんの入園が決まるなんて全く運がいい」

「ご主人一家は大喜びです。」

「でも、トモコの度胸には恐入ったね」

「言葉はほとんど通じないのになんとなく話は通じちゃうのね。これからもなんとかなりそうだわ」

「トモコぐらい度胸があれば心配なしさ」

「ご主人と奥さんの話声でアダミヤックさんは目を覚まし、すぐに車を発車させました。一眠りしたせいかなれさがついていたためじりもピンと跳上がり、今度は奥さんに脅かされることもなく、無事にアメリカンスクールへ百キロメートルの猛スピードでふつとばすことが出来ましたから、なんとそこまでたったの五分しかかかりませんでした。」

「昨日私の秘書がミコちゃんの入學依頼の電話をしてOKをとってあるので、だれか出迎えてくれるはずだ」
「ご主人のいうように二階だてのアメリカンスクールの玄関口にちゃんと出迎えの人が待っていました。頭はツルツルに禿げているのに口元にはふさふさとしたくりいろのひげをはやした男の人とミコちゃんと同じ年頃の金髪の素敵な男の子です。ご主人一家が車から降りると、口髭の男の人が近付いてきて、

「ヨクイラッシャイマシタ。ワタシコウチヨウノデビスデス。ドウゾヨロシク」

と日本語で挨拶をしました。ご主人が思いがけないところで聞く日本語に驚いた顔を見ると、

「ワタシ、ムカシニッポンニイタコトガアルノデ、ニッポンゴハナセマス」

ご主人はそれは大いに助かります、こちらこそよろしくと握手をしました。

金髪の男の子はツカツカとミコちゃんに近付き、ミコちゃんの右のほっぺにチュッとキスをしました。そのときなんと静電気がピツと弾けたものですからミコちゃんは、両足をまげて僕の頭よりも高くボンと飛上がりました。始めてキスされたためなのか、静電気に驚いたのか分りませんが目をパチクリさせています。ホッペタはもう真赤です。僕たち犬仲間だったら、キスぐらいいつものことですから、あんなに飛上がったりしません。アンナとの時だって僕は全然飛上がったりしませんでした。もっとも少々赤くはなりましたが

「ヘーイ、カムオン（さあおいで）、ミコ」

男の子はミコちゃんの手をとってひっぱりました。ミコちゃんは手を引かれながら、たちまち姿を消して

しまいました。ご主人も奥さんもあつけにとられています。

「シンパイイリマセン。ミコチャンガクルコトラミンナシッテイマス。ダカラムカエニキタノデス。ミコチャンモスゲニアメリカンスクールニナレマスヨ」

「ご主人たちは心配そうでしたが、校長先生はニコニコしています。

「チョット、ワタシノヘヤデ、コノガツコウノコトニツイテオハナシシマシヨウ」

校長先生は校長室へご主人たちを案内して行きました。僕は校長先生の話よりもミコちゃんのことを気掛かりでしたので匂いを頼りにミコちゃんたちの跡を追ってみました。

二人の匂いは廊下を左に折れ、Aとかいた教室へ行き、廊下のロッカーのところへ行き、それからトイレに行き、体育館へ行き、運動場に出、階段を上って図書館へ行き、そしてまた最初の一Aの部屋に戻っているのです。さっきの男の子が恐らく学校の中をくまなく案内してくれたのでしょう。

僕はAの部屋の窓の外から後足で立って精一杯背伸びして覗き込みました。が、それでも少し高さが足りません。そこで少し弾みをつけてジャンプして見ますと、ミコちゃんは部屋の真中の机に座り、二十人ほどの子供たちに取りまかれてホッペを先ほどキスされた時のように真赤にしながら話をしているのです。

一体なに語を使っているのか、何について話しているのか分りませんが、いろいろと身振り、手振りをまぜた話に、赤、茶、黄、黒といろんな髪の色をした子供たちが愉快そうに頷いているところを見ると、ミコちゃんもそれほど心配なさそうです。

——案ずるより生むがやすし

そう思いながら校長室に戻ると、ちょうど話も終わったとみえてご主人一家が別れの握手をしているとこ

ろでした。

帰りの車の中で奥さんがいました。

「ミコちゃん、アメリカンスクールへ行きはじめたし、ひろしくんの幼稚園は見付かったし、これで子供たちのことはなんとか目処がついたわね。あなたは明日から商社勤務が始まるし、なんとなくポーランド生活も軌道に乗りだしたみたい。さあ、私も皆んなに負けないように頑張らなくっちゃ」

「さあ僕も、明日から幼稚園だ。皆んなに負けないように頑張らなくっちゃ」

ひろしくんが奥さんの口調をまねて言ったので、「ご主人と奥さんは大笑いしました。実は僕も、

「ようし、僕も皆んなに負けないように頑張らなくっちゃ」

と心の中で呟いたところでしたので、ご主人たちに笑われたような気がしてちょっぴり照臭い思いをしました。

その日、アメリカンスクールから帰ってきたミコちゃんが最初にいったのが、

「あたしにアメリカンスクールの玄関でキスした子、男の子かと思ってたら、マリアっていう女の子だったの。赤くなってそんじやった」

この調子なら、ミコちゃんも全く心配なさそうです。

ディナー 18

「プップー、プップー」

ミコちゃんやひろしくんと屋根裏部屋で遊んでいると、通りの方から大きな自動車の警笛が聞こえてきました。皆で窓から覗くと、家の前に見慣れない青い色の車が止まっています。ドアを開けて降りてきたのはなんのことはないご主人です。

「おーい、我家の新しい車がきたぞ。皆早く下りておいで」

「ご主人は、嬉しそうに手をふっています。ミコちゃんがアメリカンスクールへ行きはじめてから一週間近くたった夕方のことです。

「わーい、車がきたんだ」

「すごい。素敵な色の車だわ」

皆先を争って階段をバタバタと下りていきました。らせん状の階段ですので気をつけないと足を踏外してしまいかねません。結局一着は僕。続いてミコちゃん、ひろしくん、最後が奥さんの順です。奥さんは地下室で洗濯をしていたらしく、エプロンで手を拭きながらやってきました。

「ご主人は車の前で腕を腰にあて得意そうな顔をして立っています。」

「素敵な車だろう。これはプジョーというフランスの車なんだよ。今日から我家の車になったんだ。そこで早

速今夜はこの車でどこかへ夕食に出掛けることにしよう」

奥さんもミコちゃんもひろしくんも車の周りに集って、なぜたり擦ったり、車の中を覗き込んだり、ナンバープレート番号を読んだりしていますが、誰も乗込もうとはしません。

「一体どうしたんだ。早く乗った乗った」

「ご主人はドアを開けて促すのですが、皆は顔を見合わせて黙っています。」

「そうか分かった。パパの運転では不安だから乗れないというのだね。確かに僕はこの二年ばかり運転しなかった。でもね今日は丸一日、アダミヤックさんにつきっきりで運転を教えてもらったんだ。現にこうして自分で運転して、我家まで帰ってきた。それが信用できないというのならそれでいい。今夜はフルシャワー豪華なホテルのレストランで僕独りで大御馳走を食べることにする」

「ご主人は怒ってドアを閉めそうになりました。」

確かに日本の車と違ってハンドルは右から左へ変っていますし、道路も左側通行から右側通行へ変ったのも事実です。でも、ご主人は日本でもちゃんと二年前までは運転していたんだし、たかがこれしきのことです。事故を起こしたりするような人ではないはずですよ。もっと信頼してあげなくっちゃ。そう思って、僕はドアの閉まる直前に素早く滑り込みました。もっとも豪華なホテルの御馳走を食べたい気持ちも強かったのですが。

「アッ、チビクロが行くんなら、僕も行く」

ひろしくんがあわてて乗込みました。

「ひろしくんが行くんなら……私も」

「ミコちゃんも、奥さんの顔を半分見ながら、車のステップに片足かけました。

「しょうがないか。愛する夫に二人の子供、それにチビクロだけ先立たせるわけにはいけない。私も運命を共にすることにするか」

とうとう奥さんもご主人の隣の席に乘込みました。

「確かに、ハンドルが右から左へ変ったし、右側通行なので、いささか戸惑うことはあるさ。しかしなんといても僕はこれまで無事故、無違反でやってきた腕前なんだし、まあ安心してシートによっかかっていなさい」
「ご主人は自信たっぷりに発車させました。皆は顔にこそ出しませんでしたが、その実、両手でしっかりとシートにつかまっているのです。僕も少し申し訳ないと思いながら、背を低くして床にうずくまっています」

最初の曲り角を曲りかけたとき、

「アッ！」

奥さんが叫びました。

——キーン

「ご主人はあわてて急ブレーキをかけました。この前のアダミヤックさんの時と同じようにご主人は三十七センチメートルも飛上がりました。幸いアダミヤックさんほど背が高くないので天井に頭をぶつけずに済みましたが。」

「な、なんだい？」

「あの、ちょっと、洗濯してたんで、水道の水を出しっぱなしにしてきたんじゃないかと思って」

「なんだそんなことくらいでそんなに大きな声を出さないでくれよ。だれかが急に飛出してきたんじゃないかと思って、きもを冷やしたじゃないか」

「そんなことをいったって、急に思いだしたんだからしょうがないじゃないですか」

「でも、僕は運転しているんだし、隣の席で急に大声をたてられれば、てっきり車のことだと思ってびびくりするじゃないか。水道の水だったら、別にアッと叫ばなかったっていいだろう」

「アッと叫ばなくなつていいじゃないかと言つたって、急に思いだしたんですからアッと言つたって仕方ないでしょ。急に思い出さなくするわけにはいかないわ」

ポーランドで聞くご主人と奥さんの最初の口喧嘩です。ポーランドにくるまえ確か僕をポーランドに連れて行くかどうかをめぐつてさんざん聞かされたことがあります。あのときと少しも変わりありません。日本にいたときのようにこつして堂々と口喧嘩が出来るようになったのもそれだけご主人と奥さんがポーランドの生活になれてきた証拠に違いありません。ミコちゃんといろしくんはまた始まつたかという顔をして、両肘を前のシートの背もたれについて聞いています。

なんでも、人間の世界には夫婦喧嘩は犬も食わないということわざがあるそうです。確かに僕も夫婦喧嘩はあまりいただけるとはおもいませんが、その言い方は、はつきりいつて気に入らせません。

——犬も食わない

というと、犬はなんでも食べちゃうがそんな犬でも食べないというちょっと嫌な意味がその裏にこめられているからです。

曲り角で夫婦喧嘩が続いているうちに他の車が一台後ろに停車しました。口喧嘩に夢中になっているご主

人はそれに気がつかないようです。僕はそれを気づかせて上げようと思って、

「ワーワンワン」

と吠えました。と、ご主人と奥さんは後ろの車にはつと気づき、僕のほうをばつの悪そうな顔でチラリと見ると、

「こんな道路の曲り角で口喧嘩などしている場合じゃない。さあ、出発だ」

車はふたたび走り始めました。今度は奥さんも、

「アッ」

と叫んだりしないので車は滑かに走ります。それにしても、出しっぱなしの水道の水はどうなっているのでしょうか。僕は少々気になりましたが、ここで僕が、

「ワン」

とでも吠えようものなら、今度は僕がご主人のきもを冷やすことになりかねませんので黙っていました。まあ、たいていの場合、奥さんが忘れたかしらというときは忘れてないことが多いのです。

ご主人は左ハンドルになれないせいか、スピードをそれほど出さずに走っていますが、事故の心配をしなければならぬようなことは全くありません。皆のシートをつかんでいた腕からも次第に力が抜けてきました。僕も後ろの座席に上がって、ガラス窓からワルシャワの景色を楽しむことにしました。

「今日は、ビスワ川のほとりにあるソレツツというホテルに行くことにしよう。ほら、この通りがワルシャワの一の大通りマルシャコフス力通りだよ。通りの真中に中央帯があって、赤い市電が走っているだろう。この前日本大使館へ行った時にはこの電車に乗ったのだよ」

通りの両側には大きな街路樹が植わっています。どこに行っても大きな街路樹があるのには感心させられます。広い歩道があって、人々がゆっくり歩いています。石造りの建物がどこまでも続いて建っています。「ここを右に曲ってしばらくいくと……」

車は右に大きなカーブを切り、両側に三車線ある道路を走って行きます。

「ほら、大きな河が見えて来ただろう。この河がね、ポーランドの母なる大河と言われるビスワ河だ。ポーランドの大きな都市の多くはこの川の岸边に発達しているんだよ。現在の都のこのワルシャワ。四百年まえまで都だったクラコフ。コペルニクスという偉い学者が生まれたトルン。バルト海に注ぐ河口には、グダンスクにグジニアという二つの大きな港町がある」

僕は右の窓へ首を回してビスワ河を見ましたが向つの河岸までずいぶんあります。その間を溢れるような水が流れています。両岸には背の高い木が沢山植わっていますが、まだ芽をふいていない枯木同然の枝の間から、夕日に照りはえる水面が見えます。ご主人はビスワ河にまつわる話を続けています。

「今から四十年まえ、世界中が大戦争をしていたんだよ。この戦争を第二次世界大戦と言うのだけど、その戦争はこのポーランドにドイツ軍が攻入ったことから始まったのさ。その戦争も終りに近くなつて、ソビエト軍はドイツ軍を撃退させながらとつとつこの川の向つ岸まで来たんだよ。ワルシャワは未だドイツ軍に占領されたままだったけれど、ワルシャワの市民は、ソビエト軍が助けてくれることを期待してドイツ軍を相手に戦いをいどんだんだ。ところがソビエト軍はピクリとも動かなかつたんだね。ワルシャワ市民が持っている武器といえば、小銃とか鉄砲の類ばかり。完全武装したドイツ軍に勝てるわけがない。それでもポーランド人はずいぶんとがんばったんだけど、二月後に降伏する。ドイツ軍はワルシャワの全住民を追放し、市街

をかたつぱしから略奪して火を放ち、王宮をダイナマイトで爆破した。そのとき戦死したり、処刑されたりした人の数が二十万人と言われている。その結果、このワルシャワは、ほとんどがれきの山となり、戦争前には百二十万だった人口が二十万人まで減ってしまっただ。この事件は『ワルシャワほつき』という名で有名な史実なんだけど、ポーランドの公式の歴史の中では認められていない。ソ連にとって都合の悪い事件だからね」

「へえ、本当のことなのにどうして、ソ連は認めようとしらないの」

「今も、ポーランドはね、ソ連の言うことをむりやり聞かされているのよ。ソ連が昔の王様みたいに威張っているの。王様にとって都合の悪いことはなにも話したり、書いたりしてはいけないことになっているの」

「ふーん、ちょうど王様の耳はロバの耳というお話にそっくりね」

「そう、その通りなんだ」

「ニコちゃん王様の耳はロバの耳ってどんなお話なの」

「昔々あるところにね、とってもいばった王様がいたのね。その王様の耳は本当はロバの耳のように長くて毛がモジャモジャはえていたの。でもけらいや町の人は王様の耳がロバの耳っていいえないの。言えばつかまつて牢屋にぶちこまれたり、縛り首にされちゃうの。だからちょうどソ連が王様で、ポーランド人は王様のけらいみたいと思ったの」

「ポーランドはソ連なんかのけらいなんかやめちゃえばいいのにね」

「ポーランドは、本心ではけらいでなくなりたいのでしょうけどね、王様はそんな勝手はゆるさないのよ。ガキ大将が少しくらい無理なことをいったって周りの子供たちはいっ通りになければならないことがあるで

しょう」

「そういえば、アメリカンスクールにはジョンというガキ大将がいるの。ジョンがこうしろああしろというとその通りにする男の子たちがいるの。聞かないと、ゴツンってやられちゃうのよ」

「ポーランドって、かわいそうな国なんだね」

「うん」

「ほんとに」

「ご主人も奥さんもしんみりと頷きました」

話をごここまで進んだとき、車がすーっと止まりました。ご主人がさきほどいったソレッツ・ホテルの前でした。いよいよ豪華な夕食です。もうさっきから僕の口の中はつばきで一杯です。

——犬も食わない

という言い方は気に入りませんが、確かに僕も犬族の一員にふさわしく、いつでもびっくりするくらい食欲があることを認めないわけにはいきません。

19

ホテルの入口を入るとすぐ左側がレストランになっていました。ご主人一家がツカツカと入るうたとすると、「プロシェパーナ（もしもし）」

という声がかかって来ました。レストランのドアの左側にあるカウンターの奥に座っていた中年の丸顔のおばさんが立上がり、呼びとめたのです。

「レストランに入る前に皆さんの着ているコートをこのクロークに預けて下さい」

「わかりました」

と即座に答えたのはひろしくんです。ご主人たちに今度は日本語でコートを預けていくようにと教えています。たったの一週間ポーランドの幼稚園に行っただけなのにひろしくんは、もうこんなにポーランド語がうまくなったのです。人間も子供の場合は、犬と同じ様に語学の才能があるとみえます。

クロークのおばさんはひろしくんがポーランド語がわかるとみると、ニコニコと丸い顔をますます丸くして、

「可愛い子だねえ、真直ぐな黒い髪をして。どこの国から来たのかい」

コートをハンガーに掛けながら声を掛けました。

「日本から」

「まあ日本から。それでどこの町から来たのかい」

「東京」

「えっ、東京。まあかわいそうに。東京ってところは、人が多くて、車が多くて、空気が汚れていて、物価が高くて、とつてい人の住めるところじゃないというじゃないか。この前テレビでやってたよ。皆さんはワルシャワみたいがいいところに来られて本当に良かったね」

東京はそんな酷いところではないのにクロークのおばさんはそう信じ込んでいるようです。コートを預け

てレストランに入ろうとするとおばさんがいました。

「ここではねえ、レストランには犬を連れては入れないのだよ。犬はホテルの玄関口につなぐところがあるからそこにつないでおいで」

——せっかく豪華なホテルと一緒に食事ができると思ってたのに……と思うと僕は全身から力が抜け一層空腹感が強まるのを覚えました。とミコちゃんが、

「チビクロは特別な犬なの。日本からたった一匹でこの遠いポーランドまでわたしたち一家の跡を追って来たのよ。それにポーランド語がみんなわかるの。だからこれまで私たちがポーランド語が話せるようになるまで、このチビクロがわたしたちの通訳をやってくれていたの。だから、今日はチビクロへのお礼のための食事なの。もし、チビクロを玄関口につなぐことなくちゃならないんなら、わたしたちも食事を止めて帰らなくっちゃならないわ」

もちろんこんなに滑かに話せたわけではないんですが、とにかくミコちゃんはこれだけのことを必死になっ
ていったのです。ミコちゃんが引掛かるとひろしくんが助け船を出します。二人があまり一生懸命なのでク
ロークのおばさんも話に引込まれるように、カウンターから身を乗りだして聞いていましたが、コツクリ頷
くと、

「よくわかったわ、モメント(ちょっとまってね)」

というカウンターの下をぐぐって外に出てき、すたすたとレストランの中に入って行きました。さつき
から事情がのみにめずにキョトンとしているご主人と奥さんにミコちゃんとひろしくんが今までのいきさつ
を説明してあげています。

しばらくするとクローク係りのおばさんは黒い立派な服を着たデブリと太った男の人と一緒に帰って来ました。レストランの入口辺りで立止まりこちらをチラチラ見ながら話をしているところを見ると、その男の人に事情を説明しているようです。でもなかなか話はつきそうにありません。とうとうクローク係りのおばさんと太った男の人とは顔と顔とがくっつかんばかりにして大きな声で怒鳴りあいを始めました。

「規則は規則だよ、たとえば、どんな立派な犬だろうが犬は犬。犬などレストランに入れるわけには絶対にいいない」

「だって、あの犬は特別の犬なんですよ。日本からたったの一匹で飼い主をしたってやってきたっていうし、ポーランド語がちゃんとわかるっていうし」

「日本の犬でポーランド語がわかるって。ふん、日本の犬でなくたってポーランドの犬なら、お手、こつちへ来い、待て、止まれ。皆んなポーランド語がわかる。別に感心するほどのことではないね」

「その程度のことでもなにも感心していただこうなんて少しも思いませんわ。あの犬はねえ、日本語とポーランド語の通訳をやっていたっていうんですよ。通訳をね」

「通訳？じゃああなたはあの犬が通訳をやることをちゃんとその目で見たとでもいうのかね」

「話をきいただけですから見たことはありませんわ」

「そんなのでたらめに決っている」

「まあ、でたらめですって、じゃあ、あの日本の子供たちが私にでたらめをいっているというんですか」

「あんな小さい子供のいうことなんてあてにならないよ」

「それじゃ、賭けますか。もしでたらめでなかったら、一体どうしてくれます」

「そのときは喜んで、あの日本のお犬さまとやらにこのレストランの一番いい席でお食事を取っていただこうじゃないですか」

「わかったわ、もしでたらめだったら、私は、あなたの前でチンチンを三回やってワンと吠えますわ。それじゃ、でたらめかどうか実際に試してみましようよ」

クローク係りのおばさんと、ビヤ樽の様に太った男の人が鼻の穴を大きく脹らませ、ギラギラした目で僕を見ながら近付いてきました。

「ミコちゃん、ひろしくんにも、今までの話の内容は大体わかった様です。」

「チビクロが通訳がやれるってことをどうやってわからせたらいいのかしら」

「そうだ、この前幼稚園に行った時、パパがイエスの時はワンだけ、ノーの時はワンワンと答えさせたでしょ。あれをやらせようよ」

「そうね、それは名案ね」

「ミコちゃんは、近付いて来た二人の前に出ていき、

「クロークのおばさん、それに、あのーちよつとばかり太めの小父さん、このチビクロが通訳できるかどうか、賭をしたんでしょ。それではチビクロがどうやって通訳をするかお見せするわ。まず、ポーランド語がどのくらいわかるかってところからやりますから、チビクロに、ポーランド語であなた方からなにか質問してみてください。そうしたら、チビクロがアっているとき、つまりタークのときはワン、間違っているとき、つまりニエツのときはワンワンと吠えますから。チビクロもいいわね」

「ワン」

僕がそう吠えるときニコちゃんもニコリしました。

「それじゃ、ワシから一つ聞いてみよう。ポーランドの首都はワルシャワかね」

「ワン」

「ポーランド語ではネ」のことを「ネット」といっかね」

「ワン」

「ネコの好物はネズミかね」

「ワン」

「ふん、ポーランド語が少しわかるみたいだが、ちょっと質問がかたより過ぎた。いつもワンというだけかもしれない。今度はニエツという質問も混ぜねばなるまい。さーてと」

「日本はポーランドのすぐ近くにあるのかね」

「ワンワン」

「水は低いところから高いところへ流れるのかね」

「ワンワン」

「ワシは凄くやせているかね」

「ワンワン」

「ワシは素敵かね」

さあ、これはむずかしい質問です。ビヤ樽のように太っていて、アゴが三重にもなっているのに、良くな質問ができるものですが、素敵か素敵でないかは、自分で決めればいい種類の問題ですし、この小父さ

んは夢見る乙女のような目で僕をじつと見つめているのです。僕は答えました。

「ワン」

「ワシは、凄く男性的かね」

「ワン」

「ワシは、食らいつきたくなるほど魅力に溢れているかね」

「ワン」

「ワシは、世界中の女性にもてそうかね」

「ワン」

「ブラボー。素晴らしい！完璧だ。こんな素晴らしい犬を見たことはこれまで一度もない。まさに天才だ。ポーランド語が良くわかってるばかりではない。わがポーランド文化！つまり、他人にたいして限り無く優しいというポーランドの文化を君は良くわきまえている。よし、賭けは、ワシの負けだ。さあ、君はチビクロといったな。今晚は君の分はワシのおごりだ。大きな骨つきの肉のかたまりを進呈しよう。チビクロくんとお連れの日本人の皆さん、私がこのレストランの支配人のデブコフスキーです。私のレストランへようこそいらっしゃいました。一番奥の一等席へご案内しましょう。さあ、どうぞ」

デブコフスキーさんは大きな体を揺すりながら先頭にたって歩きはじめました。前の方から見たら、きつと、デブコフスキーさんの陰に隠れてご主人一家の姿はまるで見えないうに違いありません。

案内されたのは、五人ほどのバンドマンが演奏しているボックスのすぐ近くの席でした。観葉植物の鉢が幾つも飾ってあります。デブコフスキーさんは僕の背が低いを見ると、普通の椅子の上にお子様用の椅子

を重ねて特別高い椅子を作ってくれました。首から上だけテーブルの上に出していたひろくんも、

「僕もチビクロの様に高くして」

といって、椅子を二つ重ねて貰いました。デブコフスキーさんは、最後に僕の首の回りにナプキンを結わつけてくれ、

「どうぞ、いいお食事を。すぐにウエイトレスを寄越しますから」

という、大きな体を揺すりながら行っていました。

テーブルの上には、真白いテーブルクロスが掛かっており、その真中には一輪差しの花瓶が置かれ、クロッカスの花がいけてあります。こんな豪華なところでおまけに白いナプキンを付けて食事するのは初めてのことで僕はすこしばかり堅くなりました。ご主人一家もポーランドのレストランで家族だけで食事するのは初めてのことで、どこことなく落着きがありません。

「すぐにウエイトレスを寄越します」といったけれど、メニュー一つなかなか持ってきて来ない。どうしたんだろう。「日本でなら座るか座らないうちにウエイトレスがすぐ飛んでくるのにおかしいわね。ずつと向つの方で三人集っておしゃべりしているのはウエイトレスでしょう。おそろいの茶色の服を着ているし。私たちがここに座つたのに気がつかないのかしら」

すぐかたわらのボックスではバンドが、ゆっくりした曲を演奏しています。それに合せて、食堂の真中にしつらえられたダンスフロアで踊っている人達もいます。老いも若きもといういいかたがありますが、踊っているのは若い人というより、むしろご主人と同じぐらいの歳の人が多く、中には東京のおじいちゃんおばあちゃんと同じ位の歳の人達も腕を組み足を上げて楽しそうに踊っています。食事をしている人は小さな声

で皆んな楽しそうに話しています。明りは薄暗いぐらいで辺りには落着いた雰囲気漂っています。僕は明かる過ぎるのは苦手なので大助かりです。

「遅いなあ、一体どうなっているんだ」

「もうかれこれ二十分にもなるのにねえ」

しかし、いらいらしているのはご主人一家だけのようです。ご主人一家より早く来た人達の中にもまだメニューが来ていない席もありますが、一向にあわてるようすでもなく話に花を咲かせています。

「ポーランドでは、サービスが悪いつて聞いていたけれど、これほど悪いとは思わなかったな」

「ご主人がそういったとき、ちょうどメニューが届きました」

「いらっしやい。メニューをどうぞ」

茶色の制服を着た金髪の小柄なウェイトレスです。メニューを置くとさっといなくなりました。

「三十分たってやっとメニューか。一体どうなってるんだろっ」

「ご主人がぶつぶつ言いながらメニューを開きました。メニューにはつるの様につながったまるっこい文字が一杯書いてあります」

「さあてと。なにがなんだかさっぱりわからないな。おや、こっちはフランス語でこっちはポーランド語のようだぞ。フランス語ならば、なんとかなりそうだな。ふむふむ、これがオードブル、これがポタージュ、ポーランド語ではこれをズッペというのか、そっぴえばスープにすこし似ているな、これがポアソンだから魚というわけか」

「パパ、僕もう決めちゃった」

「えっ、まだパパはメニューを読んであげてないのにとっやっで決めたんだい」

「あそこの小父さんが食べているのが美味しそうだから僕あれにする」

「あたし、その向うの女の人が食べている、ソウセージやキャベツやら一杯煮込んだのがいい」

「なるほど、メニューを苦労して見るよりかそっちの方がとっとり早いな。パパもそつするとしよう」

こつして一通り、注文の料理が決りましたが、今度は注文をなかなか取りに来ません。

「こつなりや、郷に入らば郷に従えだ。腰を落着けて待つことにしよう。おや、いい音楽をやっているじゃないか」

「ご主人は初めてバンドの演奏に気付いたようです。」

「まあ、懐かしいわ。私たちが初めて一緒にダンスを踊ったときの曲よ。ほら、『魅惑の宵』って曲。あなた踊らないこと」

「よし、踊ろう。ミコちゃん、ウエイトレスが来たら、合図を頼むよ」

いつものことながら、変り身の早いご主人と奥さんです。注文のことはそのままに、さっとたってダンスフロアで踊りはじめました。

「おなかすいちゃったけれど、僕たちもなにかゲームやららない、ミコちゃん」

「そうねじゃ果物と野菜だけのしりとりのゲームは？」

「うん、それじゃ、僕から出すよ、僕の一番好きなスイカ」

「カボチャ」

「やだね、や、や、ヤキイモ」

「ちょっと怪しいけどおまけしとくわ、モモ」

「モヤシ」

「シン」

「ソラマメ」

「メロン」

「あつ、ミコちゃんが、ンって言った。ミコちゃんの負けだ。さ、ミコちゃん手を出して、僕がしっぺするか
ら」

「ミコちゃんがテーブルの上に手を出しました。ひろしくんがねらいを定めて打とうとするど、ミコちゃん
はさつとひっこめてしまいます。」

「ミコちゃんずるいよもっとちゃんと出しておかなくちゃならないんだよ」

「そんなことないわ、それは私の自由よ」

「あつ、ミコちゃん、ウエイトレスが来たよ」

「エッ」

「パチン」

「ミコちゃんがちょっとウエイトレスに気を取られたすぎにひろしくんはミコちゃんの手をパシッと叩きま
した。」

「いたーい。ひろしくんもやったわねえ。でも本当にウエイトレスが来ちゃったからパパたちに連絡しなくつ
ちゃ」

「ニコちゃんが手を上げて合図すると、ご主人と奥さんは、すぐテーブルに帰って来ました。奥さんは気持ち良く踊っていたとみえて、両頬がポーツと上氣しています。さきほどの金髪のウエイトレスが、

「注文は」

と、いって、メモを構えました。

「ご主人は、スープはこれこれとメニューから、お肉はあれ、それと近くの人の料理をこっそり指差しました。ニコちゃんが注文したソーセージやキャベツやらを一杯煮込んだ料理は、ピゴスというポーランドの名物料理ということがわかりました。

「あれ、僕の頼む料理がなくなっている。どうしよう」

ひろしくんが悲鳴を上げました。みると確かに先ほどの小父さんはもう違うものを食べています。しかし、あの小父さんが食べていたものと同じ物ということでウエイトレスも、

「ロズミエム（わかりました）」

とニコリして引下がりました。

どっちみち、料理が来るまで時間が掛かるだろうと、いって、ご主人と奥さんは料理の注文が終わると、またすぐダンスへ行ってしまうました。奥さんの頬の赤みはまだ収まっていまませんでした。

「それじゃ、わたしたちもさっきの続きをしましょうよ。今度は動物のしりとりのよ。私から出すわね。いい？」

「うん、いいよ」

「じゃあ……ワニ」

「ニンゲン。アッしまった」

「ひろしたら馬鹿ね。ワニといういつもすぐニンゲンっていうんだから。さあ、しっぺよ。手を出して」
「また、あの手にやられたか、うーん残念」

今度は、ひろしくんが盛んに手を動かしてなかなかミコちゃんに打つチャンスを与えません。

僕だけ独りポツンとしているのはさびしいので僕は、すぐかたわらのバンドの小父さんをなめることにしました。目の前でいろんなボタンみたいのがたくさんついたほそ長い笛を吹いている男の人の顔の表情がとても面白いので、僕は一生懸命その人の様子を見ていました。息を吸うとそれを両方の頬に一杯ため、吹くときにはいかにも苦しそうに目じりや額にしわを一杯よせます。

吹いている間は堅く目をしていますが、息を吸う瞬間、パツと目を開けます。泳いでいる人が息をするときパツと口を開けると良くにっています。その目を開けたとき、僕の目と視線があいました。と、片目をつぶって、僕にウインクしてくれたのです。僕もそれにこたえようととして片目をつぶろうとしましたが、うまくいきませんでした。もう、笛の小父さんは、両目を閉じて、一生懸命に笛を吹いています。そこで笛の小父さんが今度目を開けたときに合図をしようと思って待構えていました。

曲の切れ目に笛の小父さんがパツと目を開けた瞬間、僕は右足をパツと上げ、片目をその足で隠しました。ウインクできないので、足先で片目を隠したのです。笛の小父さんは、ちょっと驚いたように目を見開きましたが、すぐ目を閉じてしまいました。僕は僕のウインクがはつきり伝わったかどうか不安でしたので、次ぎの曲の切れ目を待構えていました。笛の小父さんがそのつぎ目を開いたとき、僕は今度こそ良く分るように、右の前足で、片目を押え、そのついでに首を直角にかしげ、耳をピクンと動かししました。

笛の小父さんの目は、今度はびっくりしたように大きくなり、両頬のふくらみがこれまで以上にふくらんでいき、次ぎの瞬間とつとつこらえきれなくなつて笛の中に、

「ク、ク、ク、ク」

笑つたとも、咳込んだとも区別のつかない息を吹きこんでしまいました。

「プウープウープウー」

突拍子もなく大きな笛の音が辺りに響きわたりました。とつとつ笛の小父さんは笛を口から話し、

「ワッハッハッハ」

と腹をよじつて笑いだしました。

バンドの他のメンバーはあつけにとられて演奏をやめてしまいましたし、踊っていた人達も踊りをやめて笛の小父さんの方を振返りました。バンドの一人が、

「一体どうしたんだヤーヌシュ。急に笑いだしたりして」

「いやー参つた参つた。僕の前にナプキン結んでちょねんと座っているこのおちびの大君が、僕がちょっとウインクしたらウインクでも返すつもりか、盛んに面白いしぐさをするのだよ。前足で右目を隠してみたり、首を傾けてみたり、いろいろするもんだから思わず吹きだしてしまつて。すまんすまん」

「この黒い子犬がウインクをだつてどれどれ」

バンドのメンバーは演奏そつちのけで僕のテーブルの周りにぞろぞろ集つて来ました。踊っていた人達もその後に入垣を作り背伸びをしておきこんでいます。みんながヤーヌシュとよばれた笛の小父さんにもう一度ウインクをしてみるとけしかけています。笛の小父さんは僕の前に進みでると、ちょっとばつの悪そう

な顔をして、右目をキュツとつぶりました。僕も負けずに、もう一度右の前足で右目を隠し、首を直角にかしげ耳をピクリと動かし、今度はおまけに尻尾も振りしました。

見ていた人は、どっと喚声を上げ我先に僕に向かってウインクを始めました。僕はここは一つサービス精神にてつしようと心に決め、一人一人に僕流のウインクを返しました。みんな大喜びです。

「なかなか面白い犬だね、ぼつや。名前は何ていうの」

「チビクロというんだよ」

「おじょうちゃん、チビクロにどうやって、ウインクの芸をしこんだんだね」

「あら、チビクロがウインクするなんてこと今の今まで知らなかったわ。でも、チビクロは、通訳ができるんですから、ウインクすることぐらいアサメシ前だと思うわ。今はユウメシ前ですけどね」

「通訳？」

「そう、いまさっきも、このレストランの支配人のデブコフスキーさんに、通訳できるところをお見せして、そのごほうびにバンドに一番近いこの特等席で骨付の肉のかたまりを御馳走して貰うことになったのよ」

「そんな凄い犬が今夜のお客とは知らなかった。それじゃ、今夜はチビクロのために我々も腕をふるって一つ大いに演奏しよう」

バンドのメンバーがボックスに戻り、テーブルを取囲んでいた人の輪が消えるとご主人と奥さんだけが残されました。ご主人たちも輪の中で今までの様子を見ていたのです。ちょうどそのとき料理も運ばれてきました。デブコフスキーさんが御馳走して上げるといっていた例の骨付の肉のかたまりもちゃんと届きました。

「いいお食事を」

ウエイトレスはちゃんと挨拶をし、僕に微笑みながらウインクをして引下がりました。

バンドの演奏が始まりました。最初の曲は「子犬のワルツ」の変奏曲です。これはポーランドが生んだ名作曲家ショパンという人の曲だそうです。それから次々に犬に関係のある曲や日本の曲を演奏してくれました。ご主人や奥さんは、

「これは、荒城の月だ」

「あつ、さくらさくらよ」

となつかしそうな顔で聞いています。

「こんな遠いポーランドで日本の曲を聞きながらこうしてゆっくり食事できるなんて、全く想像もしなかったけれど実にいいものだね」

「お肉の周りには、こんもりと盛上がるほどのジャガイモ。一皿一皿がかなりボリュームがあつて、最初はとても食べきれないと思っていたけれど、一つの皿が引込んでから次ぎの皿が出てくるまでたつぱり時間があつて、その間に演奏を聞いたり踊ったりお話をしたりしていると、結構おなかに入るもののね」

「なるほど、こうやってゆっくり時間をかけて食べるつても、なれてしまふといいものなのかもしれないね」
「そうね、考えてみるとこのほうが人間らしいのかもしれないわ。本当に食事を楽しむってこういうことなのかもしれないわね」

「食事に二時間以上もかけるって、日本じゃとうてい信じられないことだね」

「どこのテーブルでも、みんなゆうげんと食事をとり、楽しそうに話しあっています。食べては踊り、踊っては食べ、大きなヒフテキを平らげた後で、デザートに大きなチーズのかたまりや、日本の生菓子の二倍ほ

どもあるいかにも甘味のきつそうなお菓子を注文して、平然と食べています。

「ご主人たちが、デザートに選んだのは、さすがに「小さめのアイスクリーム」ということでした。皆んながデザートを食べ終わりがけたとき、バンドは氣を利かして、「ホタルの光」を演奏してくれました。

「ご主人一家が席をたつとバンドのメンバーが一斉にウインクしました。今度は皆んなを笑わせるとせっかくの演奏が駄目になりかねませんので、僕はただ尻尾を振るだけにしておきました。レストランの出口にウエイトレスがせいぞろいして送ってくれました。クロークでコートを受取り、クロークのおばさんに楽しく食事ができたお礼と別れの挨拶をしていると、デブコフスキーさんも、大きな体を揺すりながら現れました。

「お食事いかがでした。ご満足いただけましたか。それはおおいに結構。またいらして下さい。チビクロも是非一緒に」

「こついいながらご主人に握手をし、奥さんの手の甲にキスをし、ミコちゃんとひろしくんのほっぺにキスしました。最後に僕の頭をなでながら、尋ねました。

「今日の料理は気に入って貰えたかね、チビクロ」

「ワン」

スターレミヤスト 20

次の休みの朝です。

「ミ」ちゃんにひろしくん、今朝、家主のバランスキーさん一家がお見えになるのよ。お願いしておいたお手伝いさんを連れて来て下さるの。だから、早く食事を済ませて、食器は流しまで運んでね」

「ママ、お手伝いさんって何のお手伝いをするの」

「ミ」ちゃんがききました。

「簡単にいうとママの助手ってとこね。ママこれから色々と忙しくなるでしょ。お家も東京の何倍もあるし、掃除するだけでも大変でしょ。それに毎日長いこと待たなければならぬ買い物もあるし。日本からいらつしやるパパのお客様のおもてなし。あなたたちの下着の洗濯に日本語の補習。広い庭の手入れ。とてもママだけでは手が回りそうにないわ。そこで家主のバランスキーさんに頼んでお手伝いさんを探して貰ったの。そうしたら前にバランスキーさんの家で働いていたこともあるいい人が見つかったらしいの」

「へえママに助手が来るの。いいなあ。僕も助手がほしいなあ」

「ひろしくんにはちゃんとチビクロという立派な助手がいるじゃないの。昨日だってひろしくんたら幼稚園にハンカチを忘れて行ったんだから。そうしたらチビクロが追掛けて行って渡してあげたじゃないの。助手が欲しいのはあたしの方よ」

「ニコちゃんだつてこの間遊んでいてスカートを木の枝に引掛けてすってんころりんつて転んだとき、チビクロに助けてもらったじゃないか。それに泣きそうになった時にもほつぺたをなめて貰ったりしてさ」

「まあひろしくんたら、言つたわね」

「チビクロはなかなか有能な助手みたいだな。こういつことになるパパもチビクロみたいな助手がほしいな」

「あら、あなたにはバンダさんという美人で有能な秘書がオフィスにいらつしゃるんじゃないの」

奥さんがちよつとトゲのある目つきで「ご主人の方をチラツとにらみました。ご主人はそれが聞えないかのよつに時計を覗き込むと、

「もうそろそろバランスキーさんがお手伝いさんを連れて来るころだな」

ブルルンブルルン。表の通りの方から弱々しい車のエンジンの音が聞こえてきて、家の前で止まりました。きつとバランスキーさん一家に違いありません。僕は先頭を切つて玄関へ走つて行きました。ニコちゃんもひろしくんも、

「ワァーイ、お手伝いさんだ」

と叫びながら、僕の後を追つてきました。ご主人と奥さんは食堂の窓ガラス越しに確かめてからやつて来ました。

玄関のドアを開けると家の前に小さな赤い車が一台止まっていました。ご主人のプジョーに比べると半分の大きさしかありません。

「あつ、あれはボルスキーフィアット126つて車だよ」

車のことなんでも良く知っているひろしくんが言いました。

「そうだね、イタリアのフィアットという自動車会社と提携してポーランドで車を作っているんだけど、小さいほうのツードアの車が、あの126。パバのプジョーと大体同じ大きさのがポルスキーフィアット25という車だ」

「でもパバ、プジョーにくらべたらちよつとスタイルが悪いね。それにスピードも余り出ないみたいだね」

車の左側のドアがギーッと音をたてて開きました。顔中ひげだらけの大きな男の人が狭いところから這いであるような感じで降りてきました。

「あの方が家主のバランスキーさんだよ」

「ご主人が皆に説明しました。バランスキーさんは車の右側に回っていき、ドアを開けてあげました。助手席にはまんまるい顔をした太った女の人が座っています。狭い助手席にピツタリはまりこんだのか体の向きを変えるのもひと苦労のようです。プールに落ちた人を助けあげてやるようにしてバランスキーさんがやっとその女の人を車から降ろしました。降りた拍子に車がユサユサと揺れました。」

「あの方がバランスキーさんの奥さんのハンナさんよ」

奥さんが言いました。

続いてそのすぐ後ろの席に座っていたシュークリームのようなヘアスタイルをした女の人が、助手席の椅子を前に倒して降りはじめましたが、この人もハンナさんに負けず劣らず太っているので助手席と車の柱との間にはさまってしまい身動きがとれなくなってしまうました。バランスキーさんが引張ります。後ろからハンナさんも引張ります。

「一二三」

二人してやつのことで引ずりだしましたが、せつかくのシークリームがたのヘアスタイルがいつの間にか空飛ぶ円盤のようにペチャンコになってしまっています。

「あの人がきつとお手伝いのユラさんよ」

ユラさんはペチャンコになった髪を両手で一生懸命に直しています。

続いて十歳程の金髪のやせた男の子がスルリと降りてきました。大きな太った人三人も続いた後に見るせいかまるでカトンボのように見えます。

「バランスキーさんの息子のヨゼフよ。小学六年生」

これで終りかと思っていると最後にもう一人類が真赤な女の子が降りてきました。ハンナさんやユラさんほどではありませんが、結構太っています。でも若いだけ動作はびんしょうで誰の手も借りずに身軽にボンと飛びだしてきました。その反動で車がブルンとゆれました。

「バランスキーさんの娘のヨアンナよ。十七歳高校三年生」

あんな小さい車によくこれだけ太った人達が乗ってたものです。車の苦勞がよくわかります。あえぐようなエンジンの音がしていたのも無理ありません。バランスキーさんたちは通りにせいぞろいするとやあらちらを向直り、

「ジェンドーブリ」

声をそろえて挨拶をしました。

「どうぞ入ってきてください」

「ご主人が声を掛けると、緑色の金網の扉を開け、ハンナさんを先頭に玄関の石の階段を上ってきました。入

口で挨拶が始まりました。

バランスキーさんは奥さんの手をとってチュッとキスしました。奥さんはたちまちポツと頬を赤くしました。ご主人はどうするかと思っただけだとするとバランスキー夫人やユラさんやヨアンナに握手だけしています。いつだったか、

「今度ポーランドの女の人に挨拶するときは僕も手の甲にキスをするぞ」

と言っていたことがありましたが、なかなか実行はできないみたいです。バランスキーさんがお手伝いのユラさんをご主人一家に紹介しました。ユラは腰を屈めるようにして一人一人に握手しました。

「どうぞよろしく、ミステル」

「ご主人はこれからミステルと呼ばれることになりました。

「どうぞよろしく、マダム」

奥さんはマダムです。

「どうぞよろしくミコちゃん、どうぞよろしくひろしくん」

ユラはそういつてミコちゃんとひろしくんを両手に抱え上げ、二人のほっぺたに代り番にキスをし、

「マイコーハニー（私の可愛い人）」

ときつく抱きしめました。ミコちゃんもひろしくんもいつべんにユラが好きになったようです。皆の挨拶が終わるとご主人が僕のことをバランスキーさんたちに紹介してくれました。

「我家の愛犬チビクロです。日本から我々を尋ねて一万キロメートルもやって来た。今ではポーランド語も全部分かる。ミコちゃんとひろしくんのお手伝いさん」

「ご主人のややあいまいなポーランド語でしたので皆に良く分かったのかどうか良く分かりませんでした。が、バランスキーさんはじめ全員が目や皿のようにして僕を見たので大体は通じたに違いありません。

「チビクロ、よろしく。なかなか賢そうなつらがまえだな」

バランスキーさんは、ひげだらけの顔ですので犬族としては親しみが持てます。ひげの奥の目は優しくそうです。

「チビクロは日本から独りでやってきたの。偉いのねえ」

ハンナさんは両方の頬が焼きたてのコッペパンのように盛上がっています。これでも結婚するまえまで有名な歌手で踊も踊っていたというのですからちよつと想像できません。今では片足を二十センチメートル上げるのも大変なことです。

「お手伝いのユラよ。これからは同じ屋根の下で暮らすのよ。仲よくやりましょーね」

そういいながらユラは僕を抱きあげてくれました。ユラは近くでみると顔中にシワがあります。それも不思議ではありません。もう六十四歳というのですから。でも僕を抱きあげてくれた手は、驚くほど大きく力強いのです。きつと働きものに違いありません。

「わたしの話すポーランド語が皆分かるのチビクロ。すごいねえ。高校で英語を習ってるけどなかなか良く聞きたれないわ」

ヨアンナは、腰を屈めて頭をなでてくれました。赤い頬がりんごのように光っています。肌が白いのでくちびるの赤さも引立ちます。なかなか可愛い顔だちです。

「僕、ヨゼフ。僕んちにもトトという犬がいるんだよ。トトも賢い犬なんだ。今度紹介するからね」

ヨゼフの体からは犬の匂いがします。きつと犬好きなのに違いありません。

一通り挨拶が済むと、バランススキーさんがせっかくの機会だからワルシャワの名所のスターレミヤストをご案内したいと提案しました。

「スターレミヤストって何ですか」

ミコちゃんがききました。

「スターレはポーランド語で古い、ミヤストは街という意味です。だから文字通りに訳すと『古い街』ということですが、ワルシャワの街が古昔その辺りから始まったとされるところで、街を囲んでいた古い城壁の跡や、中世のおもかげを残した街並が見られ、なかなか美しい所です。是非一度見ていただきたいのです」

そこで皆んなはご主人のプジョーとバランススキーさんのポルスキーフィアット126とに分乗して出発しました。体の大きさでどちらに乗るかをぎめたところ、結局プジョーには、運転するご主人、バランススキー夫人、ユラ、ヨアンナ、ヨゼフ、フィアットには、バランススキーさん、奥さん、ミコちゃんとひろしくん、それに僕ということになりました。つまり運転する人を除くとご主人一家とバランススキーさん一家とがそっくり入替ったという訳です。フィアットが先導して、その後ろをプジョーがついて来ます。

バランススキーさんは、

「さつき運転した時に比べたら、なんだか車が羽根のように軽くなったぞ」

とかなりのスピードで走ります。エンジンにはバツバツと大きな音をたてます。プジョーに慣れつこになった僕の耳にはかなりうるさく感じられます。後ろの席はミコちゃんとひろしくんと僕が座っても狭い感じなのによくこんなところさつきはユラやヨアンナやヨゼフまで乗っていたものです。バランススキーさん

は、曲り角などもスイスイと思いきって曲がるので、奥さんやミコちゃんやひろしくんもなんとなく心配そうで、それとなく周りのものにつかまっています。バランスキーさんは街のあちこちにある建物や、記念の銅像等を指差して説明してくれます。説明に夢中になるとハンドルから両手を離してしまうのでその度に助手席の奥さんは心配そうにバランスキーさんがハンドルから離れた手を見つめます。バランスキーさんはそんなことにはお構いなしに盛んに両手を離します。

「この通りはクラコフ通り、戦前から続いている美味しいお菓子屋さんや、喫茶店もあって、ちょっとばかり、おしゃれして来るところです。あつ、左手に見えてきた大きな建物が聖十字架教会、あそこにはポーランドの生んだ偉大な音楽家ショパンの心臓が祭られています。ショパンはパリで死んだのですが、遺言に従って妹がショパンの心臓をここまで運んできて祭ったのです。」

「そ、そのすぐ斜め前にある銅像が地動説で有名なコペルニクスの像です。コペルニクスはポーランドが生んだ有名な天文学者で地球が太陽の周りを回っていることを明らかにした人です。それまでは地球のほうが天の中心にあつてその周りを太陽をはじめ全ての星が回っていると考えられていたのです。」

「本当に地球が太陽の周りを回っているの。じゃ、どうして太陽は東から出て西に沈むの。」

ひろしくんが尋ねました。

「そういつぶつに見えるだけなのよ。車に乗っていたら、時々車の方が止まっていて、周りの景色が動いているように思えるときがあるでしょう。あれと同じことよ。」

奥さんが説明しました。

「ふーん」

ひろくんは分かったような分からないような顔をしています。僕もあまり良く分かりませんが、太陽が動いていようと地球が動いていようとあんまり大した変りはないことなので、コベルニクスという人がどうしてそんなに有名なのか良く分かりませんでした。

「今通りすぎた右手の門がウルシャワ大学の正門です。ウルシャワ大学はポーランド一の大学です。さて、そろそろスターレミヤストに着きましたよ。あそこに高い塔がたっているでしょう。あそこがザムコービー広場で、高い塔の上の銅像がジグムント三世という王様です。今から約四百年前にクラコフという町からウルシャワに都を移した人です。ザムコービーというのは『城の』という意味で、ほら右手に再建中の大きな建物が見えるでしょう。あれが戦争で壊された城です。さてとここに駐車して皆んなして後は歩いて行くことにしましょう。」

フィアットが止まるとその直ぐ横にプジョーがすつと滑込んできました。プジョーの助手席から今度は独りで降りたバランスキー夫人は、バランスキーさんのところにつかつかと歩いて来ていました。

「あなた今日からわたしたち一家総入替えにしないこと。車のサイズもそのほうがピッタリみたいだし。プジョーに乗ったら、もうフィアット126なんかには乗れませんわ」

「ああ、一向に構わないよ。わたしとしては食事代とガソリン代が半分になって大助かりだ」

「わたしのほうで引受けるにしては、少々荷が重いような感じがしますが…」

「ご主人が真面目な顔をしているものですから大笑いになりました。」

「これがバルバカン。昔のウルシャワは二重の城壁と堀とによって外敵の来襲に備えていたのです。その門のひとつはバルバカンとよばれ敵の来襲に備えて銃眼、落し穴、みずぜめの設備なども持っていました。その

城門の跡がこれです。もうすっかり壊れていますが」

バランスキーさんが説明してくれるバルバカンには赤茶けた色をしたレンガづみの壁で、古いせいかあちこち崩れており色もまだらです。バルバカンに囲まれた中の街に入っていくと道路は石畳でその両脇には四、五階だての建物がびっしりと立っています。

しばらく行くと大きな広場に出ました。広場も石畳です。広場の周りにも四、五階だての建物が立並んでいます。ひとつひとつの建物の色や窓の大きさなどそれぞれ違っていますが、全体としてはちゃんと調和がとれています。広場には、そぞろ歩きをする人、椅子に腰を降ろして話している人、壁に並べられた絵を眺めている人などいろんな人がいます。白い馬をつないだ馬車が観光客を乗せてポツカポツカと高いひずめの音を辺りに響かせて走っています。アイスクリームの店の前には長い行列ができています。

その行列を横目で見ながら皆んなが行きすぎようとしたとき、

「僕、なんとなくロディ（アイスクリーム）が食べたくなっちゃったな」

ひろしくんが、少し恥かしそうに奥さんにいいました。と、皆んなその言葉を待っていたかのようにつたりとその場で立止まり、ちょっと顔を見合わせ、こっくりとつなずくと黙って行列に加わりました。

「ワルシャワは前の戦争ですっかり壊されてしまったという話をきいたんですが、ここだけはたすかったのですか」

「いいえ」

バランスキー夫人が、とんでもないといわんばかりに打消しました。

「ここも、すっかり壊されたのです。でも、壊される前とそれこそ一枚一枚のレンガの色までそっくりに作り

直したのですよ」

「じゃーさっき見たあのバルバカンもそうなんですか」

「ミ」ちゃんがききました。

「そうですね。あのバルバカンも、この広場の周りの建物も、そしてあそこに十字架の高い塔が覗いている聖ヤン教会も、皆ほとんど影も形もないまでに壊されたのです。それを昔どおりに、ワルシャワの市民が力を合せて戦後いちちはやく作り直したのです」

「戦後いちちはやくって、皆貧しくて食べるものも充分なかったでしょうに」

「今だってポーランドは貧しくて、肉屋の前には毎日長い行列ができていますわ。でも、ポーランド人は戦後すぐこの街の復興に乗出したのです。ポーランド人はワルシャワが大好きなんです。愛するものが壊されたらそれを元のように直してあげる。たとえおながすいていても。これは普通の気持でしょ。おながすいているからといって後回しにするわけにはいきませんわ。戦争さえなかったら、ここにはここに今あるのとまったく同じ美しい街があり、平和な生活があったということであれば、その美しい街、平和な生活を一日も早くとり戻そうとするのが人情ではありませんこと？ この広場の石の畳の一枚一枚を若い娘も年寄いた老人も四つん這いになりながら、うめこんでいったのですよ。わたしもその中にいたんですが、膝こごうはすりむけるし、手からは血が出るし……でも皆それほど気にもしませんでしたわ」

昔、劇場で歌ったこともあるというバランスキー夫人の美しい声で聞くスターレミヤストの物語は感動的でした。

ヨアンナやヨゼフもこの街にまつわる話は良く聞かされているものと見えて次から次へといろんなことを

話してくれます。戦後再建する日に備えて、この辺りの図面や設計図などを一万枚以上も戦時中に密かに疎開させた人達のこととか、バルバカン建物の建築様式を伝えるために特別の学校まで作った話など、いろんな苦心談を聞いているうちに、アイスクリームの番が回ってきました。

ミコちゃんもひろしくんもポーランドで初めてアイスクリームを食べた時には日本のに比べてちょっと酸っぱすぎるといつていたのですが、今ではもう大のファンです。食べ終わっても少しもべとつかず、口の中がすつとするアイスクリームは、なんとなく本物の味がします。僕にもちゃんと一個の配給がありましたので、ひろしくんに持って貰ってペロペロとなめました。美味しくてあこが落ちそうです。アイスクリームをなめながら、日曜画家が広場の端のところに絵を一杯並べて売っているのを見まわりました。スターレミヤストを描いたものもあれば、肖像画や犬や猫を描いたものもあります。

絵の好きな主人は、夢中になって見えています。

「結構抽象的な絵もあるんだな。せつかくだから、二まい買って行くか」

色々迷ったあげく主人は、スターレミヤストを描いた小さい絵を二まい買いました。

僕はもう絵どころではありません。絵の並べられている直ぐ側に、喫茶店があり、そこから凄くいい匂いがしてくるのです。もうそろそろお昼時なのでおながすいてきました。僕は喫茶店の前まで行き鼻をくんくん鳴らしていました。嗅ぎ慣れない料理の匂いです。少しチキンに似ているけれど、少し違います。

「はて何だろっ」

盛んに首を捻っていると、

「チビクロ、絵を買っているうちにどこへ行ったかと思っていたらこんなところにいたのか」

どうもみんなして僕のことを捜していたような口振りです。しまったと思い、尻尾をまいていると、

「いや、さすがにチビクロは鼻がきくな。ここはスターレミヤストの名物のひとつでカチカ料理を食べさせてくれるところですよ」

バランスキーさんが説明しました。

「カチカ、つまりダック」

ヨアンナが英語でつけ加えました。

「ダック、つまりあひる」

「ミ」ちゃんがいました。

「へえ、あひる。醜いあひるの子のあひる?」

「そうグアグアと鳴く」

「あひるなんて食べたことないなあ。おいしいのかな」

「それは折紙つき」

「おなかもすいたことだし」

「それではここでお昼といきますか」

「さすがにチビクロは目のつけどころじゃない、鼻のつけどころがいい」

やっと面目を回復して、僕は鼻を二、三度ひくひくさせました。

「でもここは喫茶店なんですよ、喫茶店でカチカ料理を出すんですの」

「そうなんです。そこが変つてて面白いでしょ」

喫茶店の入口には厚い毛布がぶら下がっています。冷たい空気が中に入らないようにしてあるのです。その毛布をくぐって中に入ると中は薄暗くて、楽しそうに食事を味わっている雰囲気があります。皿やフォークのふれあう音。人々の話声。ウエイトレスの足音。ろっそくの炎のゆらめき。

一番奥まったところにちようど九人と一匹分の席があいていました。ウエイトレスが注文を取りにきて、カチカの注文をする。

「一羽にしますか、半分にしますか」

ときいています。カチカ一羽丸ごとにするか、それとも半分にするかの意味だそうです。ウエイトレスはメモ帳片手に一人一人に一羽か半分か聞き始めました。ミコちゃんといろしくん以外は、あのやせたヨゼフを含めて一羽の方を選びました。さて僕に聞かれたらどっちにしようか、あのヨゼフだって一羽なんだから、僕だって一羽にしてもおかしくないと思っていいたら、いつの間にか僕の分は半分ということに決っていました。僕だってちゃんとポーランド語が分かるのですから聞いてくれればいいものを……

大人はワインを飲みはじめました。バランスキーさんやご主人も飲んでいきます。帰りの車の運転は大丈夫なのでしょう。子供には、ボジェツキーという木の実で作った赤い色のジュースが出ました。

しばらくするとこんがりときつね色に揚げられたカチカが運ばれて来ました。一羽分の方は大きな皿からはみだすほどあります。周りには例によって、こんがり揚げたジャガイモが山盛りになっています。カチカは少しくせがあるので赤い色をしたベリーのジャムを付けて食べるのだそうです。でも僕の口にはジャム抜きの方があいそうです。

カリカリとほどよい歯応えがあって、これはいけます。おいしそうな匂いがしたはず。かなり堅い骨

があります。僕にはちょうど手頃です。ニコちゃんやひろしくんは食べかたを教わりながら、骨の間の肉をナイフやフォークで苦心して食べています。ヨアンナやヨゼフは慣れた手つきで、したなめずりしながら食べています。でも僕のスピードにはかきません。僕は骨ごとたちまちペロリと食べてしまいました。もう半分ぐらい食べられそうな気がします。誰か気付いてもう半分追加注文してくれないものかと辺りを見回しましたが、みんな食べることに話に夢中です。大人たちはアルコールが入ったせい、いつもより少し大きな声でポーランド語や英語や時には日本語までチャンポンにして楽しそうに話しています。

「これは、我々日本人の舌にも良く合う。トモ」是非料理法をマスターして帰った方がいい」

「ユラはカチカ料理の名人ですよ。うちに来ていたときも、良く料理してくれましたよ」

「マダム、何時でもわたしが教えて差し上げますよ」

「でも、あなた日本ではあひるを売っているところがありませんわ」

「それじゃ、我家の庭に池を作つてあひるを飼おう」

「あんな狭い庭じゃ、あひるを飼えてもせいぜい一羽よ」

「家族四人に一羽じゃ、一羽にするか半分にするかの注文もとれないね」

「やつぱり、あひるはポーランドで食べるに限りますわ」

みんな、カチカにも話にも満足して喫茶店を出ました。店を出るときひろしくんが叫びました。

「一羽丸ごと食べられるぐらい大きくなってから僕はまたこの店にくるんだ。ゼツタイ」

僕は心の中で叫びました。

「僕はもう一羽丸ごと食べられるぐらい大きいんだぞ」

あんなに痩せたヨゼフだって、少しも残さずに一羽食べたのですから僕が食べられないはずがありません。犬の気持ちももうすこしくんでほしいなあ。

でも、もう一度広場に出ると僕の心もきゅうつと引締まりました。ここの石畳はお腹を空かしながらも、膝こぞつをすりむき、手から血を流しつつ、一枚一枚しきつめていったという話を思い出したからです。力チ力半分といいながら実は僕のお腹はもう九分以上もまんばいになっているのです。わずか一分が満たされないと、文句をいつている自分の食い意地の活さになんとなく情無くなってきました。

21

突然、パカッパカッと陽気な馬のひずめの音が聞こえてきました。先ほどの白い馬車です。お客は誰も乗っていません。

「ワッ、馬車に乗りたい」

「ミコちゃんとひろしくんが口をそろえていいました。」

「食後の散歩は馬車でとしゃれますか」

「アルコールがはいって口がなめらかになったご主人が、早速右手を上げて馬車を止めました。」

「さあさあ乗ったり乗ったり」

「わずか四人分の席に九人と一匹がぎゅづぎゅづづめで腰を降ろしました。お腹もふくらんでいます。恐ら

くポルスキーフィアット126の中以上の混み具合でしょう。御者はチラッと後ろを振り返りましたが、
「それじゃ出発しやすよ。ようがすかな」

そういつと、

「ビジョー」

馬の尻にムチを当てました。馬車はピクリとも動きません。

「ビジョー」

もう一度ムチが馬の尻にピシリと音をたてましたが、馬車は動きません。痩せてか細い尻です。その尻に筋が走り、馬が動きだそうと必死に力をふりしぼっているのが分ります。

「少し降りた方がいいかね」

「いや、そのままで結構でやす。こいつめがいつもの怠け癖を出したんでさあ」

御者はお客が降りると料金がへるせいもあってか、自分が降りて、馬車の後ろに回り、後ろからぐいと押しました。そのときを待っていたかのように馬は元気良くパカッパカッと走りだしました。御者はよるけて、つんのめりそうになりました。

「ち、ちよっと待て…」

御者はあわてて追っ掛けてきます。

馬耳東風とはこのことをいうのでしょうか。馬はなに知らぬ顔をしてパカッパカッといせいよく走ります。御者が今にも追いつきそうになると、ほんのすこし速度を早めるので、御者は益々腹をたてています。

「この馬鹿やろう。トンマメ。わしを置いてどこへ行くさる」

御者は口汚く罵りながら追掛けてきます。馬のほうでは何事もないように走りつつけます。いや、何と驚いたことには、馬はパカッパカッというひずめの音に合せて鼻歌を歌っているのです。

「かいばも充分くねずして

朝から晩までこきつかう

御陰でおいらはこの通り

痩せておいぼれ 力も出ない

たまにはかいばを腹一杯

食べて見たいよ

おいらでも」

「さてこのうすらとんかち、お客さんにもしものことでもあったらどうするんだ」

御者は右手でムチを振回しながら追掛けてきます。通りがかりの人も立止まって見えています。子供たちが御者の後ろから、

「馬勝て、御者勝て、馬勝て、御者勝て」

とはやしながらついて来ます。

「おいらはこの道二十年

慣れたものだよこの通り

御者などなくても走れるさ

右に折れれば 教会で

左へ下れば ビスワ河

シャンシャンシャンシャンお馬が通る

ワルシャワーの名馬だよ」

御者は息を切らして、ゼイゼイという音がここまで聞こえて来るほどです。それでも諦めずにヨタヨタと追掛けてきます。頭はもうすっかりこま塩で、大きな鼻はお酒のせいのか真赤です。大きなソーセージが顔の真中に一本ぶらさがっているようです。それが走るたびに揺れています。

「一体どうしたんですかね。この馬車は御者なしで大丈夫ですか」

「まあこの程度のスピードならひっくり返ることもないでしょう。御者なしで走るってのもなかなか乙なものですな」

「でも、あの御者の小父さん、かなりお年のようだけど、あんなに走って大丈夫かしらねえ」

「まあ苦しくなれば止まりますよ。こんな時に観光案内というのも何ですがせっかく観光馬車に乗ったのですから説明しますと、左に見えてきたのが、ポーランドの母なる大河ビスワ河でして、向う岸がブラガ地区、ちょうどあのあたりに動物園があります。」

「いつそのことこのまま向う岸の動物園まで行きたいね、パパ」

「ビジョー、ビジョー」

「ミ「ちゃんとヨゼフが掛声をかけています。」

「ご主人一家といい、バランスキーさん一家といい、なかなか見上げた度胸の良さですが、僕は御者の小父さんのことが気に掛かってしょうがありません。僕は空席になっている御者台のところへ行行って馬に話掛け

ました。

「馬さん、馬さん聞こえるかい

僕は小犬のチビクロさ

御者の小父さん大弱り

今にも心臓やぶれそう

そろそろおよし悪戯は」

「おやおやこれは」ご親切

だけど 潮時 分かつてる

たまには おきゅうをすえないと

おいらの主人は横着で

自分ばかりで 酒を飲み

おいらにゃ かいはもくれぬのさ

しばらく走って一回り

広場に戻れば 止まります」

僕が御者台に座っているのを見付けた通りがかりの人の中にはなにを勘違いしたのか、

「まあ、御覧よ、あんなちび犬が馬車を走らせているよ」

と感心している人がいます。子供たちも、

「チビ犬頑張れ、チビ犬頑張れ」

と声援を送ってください。

「あの角曲がればもう広場

お降りの準備を願います

皆様長らく お疲れさん

ここが終点 止まります」

その言葉通り、馬はその場でピタリと止まりました。ちょうど皆が馬車に乗った場所でした。皆が降りようとしているところに御者が息を切らしながらやって来ました。ゼイゼイと息を苦しそつにはきながら、「こんちくしょめ、わしをコケにしようって……」

御者はムチを高く振り上げました。今にもうちおろそうとしたとき、僕は、馬車の上からその腕に飛びつき、御者の袖口に噛みついてぶら下がりました。もちろん腕を噛まぬように充分注意を払ってのことですが、御者は驚いて袖口にぶら下がっている僕を見

「このやろ」

といって振りほどきました。僕は五メートルも向うに放り出されました。御者はもう一度馬目掛けてムチを振り上げました。僕は御者の背後から、

「ウーワンワン」

と激しく吠えたりしました。御者は僕の方を向き直り、今度は僕に目掛けてムチを振りあげました。ピューン。うなりをしょうじたムチが僕に向かってとんで来ました。僕は危うく身をかわしました。

「ワンワン」

「このチビ犬め、邪魔をしおってからに」

「ち、ちょっと待って下さい」

「ご主人が御者の右腕にすがりつきました。すっかり頭に来ている御者は思いきり腕を横に払ったので、ご主人はよたよたと転びそうになりました。あわててバランススキーさんが御者を後ろから押えつけました。

「お客さんに怪我でもさせた日にゃ、いっていどうするんだ。大ぢくしょうにはちゃんと痛い目をさせて教えないことにはわからねえんでさあ。自分の馬にあっしが教え込もうってのが何が悪い。このチビ犬が横からじゃまだてしやがって」

「まあまあ、事故もなくこうして無事一回りしてきたんだから、今日のところは目に見てやって下さいよ」
「見ればこの馬は凄く痩せている、充分かいばをあげているようには見えませんな」

「それに反して、あなたの方は昼間から酒臭い息をしている。酒飲みの御者の方が事故を起しやすいじゃありませんか」

「あなたがこうして酒が飲めるのも、この馬がいればこそじゃないですか」

「そんなにムチではかりひっぱたいたりしないで、もうすこし可愛がってあげたらどうですか」

「この馬は凄く頭がいい。ちゃんと同じ所に戻って来て、ほれ、こんなに静かにしているじゃないですか」

「ご主人とバランススキーさんが代り番に御者を慰めています。御者の怒りも次第に収まって来たようです。そういわれりゃ、この馬あつてのわっしですわ。こいつが倒れた日にゃわっしも食ってはいけねえ。ようがす分かりやした。今日からは、ムチではあんまりひっぱたかねえようにして、かいばもうんとこさ食わしてやりやしょう。な、お前、今日からは大事にしてやつからな。それにしたってよ、時々わっしを置いてけぼ

りにして走りだす癖さえなけりや、おめえもいやつなんだがなあ」

「それじゃ、この馬のかいば料に少々チップを弾みましょう。御者拔きの馬車というものに初めて乗せて貰ったことでもあるし」

「いやあ、だんなもお人が悪い。そんなこといいつこなしですぜ」

僕は馬のところに行つて声をかけました。

「馬くん良かったね。今日は、おなか一杯かいばが食べられそうだよ」

「チビクロつていったかね。今日はみつともないところをお見せしちゃって面目無い。悪い主人じゃないんだが、酒が入ると人が変っちゃつてね。今日のことですこしはいい人になつてくれればいいんだけどね。ありがとよ。君の主人は優しいそうだなみたいで幸せだね。君が放り出されたとき必死になつて止めに入つたものね。大切にしておあげよ。今度また、ここへ来たら、会いに来てくれよ。今度はすこしは太っているかな」

それから二月経つた頃、スターレミヤストへ行つたことがあるのですが、その時観光客を載せて走っているこの馬を見掛けました。相変わらず、痩せこけていて、酒臭い息をした御者にムチで打たれていました。それでもバカッバカッという陽気なひずめの音をたて、鼻歌を歌いながら走っていましたから、案外あれはあれで幸福なのかも知れません。

買物 22

ユラは、翌朝から早速やって来ました。

「ご主人は会社へ、ミコちゃんはアメリカンスクールへ、ひろしくんは斜め向かいの幼稚園へ、それぞれ出掛けてしまつと、広い家の中に残つたのは、奥さんとユラと僕だけです。奥さんは早速ユラに色々の仕事を頼み始めました。ポーランド語が充分話せないので時々英語を混ぜますが、ユラは英語はからつきし駄目で、
「ニエロズミエム」

と頭を振るだけです。もちろん日本語はまったく分りません。

ユラは話が分らなくなるとポーランド語で色々たずねますが、奥さんにはそれが何を言っているのか分らないのです。するとユラは声を一段と大きくして、ゆっくりと区切つて話します。電話が遠い訳ではないので、声を大きくするだけで通じる訳はないのですが、ユラは声を大きくするとすこしは通じやすくなるとでも思っているようです。

奥さんとユラは顔と顔とを見合わせて一緒に、

「フツ」

と溜息を付いています。僕もやれやれといつぷつに溜息をつきました。

「そうだわ、うつかりしてたわ。チビクロがいたんだわ」

奥さんは膝を叩きました。

「チビクロちょっとおいで」

奥さんが僕を呼びました。

「よくって、わたし、今ユラさんに、洗濯物のアイロンがけをするようにたのんだんだけど、足りないものもあるらしくて、ユラが大きな声で何か言っているのよ。わたしにはユラが何を言っているのかチンプンカンプンなの。ユラがこんなことを言っているんじゃないかってことを、わたしがお前に尋ねるから、当たっていたらワン、違っていたらワンワンと答えてくれないこと」

「ワン」

「ユラはアイロンの使い方がわからないと言っているの」

「ワンワン」

「じゃーやっぱりなにか足りないものでもあるの」

「ワン」

「一体何かしら。霧吹きはあるし、アイロン台はあるし。それじゃ何か薬品でも欲しいと言っているの」

「ワンワン」

「そうだ、うっかりしてたけれど、アイロンを掛けるときに使う薄いタオル地を出してあげるのをわすれてたわ。そうでしょう」

「ワン」

「良くわかったわ。チビクロどうもありがとう。これ、いほつび」

奥さんがソーセージを冷蔵庫から出して僕にくれました。

「ユラ分かったわよ、これでしょう」

奥さんは、三階の整理棚から薄いタオルを取りだしてきて、ユラに見せました。

「ターク、ターク」

ユラは僕が奥さんの通訳の手伝いをしているところを感心したようなうすうすで見っていました。

僕が庭で遊んでいると、ユラがテラスまで出てきて、

「チビク口、ちよつと来て」

僕が何事かと近付いて行くとユラは困ったような顔をしていました。

「チビク口、ちよつと巻尺が欲しいんだけど、奥さんになんとか通訳してくれない」

僕ははてなと考えました。巻尺のことをどうやって奥さんに分らせたらいいのでしょうか。考えているうちに、いつか地下室のバランススキーさんの作業室に行ったとき確か作り付けの棚箱の棚に並べてあったことを思い出しました。僕はユラのスカートの裾をちよつと噛み、ついて来るように合図しました。僕が前に立つて歩くとユラが後ろからついて来ます。地下室の作業室まで連れて行き、作り付けの棚箱を見上げると、そこにちゃんと巻尺が並べてありました。そこを見ながら僕が、

「ワン」

となくと、ユラは、

「まあ、チビク口はわたしのいつてることがちゃんとわかるんだねえ。本当に賢い犬だね、お前は。ちよつとわたしもごぼつびをあげたくなったわ。一緒に台所においで」

台所へ行くとユラは、奥さんと同じ様に冷蔵庫の中からソーセージが一杯入った袋を取りだし、ひとつちぎって、

「ポン」

と投げてくれました。僕はそれを空中でパクツと受止めました。

「おや、なかなか運動神経もいいんだね。じゃ、それもつひとつ」

今度はもつと遠くの方へ投げました。それも床に落ちる寸前にパクツと食べました。すると今度は右に左に連続的に投げたり、左に投げると見せかけて右の方に投げたり、色々と手がこんで来ました。こうなれば乗掛かった船です。意地でもひとつも落したくありません。スライディングキャッチ。危つく転びそうになつてやつと踏止どまつたときには次のソーセージが反対方向に飛んで来ています。いわしを一匹残らず受止めるサーカスのおつとせいよろしく、僕はあせみどろになりながら走りまわり、ユラの投げるソーセージをことごとくダイレクトキャッチしました。

「お見事お見事」

ユラは、両手をパチパチ叩きました。

「おや、しまった。ソーセージがすっかりなくなっちゃったよ。奥さんにお昼は、ソーセージを使ってなにか作ってくれといわれたのにどうしよう」

どうもユラさんは調子に乗りやすいタイプの人のようです。まあ、そういう僕も調子に乗りやすい点ではひけをとりませんが、とにかく袋に一杯あったソーセージを全部平らげてしまったのですから、もうゲップが出そうです。

「そうだこんなことしておれないわ」

ユラは、何を思いついたのか、それからあつちへ行ったりこつちへ行ったり家の中をめぐるしく動きま

わり始めました。

23

それから一時間たつたでしょうか。

「チビクロちよつと来て」

また、ユラが呼んでいます。ユラの側に奥さんがいます。通訳の仕事に違いありません。それともソーセージを全部食べたことがばれたのでしょうか。でもあれは僕に責任がある訳ではありません。とにかくここは平気な顔をしているにこしたことはありません。僕はユラと奥さんが待っているところに胸を張ってゆつくりと歩いて行きました。

「チビクロわたし今日半日かけて家の中を色々調べてみたんだけど、これからわたしがお手伝いをするうえで足りないものがいっぱいあるの。だから、今からマダムと一緒に買物に出かけたいんだけど、奥さんに通訳してくれないかい」

僕は奥さんが買物に行くときにいつも持つて行く買物かごを台所から持つて来て奥さんに手渡し、奥さんのスカートの裾を引張つて玄関へ連れて行きました。

「ユラは買物に行きたいの？」

「ワン」

「わたしと一緒に?」

「ワン」

「わたしも色々と買いたいものがあるし、それじゃ今日は買物に行きましようか。でももうそろそろお昼も近いことだし、お昼御飯を済ませてから行ったらどうかしら」

奥さんは食べる真似をしました。

「二エ」

ユラは大きくかぶりを振って、奥さんの肩にすばやくコートを掛けました。そして奥さんを後ろから追いたてるようにして家の外へ出ました。僕はあわててその後を追掛けました。

家を出て左手に曲がると、ひろしくんの幼稚園があります。ちょうど園児が庭に出て遊んでいるところでした。僕たちが通りかかると皆一斉に金網のフェンスのところまで走って来て、

「ジェンドーブリ。ひろしくんのマートカ」

「ジェンドーブリ、チビクロ」

声をかけて来ました。

「あの太った女の人はだれだろう?」

という声も聞こえて来ます。ひろしくんもこちらに手を振りながら、

「今日から来ることになったお手伝いのユラだよ」

と説明しています。ひろしくんは人気者のようです。

「ジェンドーブリ、ユラ」

皆精一杯声を張りあげて自分の方を見るように挨拶をします。

「園長先生が言っていたけれど、あのチビクロはポーランド語が何でもわかるんだって」

「チビクロ、もっと近くへおいでよ。なでてあげるから」

金網の隙間から園児たちが可愛い紅葉のような手を差出しています。僕が近付いて行くと、皆が先を争って触ろうとするので、大人の背丈以上もあるフェンスが今にも倒れて来そうです。

「チビクロはねえ、きのうスターレミヤストで酔払った馬車の御者が、馬をムチでひっぱたこうとしたとき御者の袖に噛みついてやめさせたんだよ」

ひろしくんが得意そうに話しています。もうポーランド人とおなじぐらい早口で話せるのです。

「へえ、すごいなあ」

「チビクロ、チビクロ、僕らのヒーロー、チビクロ」

皆が声を合せてはやしたてました。僕はきまりわるくなつてとつとこと小走りに幼稚園の前を通りすぎました。

幼稚園の角を右に曲がるとプヤトフスカ大通りに出ます。いつもの奥さんの買物のときの順路です。ところがユラはそこを左に曲がりました。曲がったすぐ横の建物の地下へつながっている階段をユラは下り始めました。階段を下りたところにある木のドアを開けるとそこは食料品店でした。

「まあ、こんなに近くに食料品店があつたの。いつもプヤトフスカ大通りのスーパーまで行っていたのに」

奥さんが驚いています。地下に下りたところに、ほんの印だけの小さな看板が出ているだけです。奥さんが気づかなかったのも無理ありません。卵、チーズ、バター、ヨーグルト、ソーセージ、ハム等が売ら

れています。トマトケチャップやリンゴ酢、にしんの缶詰、酢キャベツ、マッシュルーム等もあります。

「まあ、この店国営でなくて、プライベート（個人経営）の店かしら、品数が多いわね」

奥さんはあれもこれも買つのでたちまち大きな袋が二つ出来ました。奥さんが買ったものを見ていたユラが、今度はいろんなスパイスやら、サワークリームやら洋からしやら、いろんな種類のマスタードやリンゴ酢等を袋につめ始めました。奥さんが今まで日本では使わなかったようなものはかりです。奥さんがちょっと横を向いたすきに、ユラはソーセージの袋を素早く袋の中に滑込ませました。僕が見上げるとユラは片目をつぶってウインクしました。

「秘密だよ、チビクロ」

こうしてたちまち合せて四つの大きな袋が出来てしまいました。料金を払って、奥さんがユラと二つずつ持とうとするとユラが、

「ニエ、わたしが全部持ちます」

奥さんの手から袋を取りあげてしまいました。

「いいわよ。わたしが持つから」

「ニエ、わたしが。このくらい大したことはありません」

ユラは絶対に譲りません。奥さんも諦めて食料品店を出ると、

「それじゃ、今日はこれで帰りましょう」

と家の方に向かって歩き始めました。

「ニエ、もっと買いたいものがあります」

ユラはその場に立止まって動きません。

「あら、もっと買いたいものでもあるのかしら」

「ワン」

ユラは先頭にたって今度はプヤトフス力大通りの方へ歩いて行きます。

「お店はすぐ近くなのかしらね」

奥さんはユラに遅れまいと時々小走りになってついて行きます。ユラは体が大きいだけ歩くスピードが速いのです。

十五分ほど歩いたでしょうか。賑かな大通りに出ました。これがプヤトフス力通りです。この通りはワルシャワーの大通りのマルシャコフス力通りにつながっており、電車が走っています。ユラは大きな雑貨店に入りました。そこで、掃除用の大きなタブやブラシ、洗濯用のタライ、洗剤、漂白剤、お風呂場用のマット、玄関にひくマット等を買いました。

大きな包みがまた四つ増えました。キャッシャーでお金を払って奥さんが荷物を持とつとすると、

「ニエ、ユラ一人で大丈夫です」

ユラは合計八この荷物を一人じめにしました。長いタブを肩に担ぎ、タライを背中に背負い、両手に大きな袋を幾つもぶら下げた様子は、七つ道具を持った弁慶のようです。

「もう今日はこれで充分だね、さあ引返ししましょう」

奥さんが引返そうとすると、ユラはその場を動きません。

「ニエ、もう一軒だけ寄るところがあります」

「チビクロ、ユラはもっと買物がしたいって言っているの」

「ワン」

「そうね、考えて見ればわたしはまだ手ぶらだし、わたしだけ手ぶらで帰るのもおかしいわね」

またユラが先頭に立って歩き始めました。これだけ荷物を持ってもスピードが衰えません。奥さんは時々小走りで追いつかなければなりません。

「一体お店はどこにあるのかしら。遠いのかしら。遠いのだったら、電車に乗るか、タクシーに乗るかした方がいいんじゃないかしら」

奥さんはブツブツ独言を言っています。まだまだかなりありそうな感じです。

「ユラ、トランバイ（電車）？ タクシー？」

「ニエ、もつたいない。お店はもうすぐ近くです」

ユラは歩調を緩めず歩き続けます。奥さんは額にうっすら汗をかいています。かれこれ三十分も歩いたでしょうが、ユラは大きな衣料品店に入って行きました。ユラはそのまま真直ぐカーテンの生地を売っているカウンターのところへ歩いて行きました。

「マダム、あのお屋敷にはきちんとしたカーテンが必要です。良くあったカーテンのない家は、家ではありません」

「そうか、カーテンね。わたしも、一日も早く、きれいなカーテンを付けたいと思っていたところなのよ。ユラ、良いところに気付いたわね。でも、どのくらいの大きさの生地を買って帰ればよいか分らなければしょうがないわえ」

奥さんはつぶやきました。ユラは鼻をツンと高くして、ポケットから小さな紙切れをとりだすと、それを奥さんに手渡ししました。そこにはいつのまにかちゃんと各部屋の間取りと部屋ごとのガラス戸や窓の大きさが、五・二メートル×七・六メートルというふうに書込まれていました。

奥さんはすっかり感心した様子でユラを見、

「まあ、ユラったら手際が良いのね。じゃ、良い生地を選ばなくっちゃ」

今度は目を輝かせながら、カーテンの生地を選び始めました。

「どの部屋もカーテンレールは二本ずつ付いていたわね。そうすると窓側は白いレース地にして、部屋側はそれぞれの部屋にマッチした厚手のものがいいわね。居間のテラスのところにはこのちょっと黄金の紗が織込んである生地なんかどうかしら。豪華な雰囲気だし。わたしたちの寝室は落着いたベージュ系の暖かい色がよさそうね。子供たちの部屋は明るくて清潔な感じのにしたいわ。あら、この生地、とても素敵じゃない」

奥さんとユラは部屋の見取図を指差しながら、これが良いかあれが良いかと相談しています。お互いに選んだ物に対して、

「ターク、ターク」

とつなずいたり、

「二エ、二エ」

と首を横に振りさえすれば良いのですから話は簡単です。しかし、選ぶ方はそれほど簡単ではありませんでした。

僕があくびを五回ほど噛み殺した頃、やっと家中のカーテンの生地選びが終わりました。今度はカーテン

の生地のかなな包みが四つと、カーテンを吊すリングの入った小さな包みが一つ出来ました。

料金を払って奥さんが今度こそ全部の包みを持とつとすると、

「二五」

ユラは全部の荷物を取りあげてしまいました。奥さんが必死になって頼みこみ持たせて貰ったのがカーテン用のリングの入った小さな包み一つでした。その包みを手わたされたとき奥さんは、こぼつびを買ったときのひろしくんみたいにニコツとしました。

「こんなに沢山買物したんだから、帰りはタクシーにしましょ」

通りに出て奥さんが手を上げてタクシーを止めようとする、ユラは一声、

「二五」

といってさつさと歩き始めました。まるで、荷物のかたまりが歩いているみたいです。奥さんも仕方なくその後を追いました。小さな包みを一つだけ持った奥さんは並んで歩くのがなんとなく恥かしそうです。僕も何かお手伝いしたいのですが、ユラに頼んでもおそろく何も持たしてくれそうにありません。まあ、僕は通訳という頭脳労働をさんざんやったのですから今日のところは勘弁して貰うことにしましょう。

それにしても、ユラは頭がいいのか悪いのか気掛かりです。たった半日の間に何が不足しているかちゃんと調べあげたり、ガラス戸や窓の大きさを計って来たところは、とても頭が良いように見えるのですが、買物の順序を見ていると、どうも頭が良いようには思えません。最初にカーテンを買いに来て、その次に雑貨店へ行き、最後に食料品店に寄れば、ずいぶんと楽なはず。家から百メートルも行かないところで買った物をわざわざ行きも帰りも持運ぶ必要があるようには思えません。それとも、こんなことを考えるのは僕

がチビ犬で力があまりないせいでしょうか。

ユラは背筋をピンと伸ばして、相変らずかなりのスピードで歩いています。僕も時々小走りで追いつかなければなりません。

家に帰ったときにはもう薄暗くなりかけていました。ユラは大急ぎで遅くなった昼食を作りました。ゆでたソーセージに酢キャベツとマツシユポテトが盛りあわせてありました。

「チビクロも今日は散々歩いて疲れたでしょう」

奥さんが僕に少しソーセージを分けてくれましたが、もうすっかりおなかですいていた割りには僕は食欲が湧いてきませんでした。もちろん先ほどゲップが出るほど同じ物を食べたせいもありますが、ユラが往復とも歩いたのは、もしかしたら僕に食べさせたソーセージの代金分を償約するつもりだったのではないかとふと思いついたせいでもあります。

エバ 24

「ジュジュ」

翌朝、八時少し前に玄関の呼鈴が鳴りました。ユラの出勤時間は、八時半のはずです。

「こんなに早くだれだろう」

新聞を見ながら朝食を食べていたご主人を始め、奥さん、ミコちゃんが連れだって玄関へ出ました。ひろ

しくんはもう幼稚園に行っていないせん。ひろしくんは幼稚園で毎朝朝食を食べるのです。玄関のドアを開けると、ユラが入口を全部ふさぐように立っています。

「ユラ、こんなに早くどうしたの」

奥さんが声をかけました。とユラの大きな体の陰から、すらりとした若い金髪の女性が姿を現しました。少しはずかしそつに「ニコリとし、」

「ジェンドーブリ」

と挨拶しました。

「これは、エバ・カミュシカです」

ユラが紹介しました。皆キョトンとしてユラの顔を見ました。一体どうしてユラはこんなに朝早くエバという人を連れて来たのでしょうか。居間に通すとエバが話し始めました。

「はじめまして、私エバ・カミュシカと申します」

それはきれいな日本語でした。

「私はワルシャワ大学の日本語学科の四年生です。ユラに頼まれてマダムのポーランド語の家庭教師に来ました。どうぞよろしく」

奥さんは狐につままれたような顔をして、

「私、家庭教師を頼んだ覚えなんかないけど…」

奥さんの言葉が終わらないうちに、ユラが例によって声を張りあげ、ゆっくりと区切って話しはじめました。話し終わるとエバの横腹をつついて早く通訳するように言いました。

「今ユラが言ったのは、マダムは残念ながらポーランド語がまだ充分話せない。ポーランドに来ながらポーランド語が話せないのはとても残念だ。一日も早く是非ともポーランド語をマスターして、ユラと何でも話しかえるようになって欲しい。そうでないとユラとしては、お手伝いとしての勤めを充分果すことが出来ず、申しわけない。チビクロはともよくやってくれるけれど、やはりマダムが自分で話せるようになって貰いたい。それで、私の知人の姪に当たるエバをマダムのポーランド語の家庭教師にと思って連れて来ました。エバはワルシャワ大学日本語学科でナンバーワンの実力の持主だから、本当はナンバーツーなんです。よーきと気に入って貰えるはずだ、といっています」

「私、今から難しいポーランド語を勉強してもよく覚えられそうにないわ。ポーランドに来るまえに英語をたくさん勉強したけれど、そっちの方だってまだよく話せないんですもの。ユラが我家にお手伝いに来るんだから、ユラの方で日本語を覚えて欲しいわ。そうそうエバさんがユラに日本語を教えて上げたらどうかしら。それがいいわ」

奥さんの話をエバが通訳し終わらないうちに、ユラがもっと大きな声を張りあげてしゃべり始めました。体が大きいせいかな声量には限度がないみたいです。その後でエバが通訳します。

「私はもう六四歳。頭がすっかり堅くなっちゃってます。今更日本語を覚えようとしても、もうどこにも入る余地がない。それにひきかえ、マダムは三十ちよっと過ぎたばかり、私の歳の半分に過ぎない。それにポーランドに来てまだあまり日がたっていないのに、昨日一緒に買物に行っただけで、カタコトながら結構話せる。勉強すれば、きつとうまくなる素質がある。せつかくの素質を眠らせておくのは惜しい」

「若いといっただってもう三十過ぎよ。それに時間があるかどうか……」

「時間でしたら、私 学生ですから、奥様の都合のいい時間にいくらでも合せることが出来ますわ」

エバが言いました。その言葉が終わらないうちにユラが例の大声で、また、話し始めました。エバが訳します。

「ユラが言うには、マダムはエバのお手当のことを心配しているかもしれないが、それは全然心配しなくてもいい。昨日一緒に買物に行ったけれど、マダムはすぐに電車やタクシーに乗ろうとするが、あれはもったいない。私は今後買物のときは全部歩いて儉約するので、その分でもエバを雇って欲しい。エバも日本人と知合いになれば、日本語の勉強にもなるので、お手当なしでも良いから行きたいといったのだけど、すこしでも出して貰えれば学費のたしになるし、私から頼んで上げようといって連れて来た。その手前、なんとかお願いしたい、と申しております。」

そのあとにエバが付加えました。

「私、本当はお手当なしでもかまわないんです。お知合いになっただけでいいんです」

「お手当のことを別に心配してるんじゃないのよ。英語だってまだ中途半端でしょう。せめて英語だけでもマスターしたいの。だから英語の先生につくつもりでいるの。そのうえポーランド語まで始めても、チビクロのレベルにも追いつけそうもないわ。ねえ、チビクロ」

「ワンワン」

僕は力強く吠えました。もちろんそんなことはありませんという意味です。横からニコちゃんが口をはさみました。

「あら、ママったら、私にはやる気になりさえすれば、英語だって、ポーランド語だって同時にマスターでき

るって言ったじゃない。だからあたしアメリカンスクールでポーランド語も補習で取ることにしたのよ。マ
マだってまだ若いんだから、要するに、やる気よ」

「でもポーランド語の家庭教師につくなんて、これまでほんのこれっぽちも考えたことがなかったのよ。急に
決めろっていわれても、少し考える時間がないと……」

「トモコ、いいじゃないか。せつかくユラがいい人を連れて来てくれたんだから、エバに家庭教師をお願い
たら」

「ご主人が口をはさみました。エバが凄い美人なのでもうすっかり気にいったような口ぶりです。

「そうねえ」

奥さんは、しばらく頭をかしげて考えていましたが、決心がついたように顔を真直ぐ上げると、

「みんながそう言うのなら、わたしもポーランド語を勉強することにしようかしら……少し荷が重いんだけど……」
「それじゃトモコ一人で勉強するのも何だから、僕も一緒に勉強することにしよう。その方がお互いに張合い
があっていいし、その上エバさんに二人分のお手当を払ってあげられるしや」

「ご主人は、なんだか自分独りででも習いたいようなムードです。しかし、この一言で話は決まりました。

「ご主人が奥さんと自分二人の家庭教師として雇うことにし、お手当も二人分払うと伝えるとユラとエバは
手を取りあい、飛上がって喜びました。その度にソファのクッションがキューキューと音をたてました。

「ジェンクーエン・バルゾー、マダム、ジェンクーエン・バルゾー、ミステル」

「ほんとつにありがとございます」

奥さんはユラとエバに両側から抱きつかれて目を丸くしています。

「それじゃ何曜日に来て貰つことにするか」

「主人がポケットから小さな手帳を取り出したとき、

「リーナリー」

電話の呼鈴がなりました。一番近くにいたミコちゃんが出ました。

「ハロー、イエス。あたしミコよ。メアリー、何の用件？ 今日の写真の時間のこと。あつそうだ、あたしも忘れて行くところだったわ。そう、この前の時間に確か先生が今日は近くの公園に写生に行くので写生板とクレパスを持って来るようにおっしゃってたわ……うん間違いない。」

「ミコちゃんは電話でもう英語で話しています。エバはミコちゃんを見ながら、

「とっても可愛いお嬢さんですねえ。おいくつですか」

「六つです」

「英語がお上手のようですけど、アメリカンスクールですか」

「ええちょうど三週間前から行き始めたのですよ。それまでは英語のEの字も知らなかったんですよ」

「まあ、たったの三週間ですか。お子さんって早いですねえ」

「本当に自分の頭の堅さが情無くなりますわ。ワルシヤワに来るまでは、英語にしてもポーランド語にしても皆こつちが教える側だったんですよ。それがポーランドに来たら、チビクロにまで追越される始末なんですから」

「お子さんはお一人ですか」

「いいえ、あの子の下に今年五歳になるひろしという男の子がいるんですよ。すぐ斜め向かいの幼稚園に行っ

ていて、いつも七時半には出かけるんですの。なにしろ朝食付き、おやつ付き、昼食付き、おまけに昼寝付きなものですから、とっても助かりますわ」

「あら、ひろしくんは、わたしの娘のボウグナより一つ年上ですね」

「えっ、あなたはもう結婚してらしたのですか」

「いいえ、今はもうしていません。一年前に離婚しました」

「えっ、それでは一人で子供を育てながら、大学へ行っているんですか」

「今は、両親と一緒に住んでいます」

「まあ、それにしてもタフですこと」

「あなたの顔を見ていると、四つになる娘さんがあるようにはとても見えませんね。それに離婚女性にありがちな暗さつてものがまったく感じられないし、すっかり独身と思ってましたよ」

「わたしみたいなケースはポーランドではそれほど珍しくありませんよ。離婚したからといって別に何も悲観することなんかありませんわ」

「いやポーランドの女性は強いんですね」

クンクン。妙な匂いがします。僕は台所は飛んで行きました。案の定ガスコンロの上で、コーヒーが煮えたぎっています。

「ワンワン」

僕は、台所の入口で吠えました。

「あつ、そうそうコーヒーをコンロにかけっぱなしだったわ。チビクロ、どうもありがとう」

奥さんが飛んで来ました。

「ピーピー」

玄関の呼鈴が鳴りました。

「あっ、アダミヤックさんのお迎えだわ」

アダミヤックさんは毎日ニコちゃんをアメリカンスクールへ送り迎えしてくれるのです。

「チビクロ、あたしちよっと写生板とクレパスを二階から取って来るから、その間アダミヤックさんのお相手をしていてくれない」

ニコちゃんは二段飛びでらせん階段をかけあがって行きました。

外へ出るとアダミヤックさんは、ベンツを布で磨いていました。手入れがいいのでいつもピカピカ光っています。その側にもうご主人のプジョーが車庫から出されて置いてありましたが、プジョーはまだ新しいので余りひけを取りませんが、ベンツに比べると少しつやがにぶい感じがします。ご主人はそれほど手入れのいい方ではないのです。僕はそれが残念でなりません。

「ワン、ワン」

僕が挨拶をする、

「ジェンドーブリ、チビクロ」

アダミヤックさんはおむすびのような顔をほころばせ、

「チビクロはいつも元気そうだね」

そういうと、しゃがんで僕のあごの下をさすってくれました。気持ちがいいので目を細めていると、ニコ

ちゃんがロケットのような勢いで玄関から飛びだして来ました。右の脇の下に大きな写生板を抱えています。アダミヤックさんが開けてくれたドアからミコちゃんはずきずきの勢いのまま、ピョンと飛び乗ると広い後ろの座席にピョンと腰掛け、

「ジェンドーブリ、アダミヤックさん。少し遅くなったのでぶつとばして」

僕は、凄く勢いで走りだしたベンツの後ろから見送りしました。ミコちゃんの頭の先が後ろの窓からほんの少し見えるだけです。ベンツはたちまち幼稚園の角を右の方へ曲がって見えなくなってしまいました。

居間に戻ると、なんとなくこげ臭いコーヒーを奥さんが皆に勧めていましたが、売れ行きは今一つパツとしないようでした。

再会 25

どこからともなく心をわくわくさせるような香りがただよって来ます。土の奥深くから湧きあがって来るような、不思議な香りです。今年になってから、この香りをかぐのは確か二度目です。ポーランドへ出発する日の朝、東京でかいだことを覚えています。東京のときよりもほんの少し、薄めの感じがしますが、これは間違いなく春の香りです。ポーランドにもようやく遅い春が巡って来たのです。

僕は、庭に出て庭の木を見て回りました。スモモの木も、サクランボの木も、スゲリの木も、バラの木も、リンゴの木も、ブドウの木も、モクレンの木も、あんずの木も、ナシの木も、ねこやなぎの木も、皆一斉に

芽をふくらませています。きつとこれからは、日一日ことに、木の芽が大きくなっていくにちがいありません。庭の周りには大きな木が一杯繁っていますが、今まで灰色一色だった景色がうつすらと化粧でもしたかのように色づき、なんとなくさわめくような賑かさが感じられます。僕はピョンピョンと跳回ったり、芝生にころげまわって背中をこすりつけたりしました。どこか郊外へでも行って広い野原を思いきり走り回れたらどんなに素敵でしょう。

そのとき、僕はご主人が今日の午後空港に日本から来るお客さんを迎えに行くので昼食の用意をしておいて欲しいと、朝出掛けに奥さんに言っていたのを思い出しました。ご主人は自分で会社から一旦家に帰り、昼食を食べた後で、アドミヤックさんに迎えに来て貰い空港まで行く予定のようです。

「そうだ。ご主人に空港まで連れて行って貰おう」

僕は堅く心を決めました。ご主人が昼食に帰って来たとき、僕は玄関まで真先に迎えに行き、前足を差出しました。

「おっ、チビクロ。元気にしてるかい」

「ご主人のきげんは別に悪くなさそうです。」

食事をしながらご主人と奥さんが話しあっているときも、テーブルの下にうずくまりじつと耳を傾けていました。

「今日のお客様は、人事担当の野村常務でしょう。わたしたちのために歓送パーティをやってください、色々と赴任に当たってのアドバイスまでくださった方でしょう。わたしも面識があることだし、空港までお迎えに行った方がいいんじゃないかしら」

「そうしてくればありがたいよ。野村常務は、洋食はからつきし駄目で、外国に出ても日本食一辺倒の方だから、どっちみち夕食には我家にお連れしようと思っていたんだけど、その前に会っておけば、なんなりとご希望の料理もきけて好都合だろうし」

「それじゃ、わたしちょっと支度してくるわね」

奥さんは食事を手早く済すと二階に上がって行きました。

「ご主人は食事が済むと居間のソファにひっくり返り、テーブルに足を投出した格好で休んでいます。僕はすぐ側に行つてご主人に体をこすりつけ、顔を見上げながら、鼻を鳴らしました。」

「チビクロ、久し振りに抱っこしてやるか」

僕は素早くご主人の膝に飛乗りました。

「お前もなかなかポーランドが気に入つてゐるみたいじゃないか」

「クーンクーン」

「トモコやユラをずいぶん助けてくれているようだね」

「ご主人は耳の後ろや背中やあごの下をなでてくれます。長年つきあっているので僕の好きなところをよく知っているのです。とてもいい気持です。」

「ピーピー」

玄関の呼鈴がなりました。アダミヤックさんのお迎えです。玄関口に出たユラがアダミヤックさんに挨拶をしています。奥さんが二階かららせん階段をシャリシャナリと下りて来ました。赤いくちべにつけ、白と黒のチェックのコートを着、品のいい香水の匂いをただよわせています。昼食を食べる前とは、見違える

ほどこれいになっています。

ピカピカに磨かれたベントの前でアダミヤックさんがドアを開けて待っています。奥さんは、ボーランド式にご主人より先に乗込みました。続いてご主人が乗込みうとしたその脇を僕はスルリとかいくぐってサツと乗りこみ、奥さんのすぐとなりにつたりと寄添い体を小さく丸めました。

「チビクロ、お前は今日はユラさんとお留守番だよ」

「クーンクーン」

僕は精一杯鼻を鳴らし、奥さんの手をペロペロなめました。

「今日はね、大切なお客さんなのよ。だから、チビクロ、今日はだめよ」

僕はご主人の方を振りかえって一生懸命尻尾を振り、頭を低くして鼻を鳴らしました。

「クーン、クーン」

「いつもはおりこうさんなのに、今日に限ってチビクロは聞分けが悪いんだな。僕たちと一緒に行きたいのかい」

「ワン」

僕はさらに激しく尻尾を振り、頭を低くしました。

「ワン」

「きつとチビクロは私たちが空港に行くのが分かっているのよ。空港がなつかしいんじゃないかしら。あんなことがあったんだし」

「それじゃ連れて行くことにするか。チビクロ、お客さんがみえたらおとなしくしているんだぞ。トモコ、帰

りはお前がチビクロを抱いて前の席に座ってくれ」

やっとのことで許可が降りました。

ポーランドに着いたとき以来空港へ行くのはこれが初めてです。僕は窓に鼻を押し付けて外の景色を見ました。通りの大きな街路樹もうつすらと色づいて見えます。けぶるような淡い黄緑です。大きな建物や記念碑や、バスや、電車が後ろへふつとんで行くように見えます。なるほどこれがコペルニクスの地動説なのかも知れません。車でなくて周りの景色のほつが動いているように見えるのです。

もう空港の近くへやって来たようです。ポーランドについた当時、恐らくこの辺りを僕はご主人一家と巡り会える当てもないまま、歩き回ったのです。

いろんな思い出が一気によみがえりました。

空港のシェパードのこと、ブードル犬のアンナのこと。ポーランド語を教えてくれた、ノラ暮らしのキジ猫のこと。危つく腕白な子供たちにつかまりそうになったこと。ボイテックやヤーチェック、それにマートカやタトーシユのこと。あんまりいろんなことが次々と起こったので、もうずいぶん昔のように思えますが、考えて見るとつい一月半ほど前のことに過ぎません。今、こうしてご主人と奥さんと一緒に車に乗っていることが信じられないほどです。本当に運が良かったとしか言いようがありません。

窓の外を見ながらとりとめもなく物思いにふけっているうちに、車は空港の建物の前でピタリと止まりました。日本の空港に比べると人影が少ないように思えます。建物も少し古めかしくて貧弱です。ご主人が空港ビルのカウンターで到着便の確認をしています。どうも、予定よりかなり遅れているようです。

「遅れは、一時間ですか、それとも二時間ですか？」

「二エビエム（分りません）。まあ、一時間は遅れるでしょう。とにかく掲示板をよく見ていて下さい」

「ご主人は後ろを振りかえって奥さんに説明しています」

「どのくらい遅れるか、いつもはつきりしないんだよ。しょうがない、この辺りをブラブラしながら待つよりないな」

「あそここの林の方へ行って見ましようか」

「ご主人と奥さんは空港のビルから出て、近くの林の方へゆつくりと歩き始めました。アダムヤックさんはビルの前の駐車場に車を止め、その中でもう船を漕いでいます」

「ほら、あなた、木の芽がふきはじめてるわよ。もうこんなに大きくなって。ようやくポーランドにも春が来たんだわ。嬉しいわ」

「北国ではみんな一斉に芽をふくんだね。どの木の芽も同じ位の大きさだよ」

「そうね。東京みたいに梅から桃、桃から桜というふうに次々と芽をふくのは違うみたいね」

「ポーランドに来てみて初めて、北国の人が、春を待ちこがれる気持ちが良くわかったね」

「そうねえ、こればかりは実際にその場所に住んで見ないと分らないわね」

二人は話合いながら、林のほうへゆつくりと歩いて行きます。僕も、あちこちの木の芽の匂いをかいだり、木の幹に付いた他の犬のオシッコの匂いをかぎながらその後をついて行きましたが、フト良いことを思いつきました。でも思いついたとたんになんとなく照臭くなつて、思わずご主人と奥さんの方を見上げましたが、二人とも僕のことなどまったく気にとめず、恋人みたいにピッタリと寄添いながら歩いています。その姿がいつそう僕の心を刺激しました。

——僕が姿をくramしたりしたら、二人は心配するだろうな…

——でも、アダミヤックさんのところにも行ったと思ひそれほど気にしないんじゃないかな…

うん、きつとそうだ。すぐ帰ってくればいいんだし…

自分でも、僕がこれからしようとするに出来るだけ都合よく考えようとしていることが分かっていました。でも、僕の思いつきは益々僕の気持ちを駆立てるのです。自分の力ではもうどうしようもないほどそれは大きくふくらんでしまっていました。

26

僕は近くの林の中に入って行く。主人と奥さんを見送り、反対の方向へさつと走り始めました。こうなったら、もう時間を無駄にはできません。僕は空港のビルの方へ走って行きました。それから空港のビルの後ろに回って広い滑走路を見渡しました。おおよその見当はつきます。飛行機に忍込んでこの空港に着いた日、僕が空港の人達に追われたとき、警備犬のシェパードに助けられ、やっとのことでかいぐぐった金網の穴は、ちようと空港ビルの反対側にあるようです。空港の中を突っ切っていくわけにはいきませんので、そこまてかなり距離があります。

僕は空港を取りまいてるフェンスに沿って走り始めました。大きな木の株や、もみの木の木の繁みや、やぶや木のさくなど走りを妨げるものが沢山あります。僕は木の枝の間をすりぬけたり、さくの下をかいぐぐつ

たり、時々回り道をしたりしながら、目標地点である金網に穴のあいているところまで一気に走りました。見ると金網の穴は太めの針金でもつきちゃんと修理されていました。

ここからさきはちゃんと覚えていきます。僕は少し緑をおび始めた野原を横ぎり、小さな木造の家の側を通りぬけ、林の中の小道を一目散に走りました。心臓がドキドキしてきました。体中が熱くなってきました。やっと、あの大きな石造りの家に着きました。僕は急いで裏手に回りましたが、大きな庭には動くものの影はなんにも見当たりません。僕は声をひそめて呼びました。

「アンナさーん」

返事がありません。

「アンナさーん」

もうすこし大きな声で呼びました。あの日、雪の中をアンナとピョンピョン飛んで遊んだ庭もうつすらと春の色に染まっていますが、いつまで待ってももの音一つ聞こえて来ません。ひよっとしたら留守なのではないか。ここまでやって来たのに会えずに帰るのは残念でなりません。

「アンナさーん」

もう一度、僕は叫びました。結局駄目だったようです。アンナはどこかへ出掛けているに違いありません。僕は重たい足を引ずりながらもと来た道を引き返し始めました。大きな家の表側に回り、もう一度別れを告げようと振り返って見ました。そのとき、玄関の重たそうな櫛の扉がほんの少し開き、その陰から小さな白い雌犬の顔がチラリと覗きました。僕は足を止めました。

「チビクロー！」

「アンナ！」

アンナは重たい櫪の扉を肩で押しあげ、僕のところまで飛んで来ました。

「お久し振りチビクロ」

「こちらこそ、お久し振りアンナ」

僕はフェンス越しに鼻のあたまをこすりつけあいました。毛並みもつやをまし、アンナは一段と美しくなつたようです。ピンと伸ばした尻尾をいせいよく左右に振っています。

僕が最初にアンナを呼んだとき、すぐにそれが僕の声だということがわかつたんだそうです。裏庭に面した居間には飼い主一家がくつろいでおり、テラスのガラス戸にも鍵が掛かっていました。そこで玄関の方へ回り、これまで一度も自分で開けたことのない櫪の扉を必死になつて開けて出て来たんだそうです。声をたてると飼い主一家に気づかれると思い返事もしなかった。とにかく扉のノブを回すのにさんざんてこずっていると、僕が今にも引き返えしそうな様子なので、ハラハラしながら、力を振りしぼつて開けたのだそうです。アンナは息をはずませながら、話します。見るとアンナのくちびるが少し切れて、血がにじんでいます。きつと扉のノブを口で回したときに切れたに違いありません。アンナにとってそれがどれほど大変なことだったかを物語っています。

僕はアンナがたまらなく愛しくなつて、思わずアンナの唇の血をなめてあげました。アンナはじつと僕のままにしていますが、そつと、自分のくちびるを僕に押つけてきました。たえようもない柔かいくちびるです。僕もアンナのくちびるに自分のくちびるを押しつけました。アンナの香ばしい息が僕の顔に掛かりました。

思いもかけなかったような悦びが僕の体の中を突抜けました。アンナはじっとそのまま目を閉じています。くちびるを離すとアンナは恥かしそくに俯きました。

僕は近くの木陰に場所を移して、アンナから別れた後に起こったことを手短かに話しました。アンナは目を丸くして聞いています。

「ご主人一家に巡り会えるなんて、あなたも本当に運がいいのねえ」

「アンナ、それもこれもみな君に助けて貰った御陰だよ。今日は一言お礼を言いたくてやって来たんだ。でも空港でご主人と奥さんが待っているの、今日はこれで失礼しなければなりません」

「ええ、わたしもあまり長いこと外にいたら、こないだみたいに見つかって、またコラッてご主人に怒られることになりかねないわ。せつかくお会いできたのにコラッて怒られながら別れるのは味気無いわ。そんなことをしていたんじゃ、これから会えなくなるかもしれないし……本当はもっとずっとお話ししていたんだけど、これからのために今日はお別れにしましょ。きつとまたいらしてね」

「うん、ぜったいまた来ます」

僕はかたく約束しました。

後ろを振り返り振り返りしながら僕は、その場を離れました。アンナの姿が見えなくなるや否や、僕は全速力で走り始めました。ひよっとしたらご主人たちが僕がいなくなったのに気づいて捜し始めているかも知れません。僕は少々木の枝に引掛かって毛が抜けようと、足の裏をすりむこうとお構いなしにひたすら走り続けました。だから空港ビルに着いたときには、もうへとへとで、いまにも倒れそうになっていました。

僕は、激しい息をつきながらまずアダミヤックさんの車のところへ行って見ました。ところがそこには車は見当たりません。

スーツと血の気が引いていくのが分かりました。僕は青くなって空港のビルの中に入って行きました。ご主人たちの姿は見当たりません。アダミヤックさんの車がないということは、もう皆んな帰ってしまったということなのでしょうが。

「しまった」

僕はとんでもない失敗をしてしまったのです。恐らく飛行機が着いて、お客さんをお迎えしたご主人たちは、もう空港から帰ってしまったのです。僕をすこしは捜してはくれたのですが、大切なお客さんということでしたから、やむを得ず行ってしまったに違いありません。こうなればどうにかして、自力で家に帰りつくより外に手はありません。僕はそれでも念の為に林の方に行って見ました。

ご主人たちの匂いは、もうかなり古くなっています。最後にもう一度だけ空港のビルの中を覗いて見ました。あちこちに人がかたまっています。新しい飛行機が到着したのか、先ほどよりかなり混みあっています。その中に少しこぶとりの小柄な小父さんがいます。匂いからしてどうも日本人のようです。キョロキョロと辺りを見回しています。こちらを向いたときよく見ると日本人に間違いありません。あめいろのべっこうの眼鏡をかけて盛んにキョロキョロしているのです。お迎えの人がいないのでしょうか。僕は少し気になって

近づいて行きました。すると眼鏡の小父さんも僕に気がついたようで、僕のほうへ近づいて来て、

「チビクロ？ チビクロか？」

というのです。僕は驚いてしまいました。僕が目を丸くして見上げていると小父さんは両手を差出しながら近づいて来ます。一体だれなのでしょう。どうして僕の名前を知っているのでしょうか。

めったなことに見知らぬ人に近づきになるわけにはいきません。たとえ名前を知っていても。僕は警戒して少し後退りました。

「お前チビクロなんやろ。捜していたんだよ」

こんな見も知らぬ小父さんがどうして僕のことなど捜したりしていたんでしょう。小父さんは僕を抱上げよつとして両手を差し出しながら、近づいて来ましたので、僕は齒をむき、

「ウーッ」

体を低くし、おどすような姿勢をとりました。

「こりやなかかわし独りでは手におえそうにないな」

眼鏡の小父さんは辺りを見回すと、口に手を当て大きな声で叫びました。

「おーい、チビクロがおったぞっ」

周りの人は、小父さんが突然大きな声を出したので、驚いて一斉に僕らの方を見ました。小父さんは僕に手を半分差出しながら時々振りかえっては、

「おーい、チビクロがおったぞっ」

と叫びます。何時の間にか丸い人垣が出来て、みんなこの不思議な情景をながめています。とその人垣を

かきわけ、最初に「ご主人が、そのすぐ後から奥さんが飛出して来ました。二人ともなぜか必死の形相をしています。」

「チビクロー！」

「チビクロー！」

二人が叫びました。僕はほっとして「ご主人と奥さんの方へさつと走って行きました。心の半分でちよっぴり怒られることを覚悟しながら。それでもべっこうの眼鏡の小父さんなんかにさらわれたりしなくて良かったと思いがら。」

「チビクロー！」

「ご主人と奥さんは僕を抱上げきつく抱きしめました。見るとご主人の目にも、奥さんの目にも涙が溢れ、くちびるがぶるぶるぶるえているのです。」

「ごめんね、チビクロ。私たちがほつといたものだから、迷子にさせたりして」

奥さんが涙声で言いました。僕は一体なんと答えたらいいのでしょうか。クンクンと鼻を鳴らしながら、僕は奥さんの涙を一生懸命になめました。

「済みません。悪いのは僕なんです」

心の中で僕は一生懸命あやまりました。

「常務、誠に申し訳ありませんでした。ポーランドにお着きそうそう、犬を捜すお手伝いをさせてしまったらして」

「ご主人は、何と先ほどのべっこう眼鏡の小父さんに最敬礼をしているのです。」

「いやー参ったよ。このチビクロくん、わしが手を出すと歯をむきだして、『ウーッ』ちゅつておどかさんだよ。どれ、わしと仲直りするか」

小父さんは、僕の頭をなでてくれました。僕は申し訳なさに上目づかいで常務の顔をチラリと見、体を小さくしてなでて貰いました。べつここの眼鏡の奥の目は優しくなっていました。

人垣をかきわけてアダムヤックさんが現れました。

「チビクロ、見つかりましたか。それはよかった。チビクロが家に帰ったんじゃないかと思って、空港から家までの通りをずつと捜してみたんですが見当たらないものですから、心配しながら引返して来たんですよ。チビクロ一体どこに行つてたんだい」

こういうときには口がきけないということは便利なのかも知れません。これだけ心配させて、まさかアナに会いに行つていたなどとは言えません。

帰りの車の中で常務がご主人と奥さんを盛んにからかっています。

「チビクロがいなくて知つたときの君たちの顔は見ものだったな。だれかに連れて行かれたのかも知れんゆうて、わしのことそっちのけで、やれ電話に飛びつく、運転手を捜しにやる、まあ奥さんまで必死になつてそこから中えらい勢いで走りまわる。わしがそのうち帰つて来るよゆうたかていつこつに聞きよらん。いや、ポーランドに着くそうそう仕事そっちのけで、犬を捜すことになるうとは思わんかったよ」

「この犬は、私たちを追いかけてポーランドまでやってきた犬なんです。わたしたちの宝なんです。もしものことがあつたらと思うと、もう何もかも分らなくなつてしまつて。常務にまで捜すお手伝いをお願いして誠に申し訳ありませんでした。おまけに常務に見つけていただいて、本当に何とお礼いつて良いか分りません」

「まあ、これでわしは、君たちに貸しが出来たわけだ。今日は遠慮なしに日本メシの御馳走にあずかれるな」
その晩の日本メシは、奥さんが腕によりをかけて作ったので、さすがの常務もご満悦でした。ただ奥さんが残念がったのは未だ日本から船荷が着かないので、料理の品数が少ないことと、こまごました日本料理用の器がないために、洋風の皿に盛りつけなければならないことでした。

「早く船荷が着けば、もっといろんな料理も差し上げられますし、もっときれいに盛りつけることも出来るのですが、こんな料理でお口にあいましたかしら」

「いや奥さんはなかなか腕がいい。日本でもこれだけうまいもんはそう食わして貰えるものじゃない。吉野君君はいい奥さんに恵まれて幸せだよ。船荷が着いたら、もっとうまいもんを食わしてくれるちゅうなら、船荷がついた後でまたやって来ますかな。君たちがなかなか張切ってやっていることも分かったし、チビク口とも仲良しになったことだし。な、チビク口」

僕はこのときとばかり、懸命に尻尾を振りました。

船荷
28

「ウーム、待つべきか、待たざるべきか、それが問題だ」

一通の手紙を前にして、今日もご主人一家が居間に集まり盛んに議論をしています。

「いい知らせでもあり、悪い知らせでもある」

そう言いながらご主人が、その手紙を持って帰って来たのは、もう三日も前のことです。それ以来、時にはご主人と奥さんが頭を突合せて話合うこともあれば、今日みたいに夕食後ニコちゃんもひろしくんも入って、家族討論が繰広げられることもあります。

「この手紙によれば、我家の船荷はもうグダンスクという港に到着したらしい。ところがポーランドでは今、貨物運搬用のトラックがもの凄く不足していて、放っておくと少なくともあと一月しないと配達されないらしい。でも、会社の秘書のバンダの話だと荷主がグダンスクまで行き、港の事務所の人と直接掛合えば、ひよつとしたら、その日のうちにもトラックを出してもらえる可能性があるらしい。現に我が社の間野さんは、そのやり口でうまくいったということだ。しかし、いつもいつもうまくいくとは限らないらしくて、三〇〇キロも車を飛ばして行ったもののまったく無駄足に終わった人も大勢いるらしい」

これが議論の発端になったご主人の説明です。そこで皆が頭を悩ましているというわけです。

「一日も早く船荷が届いて欲しいのは当然だけど、せっかくグダンスクまで三〇〇キロメートルもの道程をか

けて行っても、うまくいけばともかく全くの無駄足になりかねないんじゃない、黙って着くのを待つ方が利口かもしれないわね」

「船荷の中には、僕のおもちゃも一杯入っているし、絵本やミニカーやウルトラマンも入っているのになあ。ああ、早く着くといいなあ」

「あたしの可愛いお人形さんだつてたくさん入っているのに。それに春向きのお洋服だつて。船荷がもっと早く着くと思って飛行機では一枚も持って来なかったから、この頃着て行くものが何もないわ。クラスの女の子なんか春らしいとっても素敵な洋服をみんな着て来ているのに」

「この前の、野村常務のときだつて日本食の材料もなければ、食器もないんですもの。茶碗蒸をコーヒーのカップに作ったのなんて初めてよ。味噌、醤油、しいたけ、こんぶ、はるさめ、お豆腐のもと、かつおぶし、こんにゃくのもと。うどんに蕎麦、とにかく三年分の日本食をパパと日本橋の問屋さんまで行ってあれこれ買いこんできたのに未だ何もつかえないんだから。それにミコちゃんではないけれど、春ものの洋服や下着類も、もうそろそろ暖つたかくなつて来たし、わたしも一日も早く欲しいわ。それに電動ミシン。あれさえ着けば子供たちにもいろいろと可愛い洋服を作つてあげられるんだけど」

「船荷が一日も早く着いて欲しいのはパパだつて同じさ。パパの読みたい本だつて、テニスの用具だつて、合服だつて、暮やマージャンのセットだつてみんな船荷の中なんだから」

「早く船荷に着いてもらいたいのは皆同じね。でも、グダンスクまで行ってみたところでそれで早くなるかどうかはつきりしないところが問題なのよね」

「ああ、待つべきか、待たざるべきか、それが問題だ」

ひろしくんがこのところ聞きなれたご主人の得意のセリフを、ご主人の口調を真似て言ったので大笑いになりました。

しかし、今日の議論にしても、この三日間続いたのと少しも変わりばえしません。僕は、やや距離をおいてじゅうたんの上に寝そべり、議論の成行きを冷静に聞いていました。こと船荷に関する限り僕は早く着くことが遅くなるのが全く我関せずです。なぜなら、船荷の中には僕のもの何一つ入っていないからです。だって、船荷を日本から出したのは、一月の末のことなのですが、そのときには僕は東京においてこられることになっていたのです。

もっとも、僕の好きなカツオブシとか、お豆腐のもととかは入っているでしょうが、ポーランドにも結構美味しいものがあることが分りましたし、ポーランドにいた四日間朝夕晩日本料理で通した野村常務のようには、日本メシにこだわり続けるのはなんとなく馬鹿げています。僕はご主人もいうように外国へ来たらその土地の料理を楽しむべきだと思います。そのほうがどれだけ幸せか分りません。僕はもうカツオブシやお豆腐よりもどちらかというとポーランドせいソーセージとか、カチカ料理の方が余計舌に合うように感じます。ご主人一家は、ご主人の、

「何でも、食ってやろう」

という精神に影響されてか、ポーランド料理に対してもあまり好き嫌いが無いのは見上げたものです。

「グダンスクまで、三百キロメートルか。往復で六百キロメートル。車で行くとしても一泊は欲しい距離だな。強行すれば一日で行って来られない距離ではないけど、ポーランドにはまだ一メートルも高速道路がないし、あまり道路の整備状況は良くないから、やはりちょっとむずかしいかな」

「運転手のアダミヤックさんに頼んでみたら。運転のプロだし、一日で六百キロぐらいわけないでしょう」

「ウーン、会社の仕事だったら、頼めないこともないけれどね」

「でも、パパは会社のためにポーランドへ来たんでしょ。頼んでもおかしくないと思うけど」

「今度のお休みにパパの車で皆と一緒にの方がいいな」

「お休みの日に行ってもグダンスクの港の事務所もお休みでトラックを出して貰えなかったら、意味がないわね」

「じゃー普通の日にパパがお休みをとれば」

「ちょっと待てよ。もつそろそろ日本では五月のゴールデンウィークだね。日本の休みの日には原則として、海外のオフィスでもお休みにしていいことになっているんだ。そうだーつゴールデンウィークを利用して家族そろってグダンスクへ行ってみるか」

「たとえ無駄足になったとしても？」

「うん、ポーランドにいるあいだに出来るだけあちこち行ってみたいと思っただけだから、たとえ無駄足になっても構わないじゃないか。旅行で行ったと思えばいい。グダンスクは、ドイツ名でダンチヒ。第二次世界大戦の発火点になった有名な町だし、一度は行ってみたいと思っただころだしね」

「でも、あなた三百キロも独りで運転できて」

「まあ、まかしとき。僕だっていざとなれば、三百キロだろうが、六百キロだろうが、無事故運転でやってみせるわ」

「ワイ万歳、自動車旅行だ」

ニコちゃんもひろしくんが両手を高く上げました。三日間にわたる長い議論もようやく結論が出たようです。日程も五月三日の憲法記念日から五月五日の子供の日まで二泊三日に決ったようです。とにかくゆつくり行つてゆつくり帰つてくれれば、たとえ六〇〇キロだろうが、事故に合わずに済むだろうということのようです。

まあ、僕としてもグダンスクという町へ行くと決れば、別に反対ではありません。別に知らないところへ旅行することが嫌いなわけではありませんし。でもニコちゃんやひろしくんの万歳の中に加わつて小躍りする気にはなれませんでした。

29

出発までまだ一週間もあるのにその翌日から家族全員で旅行の準備が始まりました。

ご主人は、早速ポーランドの道路地図を買ってきました。どの道を通つて行くかさかんに研究しています。行きがけのだちに途中の有名なところへも寄つて行くつもりようです。

奥さんは、旅行に持つて行くものの一覽表を作り、足りないものはユラさんに買つて来てもらい、スーツケースやダンボールの箱にパッキングしています。ニコちゃんもひろしくんも旅行に持つて行くものの点検に余念がありません。

「僕は、このウルトラマンとミニカーと肩掛けのカバンを持つて行くことにしようかな」

「あたしは、お人形さんと英語のテキストブックと数学のドリルと持って行こう。そうだ日記帳も忘れないようにしなくっちゃ」

さて、この僕は何を持って行ったらいいのでしょうか。どこへ行くにしてもいつも体一つですから改まって持つて行くものは何もなさそうです。ただ、僕と一緒に行くことになってるのかどうか誰もきちんと言ってくれないのが気掛かりです。まさか、二泊三日の旅行において行くとは思わないのですが。

実は、密かに心配しているのは、ご主人と奥さんは僕が飛行場で本当に迷子になったと思いこんでいるらしいふしがあることです。旅行中にもう一度あんなことになったらチビクロとはぐれてしまいかねない。連れて行くのは少し心配だ。そう考えているようなのです。いつもなら、

「チビクロ、今度一緒にグダンスクというところへ行くぞ」

といってくれるはずのご主人が何も言わないのです。ついて行くつもりになっているのに最後の土壇場になつて、

「チビクロ、今度はユラとお留守番よ」

ということにでもなつたら大変です。僕はせっかくの旅行のチャンスをみすみす失いたくありません。僕だって、ポーランドにいる間にいろんなところへ行ってみたいし、たとえ三日にしても、ご主人一家と離れて暮らしたくありません。

僕は少し心配になって、地図の上におおいかぶさるようにして見ているご主人の側に行つてみたり、奥さんがスーツケースに下着を詰込んでいるところとか、ミコちゃんとひろしくんが小さなカバンに持つて行くものを詰めているところに近づいていき、何か言ってくれないかとしばらく様子をうかがってみたのですが、

今一つはつきりした反応がありません。

僕は少し、心配になって来ました。

本当に僕をおいて行くつもりなのでしょう。そんなことなら皆が議論しているとき、つまらない意地を張って、いかにも自分には関係ないと言わんばかりに、少し距離をおいて寝そべっていたことが悔やまれます。あんな態度を取ったのでチビクロはグダンスク行きに興味がないと受取られたのかも知れません。これはなんとかしなければなりません。

僕はまず、地図を広げているご主人のところへ行き、クンクンと鼻を鳴らし、ご主人の手をなめました。ご主人は振りむきもせず、地図に夢中になっています。ご主人の手を優しく噛んでみましたが、まだ知らん顔です。ご主人をこっちにむかせるにはどうしたらいいのでしょうか。こうなったら仕方がありません。僕は地図の上に飛乗ってシッポを高々とかがげて、ご主人のあごの下を払うようにさっとなぜました。

「こらっ、チビクロ、地図がしくちゃになつたじゃないか。邪魔しないでちよつとあっちに行つてくれ」
これでは取りつく島がありません。今度は奥さんのところへ行つてみました。奥さんは赤と黒のチェックの布性のスーツケースに、作りつけのタンスから子供用の着替えや下着を詰めているところでした。僕はミコちゃんがかさき旅行に持つて行かなくっちゃと言つていた水玉模様のワンピースがまだタンスに残つているのを見て、それをタンスから出すお手伝いすることにしました。下から三段目の棚にあるので、背伸びをし、出来るだけ気をつけてくわえ、引張りだしました。ところがせっかく畳んであったのがほどけてしまい引きずり出すようなことになってしまいました。自分で畳みなおすわけにはいきません。しょうがないのでそのまま引きずって、奥さんのところへ持つて行きました。

「マーマーマー、チビクロったら何してるの。ニコちゃんの大切な水玉のワンピースを引っぱり回したりして。こないたずらはやめて、向つて遊んでなさい」

少し悲しくなつて来ました。ニコちゃんとひろしくんのところへ行つて見ましたが、また、怒られたらと思うとうかつに近寄れません。ちょっと離れたところから、盛んにこっち遊びをしている二人をぼんやりと見ていました。

「どうしたのチビクロ、元気なさそうな顔して」

「チビクロ一緒に遊ぼうよ。ほら、こっちにおいでよ」

僕は力なく尻尾を振りながら、二人のところへ行きました。

「チビクロ、今度グダンスクと言つ町へ行くんだよ。ワルシャワから、三百キロも離れているんだって」

「バルト海という海に面している大きな港町なんだそつよ。だから大きな造船所もあるんだって」

「海を見るのは久し振りだね、ニコちゃん」

「そうね。日本の海とは違うのかしらね」

「海の水はどこでもしょっぱいのかな」

「それはしょっぱいにきまつてるでしょ」

「バルト海って、日本の海とつながっているのかな」

「そうねえ、日本の海とねえ。日本とポーランドは一万キロも離れているんだし、ひよとしたらつながっていないんじゃないかしら」

「僕はつながっていると思つ」

「私はつながっていないと思うわ」

「じゃ、ババに聞いてこようよ」

「そっね」

二人は僕のことなどそっちのけでバタバタと二階へ下りて行ってしまいました。

僕は、独りぼっちなんだ。今度の旅行には連れて行ってもらえないことになってるんだ。きつとそっだ。そう思うと、鼻の先がじーんとしてきました。僕は独りで階段をこっそりと下り、居間で旅行の話をしているご主人やミコちゃんやひろしくんに気づかれないように、さつと地下室の自分の部屋に戻りました。冷えきったダンボールの箱の中にもぐりこみ体を猫のように丸めてうずくまりました。

どの位たったのでしょうか。知らないうちにうつらうつら眠り込んでいたようです。

「チビクロ、夕御飯だよ。今日は御馳走よ。ほら、お肉」

ミコちゃんがアルミニウムのボールを目の前に突き出しています。でも、僕は食欲が湧いてきません。頭を、布切れの中に突っ込み、そのままじっとしていました。

「チビクロどうしたのよ。大好きなお肉なのに」

「ミコちゃんがしゃがみこんで覗いています。」

—どうせ、僕なんかおいていかれちゃうんだから。

さつきより、もっと強い悲しみがこみあげて来ました。僕は顔を見られないようにもつと深く布きれのなかに頭を突っ込みました。

「おかしいわねえ」

「ニコちゃんは頭をひねっています。」

「だれか来てえ…チビクロが元気ないの」

「ニコちゃんが大声を出しました。」

「どうしたの」

「真先に下りて来たのは、ひろしくんです。」

「チビクロが元気ないのよ。夕御飯を食べようとしてもしないで、じっとずくまっているのよ」

「どうしたのチビクロ、元気出しな」

ひろしくんがダンボールの中に頭を突っ込んで両手で僕の顔を持上げようとしましたが、僕はその手の中からずるりと抜けました。

「ふーんおかしいなどこか具合がわるいのかな」

「パパ、ママ、ちょっと来てえー」

「ニコちゃんとひろしくんが声を合せて呼びました。しばらく待っても足音が聞こえてきません。どうせ僕のことなんかどうでもいいにちがいないんだ。」

「聞こえなかったのかな。じゃあ僕が呼んでくるよ」

ひろしくんは小さい足音をたてて階段を上っていきました。

「どうしたの一体。さっきまで元気だったのに」

「チビクロ、どうした。元気出しなよ」

下りてきたご主人と奥さんも心配そうに覗き込みました。僕はますます布きれの中に頭を深くもぐりこま

せて、うずくまっていた。

「さっき、地図の上に乗ったので、ちょっと叱ったのを気にしているのかな」

「私も、いたずらしないであつちで遊びなさいといったわ」

「でも、そのくらいで夕御飯を食べないほどチビクロは繊細じゃないわ。食欲はいつもおうせいよ」

どうせ僕はそれほど繊細には出来ていません。

「どこか、体の具合でも悪いのかな。あつちこつち、押してみるか」

「あまり体の具合が悪そうな感じもしないわ」

「チビクロには何か悩みことがあるんじゃないかしら」

「悩みごとって？」

「私にもはつきりとはわかんないんだけど、なんとなくそんな気がするの」

「こまったな、こんな調子だと、チビクロをグダンスクへ連れて行けなくなるかもしれないな」

「えっ、なんですって？」

僕は飛び起きました。ダンボールの箱の縁に前足を掛けて、

「ワンワン、ワンワン」

必死になって吠え、千切れるほどシッポを振りまわした。

「一体どうしたんだ。チビクロ。いきなり吠えだしたりして」

「ワンワン、ワンワン」

「今までしよげかえっていたのが嘘みたい。一体どうしたの、チビクロ」

「驚いたわ、なんだか、急に元気が出てきたみたい」

「チビクロのヘンシーンだ」

「チビクロは僕が話したら、急に元気が出てきたみたいだな。でも何の話をしたんだっけ。急に吠えだしたんで、すっかり忘れちゃったよ。トモコおぼえてないかい」

「人の話していたことなんかいちいちおぼえてないわ」

「ワンワン」

思い出して貰わないことにはどうにもなりません。僕はご主人の顔を見上げながら必死になって吠え続けました。

「チビクロのようすだと、やっぱりどうも、僕の話していたことと関係あるみたいだな」

「パパ、僕覚えてるよ」

ひろしくんがいました。僕はひろしくんの方に向直り息を詰まらせていました。

「パパはね、こんな調子だとチビクロをグダンスクには連れて行けなくなるかもしれないっていったんだよ」

僕は嬉しくなってひろしくんのところへ飛んでいき、後ろ足で立上がりひろしくんの顔をペロペロとなめました。

「そうか、そういうことか。わかったぞ。チビクロはグダンスクに連れて行って貰えないと思ってしょげていたのかい」

僕は少し照れ臭くなって、ご主人の顔を上目使いで見ながら、

「ワン」

と答えました。

「ちゃんと連れて行って上げるよ、心配しなくても」

僕はすっかり嬉しくなつて、そこらじゅうを『ヨンピヨン』と後ろ足で飛びまわりましたが、すぐにおなかがグウグウ言っているのに気づいて、アルミのボールのお肉のところへ飛んで行きました。

みんなが見ている真中で僕は夢中になつて遅い夕御飯を食べ始めました。その美味しいこと。

「チビクロたつら現金なこと」

「やつぱり、こつじゃなくっちゃチビクロらしくない」

「でも、チビクロにだって、悩みごとがあるのね」

「僕にだって、悩みごとはあるんだから」

ひろしくんが言つたので、皆声を上げて笑いました。でも、僕に関するかぎり、御飯を食べている間は、周りで何を言われようと、もう、

——馬の耳に念仏

です。

愛 30

「さあさあ、ミコちゃんもひろしくんも今夜は早く寝なさい。明日いよいよグダンスクへ出発だぞ」

「ハ―イ」

今夜はミコちゃんもひろしくも素直に二階に上がっていきました。

「おや、チビクロはまだ起きていたのか。明日朝が早いんだから、お前も今夜は早く寝なさい」

僕も素直に言うことを聞いたのは言うまでもありません。早速寢床にもぐりこみましたが、いよいよ明日が発かと思うと胸がわくわくして寝つけません。ポーランドってどんな国なんだろう。ワルシャワの外にはまだ一步も出たことがありませんので、想像も出来ません。平らな国と聞いていたけれど、どんなふうに平らなのだろう。僕はとりとめもなくいろんなことを考えていました。

そのときです。僕ははつきりと聞いたのです。いえ、聞いたという正確ではないかもしれませんが。別に声が出たわけではないのですから。感じたのです。誰かが僕を呼んでいるのを。そうです。僕に早く来て、助けて欲しいと言っているのです。辺りは静まり返っています。まっくらです。その中から、悲鳴にも近い呼声がはるか遠くから聞こえてくるのです。

僕はすくつと立上がりました。行かないわけにはいけません。でも、どうやってこの地下室から抜け出したらいいのでしょうか。僕はやみのなかで、忙しく頭を回転させました。

――そうだ。例の地下水道を通って行く道がある。

僕は、ちゅうちょなく地下室の一番奥の作業室へ飛んでいきました。木の棚箱に前足を掛け、後ろ足で立上がつて、例の犬の首飾りをくわえてぐいと引張りました。棚箱はギーといって回転を始め、半分ほど回って止まりました。僕はその後ろにぼっかかりあいた穴の中に声をおしころして呼びかけました。

「ロン、ドブネズミのロンはいるかい。僕チビクロだけど」

「おや、久し振りだね、チビクロ。こんな時間に一体どんな用事だい」

ロンが姿を現しました。いつものように後ろには家族がソロソロついて来ています。

「ちよつと、僕は外へ行く用事があるんだ。悪いけど、君の部屋を通してくれないか」

「ま、そんなことならお安いご用だけどね。こんな時間にお出掛けとはお安くないね」

「今は少し急いでいるので、わけを説明している時間がないんだ。悪いけど通させて貰つよ」

ロンと話しかつている時間も惜しいので、僕はロンの言葉にまともに挨拶せず、急いでロンの家族の部屋を通り、部屋の右手にある小さな穴を抜け、地下水道へ出ました。やみのなかを濁った水が相変らず音をたてて流れています。滑りやすい通路に気をつけながらしばらく行くと、外へ出る石の階段がありました。僕は一気にかけ上りました。

外はやや肌寒い、春の初めの宵です。空気が新鮮に感じられます。丸い月が空の真中に浮かんでいます。五十メートルほど向うにご主人一家の家が月の光を浴びて白く輝いています。居間の明りはまだ点つていますが、ご主人と奥さんが明日の準備をしているのでしょうか。僕は少しうしろめたい気持ちにとらわれましたが、ここまで来た以上もう引返すわけにはいきません。僕を呼ぶ声はさっきよりもっとはっきりと伝わってきます。僕は声のする方向へ走り始めました。

道路には人影も少なく、車はごくまれにしか通りません。月の光を浴びて、大きな建物も、街路樹も静かに寝静まっています。

動くものといえば道路のあちこちに、立っているおまわりさんぐらいなものです。そればかりではなく、建

物の陰や、木の陰など思いがけないところにもおまわりさんがたくさんいるのです。

「ポーランドには警察官がやけに多いね、夜中に車を走らせるといたるところにいて感じてだよ」

といていた主人の言葉を思い出しました。僕は別に悪いことをしているわけではないのですが、つまらないいざこざを起こしてもつまりません。出来るだけおまわりさんの目を避けるようにしながら走りました。ひょっとしたら、夜、人影がまだらなのもおまわりさんがこんなに多いせいなのかも知れません。僕と同じように、つまらないいざこざを起こしてもつまらないと思えば、つい家に引込みがちになるのでしょう。

ある道路を曲がったとき、危うく僕はその避けているはずのおまわりさんとぶつかりそうになってしまいました。というのもそのおまわりさんは道路の曲り角に身を潜めるようにして隠れていたからです。僕は驚いて飛退きました。

「シッ」

くちびるに人差し指をたて、

「あっちへいってろ」

低いドスのきいた声です。僕はあわてて、その場を離れました。張込みでもやっているのでしょうか。

あわてて進路を変更したせいかな、ちょっとばかり方向感覚が狂ってしまいました。

「さて、と」

僕は立止まって辺りを見渡しまいました。と、この近くに一度来たことがあることを思い出しました。僕が記憶を頼りに歩いて行くと道路の側に確かにありました。腕白な子供たちに追われて、転げ込んだ例の縦の繁みです。とするとその後ろの家はボイテックの家にはちがいません。ボイテックやヤーチェック、マー

トカヤタトーシュはどうしているのでしょうか。家の明りも消えひっそりと寝静まっています。

——道も分かったことだし、よし、今度必ず遊びに来よう。

もつ、ここからならなんとかなりそうです。僕を目的に向かって、足を早めました。飛行場が左前方に見えてきました。

「チビクロ早く来て、チビクロ」

——すぐ行く、今すぐ行くからね。

僕は心の中で叫びました。

飛行場の周りを半周して野原に出ました。木造の小さな家の側を通り、林の中の小道を抜けると、目の前に大きな石造りの家が、こうこうと輝く月の光の中にそそり立っています。窓の明りは全部消えています。アンナの呼ぶ声は裏手の方から伝わって来ます。

僕は裏手に回りました。車用の通路づたいに僕は入って行きました。半地下になったガレージのところまで行き、僕は声をひそめて言いました。

「アンナ、僕だよ、チビクロだよ」

アンナはガレージの中から飛出してきました。首には鎖がつけられています。

「まあ、やっぱり来てくださったのね、チビクロ、あたしが呼んだのがわかったのね」

「うん、君が呼ぶ声が直接僕に伝わってきたんだよ」

「神様に祈るつもりであなたに救いを求めてたの。それがあなたに通じたのね。嬉しいわ」

「救いだって？」

「ええ、私、もうどうにもならないの」

アンナは目に一杯涙を浮かべています。

「一体どうしたんだ、僕にちゃんと話してくれなきゃ何も分らないじゃないか」

「チビクロ、その前にキスして」

そういつとアンナは顔を上げ目をつむりました。僕がキスしてあげるとアンナの気持ちもやっと落ち着いたようです。僕たちは木の箱の中で寄添いながら話をしました。アンナはぴったりと体をすりよせてきます。これまで嗅いだこともないような素敵な匂いがします。

アンナの話は、こうでした。

アンナの飼い主が今日の午後、カジユクという雄犬を連れて来たんだそうです。引合せるなり、

「アンナ、これがお前のダンナだ。こいつは血統書付きの名犬で、子造り名人としてもポーランド中に知れ渡っている。顔付きもいいし、ほら、この真白い毛にも艶があつて素晴らしい雄犬だろう。もうそろそろお前も赤ん坊を生める年頃になった。こいつとなら似合いのカップルだ。きっと可愛い子犬が出来るだろう。うんとこさつくつてくれよ」

そういつてこの地下のガレージにカジユクと二匹だけに行つてしまつたのだそうです。カジユクという犬は、確かに男前で毛並みもよさそうだったけれど、アンナはどうしても好きになれなかつたのだそうです。

「カジユクときたら私に向かつて、君は運がよかったな、僕みたいに毛並みのいい犬の子供が生めるんだから。おれの子供なら高く売れるし飼い主も大喜びさ。さあ、はずかしがらずにこっちにおいで、なんていつのよ」

アンナは、今考えても本当に身の毛がよだつといわんばかりにからだをふるわせました。

「私はだから、とりあわなかったの。そうしたらカジユクは私を追回すの。私は、ガレージの隅にあった小さな隙間に入りこんで何度カジユクが呼んでも、出て行かなかったの」

「二時間たつて飼い主が降りてきて、私たちの様子を見て腹をたて、私を隙間から引張り出して、カジユクをけしかけるの。私はあばれまわつて、どうしても言うことをきかなかったの。だって愛してもいないのに、そんなこと出来ないわ。飼い主は怒つて私を何度も鞭で叩いたわ。でもとうとう諦めて、今日はこれくらいにしてやるわ。でも明日はこれでは済まないぞ。今度は専門家のところへ連れて行って、どうしても二人と一緒にさせてやると言つた。だから私、飼い主が寝静まるのを待つて必死になつてあなたに救いを求めたの」

そういながらアンナは僕の顔をまともに見詰めました。

「チビクロ、私が愛しているのはあなただけ。あなたは私のことを愛してる？」

「もちろんさ、僕はアンナを心から愛してる」

「じゃ、私を救つて、私をきつく抱きしめて」

アンナは体をもつと押しつけてきました。あの心がとろけそうな匂いが僕を包みこみました。こんなに気持ちが高ぶつたのは初めてです。こんなにアンナを愛しく思ったのは初めてです。僕の前にすべてを投出して、救いを求めているアンナ。どうしてそんなアンナを他の犬の手に渡すことが出来るでしょう。僕はアンナをしつかりと抱きしめました。アンナは僕の腕の中で、幸せそうに小さく体を丸めました。

その晩は僕はアンナの家に泊まりました。愛するものと抱き合いながら一緒に過ごす一夜がこれほど素晴

らしいものだとは、僕は想像もしていませんでした。

夜の白む前に僕はアンナの家を出ました。飼い主に見付かりでもしたら百年目からです。それに、ご主人がグダンスクへ朝早く出発すると言っていたのに遅れてはならないと思つたからです。少し白みかけた道を今度は迷うこともなくま一文字に我家へ急ぎました。相変らずおまわりさんの影が街のあちこちに見え隠れしていますが少しは減つたようにも思えます。

家の後ろにあるアパートの階段の側を通り抜けようとしたときでした。いきなり大きな厚い板が覆いかぶさるように倒れてきました。僕はとっさに体をよじつてよけ、危つく難を逃れましたが、もう、ちよつとも逃げるのが遅かつたら、板の下敷きになつて身動きできなくなるところでした。上を見上げると階段の陰に白と黒のブチがちらつと見えました。すぐ見えなくなりましたが、何者かがじつと身を潜めている氣配がします。

あのブチ猫ニーナでしょうか。この前、ロンを救つてやったことを根に持つているのでしょうか。あんなことで恨みを持つなんてまったく根性が曲がっています。よっぽど階段をかけ上つて行つて、とつちめてやるつかとも思いましたが、こんな素晴らしい朝をニーナごときのために台なしにするのはもったいないと考え直し、そのまま何事もなかったような顔で、マンホールの割れ目の穴に向かいました。

家に入るときも、ロンの部屋を通らせて貰いましたが、朝早く起されたロンが、

「何だチビクロ朝帰りか、結構なご身分だな。御陰でこちらは寝不足だよ」

と言つつには、ちよつとばかり照臭い思いをさせられました。

グダンスクへ 31

見渡す限りの菜の花畑、どこもかしこも黄色一色の中を、ご主人の運転するプジョーはエンジンの音も快調に一路グダンスクめがけてひた走っています。

確かにポーランドは平たい国です。車の周りを見渡しても、どこにも高い山は見当たりません。ゆるやかなスロープがどこまでも続き、薄い黄緑の若芽で彩られた景色はパステル画のようにきれいです。道路ぞいにはいろんな種類の並木が植えられています。その後ろには菜の花や小麦などの畑が広がり、その向うに黒々とした森が連なっています。道路がその森の中へ入って行くことがあります。松やもみの木やぶなやかばの木が高く聳え、どの森も奥が深く、その果ては暗いやみのなかに消えています。道路には車の数は数えるほどしか走っていません。ときおり馬車がのんびりとすれちがったりします。

朝、まだ薄暗いうちに出発したので、皆んななんとなく眠たそうで、うつらうつらしています。ご主人だけが初めての長距離旅行なので、しんけんそのものの顔をして前方をにらみながら運転しています。

しばらくするうちに面白いことに気づきました。地平線の向うにまず見えてくるのは、決して教会の十字架なのです。それは高い塔の上にあるからです。やがてその塔を取りまくような形でひとかたまりの建物や高い木が見えてきます。つまり村や町が顔を現すのです。その村や町に近づくと、この教会もなかなか立派です。村や町一番の建物は決して教会のようです。そのすぐ近くに大きな広場があることもあります。広場

にはおとしよりも小さな子供も集ってのんびり過ごしています。ポーランドではどうも教会を中心にして村や町が出来ているみたいなのです。

どれだけ多くの村や町や森や林や丘や河や湖を通りこしたことでしょう。

「あーあ、良く眠ったわ。そろそろお昼にしましょうか」

奥さんは両手が車の天井につかえるほど背伸びをしました。

「うん、そうしましょう」

なんと今まで眠りこんでいたはずのミコちゃんとおひろくんが、お昼と聞いたとたんにパッと目を開け、せい良く返事しました。

「それじゃ、今度森があつたらそこでお昼にしよう」

「あのずんぐりした幹から細い枝が針鼠みたいに突出している木は何ていう木なの」

「あれはハコヤナギという木だよ」

「今走っている道の両脇に植わっているヒヨロリと高い木はなんていうの、パパ」

「これがポプラって木だよ。日本の北海道大学にあるポプラ並木は有名だけどこれ程長くは続いてはいなかったな。こっちの方がよほど立派だ」

「ポーランドの家は農家でもレンガづくりだし、日本のより大きいわ。こんな何もないようなところにポツンポツンと建っているけどさびしくないのかしら」

「なれたら、それほどでもないんじゃないかな」

「あつ、馬車だ。大きな缶をはこんでる。あの中にはミルクが入ってるのかな」

「ずいぶん、のんびりと走ってるわね。あつというまに追越してしまったわ」

「畑には、余りお百姓さんは見掛けないわねえ」

「耕作機やトラクターなどの農業機械も余り見当たらないね」

「あつ、あそこにお百姓さんが働いている」

「なんだか、普段着でやってるみたい。日本のお百姓さんのイメージとずいぶん違うわね」

「土の色がなんとなく白っぽくて砂みたい」

「あまり肥えた土地じゃなさそうだね」

「そのせいか、作物も余り元氣良くなさそうね」

「この辺りにはあちこちに水溜りがあるわ」

「あつ、ミコちゃんアヒルがあんなに一杯いるよ」

「ほんとだ、カチカだ。行列を作って歩いてるわ」

「スターレミヤストを思い出すわ…」

「僕も今度は一羽丸ごと食べたいな」

「私だって今度は一羽にするわ」

「ほら、鶏も野原を元気に走りまわってる。鶏小屋に押込められて人工の餌を食べるのではなくて、地虫をついでいるのね」

「どおりでポーランドの卵はからが堅くて、そのうえ目玉焼きにしても卵がこんもり盛上がったように焼けるはずだ」

「そうね、初め日本の卵のつもりで割ろうとしてなかなか割れないものだから、つつきりゆで卵かと思っちゃったわ」

「あたしもあんなに黄身の色が濃くってお皿から丸く盛上がった卵なんて食べたことなかったわ。それに味があつて美味しい」

「牛が放飼いにされている」

「牛の牧場なのね。焦茶色のが多いわ」

「チビクロ、ほら、犬が牛の番をしてるよ」

「大きな犬ね、チビクロの何倍もありそうだわ」

確かに僕の五倍はありそうな黒い犬がゆうぜんと寝そべって牛の番をしています。同族だからというわけではありませんが頼もしい限りです。

「森が見えてきたよ。あそこに車を止めてお昼にしよう」

「ご主人は森の中ほどの日当たりのいいところに車を止めました。」

「しらかばにおひさまが当たってきらきらと輝いているわ」

「青空、匂いたつような新緑」

「ああ、空気が美味しい」

「このあたりは車が一台も通らないわね」

「森とはいүүлけど、それほど木が密集して生えているわけでもないんだね」

「パパ、森の中に入ってもいい」

「いいよ、気をつけるんだよ」

「さ、チビクロ行こつ」

森の中は静まり返っているようでも、ゴーツという不思議な音がしています。甲高い声で小鳥がひっきりなしに鳴いています。土を踏むとふかふかしていても気持ちいいのです。爽かなにおいが押寄せてきます。ミコちゃんもひろしくんも木の間をじょうずに走りまわります。僕はその跡を追いかけます。僕などひっくり返って見なければならぬほど高い木が多いのですが、ところどころに木漏れ日が差しこんで、草の上にまだら模様を作っています。

「ご主人と奥さんも森の中をゆつくりと歩いて来ました。」

「春の森っていろんな生き物の息吹が感じられるね」

「まったくの別天地ね。道路のすぐ脇にこんな素敵なところがあるなんて」

「日本では、どんな山の奥に行っても、人のいないところに行くのは難しいのに」

「さつきからまだ一台もほかの車は通らないでしょ」

「この森全体が我が家の貸切りみたいだね」

「それではこの草の生えているところで、そろそろお昼にしましょうか」

「さて、ママ特製のおにぎりをいただくとするか」

「ミコちゃん、ひろしくん、チビクロ、いらっしやい」

きれいな空気を胸一杯吸った後は、美味しいお弁当をお腹一杯食べる番です。僕は特製の骨付の肉です。これは昨日ユラが買って来てくれたのです。なにか特別のことがあるとこれを買って来てくれます。もちろん

僕の好物です。

「ポーランドで食べるおにぎりも美味しいね」

「ポーランドの森の中で、今こつして家族そろっておにぎりを食べてる。なんとなく信じられないわ」

「考えて見ると信じられないことの連続だね」

「もうニコちゃん英語を話しているし」

「ひろしくんだってポーランド語がペラペラだし」

「ママだつてエバさんのおかげでポーランド語を少し話せるようになったし」

「パパは、プジョーというフランス製の車を無事故で運転しているし」

「ほんとに信じられないことばかり」

「ところで、信じられないことのナンバーワンは何かしら」

「それは」

「もっ」

「なんととっても」

皆が一斉に僕を振り返りました。

例によって肉を食べた後一生懸命に骨をかじっていた僕は、皆が一斉に僕の方を見たので、お行儀が悪いといわれるかもしれないと思ってあわててかじるのを止めました。

「東京に置いてきたはずのチビクロが」

「ここに今こつしているのが」

「信じられないことの一等最初」

「東京から本当に良く来たわねえ」

「しかも、人口百七十万人もいる広いワルシャワで巡り会っなんて」

「今もって信じられない」

「ポーランドまで迷子にならずにやってきたかと思うと」

「飛行場で迷子になってみたり」

「それにチビクロはポーランド語をたちまちマスターしたし」

「通訳までやったり」

「馬を助けて上げたり」

「とにかく信じられないことばかり」

「それじゃ、ここで『信じられないチビクロ』という歌でも歌おうか」

「そんな歌があるの、パパ」

「別にありやしないさ、今からみんなで作るんだよ。とにかくなんでもいいから言葉を思いついたら節をつけて歌えばいい、じゃ僕からいくよ」

「ご主人は立上がつて歌いはじめました。」

「黒くて小さいチビクロほど」

「信じられない犬はいない」

「神様が　つかわされた」

奇跡のようだ

チビクロの行くところ

いろんな苦勞が 待ち受けているけど

その燃えるような心で

いつの間にか 雪のように

とかしてしまっ

チビクロは我家の宝

チビクロの幸せのためなら

僕はなにも惜しまない」

「パチパチパチ」

皆が拍手しました。僕もあまり誉められたので照れ臭かったのですが、

「ワンワン」

と吠えて尻尾を振りました。

ご主人は、ポーランドに来て、オペラを本物のオペラ座で、しかもヨーロッパでも一番大きいと言われるワルシャワのオペラ座で見たせいとか、歌い方と言い、歌詞の感じといい、オペラ調です。好奇心が旺盛なものですから、何にでも飛びつきますが、その反面何にでもすぐ感化されてしまつところがあります。

「まあ、あなたには思いがけない才能があるのね。音程の方は少し怪しかったけれど、歌詞のほうは即興にしては上出来よ」

「それじゃ、ママ、一番を歌って」

「ダメダメダメ、ママは作詞なんてやったことないんだから」

「そんなこといわずに、チビクロじゃないけど挑戦だよ」

「それじゃパパはどうまくいくかどつかは分らないけど、パパの作った曲に合せてやって見るわね」

奥さんも立ちあがって歌い始めました。照れているせいか、歌い出す前からだのあちこちをなで回しています。

「我家の一員チビクロほど

信じられない犬はいない

神様が 生を授けた

天使のようだ

チビクロの行くところ

難しい問題が 待ち構えているけれど

その機転のきく頭で

いつの間にか 嘘のように

解き明かしてしまう

チビクロは我家の希望

チビクロの幸せのためなら

私たちはなにも惜しまない」

奥さんの澄んだ高い声が森の中に響きわたります。皆うつとりして聞きほれています。終わるとご主人のときよりも大きな拍手が湧き起りました。僕も、

「ワンワン」

と吠え、くるくるとそこらを走り回りました。

「トモコが歌うととたんに歌らしくなるな。それならワルシャワのオペラ座でも歌えるよ。歌詞の方も僕のようにいいくらいだ」

「さあ、今度は、ミコちゃんとひろしさんの番よ」

「そんなの出来ないわ」

「むずかし過ぎるよ」

「アラ、ママにはやらせといて逃げるつもり。チビクロは一万キロも独りで旅をしてきたのよ。パパやママが歌ったみたいにあなたたちもトライしなくっちゃ」

「じゃひろしやってみようか」

「そうだね」

二人は少し離れたところへ行き、ぼそぼそと打合せていましたが、しばらくすると帰ってきて、二人並んで歌い始めました。

「わたしたちの仲間チビクロほど信じられない犬はいない」

神様に知恵を授かった

子供のようだ

チビクロの行くところ

新しい冒険が 降って来るけれど

そのくじけない勇気で

いつの間にか夢のように

やりとげてしまう

チビクロはわたしたちの仲間

チビクロの幸せのためなら

わたしたちは なにも惜しまない」

なんとりっぱな出来でしょう。ご主人も奥さんも大きな音をたてて拍手しました。僕も負けずにワンワンと吠え、辺りをピョンピョン飛びまわりました。最後のところをみんなが声を合せて繰返しました。

「チビクロは我家の宝

チビクロの幸せのためなら

わたしたちはなにも惜しまない」

美しいハーモニーが森の中にこだまします。皆が歌い終わりました。

さて、いよいよ僕の番のはずです。

こんなに素敵な歌を作って貰ったのですから、お礼の歌をお返ししないわけにはいきません。

僕は前足をきちんとそろえてお座りをし、歌い始めました。

「ワワン、クーク、クークン

ワンワンワワン、

ワンワンワン　ワワワン、

クククンクンワワワン」

「チビクロも気に入ったみたいね『信じられないチビクロ』の節に合わせて吠えているわよ」

「チビクロも一緒に歌いたいんじゃないの」

「それじゃ、もう一度皆で声を合せて歌おうか」

「チビクロ、さ、一緒に歌うんだよ」

僕はみんなに合わせて最初から歌い直しました。しかし、もしここにボイテックのタトーシュがいてくれたら、僕の歌っている歌の歌詞だけが違っていることに気がついてくれたに違いありません。そしてこんなふうに訳してくれたことでしょう。

「何時でも明るい　ご主人一家ほど

素晴らしい一家はない

神様に祝福された　家族のようだ

ご主人一家の行くところ

大きな石ころも　転がっているけれど

その強い愛のきずなで

いつの間にか　砂利のように

打ちくだいてしまふ

ご主人一家は 僕の誇り

ご主人一家の幸せのためなら

僕は命も惜しまない」

32

森の中でたつぷりと休養をとって、車はまたグダンスクを目指して走り始めました。

しばらく走ると、前の方にバスが走っているのが見えてきました。大きな図体を左右に揺すりながら走っています。もともとは赤い色のバスだったのですが、排気ガスや泥で汚れて真黒です。とくに後ろの方の汚れは飛抜けています。速度が違つのでたちまちブジョーは追いついてしまいました。この辺りは道路が狭いので追いぬくことができません。バスの後ろについて走っていると、一番後ろに乗っていた子供たちが気付いて、盛んに手を振り始めました。ミコちゃんやひろしくんが手を振り返すと、バスの中の子供たちが全員後ろに集つて来て盛んに手を振ります。薄汚れた窓ガラスに顔をぴったりつけて、皆ニコニコ笑いながら手を振るのです。バスは前のほうが浮き上がったまま、走っています。

ご主人一家もニコニコしながら手を振り返します。

「こんなに手を振って貰つと追抜くのがなんだか悪いみたいだな」

広い通りに出ても、ご主人はなかなかバスを追抜けないでいます。でもあんまりゆっくり走ってばかりおれませんか。とうとう左側のランプをチ、チ、チ、と点滅させて追越しにかかりました。バスの子供たちは残念そうに手を振り、何事か叫んでいます。

「ドビゼーニャ（さようなら）」

「ご主人一家も叫びました。」

「さあ、少し飛ばすぞ。」

「ご主人はアクセルを踏みこみました。車はぐんぐんスピードを増します。」

「わー凄い。一四〇キロも出ている。」

「そんなに出してあなた大丈夫？」

「このへんは車も来ないし大丈夫だよ。」

といったとたん向うからトラックがやって来ました。すれちがいざまに、

——ピカピカ、ピカピカ

とヘッドライトを点滅させました。

「一体なんの合図だろう？ トモ」ちょっと半ドアになっていないか確かめてくれ。」

「別に半ドアになってないわよ。」

「えーと、エンジンの温度も正常だし、ライトもつけっぱなしになっていないし……おかしいところはなにもないのに、どうしたんだろっな。」

「ご主人がメーターを確かめつつ走るうちに車のスピードはたちまち落ちてしまいました。と、道路がカー

ブした、少し見えにくいところにおまわりさんが数人立っているのが突然目に飛び込んで来ました。その前に停車させられた車が数台止まっています。運転手が運転免許証を調べられています。

「ご主人はその前をゆっくりしたスピードで悠悠通り過ぎました。」

「そうか、あのピカピカは警察がスピード違反の取締まりをしているぞという合図だったんだな。いやー助かった。あのピカピカの御陰でつかまらなくて済んだよ。」

「あのスピードだったら今頃相当おきゅうをすえられているところね。」

「あつ、向うから来る車は、かなりスピードを出しているぞ。よし、ヘッドライトをピカピカさせて教えてやらなくっちゃ。」

「ご主人がライトをピカピカさせると、向うの車もライトをピカピカさせて応えました。運転手はすれちがいざまに軽く手を上げました。お礼の印のようです。」

「なるほど、ポーランドではこれが運転手の間の礼儀になっているみたいだな。」

「助合いの精神という訳ね。でも、あまりスピードを出さないでゆっくり行きましょうよ。」

「オーケー。」

とはいっても、ご主人は八〇キロから一〇〇キロのスピードで走ります。道路は平坦ですし、車の数もそれほど多くないのであまり危険な感じはありません。ゆるやかなスロープ、真直ぐに続く道。景色もそれほど変りばえしません。お昼をお腹一杯食べたせいで、皆んなまた眠たくなって来たようです。奥さんもミコちゃんもひろしくんもこっくりこっくりし始めました。

僕のまぶたも次第に重たくなってきました。運転しているご主人には悪いけれど、ここらで少し昼寝でも

させて貰おうと思い始めたときです。

「チビクロ、起きているかい」

「ご主人が声をかけました。」

「ワン」

「それじゃ、ちよつと前の座席に来て僕と運転を代ってくれ。僕も少し眠くなつて来た」

「そんなことをおっしゃつても僕は運転なんか出来ません」

「いや、心配はいらない。ほらこの道はずうと向うまで真直ぐに続いている。だから、ハンドルを押えていさえすればいいんだ。もし万が一目の前に危ないものが出てきてぶつかりそうになったら、いいかね、このスロットを思いきり引くんだよ。そつすると問題はたちまち解決するからね」

「じゃ、やつてみますからしばらく見ていて下さい」

僕はご主人に手ほどきを受けてハンドルを前足で押えました。

「思った通り、チビクロはなかなかうまいじゃないか。そうそうあまり肩に力を入れないで、楽な姿勢で運転するのだよ。うん、これなら大丈夫だ。じゃ、私は少し昼寝をするから、チビクロ頼んだよ」

「ご主人は、そついうとたちまち眠つてしまいました。」

さあ、大変です。ご主人一家の命を預かったのです。僕はご主人に負けなくらい真剣な顔をして前方をにらみつけ、運転に精神を集中しました。運転して見て分かったのですが、周りの景色を見る余裕はありません。ご主人が、時々そんな教会が通りの奥にあったかな、などということがありますが、助手席や後ろの座席に座っているほうがよほど周りの様子が分ります。車と時々すれ違つのですが、運転手が目を皿

のようにして僕の顔を見て、思わず急ブレーキを掛けるのがちらっと見える程度です。通りすぎると、運転手はわざわざ車から降りて、振りかえって見ているのがバックミラーに映ります。後ろの景色をバックミラーで見る方が左右の景色を見るよりずっと楽です。

道はどこまでも真直ぐに続いています。天気はボカボカといい日和です。お腹は昼御飯を食べたばかりで満腹です。それにあまりに一生懸命、前ばかり見ているせいかな時々ぼーっと目の前が霞んで来ました。これはいけなしいと思い、時々目をパチパチやるのですが、効果ありません。さっき歌った歌を口ずさんでとにかく目がぼーっとしてこないようにすることにしました。

「ご主人一家は僕の誇り

ご主人一家の幸せのためなら

僕は命も惜しまない

僕は命も惜しまない

僕は命も

命も

おし

ま

ない

ぼ

くは

いの
ちも
オシ

……

首がガクンとし、ハツとして目の前を見ると、すぐ前に森がおおいかぶさるように迫っています。

——このままではぶつかってしまふ！

体中の血がずつと引きました。

——なんとかしなければ……

そのときご主人がぶつかりそうになったら、スロットを引くようにといったのをとっさに思い出しました。僕はそのスロットを引こうとしました。ところが、僕にはスロットが引けないのです。僕の前足ではスロットがつかめないのです。爪で引つかいてもスロットは動きません。もう駄目です。ぶつかるよりありません。

——でも僕は、僕の命をかけても、ご主人一家を……

僕は口にくわえてそのスロットを夢中になつた引張りました。引張つたとたん、

——ぐーん

体が地面に押つけられるような感じがしました。ちょうどジェット飛行機が飛立つたときと同じ感じです。森の木にぶつかって、いまにもドスンと体が投出されるかと覚悟していたのですが、そんな衝撃はなくて、ぐ

いぐいと上の方へ上がっていく感じです。

僕は不思議に思いスロットから口を放し、こわこわ外を見ました。自動車のすぐ下に森の木々の梢がくつつかんばかりに見えます。プジョーは、

——きゅーん

とジェット機のように急上昇しているのです。

いつの間にか車の両側に大きな翼が出ています。ぐんぐんとプジョーは上昇し、森の上にでると今度は水平に飛び始めました。なんとということでしょう、ご主人の車は、空も飛べるのです。ご主人がぶつかりそうになったら、このスロットを引くようにとだけ教えたのは、僕を驚かそうというつもりだったにちがひありません。地上を走ると比べれば空を飛ぶのは楽なものです。ポーランドはまったく平らな国なのでぶつかりそうなものはないのですから。

森を越え、畑を越え、町や村の上を越え、湖や河や丘を越え、プジョーはエンジンの音も滑かに飛び続けます。ご主人や、奥さんや、ミコちゃんや、ひろしくんにも空からのポーランドの景色を見せてあげたいのですが、みんな気持よさそうにスヤスヤ眠っていますので起こしたくありません。

村の上空に差掛かると、子供たちだけでなく村中の人達が盛んに手を振ってくれます。村はずれまで皆んな走ってついて来るのです。そんな時には少しスピードを落します。

と、パタパタという音がして、車のボンネットの上に黒い影がひよいと止まりました。はっとして見るとそれは一羽の鳥でした。

——コツコツ

その鳥は窓ガラスをノックしました。

「こんにちは、僕はこの辺りに住んでいるコクマルガラスのミケグというのだけど、君は一体何者だい。この辺りの空ではあまり見掛けないけれど」

「や、こんにちは、これは空飛ぶ自動車でブジョーというんだよ。僕はその運転をしているチビクロという名前の犬だよ」

「ふーん、自動車ってのは、普通地面を走るものじゃないのかい。空を飛ぶこともできるのかい」

「僕も今の今まで、この車が空を飛べるなんて知らなかったんだけど、このスロットを引いたら翼が出て空を飛びはじめたのさ」

「我々の姿に比べれば、ずいぶんと不格好なのに良くそんなにスイスイと飛べるものだね」

「いま、後ろの席で眠っているご主人という人は、いろいろと新しいものが好きな人だから、きつと一番進んだ自動車を買ったんじゃないかと思うんだ。これならただ真直ぐ飛べばいいんだから僕みたいに今日初めてのものにもすぐ運転できるし、とても便利だよ」

「ふーん、そんなに簡単なのかい。僕ら鳥だって、きちんと飛べるようになるにはいろいろと練習しなければならぬのに」

「だって、このスロットを引き、後は黙ってこのハンドルを押えていさえすれば真直ぐにグダンスクへ飛んで行くんだよ」

「君、いまグダンスクとかいったな。そこへ行くつもりかい」

「そつだよ」

「だったらもつすこし方向を北へとつた方がいいんじゃないかい。ほら君の右斜め前方にぼんやりと見える高い建物の立つた大きな町が見えるだろう。あれがグダンスクの町だよ」

僕はハンドルをあわてて右の方へ回しました。

「でもどうしてあんな人の大勢いるところへわざわざ行くんだい。あんなところには自然がないし、空気が汚れていて、僕らには一日だって住めないね」

「僕だって別に空気の汚いところが好きなわけではないんだけど、あそこに船荷を取りに行かなければならないんだよ。日本という国からこの車に乗っている主人一家の荷物があの港に着いたんだよ」

「ふーん。日本という国ね。その国の景色とこの国の景色とは同じようなものかい」

「あまり似ていないね。日本という国はとっても山が多くてこんなに平らじゃないし、人がもつともつとたくさんいて道路にも車がいっぱい走っているし」

「僕と同じ種類の鳥は日本にはいないのかい」

「東京ではあまり見掛けたことがないからいないんじゃないかな」

「あんまり鳥が大切にされていないということかい」

「そんなわけでもないけれど、ポーランドに比べると日本は少し鳥のすめるところが少ないみたいだな。ポーランドだと大きな町の公園にもたくさん野鳥がいるけれど日本ではせいぜい鳩とか雀ぐらいしか見掛けないね」

「それじゃ、あんまり行ってみる気もおこらないな。やはり鳥を大切にすることが、この世で一番大切なことなんだよ。鳥くらい自然を愛し、自由を愛し、この地球を愛しているものはいないからね。いつも僕ら

はね、こんな高い空の上から、地球を見て生活しているだろう。地上で生活している人間や君たち犬に見えるのはせいぜい、身の回り五メートル四方つてところだろう。だから全体の調和つてものが見えないんだよ。僕らにはいつも千メートル四方が見えるんだよ。地球の変化が手にとるようにわかるんだよ。ほら御覧、いま春だろう。春の美しさも歩きながら見るのこの空の上から見るとではまったく違うだろう。森も湖も煙も村もそれぞれに装いをこらし、お互いがお互いを引きたてるように美しく輝いているのがよく分るだろう。これが地球なんだって僕らはいつも思うのさ。このポーランドだって昔に比べれば、森の木が切倒されて畑にされ、森もアスファルトの道路で切刻まれているんだ。これがどんなに全体の調和を壊しているか君にも分るだろう。ほらあの森のはずれのところに灰色をしたまるで死んだような一角があるだろう。あれがつい最近開墾されたところだよ。空の上から見ると地球の美しさに人間が年々傷をつけていくのが良くわかるのさ。僕の仲間もあそこ森から追い出されたしね」

ミケゲのいうように空から見るとその辺りだけが無残にえぐりとられたような感じですよ。パツクリと大きな傷口が口を開いているような。

「だからさ、僕らにとってはこの空飛ぶ自動車みたいな空を汚すものに、あまり大きな顔をして飛びまわってほしくないんだよ。排気ガスを出すってことは地球の美しさを多少なりともこわしているってことを自覚してもらいたいんだ」

「そうだね、良くわかったよ。僕も空から地球を見、君の話聞き、もっともつと地球や自然を大切にしなければならぬということが良く分かったよ。もうグダンスクもすぐそこだし、お別れだね。いろいろと教えてくれたり、道案内してくれてありがと。さようなら。君の仲間にも宜しく伝えてね」

「ちょっと後ろを見てごらん。ほら僕の仲間はずっと一緒にいて来ていたんだよ。僕らはいつも一緒なんだ。そうそうグダンスクならあの高い建物を目掛けてこのまま真直ぐいけばいい。あれがアン教会といつても古い教会だよ。じゃ失敬するよ。気をつけてね」

ミケゲはボンネットの上からさつと飛びたちました。仲間の鳥たちがミケゲの後にずっと寄ってきて、編隊を組みプジョーの周りをひとまわりすると反対方向へ飛んで行きました。

もうグダンスクの上空です。アン教会も目の前に近づいてきました。僕は注意深くスロットをすこしずつ押してプジョーをアン教会の前の広場に無事着陸させました。

ほっとして周りの座席を見ると驚いたことにはご主人始め皆はまだスヤスヤと眠りこけているのです。とても楽しい夢でも見ているのか、少し笑っているようです。空から自動車が舞い降りてきたというので車の周りには人がいっぱい集って来ているというのに、これではどうしようもありません。こうなったらどんなに楽しい夢を見ているにしても起きて貰うよりありません。

「ご主人、奥さん、ミコちゃん、ひろしくん、もうグダンスクに着きましたよ。早く目を覚ましてください。ワンワンワン」

やっと皆が目をごすりながら起きだしました。まだ眠たそうです。ところが眠たそうな目を開けて、僕の顔を見るなり、皆が口をそろえて、

「チビクロ、もうグダンスクに着いたんだよ。さあ早く起きなさい」

ということです。起こそうとしているのは僕なのに、僕のことを起こそうとするのですから、きつのご主人一家はまだねぼけているに違いありません。でも、少し合点がいかかったのは、ご主人がいつのまにか運

転手席でハンドルを握っていることでした。

33

グダンスクの中心部はちょうどワルシャワのスターレミヤストのようです。古い昔の建物が一杯立ち並んでいます。アン教会は大きなレンガづくりの建物です。中に入って驚いたのは、天井がものすごく高いことです。森の中にも高い木が一杯ありましたが、その木がすっぽり入ってしまうほどの高さなのです。だからそれこそ一番上を見ようと思うと、ねっころがって見なければなりません。周りの窓ガラスには美しい色で、赤ちゃんを抱いている女の人とか、十字架に磔になっている人とか、馬に乗っている人とか、ほんとうにいろいろな人の様子が描かれています。それが外から差込んでくる光でひととき美しく見えるのです。周りには重々しい音が響きわたっています。

「教会の中できくパイプオルガンの響きって、厳かで実にいいね。高い天井、厳かな響き、美しいステンドグラス、十字架の上の神々しいキリストの像、自然に信仰心が湧きあがってくるね」

「本当に教会の中に入るとなんとなくけいけんな気持ちになるわね」

「ママ、けいけんって？」

「そうね、神様をうやまいたくなるってこと。ほら、あの窓に美しい色でいろんなことが描いてあるでしょ。あれがステンドグラス。絵に描いてあるのが、聖書からとったキリストの物語なのよ。教会の外から差込む光

で本当にきれいでしょ。まるで別世界みたいで、神の国へ一歩近づいたみたいな気持ちに誘われるわ」

「アメリカンスクールでも聖書のお話を習っているの。キリストっていうとても立派な人がいて世界中の人々を救うために神の御子としてこの世につかわされたんだよ」

「僕もキリスト知ってるよ。あつあそこにあるのが、キリストのお母さんのマリア様の像でしょう。ほら、金色の冠をかぶっている。マリア様に抱かれている裸の赤ちゃんがキリストだよ。マリア様はとても優しい人でポーランドの人にお母さんのように愛されているんだよ」

「ひろしくんも良く知ってるね、ポーランドではね。ほとんどの人がキリスト教の中のカソリック教派の信者なんだよ。だからこんなに立派な教会がどこに行ってもあるんだよ。この教会も戦争でメチャメチャに破壊されたのを戦争が終わった後に建て直したんだそつだよ」

「こんなに大きな教会を作り直したの、すごいなあ」

「それだけポーランド人の信仰心があつたってことなのねえ」

「あそこの階段からこの教会の屋上へ出られるらしい。ちょっと上ってみようか」

皆んなそろって狭いらせん状の階段を上りました。僕は階段を上ったり下りたりするのは余り好きではありません。その上こんな長いらせん階段をぐるぐる上ると目がまわって来ます。半分目が回りかけたときやつと屋上に出ました。

しかしあいにく僕にはなにも見えません。てすりがかなり高いのです。ご主人が僕をひよいと抱上げててすりの上にのせてくれました。今度は本当に目がまわってしまいました。だって下を見たらすうっと吸込まれそうなほど高いのです。下の通りを歩いている人がまるでアリのように小さく見えます。

でも先ほどは空飛ぶブジョーを運転していたのです。これ位のことでは怖がってはおりません。気を引きしめて周りを見渡すと先ほど見た古い建物がマッチばこのようにビッシリと立ちならんでいます。大体五六階だての高さでそろっています。通りに面したほうの一番高い部分がいっけんことに違っておりおもしろい形です。屋根は少し赤みをおびたレンガ色が多く、建物の壁は黄土色や茶色や焦茶色などをしています。

「この古い中世風の建物も戦争で破壊されたのをみんな戦後作り直したんでしょ。凄いエネルギーね」

「なにせ第二次世界大戦の発火点になった町だから徹底的に破壊されたいね。それで、今もってあちこちで昔のままに復元する工事を進めているらしい」

その古い建物を取囲むような形で長方形をした新しい高いビルディングが立っています。そのずっと向うに海が見えます。

「あれがこれから行くグダンスクの港かな。あの港に停泊していたドイツの戦艦ホルシュタイン号の砲火が、第二次世界大戦のひびたを切ったんだね」

「ご主人がそちらの方を指差しました。」

「その近くに大きな工場みたいなのが見えるけれど、あれが有名なレーニン造船所かしら」

「どうして有名なの、ママ」

「あそこでね、五年ほどまえ、お肉の値上げに反対してストライキがあつたの。そのとき警察官に数人の労働者が殺されて、それがきっかけで、ポーランドの一番偉い政治家が交替することになったのよ」

「ふーん、このグダンスクという町はポーランドにとって、いろいろと大変なことがあつた町なんだね」

「ミ」ちゃんもひろしくんもなんとなく昔のことに思いをはせるような顔つきをして、グダンスクの町並を

見つめています。

さて、またらせん状の階段を下りることになりました。目は回るし足はなんども滑りそうになるし、下に着いたときにはふらふらでした。教会を出て街のなかをぶらぶらしていると、ニコちゃんといろしくんが、

「あつ、綿飴屋さんだ」

大きな声を上げて走りだしました。

僕もその後について行きました。小柄なおばさんが車のついた四角い荷台の上でせっせと白い綿のようなものを棒の先に巻きつけています。人の頭ほどの大きさになるとそれを並んで待っている子供に渡しています。ニコちゃんといろしくんはその列に加わりました。僕も一番後に並びました。並んだ後でニコちゃんは早く早くとい主人たちを手招いています。

「やつぱり、ポーランドにも綿飴屋さんがあるのね」

追いついた奥さんが綿飴さんをしげしげと見ています。

「さあ、お嬢ちゃんにお坊っちゃん」

綿飴のように白い服に白いずきんをかぶった綿飴屋のおばさんがニコちゃんといろしくんに一本ずつ綿飴を手渡しました。僕はその後ろでじっと待っていました。が、次ぎの綿飴はすぐ後ろに並んでいた子供に手渡されてしまいました。おばさんには僕がちっちゃくてよく見えないのかもしれないかもしれません。

「フン」

僕はここにいるよという意味で吠えました。

「おやおちびの犬さんもお客さんだったのかい。これは悪いことをしたね。おわびに大きいのをこさえて上げ

るからね」

おばさんは「ニコちゃん」がもらったの倍もあるのを作ってくれました。

「あら、チビクロも欲しいの」

奥さんが受取って、僕の目の前にその白いお菓子を差出してくれました。

「あつ、チビクロのはあんなに大きい。僕のとつかえてえ」

ひろしくんが叫びました。

「そんなのずるいわよ。最初に綿飴屋さんに気づいたのはあたしなんですからね。チビクロあたしのと交換しましょ」

「そんな意地の汚いことをいうものじゃないの」

奥さんがピシリとはなつけました。

僕はこれまで綿飴を食べたことは一度もありません。とにかく僕の口をどんなに広げててもその大きな綿飴をパクリと食べる訳には行きません。それでも僕は精一杯口を広げて思いきり噛みつきました。

「ガキッ」

大きな音をたてたのは、僕の歯でした。力一杯噛んだので勢い余って歯と歯がぶつかったのです。まるで空気を噛むようなものです。全く歯応えがありません。が、噛んだ拍子に歯と歯とがくっついて少しはなれにくくなりそのうちに甘いものが口中に広がります。あまりいきおいこんで食べるものではなく適当に噛みちぎり口の中で味わうものらしいのです。僕は甘いものに目がありません。

食べる要領も分かったので、さて食べようとする、奥さんが後ろの方からぱくついているのです。その

口の大きいこと。のどの奥まで見えます。僕も負けてはおれません。精一杯大きな口を開けて夢中になって食べました。前と後ろから大きな口がばくついたので、その大きな綿飴もみるみるやせ細ってしまいました。ご主人はと見るとミコちゃんといろしくんから一口ずつ分けて貰っています。ご主人一家はみんな大の甘党のようです。

34

綿飴で僕の疲れもふつとびました。食べ終って気付いたのですが、僕たちが綿飴を食べているところを五六人の人達が取囲んで見ていたのです。奥さんもなくきまり悪そうな顔をしました。ご主人は、ポケットから地図帳を取り出して、港へはどう行けばいいか周りの人にききました。するとみんな先を争って、あに行けばいいとかこう行けばもっと早く行けるとか、大きな声で説明を始めました。ご主人のポーランド語の能力ではどれ一つとして聞きとれないようでした。

「ニエロズミエム(分りません)」

と繰返しています。

するとその中の一人が突然英語で、

「私が連れて行つて上げる」

といいだしました。頭はぼさぼさで黒い大きな眼鏡をかけた若い男の人です。ご主人は英語はさすがに分

かったとみえて、税関から送ってきた書類を見せると、

「僕、そこでアルバイトしたことあるよ。全然心配ない。車どこ。さ、一緒に行きましょう」

前に立って歩き始めました。ご主人と奥さんは顔を見合わせましたが、それほど悪い人でもないと思きわめたのか、黙って後について行きました。車の助手席に座った後でその若い男の人は、

「僕、ジグムントといいます。大学二年生です。皆さん、日本人ですか。僕きつといつか日本へ行きたいと思っています」

と自己紹介しました。

ジグムントの案内で港の事務所へは、一五分もかからずに着きました。ジグムントは、事務所までついて来て、係りの人に「ご主人が船荷を取りに来たと説明してくれました。係りの人は、五十すぎの男の人で、こりもしないで、

「どうぞ、何時でも船荷を持って行ってくださってかまいませんよ。ただし、トラックは自分で手配して下さいよ。それにここでは船荷は着いた順に送ってますからな。どこにあんたがたの船荷があるか私にはとんと分りません。どうぞ勝手に探し出して下さい。トラックに乗つけたら私に連絡して下さい、持出しOKのサインを私がやりますからな」

と言いつつ終わるとさつさと事務所の奥へ引込んでしまいました。

「トラックまで自分で見つけなければならぬのか」

「ご主人が少し落胆したような声を出しました。ジグムントはしばらく考えている様子でしたが、

「うん、そうだ。なんとかなりそうだ」

そついうと両手をぱしつと叩き、

「アハハハハ、アハハハハ」

突然、甲高い声で笑い出しました。あまりに突然に笑いだしたので、ご主人一家だけでなく事務所の人達も皆んなびつくりして一斉に振返りました。

「いやー驚いたね。どつぞ、いつでも好きなときに持つて行つて下さいか。トラックも自分で見つけてくれたつて。なんという自由で親切な役所なんだろう。これだから、お役所は、みんなに愛されるんだ、全く。アハハハハハハ」

聞こえよがしにいうとジグムントは、ご主人の方に向きなおり、

「えーと、あなたのお名前は、何とおっしゃいますか。吉野さん？ 吉野さん、ここでアルバイトしたときの私の知合いがトラック持っています。今度の日曜日はそのトラックがあくはずです。僕、運転できるから、そのトラック僕が借りてその船荷運んで上げましょう。いいですか」

「いいも悪いも、ほんとにやつてもらえるんですか」

「ええ、やります。やらせて下さい。それじゃ、僕、トラックを借りる手筈を整えにこれから直ぐ行く必要があるのでこれで失礼します。どこのホテルに泊まりますか。話がついたら今晚でも連絡します。僕もこのお役人みたいにとても親切でしょう。アハハハハ、アハハハハ」

ジグムントは、ご主人からホテルの名前を聞くと、

「それじゃ、皆さん、さいなら。船荷はちゃんと見つけておいてくださいよ。見つかなきゃなんとかしますがね。アハハハハ、アハハハハ」

甲高い笑い声を残して行っていました。

後には煙に巻かれたような顔のご主人一家がとり残されました。

「一体、あのジグムントという人を信用していいのかしら。どうもあの甲高い笑い声が気になるわ」

「まあ、信用するもしないも自分でトラックを雇ってとなるとどうしようもないし、あの人に頼る以外に方法はないだろう」

「でも、どうやって船荷を探すの。一つ一つコンテナのラベルを見てまわるの、パパ」

「それがこまったな、とにかくコンテナヤードに出てみよう」

道順を聞いてコンテナヤードへ行きましたが、見渡す限りの広い場所にコンテナがところせましと置いてあります。

「なるほど、これだけ一杯たまっていたら、配達が一月、二月遅くなるのはあたりまえだな」

「この中から、一つだけ探したすとなると、砂漠の中から一粒のダイヤを見つけたすようなものね」

「日曜日までまだ三日あるから、毎日ここへ来て朝から晩までコンテナを捜すことにしようか」

「つまんないの。せっかくバルト海で遊ぼうと思ってやって来たのに」

「ふーん、本当にどうしたもののかね」

「ご主人は、腕を組んで考え始めました。奥さんもあごに手を当てて考えています。ミコちゃんもひろしくんもつまらなそうに棒でそこらをつつきながら、首をかしげています。僕は、みんなをそこに残したままそつとその場を離れました。」

——よし

こうなつたらやるしかありません。僕は、コンテナが両脇に並べられたところまで走って行き鼻の穴を精一杯広げ注意深く辺りの匂いをかぎはじめました。様々な匂いが漂って来ます。コンテナの中の匂いがほんの少し匂ってきます。僕は一個一個のコンテナの中身をかぎながらそれでも小走りに走りつづけました。

とにかくこんなに一杯あるのですから、小走りで走っても一通りかぎつくすにはずいぶん時間がかかりそうです。でも一つ一つのラベルを見て回るのに比べればもの数ではありません。ただ、一つでもかぎ損うと努力のかがいなくなる恐れがあります。僕は以前東京からポーランドに来る時にご主人のトランクをかぎ分けたことを思いだしながら、必死になつてかぎ回りました。

一列目、二列目、三列目が終わつてもそれらしきものはありません。四列目がもうすこしで終りかけた時です。僕の鼻の先になんともいえない懐かしい匂いがほんの少し、ひつかかったのです。それは五列目の方からしてきます。僕はそれでも念のため残つた四列目のコンテナを全部確かめてから、五列目に向かいました。においては一足近づぐことに強くなつてきます。間違いありません。五列目の端から四つつ目にそれはありました。

そこまで行くとまるで東京の我家のまん中にいるように濃い匂いがたちこめています。ご主人の匂いも奥さんの匂いも、ミコちゃんの匂いも、ひろしくんの匂いもかぎ分けることができます。ほんのすこしだけです。僕の匂いがします。ミコちゃんやひろしくんと一緒に遊んだ時おもちゃについた僕の匂いです。

これで三日もここに来て、ラベルを朝から晩まで見て回る必要はなくなりました。ひろしくんもミコちゃんもバルト海で思いきり遊ぶことができるでしょう。僕は全速力でご主人のいるところへ引返しました。走って行くと、ご主人一家がきよるきよる辺りを見回している姿が目にはいりました。きっと僕を捜しているに

違いありません。僕は遠くから、

「ワンワン」

と吠えました。ミコちゃんとひろしくんが気づいて僕の方へ走ってきました。

「チビクロ、どこへ行ってたのよ。心配して捜していたのよ」

「チビクロ、また、迷子になったって、パパが怒っていたよ」

「ご主人と奥さんが近づいて来ました。両腕を組んだまま一足一足ゆっくりと。目は怒りで四角になっています。きつとずいぶん捜したに違いありません。なんととっても五列もあるコンテナを皆んなかき回ったのですから。気がついてみると辺りはもう薄暗くなりかけています。」

「チビクロ、どこへ行っていた。この前は飛行場で迷子になるし、今度は二時間も行方不明。お前は賢い犬だと思っでどこへ行く時も鎖もつけなくて自由になににやらにちよくちよく信頼を裏切るようだと、やむをえず鎖をつけなければならぬことになるよ」

確かに、僕はなにもいわずに姿をけしてしまったのです。でもどつやって僕がやるうと思ったことをご主人一家に伝えることができたでしょう。僕はしょんぼりして下を向き、

「クーンクーン」

と鼻を鳴らしました。

「今度だけは、見逃してあげるから、もう二度としないと約束しなさい」

「ワン」

僕は、大きい声で吠え、尻尾を思いきり振りました。

「でも、本当に良かったわ。こんなグダンスクなんかで迷子になったりしたら、もう二度と会えなくなるかもしれないと思って心配したのよ、チビクロ。もう心配かけないでね」

「さ、チビクロ、一緒に帰ろう。もう迷子にならないようにあたしが抱いてあげるわ」

「ミコちゃんが、手を差出しました。僕はその手を素早く逃れて後退りし、」

「ウン」

と鳴きました。

「どうしたのよ。パパが怒ったので、チビクロも腹をたてたの」

「ウンウン」

僕は、一生懸命尻尾を振りました。そして首を後ろになんどもものけぞらせました。

「どこかへ連れて行くつもりでいるみたいだよ」

「そうね。チビクロ、どこかへ行きたいの」

「ウン」

僕は、尻尾をもつと思いきり振り、先に立って歩き始めました。ご主人一家は首をかしげながらその後をついて来ます。ますます日がぐれて来ました。

「一体、チビクロはどこへ行く気かしら」

やっと微かに一家のコンテナの匂いがして来ました。僕は歩みを速めました。

「チビクロ、どうしたんだい。そんなに速いと追いつけないよ」

でも、速くしないと日が暮れてしまいます。そうするときつとラベルの文字が読めなくなってしまうかも

しれません。そうしたらせつかく見つけたのに、ご主人一家はそれに気づかずに帰ってしまうことになりかねません。もう僕は、走りはじめました。皆さんも必死になって僕を追いかけて来ます。それでもその間がかなり開いてしまいました。僕はご主人一家のコンテナの前に行き、振り返って、

「ワンワン、ワワン」

と吠えました。

みんな息を切らしながらそこへやって来ると、

「フッフッフ」

と肩で大きく息をつき、

「どうしたのチビクロ、ここになにかあるの」

と尋ねました。僕はご主人一家のコンテナのラベルのところに鼻をおしつけ、

「ワンワン」

と吠えました。

「なんだか、このコンテナのラベルを読ませたいみたいだな」

「ご主人がラベルを覗き込みました」

「少し暗くて読みづらいな。どれどれ五ーA ウリツア クラシキエーゴ ワルシャワ ポーランド ミツボ シショウジキツケ ミスターヤスオ・ヨシノ。ミスター ヤスオ・ヨシノ。こ、これは、僕あてのコンテナだ」

「ご主人が、飛上がりました」

「まさか」

奥さんがラベルに顔を押しつけました。

「本当だわ。我家のコンテナだわ」

奥さんは信じられないといった様子でご主人の顔を見ました。

「バンザーイ。わたしたちのコンテナが見つかったんだ」

「チビクロがわたしたちのコンテナを見つけてくれたんだ」

「ご主人と奥さんは、僕をぼんやりとした顔で見下しました。まるで気の抜けた顔です。どうしたのでしょうか。せっかくコンテナが見つかったというのに、嬉しくないのでしょうか。」

「ウン」

僕は、精一杯尻尾を振りました。

「チビクロ、悪かった。さっきはお前のことを怒ったりして。許しておくれ。お前がコンテナを捜しに行っても知らずに……」

「ご主人と奥さんはしゃがみこむと僕を抱きあげ、僕の顔に顔を押しつけました。もうすっかり暗くなっていたのでご主人の顔は見えませんでした。その声がなんだか涙声なので僕はご主人の顔をなめてあげました。いつだったか東京でご主人のお母さんのほっぺたをなめてあげた時と同じ味がしました。きっと親子ですから、ほっぺたの味も似ているに違いありません。」

その夜は、グダンスクの隣のソポトという町のホテルに泊まりました。バルト海に面しているということでしたが、もう暗くなっていたのでなにも見えませんでした。夕食を終えて部屋に戻るとちょうどジグムン

トさんからトラックの手配がついたという電話が入りました。

「いやーそれがワルシャワまで走るかどうかっていう位のポンコツのトラックでしてね。途中でエンコしたらはいそれまでよ。それでもここらじゃ一番の新車なんですよ。アハハハ、アハハハ」

例の甲高い声で笑っています。きつとあれは癖なのに違いありません。

コンテナは見つかつたし、トラックの手配はついたし、もう何の心配もありません。

ホテルの部屋にはまるでプールのように大きなお風呂がついていて、僕がすっぱり入れそうなほど大きな蛇口からお湯がほとばしるように出てきます。そこでその夜は、湯船一杯に溢れるほどお湯を入れて久し振りにご主人一家と一緒に、お風呂に入り、今日一日の長い旅の疲れをいやしました。早めに休みましたが、心配ごとがないにもないせいか、すぐに寝つくことができました。

船荷の整理 35

グダンスクに着いた日のうちに、船荷のコンテナも見つかり、トラックの手配もすんだので、ワルシャワに出発する日曜日までの二日間のはんびりと過ごすことができました。ホテルの前はすぐバルト海でしたので、海を見たり、砂浜で砂遊びをしたり、海の中に長く突出た遊歩道を散歩したり、海岸にあった、人間が駒の代りになれるほど大きなチェスの盤の上で、じんとりごっこをしたりして遊びました。

バルト海の水は黒っぽい緑色をしており、入ると凍えるくらい冷たい水でした。焦茶色の海藻が波打ち際

まで一杯漂っていました。砂はきめが細かく少し茶色っぽい色をしていました。

グダンスクやグジニアやソポトの街へもドライブに行き、古い建物をいろいろ見てまわったりしましたが、郊外へ出てリンゴの花の咲く田舎道を思いきり走りまわったのが一番すてきでした。

日曜日の朝五時、いよいよワルシャワに向けて出発しました。

ジグムントさんは手伝いの仲間を三人連れてやって来ました。乗ってきたトラックは、ご主人がこれは三十年も前のスタイルだな、ボンネットが前に突きでいて、良くこんな車が走れるなあ、というほどのトラックでした。そこでご主人の車が前を走り、ジグムントさんのトラックが後ろからついて走ることにになりました。

グダンスクの街を出たか出ないうちに、トラックの影も形も見えなくなっていました。あわてて引返すとトラックは、エンジンが故障して道路のかたわらに止まっています。ジグムントさんがボンネットの上に乗ってドスンドスンと二度ほどジャンプするとやっとエンジンがかかりました。

なんとこんなエンジンの故障がワルシャワに着くあいだに三五回もありました。おまけにタイヤのパンクが六回もありました。そこで僕は見張り番を買って出しました。トラックが止まると、すぐさま、

「ワン」

と吠えて知らせるのです。四一回も途中で止まったのですから、僕はゆっくりと周りの景色を楽しむどころではありませんでした。

トラックをじっと見ているうちに、そろそろエンコしそうだかと分るようになりました。ジグムントさんがあわててあちこちのノブやレバーをひっぱりまわし始め、最後にハンドルを両手でパンパンと叩くと決っ

てトラックはガクンと止まってしまつたのです。僕はジブモントさんがハンドルをパンパンと叩いたとたんに「ワン」

と鳴いて知らせることにしていましたが、一回だけジグモントさんがハンドルをパンパンと叩いたら急にまたトラックが元気良く走りだしたことがありました。ご主人に、

「チビク口、ちゃんと止まってから知らせてくれよ」

と注意されてしまいました。だから、それからは一層注意深くトラックの様子に目をこらしていました。

トラックがエンコするたびにジグモントさんはボンネットの上に飛乗り、ドスンドスンとジャンプします。これがトラックの持主から教わったエンコを直すためのひでんなのだそうです。最初の故障の時は二回だけジャンプすれば良かったのですが、三五回目の時は二〇回ほどジャンプしなければならなくなりました。そこでミコちゃんもひろしくんもエンジンが止まる度に一緒にボンネットの上に乗ってボンボンと飛びはねました。僕も一緒に飛びはねたかったのですが、ボンネットが高くて上がることができなかったので、下から見上げていました。

「まるでタンブリングみたいだね」

二人はどれだけ高く飛上がれるか競争を始めました。ジグモントさんも負けていません。時々エンジンが掛かったのも忘れて空高く何時までも飛びあがっています。もともと凸凹だったボンネットが、こうしてすりこぎで叩かれた鍋の底のようになってしまいました。

そんなわけで、せっかく朝早く出発したのに、ワルシヤワの家に着いたのは、もう夜の二二時を回っていました。ぐっすり眠り込んでいたミコちゃんとひろしくんは車の後ろの座席からご主人に抱かれて自分たち

の部屋のベッドへ運びこまれました。奥さんも私もう眠くて駄目といって寢室に閉じこもってしまいました。それからジグムントさんと連れてきた三人の手伝いの人がコンテナを下し、船荷を一つ一つ家の中に運びこみました。ご主人は荷物の置く場所を指示しています。僕は夜は強いので一部始終を見物していました。

作業が終わったのは、もう夜明けに近い時間でした。ご主人が、皆さん、疲れたでしょうから一休みしていつて下さい、といいましたが、ジグムントさんたちは僕たちは若いですから大丈夫ですといって、すぐ帰るつとします。

「でもこの車だとこれからグダンスクに帰るのにまた丸一日掛かりますよ、ちょっと休んでいったほうが良いはないですか」

「ご主人が勧めたのですが、

「このトラックはね、荷物さえなんにも乗せなければ、時速百キロメートルでふつとばしても大丈夫なんですよ。それに持主に早く返さなくちゃならないんです。こんなオンボロトラックでも、グダンスクじゃ、引く手あまたの人気者なんですからね。今から出発すれば昼前にはグダンスクに着きますよ。どうぞご心配なく。それにしても荷物が嫌いだなんて面白い性格のトラックでしょう、アハハハハハ」

ジグムントさんは例によって甲高い笑い声を後にして出発して行きました。

船荷が着いてもう三日目になりますが、家の中は、どこもかしこもダンボールの箱や梱包された荷物や家具で一杯です。まるで迷路のようです。なんとなくわくわくして来ます。つい先ほどアメリカスクールや幼稚園から帰って来たミコちゃんもひろしくんも同じようです。もう我慢できなくなり、かんせいを上げて、荷物の間を走りまわり始めました。僕も、その跡を追っ掛けました。

「ほらほらそんなに走りまわったりしたら、片づけられないじゃないの。邪魔だからお外で遊んでいらっしやい」

奥さんが大きな声を張上げました。ミコちゃんもひろしくんも黙って大きな荷物の後ろに隠れます。

「つまんないわ、せっかく船荷が着いたのにわたしたちの物はまだなんにも出てこないんですもの」

「そうだよ、ママやパパのものばかり先なんだから」

奥さんは、台所でユラと一緒にせっせと荷物の包装をといっています。中から日本食器が出てきました。

「あら、良かったわ、全然割れてないわ」

ユラは様々な形をした食器が次々に出てくるのに目を丸くしています。

「マダム、どうしてこんなにいろんな形をした食器があるんですか。ポーランドでは平たい皿と少し底の深いスープ皿くらいしか使わないのに」

「日本料理は、器で食べるといっくら料理によつて違う食器をつかうのよ。これがちゃわんむし用、これがおひたし用の小鉢」

「ふーん、この小さな器はなんですか」

「これはお刺身用の醤油皿よ。日本人は魚を生で食べるときに、この皿にお醤油を入れてつけて食べるの」

「お魚を生でたべるんですか」

「そうよ、今度ユラにも御馳走して上げるわね」

「マダム、私は魚は生では食べません。結構です」

「それが結構美味しいんだから」

奥さんとユラはおしゃべりをしながら、一つ一つの食器の包装をていねいに解いています。

「あの調子じゃ、僕たちの物の番になるのはずいぶん先になるね、ミコちゃん」

「そうね、あと三日はまたなくちゃ駄目のようね」

「ダンボールになにがはいっているか、書いてあればいいのに」

「洋服とか食器ぐらいなら書いてあるのよ。でもだれの洋服かはあけてみなくちゃ分らないみたいなの。少し能率が悪いわね。箱に詰めるとききちゃんと書いとけば良かったのよ」

「でも、いそがしかったんじゃないの」

「それもそうね」

「僕たちのおもちゃは一体どの箱にはいつているんだろうな」

「私は最初に春もののお洋服がいいな」

「僕は断然、おもちゃ。早くウルトラマンやロボットが出てこないかな」

「私は、洋服、今日出てきたら明日から着ていけるのに」

僕がこの前のようにミコちゃんたちの欲しいものの入った箱を捜して上げようと思いついて、早速実行にかかろうとしたとき、

「そうだわ、チビクロに頼んだらいいわ」

「なにをミコちゃん？」

「チビクロにわたしたちの物の入った箱を捜しだして貰うのよ」

「うんそれはいいね。チビクロ、僕のおもちゃの入った箱はどれか捜しておくれよ」

「私のお洋服の入った箱はどれ、チビクロ」

広いコンテナ置場で主人一家のコンテナを捜しだしたのに比べなんでもありません。ひろしくんのおもちゃの入った箱は、居間のちょうど真中あたりにありました。ミコちゃんの洋服の箱は、階段の上がり口で見つかりました。どちらの箱も二人の背丈ほどもあります。

二人はそれぞれ椅子を持って来て、その上に乗り、必死になってダンボールのガムテープをはがし始めました。

ビリビリビリビリ。真剣な顔です。どっちが早いか競争です。まず縦のガムテープをはがし、次に横のをはがします。ふたのあわせめにはつてあるのが一番はがすのが骨のようです。ミコちゃんは工作用のカッターで切っています。ひろしくんのほうは、はさみを使っています。ほとんど同時にダンボールのふたが開きました。二人の目が輝いています。

「やったー！ウルトラマンだ」

「まあ嬉しい、水玉のワンピースだわ」

一人が小躍りして喜んでゐるのを聞つけて、奥さんが台所から出てきました。

「二人でいったいなにしてるの」

「ママ、僕ウルトラマン見つけちゃった」

「私も、明日アメリカスクールに着ていく水玉のワンピース見つけちゃった」

「まあ、あなたたち、良くこんなにくさんある箱の中から、自分たちの欲しいものが入っている箱を見つけたせたわね。一体どうしたの」

「それは、ここを使つたのよ」

「ニコちゃんが、人差し指で頭をポンポンと叩きました。」

「あつ、分かつた、チビクロに頼んだんでしょ」

「正解」

「アタリ」

「そうか、その手があつたわね、私もチビクロに頼みたいものがあるわ。今晚のおかずに、すぎやきをやりたんだけど、はるさめがどこにあるか分らないの。ちょっと教えてくれない。あ、それにチビクロの好きなお豆腐の素の入った箱もね」

おもちゃや洋服に比べたら、食べ物をもつと簡単です。僕はあつというまに捜しました。

それからというもの、船荷が片づくまで、僕の鼻が何度お役にたつたことでしょう。

それでも収まるべきところに収まるべきものが収まったのはそれから二週間もたっていました。それに、奥さんは一度しまつてしまつたとどこにしまつたのか忘れてしまつらしくて、あれは一体どこにしまつたかしら

と僕に聞くのです。僕の方は別に鼻に頼らなくてもちゃんとそれくらい覚えていましたから、何時も真直ぐその品物がしまつてあるところへ案内して上げました。

その間に電動ミシンの事件がありました。いえ、事件というほどのことではないのですが、電動ミシンの荷解きは済んだものの、さて二階に置こうという段になって、ご主人と奥さんとは重くて二階に運ぶことができず、翌朝やってきたユラに手伝つてくれるように頼んだときのことです。

ユラはちょっとミシンを見るといきなり両手でひょいと持ちあげ、自分のおなかの上に載せると、そのままらせん階段を上り始めたのです。ご主人と奥さんがボカンと口を開けて見上げるなかを、ユラはしっかりと足取りで途中で休むでもなく、二階まで持ちあげ、涼しい顔をして階段を下りてきました。そのときご主人は恥かしそうな顔をして俯いていました。

37

「これでやっとみんな収まるところに収まつたわ」

船荷の最後のダンボール箱から出てきた花瓶を玄関の電話の側にあるサイドテーブルの上に飾り終わると、奥さんが嬉しそうに言いました。船荷が着いてから、もう三週間以上もすぎていました。

「さあ、皆んな行らっしゃい。一緒に家中を見てまわりましょつよ」

丁度日曜日でしたのでご主人もミコちゃんもひろしくんも居間のソファに寝そべったり、本を読んだりし

ているところでした。僕もソファの足下でコックリコックリと船を漕いでいました。でもこれまで独り忙しく働いていた奥さんの提案に逆らうわけには行きません。皆んなしてそろそろと一階から三階まで見てまわりました。

三階の一番奥にある納戸から始めました。そこには日本から着いたいたけやかんでんなどの乾燥した食品がいっぱい置かれています。それに三年分のミコちゃんたちの下着や奥さんのストッキング等も区分棚にきちんと整理されています。

納戸の手前の部屋はさしあたりご主人の書斎に使つたということになっているようですが、そこには大きな本棚があり、日本語の本がいっぱい並んでいます。ご主人は本好きなのでたくさん持ってきたのです。日本を發つまえに家族のめいめいに三年分の本を買いこんできたのです。近くの本屋へ行つては両手に本のびつしり入った大きな紙袋を下げて帰ってきたことが何度ありました。だからたとえばひろしくん用には、五歳用の絵本から八歳用のグリムの童話全集まで揃つていてという具合です。もちろん小学各学年用の国語とか数学の参考書やドリルまで三年分あります。学習辞典や図鑑や百科事典もちゃんと並んでいます。

ご主人は、

「ポーランドに行つたら本をたくさん読むぞ」

と宣言していましたからいろんな本が並んでいます。東京の家の本棚に並んでいたのもあれば、はじめにお目にかかるのもあります。難しそうなものの横にはちゃんとずいぶんと軽そうな本も並んでいます。ご主人はピカピカ輝いている英語の本の並んだあたりを指差しながら、

「折紙や日本の子供の遊びや版画や禅や日本の景色、国宝、美術品、そのほか色々日本のことをポーランド

人や外国の人に紹介する本をたくさん持って来たので、お友達に興味のある人がいたら、見せてあげなさい。英語が分らなければ駄目だけど、でもカラーの写真がどれもいっぱい入っているから見るだけでも結構楽しいよ」

「そうだね。僕この前幼稚園に自動車の図鑑を持っていったらみんな喜んで見てたよ。日本語が分らなくても絵を見るとわかるもん」

三階から二階へ下りる階段は少し急で狭いので一人一人ですりにつかまりながら下りなければなりません。僕もこんな急な階段は苦手です。上りならともかく下りとなると、一段一段下りるか、一気に転げ落ちるようになって下りるかのどちらかです。皆んなと一緒に転げ落ちるわけにもいきません。慎重に下りることにしました。

二階のご主人と奥さんの寝室に入ると、奥さんが嬉しそうに洋服ダンスの扉を左右にぱつと開きました。このダンスも東京から持ってきた奥さんの嫁入り道具です。そこにはポーランドに出発する前に奥さんがご主人に何やかやとねだって作って貰ったドレスがずらりとならんでいます。日本では一度も着たこともないような派手な色もあります。ご主人がこんな派手なのをひとつのにも奥さんは外国では派手な方がいいのよといったのを思い出します。でもそれは奥さんの方が正しかったようです。

「新品ばかり、こんなに揃ったことなんてこれまで一度もなかったわ。早くこれを着て、どこかにお呼ばれてみたいわ」

奥さんはその中の一着を取りだすと、体に合せながら、大きな姿見の前でダンスのステップを踏みました。顔は夢見心地で薔薇色に輝いています。

「ご主人用の洋服は奥さんの洋服の数に比べると、霞むほどです。それにどれもこれも同じようなスタイルで色も似たりよつたりの物ばかり、見栄えがしません。ミコちゃんの部屋へ行くとミコちゃんが洋服ダンスを奥さんと同じ様に開いてみせました。ミコちゃんのもご主人に比べるとカラフルで形も色々違っています。」

「この前この赤いスカートはいて行ったら、みんなどこで買ったのって大変だったの。マリアなんか取りかえてですって」

ミコちゃんは目をきらきら輝かせながらいいました。机の上を見ると船荷で着いたけしやフランス人形がポーランドで買ったポーランド人形となかよく並べてあります。

ひろしくんの部屋に行くときひろしくんが得意そうに見せたのは、ウルトラマンやキカイダー、それにミニカーやレゴのいっぱい入った大きなおもちゃ箱でした。それを絨毯の上にひっくりかえして、一つ一つ説明をはじめました。

「ウルトラマンはね、こうやってヘンシンするんだよ」

そういいながらひろしくんはベッドの上に乗し、目の前で両手で十字を切り、

「ヘンシン」

ときけびながら飛び降りました。ところが、床に敷かれていた小さな絨毯が滑ったので、ひろしくんはすっとしりもちをついてしまいました。

「アッ、イタァーイ」

今までの得意そうな顔が、たちまちしかめっつらに変身です。

二階から一階へは緩かならせん階段ですから下りるにもそれほど苦勞はいりません。ゆつくりと下りていくとシャンデリアのある広い居間につながっています。居間のサイドボードにも日本から着いた銀製の扇の飾りやしっきの壺が飾られ、ワインクーラーには、日本酒や日本製のウイスキーが並んでいます。応接セツトにも、日本から持って来たぼたんの柄のクッションが置かれ、センターテーブルには日本製のセンタークロスや灰皿とライターの煙草のセツトが置かれています。煙草入れにはもちろん日本製の煙草が入っています。部屋の片隅に日本製のステレオセツトが置かれています。

「せつかくだから、日本から持ってきた歌謡曲でもかけましょうよ」

奥さんが大好きな若い男性歌手のテープをかけました。奥さんときたら毎日少なくとも三回はこのテープを聞いているのです。皆んなちよっとうんざりしたような顔をしましたが、口には出しませんでした。

「あたし、ピアノがほしいな。習いたい。この居間は大きいから、グランドピアノでもおけそうよ」

「同じ商社の太田さんのところでは娘の美香ちゃん用にピアノを借りているらしいから、今度ババがきいてあげるよ。ピアノを貸す大きな店があるらしい。ポーランドは音楽が盛んな国だからきつといい先生も大勢いるだろうし、それじゃ家族揃ってピアノのレッスンを受けることにしようか」

「それもいいけど、私子供の頃習ったことがあるから、四人一緒にまずいわ。私は、別格つてところね」

「ママなんかすぐ追抜いちゃうから」

「その意気、その意気」

歌謡曲を聞きながら今度は食堂へ行きました。そこには日本製の電気釜、庖丁、食器、鍋がところせましとならんでいます。壁には東京の家の台所にあったカレンダーまで飾っており、奥さんの特徴のある大きな

字で色々書きこんであります。きつと、毎日のお仕事の段取りを書きこんでいるのでしょつ。

最後に地下に行きました。地下の入口はらせん階段と居間の間にあり普段はカーテンの陰になって見えません。ドアを開け鍵型になった階段を下りると地下室に出ます。下りたところはガレージになっており、ご主人のプジョーがでんと構えています。その向う側に食料庫があります。もつとも、そのプジョーの後ろのところはもう一台車が入るようになっており、そこは洗濯物を干す場所に使われています。ポーランドでは空気が乾燥しているので地下室でも乾かせるのです。食料庫には、醤油や味噌をはじめ日本食品の缶詰やお酒が溢れています。これも三年分ですから大変な量です。

「こんなに食べられるかな」

「なにしろ三年分だからね。三年たつたらなくなっているかもしれないよ」

「でも、持ってきて本当に良かったわ。ポーランドには日本食品がないってきいてはいたんだけど、これほど徹底しているとは思わなかったわ。」

「ホント、日本食はめつたに食べられないんで、カップヌードルだつて今や大御馳走だわ」

「僕は、インスタントラーメンの方がいいな」

「ここにある日本食が我家の命の綱つてわけね。せいぜい大切に食べましょつね」

「さてと、これで船荷の収まり具合を一わたり見終わつたつてわけだ。トモコが頑張つてくれたおかげで、家中足のふみばもないほどあつたダンボール箱がすつかり片付き、中身も全部収まる場所に収まつた。本当に「苦勞さん。今日は一日ゆつくり休んだらどうだい。僕がお茶でも入れてやろつ」

「あら、嬉しいわ。でも雨が振つたりしないかしら」

「イッタンッ！」

「ご主人がふざけて奥さんの頭にげんこつをかざしました。」

「クワバラ、クワバラ」

奥さんは、両手で頭を庇いながら食料品のかげに身を潜める振りをしました。

「これだけたくさんあると食べ物のかげに隠れてかくれんぼができそうだね」

「ひろしくんなら、十人分隠れられそうね」

「ミコちゃんだって、五十人分隠れられるよ」

「あたしなんかせいぜい五人分よ。チビク口なら百匹分だけどね」

確かに僕なら百匹分隠れられそうです。でもこないだの匂いにする部屋でかくれんぼするのはごめんです。なまづばを飲みこむ音ですぐ見付かってしまつに違いありません。

食料庫を見終わると皆んなはそろそろと、地下からの階段を上りはじめました。階段のすぐ右側に僕の部屋があるというのに、僕は僕の部屋の前に立止まり、

「ワン、ワン」

と吠えました。皆んないっせいに振返りました。

「そうだ忘れてたわ、チビク口の部屋も見てあげなくっちゃね」

皆んな下りて来ました。僕は皆んなより一足先に部屋に入り、段ボールでこさえた小屋のなかに入り両足を揃えて皆んなを待受けました。

「おや、チビク口の小屋もなかなか良くなつたじゃないか」

「ほら、チビクロの小屋も日本製の段ボールでつくったんだよ。それに寢床にも日本製のタオルのおふるを敷いてあげたんだ」

「あたしが、ここにチビクロのおうちって、日本語と英語とポーランド語で書いてあげたの。日本製のマジックインキだね」

「チビクロも日本が懐かしいでしょうね」

「ワン、ワン」

僕は盛んに尻尾を振りました。

居間への階段を上がりながらご主人が言いました。

「これで僕たちのポーランド生活もいよいよ軌道に乗ったって感じだね」

「そうね、東京のおうちにあったものをそれこそなんでもかでも持ってきたでしょ。台所のカレンダーまで。それが良かったみたい。これだけ東京のおうちにあった物に取りまかれると、ふっと東京の家にいるような感じがして、なんとなく落着くの。この家に住んでいてもこれまで自分の家じゃないみたいだったんだけど、やっと自分の家だなんて実感が湧いてきたわ」

「あたしも、そう。どこからともなく東京のおうちの匂いするでしょ。すると凄く安心なの」

「僕も、ウルトラマンがいると、元気が出ちゃうんだ」

「それじゃ、ポーランドにやっと我家らしい我家が出来たのを記念してなにか記念行事をやるうか」

「私、いい考えがあるの。大パーティを開かないこと。これまでお世話になった方々をお呼びして、日本料理を御馳走するのよ」

「賛成」

「僕も、賛成」

「ワン、ワン、ワワン」

「よし、それではポーランドで最初のパーティを大々的に開いて新しい生活の門出を祝うとしよう」

階段を上がり終わらないうちに、大パーティを開く話がまとまっていました。ご主人が入れたお茶を飲みながら、みんなで居間のソファに座り、誰を呼ぶか、という話が始まりました。

「とにかく、我々一家がこれまで色々とお世話になった人を出来るだけ多く呼ぶことにしよう」

「それじゃ、めいめい自分がお世話になった呼びたいとおもつ人を明日までに考えておくことにしたら」

「うん、じゃ、そういうことにしよう」

「あたし、ノートに書いておくわ」

「うーん、僕は頭の中でおぼえておくぞ」

「パーティを開く日は、二週間後の土曜日ってことでどうだい」

「賛成、賛成」

話は、まとまったようです。でも、僕は少し気掛かりです。僕が色々とお世話になった人も呼んで貰えるのでしょうか。

「ワン」

僕はご主人の顔を心配そうに見上げました。

「なんだ、チビクロ。ああ、チビクロもお世話になった人を呼びたいんだね。それじゃ、こつしよつ。私が明

日までにチビクロの分まで考えておくけれど、もし、それで不十分の場合は、お前の欲しいだけ招待状を上げるからお前はそれを持ってその人に直接届けたらいい」

いつもながら、ご主人は僕の気持ちをすぐ察してくれました。僕が尻尾を千切れるほど振ったのは言うまでもありません。

38

その日の午後、近所の子供たちが遊びに来ました。日本から来たおもちゃや絵本はもう近所の子供たちに知れ渡り大人気なのです。

ミコちゃんの部屋では、モニカとイレーナが、ミコちゃんに折紙の作り方を習って夢中になってつるを折っています。ひろしくんの部屋ではタデウシュとカロールとヘンリックが、レゴで大きな宇宙基地を作っています。モニカはミコちゃんと同じ年で左斜め前の家の子です。色白で金髪、少しはにかみやですが、凄くやさしい子です。僕を見付けるといつも、

「チビクロ、元気？」

と声を掛けてくれます。イレーナはミコちゃんより一つ年上で、タデウシュとカロールのお姉さんです。下に弟が二人いるせいか、とても気が強くて、少し男っぽい顔付きをしています。まん丸い顔で髪の毛は少し赤みをおびています。

タデウシュはニコちゃんより一つ下で、カロルはひろしくんと同じ年です。お姉さんのイレーナに似てまん丸い顔をして体はこぶとりでがっしりしています。胸の厚みはひろしくんの二倍ほどもありそうです。二人とも目がキラキラしていて、そうとうないたすらこぞうです。時々ごみ箱をひっくりかえしたり、小猫を高い木の上に昇らせて喜んだりしています。僕も通りにこの子たちがいるときは自分だけではあまり近寄らないようにしています。この三人の姉弟は、斜め前の家に住んでいます。

ヘンリックはタデウシュと同じ年で、二軒左隣の大きな家に住んでいます。お父さんとカナダに住んでいたことがあるので英語が話せます。背がすらりと高く、薄い金髪、顔にはソバカスがたくさんありますが、賢そうな顔付きをしています。あまり笑ったりしないので少々生真面目な感じがしますが、通りで会うと、

とか、

「まだ、料金はとりに来ないのかい」

とか冗談をいいます。結構おもしろい子供なのです。しばらく部屋で遊んでいるうちにひろしくんの部屋に置いてある妙な物をカロルが見付けました。

「一体このみょうちくりんな物はなんだい」

「大きな手袋みたいなものと小さなゴムのボール。まさかサッカーには使えないし」

「この棒は何に使うの。太いところと細い所があるし、これでなにか叩くの」

船荷のなかに、バットが一本、ボールが二つ、グローブとミットがそれぞれ二つずつ入っていたのです。ポールランドではサッカーはとっても盛んで、タデウシュ兄弟やヘンリックも草っ原でしょっちゅうサッカーボー

ルをけって遊んでいます。ポーランドには野球がありませんから、何に使つか分らないのです。ひろくんがこれは野球というとてもおもしろいゲームにつかうんだよと説明しても、みんななかなか分りません。とうとうミコちゃんに応援を頼みました。ミコちゃんは、女の子ですが日本にいたとき、野球を実際にやったことがあるのです。ひろくんはテレビで見て知ってはいるのですが、まだやったことは本当はないのです。「口で説明するより、実際にやってみせた方が早いわよ。皆んな一緒にお庭で野球をやりましょうよ」

そういうことで、皆んなで庭で野球をやることになりました。ミコちゃんとひろくんが先生役です。でも先生役とはいいいながらミコちゃんにしてもそれほどうまくありません。しかし、ひろくんに比べればミコちゃんは相当うまいようです。ミコちゃんが打ち、ひろくんが拾って、皆んなに教えることになりました。ミコちゃんが打ったボールをひろくんが、

「ボールはこっやって拾うんだよ」

といいながらグローブを差出すのですが、ボールの方は決ってその下をくぐり抜けてしまつのです。見ていて僕ははがゆくて仕方がありません。僕はひろくんのすぐ後ろに待構えていて、ひろくんが後ろにそらしたボールをすばやく口にくわえて、ひろくんに届けることにしました。いつだったか、ユラさんを相手に、ソーセージを空中でパクリパクリと受止めた腕前、いえ口前ですから、ゴロなんてたいしたことありません。右に走り、左に走り、みんな掴まえてしまいました。

皆んなが応援してくれるので、いい気持です。ミコちゃんも、ひろくんそっちのけで、僕めがけてかなり難しい球を打ってきます。ときにはライナー性の当たりもあって、飛付くと、勢い余って、芝生の上で体が二三回転したり、歯が痛む時もあるのですが、負けてはおれません。地上から一メートルもある球に飛付

いてとつた時にはパチパチと拍手が湧きました。

「僕、つまんない。もうやめたーっ」と

ひろしくんがグロープを芝生の上に投出しました。どうも僕は少しでしゃばりすぎたようです。僕はひろしくんが投捨てたグロープを口にくわえてひろしくんの跡を追いました。ひろしくんの前に回り、グロープを押付けました。ひろしくんは、ぐいぐいそのまま進んできます。僕は身をよけ、また先回りして、グロープを押付けます。でもひろしくんは見向きもしないで、そのまま庭に面したテラスから家のなかに入って行ってしまいました。

「チビクロ、ひろしくんのことなんか構わないでいいのよ。我がままいつてるんだから。こっちへいらっしやい。ほらみんなと一緒に野球やりましょーよ」

近所の子供たちはすこしずつこつが分かって来たどみえてキヤーキヤーはしゃぎながらボールを追いかけたり、バットを振回したりしています。でも、やはりミコちゃんが一番じょうずです。僕は、みんなのところに戻り野球の輪のなかに入りましたが、なんとなく力が出ません。時々つまらないエラーもしてしまいます。

「チビクロ、どうしたの。ちゃんと取らなきゃ、だめじゃないの」

僕ももうやめたっというたい気持ちになった時です。テラスにひろしくんが姿を現しました。きまり悪そうに下を向いたまま、みんなの方へすこしずつすこしずつ近付いて来ます。僕は側へ走って行くのかと思いましたが、さっきのこともあるので気付かない振りをしていました。と、すぐ目の前にボールがとんできたので慌てて飛付きました、が、いきなりボールのバウンドが変わったので、よけそくなって頭に当ててしま

ました。

「キャン」

僕は芝生の上にひっくり返ってしまいました。目の前が少し暗くなりチカチカと星が光りました。

「チビクロ、大丈夫？」

僕を抱上げてくれたのは、ひろしくんでした。ひろしくんの心配そうな目が僕を覗き込んでいます。本当はたいしたことはないのです。

「ウーウー」

僕は、ひろしくんの手をなめました。僕の頭をさすりながら、ひろしくんは僕の耳元で小さな声でいいました。

「チビクロ、さっきはごめんね」

僕はひろしくんのほつぺを舌を出るだけ長く出してなんどもなめました。

その日は暗くなるまで、みんなで野球をして遊びました。帰り際に、ミコちゃんとひろしくんが、近所の子供たちを、二週間後のパーティに是非来るように早速招待しました。みんな口を揃えて、

「ありがとう。喜んで」

と答えました。モニカとイレーナは、スカートのすそを指先で持ちあげちょっと膝をまげるしぐさをしながら。僕はこのしぐさが大好きなので、口を開けて見とれていました。

パーティ 39

二週間なんてあつという間です。たちまち、大パーティの日になってしまいました。僕は今日本製のダンボールで作つて貰つた寢床の中でこの二週間の出来事を色々と思ひだしているところなのです。まだお日さまが昇ってくるには少し時間がありますが、僕はつきつきしてとても眠つておれないのです。

とにかく忙しい二週間でした。やることが山ほどあつたのです。ご主人や奥さんだけでなく、ミコちゃんもひろしくんもそれぞれ目の色を変えていました。呼ぶ人のリストづくりから、招待状の発送や電話での確認、料理用の材料の手配、ケーキやポップコーンやコーラなどの買入、大勢呼ぶので部屋やテラスや庭のお掃除、片付けや飾り、子供たちよのゲームやお土産の準備。一つ一つ手際良くやらないととてもこなせません。呼ぶ人のリストをきちんと作るだけでも簡単ではありませんでした。

皆んなが呼びたい人のリストをご主人に提出し、ご主人がだぶつた人がいないかをチェックした上で、それぞれ手分けして招待状を書き、配つたのです。アメリカンスクールや幼稚園の友達や先生を呼ぶときにはミコちゃんやひろしくんがそれぞれ持つていつて手渡しました。郵便でも送りましたが、宛名がはつきりしない人にはご主人が車で配りました。僕はそのとき一緒にいて行きました。僕はその家の前に行くだけで留守なのか、だれか家にいるのか分るのでご主人にとつても便利なのです。

奥さんは日本料理を御馳走しようというので、色々と手を尽くして材料を集めました。刺身を御馳走するため、ワルシャワ中の魚屋さんを捜しまわりましたが、刺身に出来るような魚は見付かりませんでした。がっかりしていましたが、ご主人の会社の人が丁度西ベルリンへ車で出掛ける用事があつたので、その人に頼ん

でまぐろとはまちを買って来て貰いました。ごちごちの冷凍まぐろでしたからも二三日も前から解凍に掛かっています。奥さんはチラシズシやノリマキ、テンブラ、ほうれんそうのオヒタシ、にしんのヌタ、ちゃんむし、チキンのからあげ、とんかつなどのメニューを作りその材料をユラさんと手わけして買い集めました。なにしろたくさん呼ぶので、市場に行つて買おうとすると、

「奥さん、それはなにかの間違いではないですか」

と売子が注意してくれるのだそうです。いつだったか五百グラムのつもりで五キログラムもお肉を買つたり、その後もさくらんぼを四キロも買つてきた前歴がありますから、お店の人も心配してくれるのでしょう。奥さんは買い集めた材料の一部を使つて毎日日本料理の作り方をユラさんにてほぎしています。ユラさんはのんびりいいようです。それにお醤油の味が大変気に入つたようで、料理が出来あがるとちゃんむしにまでお醤油をたらして食べたりします。しかしのりまきの海苔は苦手のようです。奥さんがのりまきの作り方を教えようとしてこれは日本語でノリというのよと何度教えても、ポーランド語で「黒い紙」としかいけません。出来あがつたのりまきも、海苔は生魚の匂いがするといつて食べようとしません。

「ユラは、黒い紙は食べたくない」

本当にそれが黒い色の紙であつて、食べ物とは信じていないみたいなのです。

ミコちゃんとひろしくんは友達と一緒にやる東京名所めぐりのすぐろくづくりや、一人一人のお友達にわたす日本製のお土産に頭を絞りました。和紙で作つた小さな人形や、財布、ミニカー等を包装紙でくるみ、りぼんで飾るのです。

それに二人は、ピアノの練習もやらなければなりません。ご主人がいつものように善は急げとあの日の翌

日早速ピアノ会社に行つてピアノを借りる契約をして来たのです。その足でピアノの先生も頼んで来たのです。ご主人が早く持つてきてくれるように一生懸命頼んできたせいか、そのまた明るく日の午前中にはピアノが届きました。ユラがこんなに早く来るなんて信じられないと驚いたほどです。

力の強そうな小父さんでしたが、たった二人でトラックでやつて来て、あの重いピアノを肩にかけあった太いロープで「えいやっ」とばかりに担ぎあげ、玄関の石段を持ちあげ居間の一番奥まで一気に運びこんでくれました。

ピアノの先生もその日の午後からやつて来て、早速レッスンを始めました。名前は、イボンヌといい、ワルシャワ音楽大学で声楽の先生をしているのだそうです。そのせいか声が驚くほど綺麗で良く響きます。小柄で頼がばらのように赤いやさしそうな女の先生ですが、教えるときにはピシりと教えます。でもとても朗らかな先生なので、ミコちゃんもひろしくんも氣にいったようです。最初はミコちゃんだけレッスンを受ける予定でしたが、ひろしくんも、

「僕もやりたい」

といいだったので、二人で一緒にレッスンを受けることになったのです。でもひろしくんがあまりお喋りなもので、二人別々に受けることになりました。ひろしくんは、とても知りたがりやなものですから、

「先生、どうしてピアノは音が出るの」

「先生、どうして一つ一つの音にドとかレとかミとか名前が付いているの」

「先生、どうしてここをたたくとドという音が出るの」

「先生、どうしてピアノの鍵盤には白いのと黒いのとがあるの」

「といちいち質問するのです。ミコちゃん、」

「これじゃ、先生のレッスンを受けているのか、ひろしのおしゃべりを聞かされているのか分らないわ」

「いいだったので、別々になったのです。でも僕もひろしくんではないけれど、どつしてピアノの音が出るのか、どつしてあるところを押すとドという音が出るのか、どつして音に一つ一つ名前が付いているのか知りたいのです。それでひろしくんがレッスンを受ける時にはピアノの足下に陣取ってレッスンを耳を傾けることにしました。お陰でピアノが鳴るのは、ピアノ線というはがねで出来た強いコイル線をハンマーで叩くからということや、音には、七つの音があつてそれぞれドからシまで名前が付いていることや、ピアノ線の短いものからは高い音が、長いものからは低い音が出るのがわかりました。」

ひろしくんは最初繰返し繰返し、ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ドとひかされていましたので僕はいつの間にかその音階に合せて歌つことが出来るようになりました。そこである日、ひろしくんがまたド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ドとひくの合せてつい声を出して歌っているとイボンヌ先生が僕の方を振り返り、

「まあ、犬がド、レ、ミと歌っている」

と目をまん丸くしました。ひろしくんが、

「この犬はね、チビクロって言うのだよ。まあポーランド語だって全部分るくらいだから、ド、レ、ミを歌うのは朝御飯を食べるくらいやさしいかもしれないよ」

「そう、ポーランド語が分るの。じゃ、チビクロ、私の言うこともわかるわね。さっき歌っていたときミとファの半音階のところの音程が少し怪しかったわ。そこはね、こういふふうに歌うのよ」

「といって、自分で歌ってくれました。さすが歌が専門だけあって素晴らしい声です。どうがんばってみて

も、僕の声は、数等落ちるようです。先生の前で歌うのは気がひけるのですが、でもせっかく大学の先生に教えていただけるのなら、チャンス逃すわけにはいきません。僕は先生の教えを守って声を張上げました。

「あら、チビクロなかなかうまいじゃないの。じゃ、ちょっとこのフレーズうまく歌えるかしら。ラ、ラ、ラーラッラー」

「ワ、ワ、わーわワッワー」

「うまいうまい。なかなかやるわね。じゃこんどはラーッラッララララ、ラララーラ」

「ワッワッワワわわ、ワワワワワ」

「パチパチパチパチ」

イボンヌ先生が拍手をしました。

「先生、僕にも教えて下さい」

背後からひろしくんがいました。

「あら、いけない。お仕事のほうを忘れていたわ。でもチビクロ、ひろしくんがひくのに合わせて歌ってごらんなさい」

そこで僕はひろしくんのひくのに合わせて歌うことにしましたが、ひろしくんはまだ始めたばかりなので、しょっちゅう間違えます。それに、ひいてる途中ですぐ質問を始めるのです。歌っていてもこれでは調子がつきません。僕はひろしくんがうまくひけるようになるまで歌うのをやめ、先生がリズムのとりかたや音の高さをひろしくんに注意するのをじっと聞いていることにしました。

ひろしくんは最低十回ほどひき、質問を十六回ほどすると、滑かにひけるようになります。そこで僕はそ

れに合せて歌うのです。先生の注意はもう充分のみこんでいますので、歌うほうはそれほど難しくありません。声を張上げて歌うとなかなかいいきもちです。遠吠えするときのように声を長く細くしてみたり、ご主人の呼びかけに応えるときのように力づよく歌ったりすると、もつと気持ち引立って来ます。

僕がうまく歌うとイボンヌ先生は振りかえって、ウイंकをしてくれます。それがとてもすてきなので先生のウイंकを見るためにも一生懸命歌うことにしました。僕が心をこめて歌い終わった時です。

「パチパチパチパチ」

突然背後から大きな拍手の音が聞こえて来ました。驚いて振りかえると、奥さんにミコちゃんにユラが勢揃いして拍手をしているのです。僕はちよっぴり恥かしくなりました。

「素敵だわチビクロ。チビクロにこんな才能があるなんてね」

「そうだ、あたしいいこともいついちゃった。今度のパーティの時にひろしくんの伴奏でチビクロが歌うことにしたら」

「それはいいアイデアですわ。きつとお客さんも大喜びしますよ」

そんなわけで、今日のパーティの余興でひろしくんの伴奏で一曲歌うことになっているのです。イボンヌ先生がそれではということで特訓をしてくれたのですが、今から胸がどきどきします。

僕がパーティに呼びたいと思っていた人は、ご主人が作ったリストのなかに一人残らずのっていました。で、問題はないのですが、実をいうと僕が呼びたい動物の方は残念ながらリストから外れていました。でもこれは仕方がないのかもしれませんが。飛行場で僕を助けてくれたシェパードやポーランド語のてほぎをし

てくれたキジ猫や肉屋の前であつたミルボやどぶねずみのロン一家、スターレミヤストで会つたやせ馬さん。それにほかでもないあの愛しいアンナ。みんながやって来たらパーティはどんなに素敵でしょう。でも呼ばれて来た人はびつくりしてしまふに違いありません。そうだ、僕はいいことを思い付きました。

おや、台所の方で「ことごと」と音がしはじめました。きつと奥さんが起き出したに違いありません。昨夜も料理の仕込みのため夜おそくまで頑張つていたのですが、今朝も一番早起きのようです。僕ものんびりと寢床に寝そべっているわけにはいきません。いよいよ活動開始です。

パーティの始まる予定の一時びつたりに用意がととのいました。時計が一時を打つたのと同時に玄関の呼鈴がなりました。みんなあわててご主人を先頭に玄関に一列に並びました。僕も一番後ろに並びました。

奥さんは、

「みんな準備はいいわね。ドアを開けるわよ」

と小声で念をおしました。

「おい、トモ」まだエプロンをつけたままだよ」

「あらいけない」

奥さんはあわててエプロンをとると玄関脇のもの置きの中に放り込みました。とにかくみんなぎりぎり

まで手分けして準備に余念がなかったのです。良く間にあったものです。奥さんが着ているのは、日本から持ってきた胸のところが少しあいたパーティ用のドレスです。どれにしようかとさんざん悩んだあげく思いきつて一番大胆なものを選んだのですが、良く似合っています。ご主人もニコちゃんもひろしくんも船荷で届いた新しい服を着て今日はめかしこんでいます。僕も負けないようにいつもの倍も丁寧に体の隅々までなめて毛づくろいをしました。

「ベッビー」

また呼鈴がなりました。

「さ、今度はいいわね」

奥さんがドアを開けました。

「ジェンニードーブリ」

一番乗りは近所の子供たちでした。最初にモニカにイレーナ、それからタデウシユ、カロルとヘンリックが入って来ました。例によってモニカとイレーナが膝をおってスカートを持ちあげて挨拶しました。

「こんにちは、今日はご招待ありがとうございます」

一人一人に握手して、最後に僕がお手をするようになりました。

その後ろには幼稚園の生徒とお母さんや先生たち、もちろんひろしくんを幼稚園に入れてくれた園長先生も一緒でした。さすがにレディファーストの国だけあって女の子が先に入って来ます。

アメリカンスクールの友達と先生の一行は大変威勢良く、

「グッアフタヌーン」

といつて入ってきました。白い肌の子も、黄色い肌の子も、黒い肌の子も皆ニコニコと元気一杯です。

例によつて小さなボルスキーフィアット126でやつて来たのはバランスキー一家です。バランスキー夫人が車からうまく降りられないので暫く行列が途絶えました。この前見たときよりもっと太つたみたいです。娘のヨアンナも夫人同様この前見たときよりまた一回り大きくなつたようです。バランスキーさんはニコニコしながら降りる手助けをしています。ボルスキーフィアット126は相変わらず大変なようです。唯一の救いは息子のヨゼフが相変わらずカトンボのようにやせていることでしょう。

ポーランド語の先生のエバさんは娘のボウグナとエバさんのボーイフレンドのマーテウスを連れてやつて来ました。ボウグナはひろしくんと同じ年ですが、初めてお目に掛かります、どうぞ宜しくと一人一人に握手しながらきちんと挨拶をしています。奥さんがエバ先生に習つたポーランド語を試そうと、

「ボウグナ、どこの幼稚園に行っているの」

とポーランド語で尋ねると、

「家のすぐ近くにあるウリーツァ・ドンブロンフスキエーゴの第五幼稚園に行っています。とても楽しい幼稚園ですよ」

とはきはきと答えました。でもかなり早口だったので、せっかくエバ先生に習つたかいもなく奥さんは、

「ああ、そう……」

とあいまいにうなずいただけでした。

ピアノのイボンヌ先生は素敵な民族衣装を着て現れました。

「先生、凄く素敵」

「先生はすごく、べっぴんだね」

ニコちゃんとひろしくんが同時に叫びました。

「ご主人の商社で働いているポーランド人達も賑かにやって来ました。その中で一際目立つのがご主人の美人秘書のバンダさんのようです。」

「奥様、初めまして。私秘書のバンダと申します」

「はじめまして、主人がいつもお世話になっております」

そついいながら奥さんが何となくしげしげとバンダさんの顔を見えています。

ボイテック一家も全員やって来ました。マートカがボイテックの手をひいています。弟のヤーチェックをタトーシュがだっこしています。この前あったときは生まれたばかりだったのですが、もう、かなり目方も増えて、ボイテック同様な女の子のようなやさしい顔だちをしています。犬語のわかるタトーシュは、

「チビクロ、ずいぶん元気そうになったな」

と座り込んで犬語で話しかけてくれましたので、僕も、

「タトーシュさんこそますます元気そうですね」

と答えました。座り込んだときにチラツと見たのですが、タトーシュの頭の後ろの髪が薄くなったところが少しふえたような気がしました。ボイテックは、

「僕、チビクロにとつても会いたかったよ」

僕をきつく抱締め、なんどもほほずりしてくれました。僕もボイテックの頬を一生懸命なめました。日本大使館の髭の書記官も見えました。

「本日はお呼びに預かりまして誠にありがとうございます」

丁寧に挨拶をしました。

少し遅れてやって来たのはグダンスクのジグモントです。

「いやーすっかり片付いちゃいましたね。この前は足のふみばもなかったのに。でもこんなに片付けちゃうと今度引越すときが大変じゃないですか。アハハハハ」

最後にやって来たのは、ご主人の商社で働いている仲間の日本人たちとその家族の人たちです。

「これつまらないものです」

といってスコッチ・ウイスキーを二本お土産に持って来ました。その中の一人の小父さんは大勢のお客さんの中に入って行きながら頭をペコペコ下げては

「ジェニードーブリ・バルゾー」

と挨拶をしています。これはそのまま日本語に直すと、

「大変、こんにちわ」

ということになって意味が通じません。きっとジェンクーエン・バルゾー（大変ありがとうございます）とジェニードーブリとをごっちゃにしているに違いありません。今もエバ先生に、

「ジェニードーブリ・バルゾー」

と挨拶をしましたが、エバ先生が、

「はじめまして、私エバ・カミュシカといいます。どうぞ宜しく」

と綺麗な日本語で答えたので、びっくりして、

「私、このご主人と同じ商社で働いている間野といいます」

とポケットからあわてて名刺を出して自己紹介をはじめました。

部屋のあちこちに置かれた大きな日本製のせともの器の中にはボブコーンが一杯入っていますので誰でもつまむことが出来ます。ご主人はお酒の係りなので注文をとって回っています。つい男の人の方から注文をとろうとしてあわてて女の人から注文をとりなめています。ジュースもテーブルのうえに一杯並べてあります。ニコちゃんひろしくんがみんなにジュースの栓を開けて配っています。ひろしくんはさすがにちゃんと女の子を優先しているから大したものです。

ステレオからは日本の歌謡曲が小さく流されています。大人のお客さん達は、部屋の中のあちこちに五、六人ごとにサークルを作って話しこんでいます。時々サークルの間を移動しては自己紹介して話に加わっています。楽しそうな笑い声が方々から聞こえて来ます。テラスや庭に出ている人たちもいます。庭にはリラの爽やかなおりが溢れています。すももの大きな枝が庭にせりだしており美しい陰模様を芝生の上に描いています。庭の奥にあるモミの木のおにこっこをして遊んでいる子供たちもいます。ほかの子供たちは二階のニコちゃんとひろしくんの部屋でお話したり、東京巡りのすこくやほかのゲームをしたり、おもちゃで遊んだり、日本の絵本を見たりしています。僕は皆んなうまくいっているか見てまわることにしましたが、お客さんの顔は楽しそうに輝いていますので、なんの心配もないようです。

ところが一つのサークルのところではなんとなく、言い争っているような雲行きのところがあります。僕は心配になってとんで行きました。みるとアメリカンスクールの先生とポーランドの幼稚園の先生がふたはに分かれて言い争っているのです。

「語学の才能のあるのは、それは絶対ひろしくんですよ。本当にあつというまにポーランド語をマスターして、今ではポーランド人より早口でまくしたてるくらいなんですから」

「それだったら、ニコちゃんだってアメリカンスクールに来て一週間後にはもう電話で話していましたからね」
「じゃ、語学の方はともかく、ひろしくんは幼稚園に入ったその日のうちに、給食のスープをお代りして飲んだくらいですからね。小さいのに度胸の座っていることこの上なしですよ、だからみんなからも一目置かれているんですよ」

「ニコちゃんが、今クラスの委員に選ばれていることをご存じないんじゃないやありませんか。まだアメリカンスクールに入って間がないのに、ニコちゃんだって皆んなから好かれているんですからね」

「ひろしくんが、女の子にもてること、右にでるものなしですわ。すごく気持ちのやさしい子ですからね」

「ニコちゃんは、体の不自由な子供たちを救う募金活動のために運動場一周ごとに両親から五ズォーティ貰う契約をとってきて、なんと二五周も走ったんですよ。女の子では校内で五番目ですよ。まだ一年生なのに」

「そんな話では驚きませんわ。ひろしくんときたら五歳なのに、ポーランドの歴史に興味を持っていた、どうしてドイツが攻めてきたのかとか、どうしてワルシャワの街のあちこちに、小さな墓が祭られているのかと聞くんですからね。そして言うことが、僕は大きくなったら絶対戦争のない世界になるようにがんばるんだ、ですって」

丁度そこへやって来た幼稚園の園長先生が、

「まあまあ、皆さんどっちにしても、ニコちゃんもひろしくんも気がやさしくていい子であるという点では意見が一致しているんですから、今度は少し話題を変えて、ちょっとチビクロのことも話しませんか、丁度

チビクロもここにいることだし。チビクロだって語学にかけてはそうとうなものですよ」

「ええ、わたしたちもチビクロがポーランド語をたちまちマスターしたとか…」

「通訳をやったってことは知ってますわ」

「私の幼稚園に初めてこの一家が見えたときチビクロが通訳をやった話はもう幼稚園では伝説になっていますの。まあ驚いたのなんのってあのときは…」

園長先生が話し始めました。僕は照臭くなってその場を離れました。言い争いがおさまればもう心配いりません。

もう一つ、大きな輪ができてドツと笑い声が湧きあがっているサークルがあるので行ってみると、輪の中央にボイテックのタートルシュが陣取り、

「チビクロに会わなかったら、私に大語の能力があるなんてまったくのところがありませんでしたよ。それにしてもあのチビクロ、よくまあ、日本から自分だけでやって来たもんですよ。それにたちまちポーランド語をマスターしてしまうなんておどろきですなあ。そういうえば髭の書記官殿、日本大使館ではチビクロが日本からの冒険談を話すのを私がポーランド語に直し、あなたがそれを日本語に直して…」

「そうでした、車のトランクを旅行用のトランクと間違えて訳すと、チビクロにそこは少し違いますと注意されたりして、いやあの時は参りましたよ」

そこで周りの人がドツと笑います。

「あれから犬に負けてはいかんということで、大いにポーランド語に励みましたよ。少し上達しているかどうか今日チビクロに試験して貰うことにしますかな」

そこでまた笑いが爆発するといったあんばいなのです。ここでも僕は照臭くなつて、ほかのサークルのところへ走つて行きました。

どのサークルへ行つても僕が行くと、

「チビクロ、チビクロ」

と呼びとめ皆すぐ僕の頭をなでたり抱上げてくれたりします。嬉しいことは嬉しいのですが、僕は見回りの役を買つて出ているのですから、あまり長くはお付き合いできません。僕が見回りをしていると、なんとなくモジモジしている女の子がいました。僕が近寄つていって見上げると、

「チビクロ、あなたボーランド語がわかるんでしょ。だったら、早くトイレがどこにあるか教えて。あたしおしっこがもれそうなの」

僕は早速一番近くの地下室の降り口の反対側にあるトイレに連れて行つてあげました。

「さあ、皆さんお食事の準備が出来ましたよ」

奥さんが、皆んなを台所と居間の間にある大きなテーブルの所に順番に案内しました。そこにはメニュー通りの日本の食事が大きなお皿の上に美しく盛りつけられ、ところせましと並んでいました。

「さあ一人一人お皿に、好きなものをとつて召上がつて下さい」

まず最初にちいさい子供たちからです。背がちいさくてとりづらい子供たちには欲しいと指差す料理を奥さんとユラがお皿にとつてあげました。みんな初めて見る日本料理なので、どれが美味しいのか迷っていました。子供たちに一番人気があったのはごもく寿司とちゃんむしと鶏のからあげでした。

刺身は初めての人が多くて最初売れ行きがかんばしくありませんでしたが、日本人が、美味しいですよと

勧めるので、バランスキーさんがまず挑戦しました。

「うん、これはうまい」

その一声で刺身の売れ行きは途端に良くなり、中にはお代りをするひともし出てきました。

そのほかの料理も、皆んなおいしいといって食べています。順調な売れ行きに最初心配顔だった奥さんの顔も明るくなって来ました。ユラと顔を見合わせて頷きあっています。

めいめいお皿に、すきな料理をとって居間の各コーナーに設けてあるちいさなテーブルの周りに座っておしゃべりしながら食べています。日本料理ということで奥さんはナイフもフォークも出さないうで、箸だけ出しましたので、みんないろいろとおもしろい持ち方をしながら食べています。ミコちゃんやひろしくんが子供たちに箸の使い方を教えています。いつもひろしくんは持ち方が悪いといって奥さんに注意されているのですが、今日だけは先生格です。

ところでいつまで待っても僕の番になりません。お腹はぐうぐう空いて来るのですが、奥さんは忙しそうにしていますし、ご馳走を食べながらおしゃべりに夢中になっているご主人やミコちゃんやひろしくんに頼むわけにもいきません。お客さんも大勢いるので自分でテーブルの上の料理をとるなどといった、あまり意地汚いまねも出来ません。とうとう奥さんもお皿にお料理をとってひとつのサークルのなかに入り、腰を落着けて食べ始めました。

僕はちよつと台所を覗いて見ました。と、ユラが今では大好物になった刺身をお醤油にたっぷり浸して食べているところでした。大きな口を開けて、いましも大きなマグロのトロを口のなかへ滑りこませようとしたところへ僕が入っていったものですから、今度は目のほうも大きく開けて僕を見ました。僕の元気なさそ

うな様子ですぐ気付いたのでしょう。食べかけたトロをあわてて刺身皿に戻し、

「あつ、すっかりチビクロのことをわすれてた。ごめんよ。わすれてたおわびに美味しいものをたっぷりあげるからね。ここじゃまずいから、チビクロ先に自分の部屋へ戻っていなさい。すぐ持つて行ってあげるから」

僕は人目に付かぬようにこっそり自分の部屋へ下りて行きました。待つほどもなくユラがおおきな皿に山盛りの御馳走を持ってきてくれました。僕も是非食べたいと思ってたサシミもあれば鶏のからあげもとかつもごもく寿司もあります。

僕は「ぐん」と生つばを飲みました。これだけあれば僕の計画にももってこいです。僕はユラにお礼の意味で尻尾を精一杯ぶつてから食べ始めました。

食べ終わって居間へ上がっていくと子供たちの余興が始まっていました。大人たちも輪を作って見ています。丁度ミコちゃんが「赤とんぼ」という日本の歌を歌っているところでした。イボンヌ先生がピアノで伴奏をしています。歌いおわるとみんな一斉に拍手しました。ミコちゃんはペコリと頭を下げ、アメリカンスクールの同級生と一緒にアメリカ国歌を歌うように提案しました。

「オーケー、レッツゴー」

皆んなさつと立ちあがるとピアノの側を集って元気良く歌いだしました。英語の歌詞なので良く内容はわかりませんがなかなかいい曲です。ミコちゃんも英語でちゃんと歌っています。国歌を歌うときは全員起立するものらしく皆んな立ちあがっています。それが終わるとミコちゃんは幼稚園の子供たちにボーランド国歌を歌うようにいいました。皆んな大きな口を開けて精一杯声を張上げて歌い出しました。もちろんひる

しくんも一緒に歌っています。大人のポーランド人も全員声を合せて歌い出しました。イボンヌ先生も、バランスキー夫人も舞台の上で歌ったこともある専門家ですし、声量のあるバランスキーさんやタートーシュも精一杯口を開けて歌っていますので、とても聞きこたえがあります。

「我ら生きる限り、ポーランドはまだ失われず…」

「この歌は、ドンプロフスキーのマズルカというのよ。もう二百年も前から歌い続けられてきた歌なの。この歌をきくといつも血がたぎるわ」

エバ先生がミコちゃんたちにそつと教えています。歌が終わると盛大な拍手がなり響きました。

次ぎは誰の番だろつと思っていると司会役のミコちゃんがいきなりこついいました。

「それでは只今から、いよいよお待ちかねのひろしくんとチビクロによる、日本の歌をお送りします。曲は、『ハトポツポ』と『さくらさくら』です。チビクロが歌い、ひろしくんがピアノで伴奏します。皆様も拍手で手拍子をとって下さい」

僕はどきどきしながら、居間の真中に進み出ました。居間には人が溢れ、らせん階段の上から見ている人もいます。後ろの方の人が、

「チビクロが見えないわ」

といいました。するとご主人が僕を抱上げてピアノの上にのせてくれました。こんな高いところで歌うのは初めてなので、それだけでも胸がどきどきします。目の前がばやけるかと思うとはつきり見えたり、どうも目の調子がおかしいのです。ひろしくんがピアノで、ラの音をくれました。その音に合せるようにイボンヌ先生に教えられたのです。僕はその音に合せて小さく、

「ウーウー」

と歌ってみました。自分ながら声が震えているのが分ります。これはまずいと思いました。ひろしくんがじゃ行くよ、というので、

「ワン」

と思わずOKのサインを出してしまいました。伴奏が始まりました。歌の出だしを間違えてはなりません。僕は頭をかしげて耳をそばだてました。と、僕の目にイボンヌ先生がウインクしているのが飛込んできました。あのとても魅力的なウインクです。僕は思わずウインクを返したくなりました。その途端に気がすーっと軽くなり、丁度うまいぐあいにピアノに合わせて歌い出すことが出来ました。イボンヌ先生が首を上下に振って拍子をとってくれますので、僕は首程が狂わないように注意を払って歌いました。

「ワッワッワ、ワワワワワワッワッワワ、ワワ、ワワ、ワワワワワワ」

ひろしくんもイボンヌ先生の拍子に合わせて一生懸命ひいています。高い椅子にピョコンと座って床に足は届かないのですが、全然間違いません。僕が間違えてはひろしくんに申し訳がたちません。僕も心をこめて歌いました。

「ワッワッワ、ワワワワワワッワッワワ、ワワ、ワワ、ワワワワワワ」

歌い終わると大きな拍手と、声援が湧きおこりました。

「ブラボー」

「ブラボー」

僕はひろしくんと一緒にぴょこんと頭を下げました。

「アンコール」

「そうだ、もう一曲」

声が掛かりました。でもピアノが来てから二週間もたっていないのですから、二曲覚えるので精一杯、アンコールの曲を用意する余裕なんてありませんでした。一体どうしたらいいのでしょうか。ひろしくんも困った顔をしてイボンヌ先生と顔を見合わせています。なにかいい知恵はないでしょうか。

「そうだ」

その時いい考えがひらめました。グダンスクへ行く途中の森のなかで最初にご主人が歌いだした曲があります。あのときは「信じられないチビクロ」という題でしたが、僕が歌詞を作ったところだけは未だ誰にも聞いて貰ったことがありません。それにあの時は未だイボンヌ先生に教えを受ける前でしたので、歌うというより単に曲に合わせて拍子をとるぐらいでしたが、今ならもつとつまく歌えるはずです。あの歌を歌おう。僕は突然歌い出しました。

「あつ、この曲はパパが作った『信じられないチビクロ』って曲だ。チビクロちょっとまって。ママ、あの曲ピアノでひける？ だったら、みんなで一緒に歌おうよ」

「つまくいくかどうかわからないけどやってみるわね」

奥さんはピアノの鍵盤をポンポンポンと叩きました。

「まあなんとかかなりそうね、じゃいいこと」

僕は見ている人のなかからボイテックのタトーシュの匂いを必死にかぎわけました。タトーシュはらせん階段のところにいました。

「ワン、ワン、クーク」

僕がいきなり吠えだしたものですから、みんなの目が一斉に僕に集まりました。僕はタトーシュに近くに来て下さいといったのです。

「チビクロ、なんのようだい」

タトーシュはすぐやって来てくれました。僕はこれから、僕がいうことをみんなに紹介してくれるように頼みました。

「お安いごようだよ」

僕が話しはじめると、タトーシュがそれをポーランド語に訳してくれました。それをまた、日本大使館の髭の書記官が日本語に訳しました。

「チビクロが信じられないチビクロ」の曲に合わせてご主人一家に捧げる歌を作ったので聞いて貰いたいといっています。私が訳しますので、皆さんも声を合せて歌って下さい。それでは奥さん伴奏をお願いします」

僕は、歌い出しました。

「いつでも明るい ご主人一家ほど素晴らしい一家はない」

歌うはじから、タトーシュがうまく訳してくれます。髭の書記官も少し遅れて追掛けます。

「神様に祝福された家族のようだ……」

みんなは歌わないで、じっと耳を傾けているようです。

「ご主人一家の行くところ

大きな石ころも転がっているけれど

その強い愛のきずなでいつの間にか
砂利のように打砕いてしまう

ご主人一家は 僕の誇り

ご主人一家の幸せのためなら

僕は命も惜しまない……

歌い終わると一瞬静かになりました。みんな僕の方をぼんやり見えています。どうしたのでしょうか。なにから
まずいことをしてしまったのでしょうか。一人でいい気になってせっかくのパーティを台無しにしてしまっ
たのかもしれない。

と、突然、

「ブラボー」

「ブラボー」

という声が湧きあがりました。拍手がさっきよりも一段と高くなり響きました。ピアノを伴奏してくれ
た奥さんを見下すとまだ鍵盤の上に俯いたままです。肩が小刻みに震えています。ときき
り顔を上げ、

「チビクロ、ありがとう」

と僕を抱締めてくれました。顔が真赤です。目も少し赤くなっています。ご主人もミコちゃんもひろしく
んも寄って来て僕にはほほほを口々に、

「いい歌をありがとう」

といました。

「本当にいい歌ですね。もう一度みんなですしよに歌いましょうよ」

イボンヌ先生が提案しました。大合唱が始まりました。僕も力を込めて歌いました。歌が終わりがけたときニコちゃんが大きな声で叫びました。

「そのまま」信じられないチビクロの歌も続けて歌って下さい。この歌はあたしたち一家がチビクロに捧げる歌です。あたし歌詞をいいますので皆その後について歌って下さい」

「黒くてちいさいチビクロほど

信じられない犬はいない

神様が　つかわされた奇跡のようだ……」

イボンヌ先生が拍子を取り、それぞれのパートをわけていったのでいつの間にか混声四部合唱になっていました。良くハーモニーのとれた曲が屋敷のなかに響きわたります。皆んなの顔も生き生きと輝いています。僕は照臭くて少し俯いて聞いてましたが、皆んなからこんな祝福の歌を歌って貰って、幸せで胸がはちきれそつでした。

本当に今日はいい日です。

子供たちもそれぞれ日本からの小さなプレゼントをお土産に貰って喜んで帰り、大人のお客さんも一人減り二人減りして最後に残ったのはご主人と同じ商社の、

「ジェンドーブリ・バルゾ」

の小父さんでしたが、その小父さんも、

「ドブラビエチール・バルゾ」

といいながら、少しちどり足で引上げました。

ご主人一家にとってもこれが最初のパーティだったのです。それがうまくいき、お客さんたちが皆んなとても素敵なパーティだったと口々にお礼をいって帰って行ったので、みんなほっとして、どっかりと居間のソファの上に腰を下し大きくふーっと息をつきました。

「本当に楽しかったわね」

「みんなが協力して良くやってくれたので、お客さんは大喜びしてくれたね」

「また、こんなパーティやりたいナ」

「そうね、もう経験したことだし、今度はもっとうまくやれるかもね。あらでも、もう九時過ぎよ。さあ後片付けは明日にして今日はぐっすり眠りましょ」

と、ユラが台所から出てきて、

「マダム、もう台所の片付けはすっかり終わりました。今から居間の片付けをやるので皆さんはもう休んで下さい」

といいました。ユラはいったん言出すと決して引込めませんので、奥さんもユラに任せて休むことにしました。ご主人一家がらせん階段を幸せそうに上っていくのを見届けてから、僕は地下へ下りていきました。僕も少しは疲れましたが疲れたなどといっておれません。すぐにでも計画に移りたいのですが、ユラが、まだ居間で片付けをしていますので、それが終わるまで待つ必要があります。ちょっとうとうとしかけたのでしょうか、もの音ではっとして目を覚ますと部屋の入口にユラが立っていました。

「おや、チビクロ、もう眠っていたのかい。悪かったね。チビクロも大活躍だったから疲れたろうね。昼間あんなにたくさんあげたのにすっかり食べたんだね。それじゃ丁度良かった。残り物だけど食べておくれよ」

ユラはまたお皿に溢れるほど御馳走を持って来てくれました。

「私は、もう帰るからね、お休み」

ユラは階段を上がって行きました。暫くすると玄関のドアをガチャリと締める音がしました。

もう大丈夫です。僕はダンボールの箱の後ろに隠して置いたバスケットを引張り出しました。そのなかには昼間ユラに貰った御馳走がまだたくさん残してあります。それにいまユラが持って来てくれた御馳走を付足すとバスケットの蓋がしまらないぐらいです。このバスケットは地下室の一番奥の部屋で見付けたものをちよつとかりたのです。僕はバスケットの口を口にくわえて出発しました。例によって、一番奥の部屋に行き、棚箱の紐をひきました。棚箱がぐるりと回り、大きな入口がポカリと穴をあけました。

「ロン、約束の御馳走だよ」

僕が声をかけると、ロン一家がたちまち勢揃いしました。僕は今朝起きたときにロンに今日パーティをやるので御馳走を届けるといふ約束をしたのです。

「ところで、ロン、ノラ暮らしのキジ猫には連絡とってくれたかい」

僕は聞きました。

「とれたとも。この地下水道はワルシヤワ中つながっている。チビクロに頼まれたので仲間に連絡をとったら確かに飛行場の近くに住んでいるノラ暮らしのキジ猫が見付かったので、チビクロが今日パーティの御馳走を届けると連絡してくれたそうさ。だけど、チビクロもひどいよ、ネズミに猫への連絡がかりをやらせるなんて。使いにいった仲間が危つくそのキジ猫につかまりそうになったんだよ。まあマンホールに逃込んで難はのがれたそうだけどね。マンホールの中から間違ひなくチビクロの伝言は伝えたそうだよ。伝言を聞くとキジ猫も掴まえようとして悪かったって謝りはしたそうだけどね。行先がわからないようだったら、そのあたりのマンホールに声をかければわかるようにしておくよ」

僕はロン一家にお礼の御馳走をたっぷり置いていつものように抜け穴を通って表通りにでました。僕がさよならをいうかわいわないうちに、ロン一家は早速御馳走を夢中になって食べ始めていましたから、僕が表に出ないうちになくなってしまったかもしれない。

もうかなり遅いはずなのに、空はすっかり暮れてはいません。すきとおるように青く輝いています。宇宙の向う側が透けて見えているようです。北国なので夏には日の暮れるのがとても遅いのです。道路のあちこちにはやはり、おまわりさんがたくさんいます。僕は注意深く小走りに走りだしました。大体の方向はわっ

かっていますが、もうそろそろキジ猫のすみかの近くかなと思ひながら通りの角を左に曲がろうとするときなり、

「おい、チビクロ」

と鋭い声がしました。

「反対、反対、方向がまるで反対だよ。右だよ。ここを右に曲がって真直ぐいけばキジ猫さんが、フェンスの上でお待ちかねだよ」

声はすれども姿は見えずです。

「一体君はだれだい。どこにいるんだい」

「ここだよ、ここ。マンホールの中さ。僕は、ドブネズミのヤスっていうんだよ」

僕が足下を見下すと、マンホールの中にも赤い二つの目が光っています。

「キジ猫に連絡に行つて、危うくつかまりそうになったのは、僕だよ」

「そうか、君が連絡をとってくれたのかい。本当にありがとつ。これはほんの気持ちだけど、パーティの御馳走のおすそわけだよ。食べてくれたまえ」

僕はマンホールの穴の中に御馳走を押し込みました。

「チビクロ、ありがとつ。こんな珍しいものを食べられるなんて、命懸けでやったかいたよ。さあ僕の一家のパーティをはじめことにしよう」

マンホールの中ではヤス一家のパーティが始まりました。

僕は、久し振りにキジ猫に会えると思ひ足を速めました。

キジ猫はヤスのいうとおりフェンスの上で待っていました。僕が近付くとひらりと道路に飛降りて来ました。相変らず丸々太っていますが、さすがにノラ暮らしをしているだけあって、飛降りる時も足音一つたてません。

「少し振りだね、チビクロ」

「本当に少し振りですね、キジ猫さん。あの時は本当にお世話になりました」

僕はご主人一家に巡りあったこと、今は一緒に楽しく暮らしていること。キジ猫にてほだきをつけたポールランド語が本当に役に立っていることなどを手短かに話しました。

「結構じゃないか。こちらもそれをききゃあー安心も二安心もするってものさ。あれっきりなしのついで。いってはどうしているかと案じていたら、今朝ほど急にみもしらぬネズミの奴がチビクロが今日お礼の御馳走を持って現われるてんで、いってどうゆう風の吹回しかと、首を捻っていたところよ。いやーおめえさんの元氣な顔をみて安心したよ。本当に運がよくってよかったなあ。積もる話もあることだし、今晚はゆっくりしていきねえ」

「僕もゆっくりしてきたいんですが実はもうひとつ寄るところがあるんです。それにあまりゆっくりしていると黙って抜け出したことがご主人にばれてしまうので、今日はこれで失礼します」

「相変らず、お前さんも律義だねえ。ご主人思いには感心するよ。じゃこんどまた出掛けておいでな」

僕は、キジ猫にも、御馳走をおすそわけして、また走りはじめました。キジ猫は、早速マグロのサシミに舌つつみをつっていました。

飛行場が左側に見えてきました。

飛行場で僕を助けてくれたシェパードのマーテックとも連絡をとりたかったのですが、ドブネズミの連絡網では無理だったのです。そのうちには是非あってお礼をいいたいものです。飛行場を過ぎ、野原を過ぎ、木の小さな家の側を通り抜けました。

僕は最後の目的地はすぐそこです。ひとりで足が速くなって来るのがわかります。最後に会ったときからもう一月半もたっています。元気にしているでしょうか。目の前に大きな石造りの家がそびえたっています。窓の明りはみんなきえています。僕は裏手にまわりました。いつものように車用の通路づたいに入って行きました。半地下のガレージの所にいき、僕は人間の耳に聞こえないような高い声で、名前を呼びました。

「アンナ、いるかい。僕だよ、チビクロだよ」

「えっ、チビクロ、まあ、良く来てくれたのね」

その声だけはすぐ返って来たのですが、アンナはなかなか出てきません。

「ちょっと、まちなさいよ。お母さんはすぐ帰って来ますから、お乳は後にしてね。お前たちのお父さんが、来てくださったのよ」

アンナが小さな声で話しています。

「クン、クン。クン。クンクン、クン」

子犬の甘えた鳴声がします。心臓が全速力で走った時のように打ちはじめました。

「まさか!？」

アンナがガレージの外に出てきました。すっかり大人びて眩しいほどです。

「チビクロ、よく来てくれたわね。嬉しいわ」

アンナは鼻を押付けて来ました。僕もやさしくキスを返しました。

「さあ、早く中に入って」

僕はアンナについてガレージの中に入りました。

「チビクロ、見てちょうだい。これがわたしたちの赤ちゃんよ」

わらをした寝床の中に、小さなそれこそドブネズミほどの子犬が動きまわっています。白い毛のが三匹、黒い毛のが三匹、上になり下になり、一時もじっとしていません。

「アンナ」

それだけいうと声が詰まって良くいえません。良くやったといったかたのですが、僕は代りにアンナの体をやさしくなめてあげました。

「君も元気そうだし、子供たちもみんな元気そうだね。本当に良かった」

「さあ、かわいこちゃん、お前たちのお父さんだよ」

小犬は、

「クンクン、くんくん」

鳴くだけでまだなにもわからないようです。お乳の匂いのする子犬たちを僕は、一匹ずつやさしくなめてあげました。子犬はなめられると気持ちがいいのか、

「クーン、クーン」

と鳴きます。そしてちいさな舌でなめかえますのです。これが僕の子供だと思つとなんだか信じられないような、夢でも見ているような、妙な気持ちです。僕ももう一人前の雄犬なんだ、しっかりしなくっちゃー。

「白が三匹に、黒が三匹でしょう。飼い主がどうして黒い子犬が生まれたんだろうって頭をひねってるの」

アンナはかたわらから肩をすりよせてきて、クスクス笑いました。平気な顔をして笑うのには僕は驚いてしまいました。

「飼い主から怒られたりしなかったの」

「ううん、全然。だって、生まれてしまったのだから仕方がないでしょ。でも、カジユクという雄犬の飼い主の所へ、もんくをいいに行ったようよ」

「それで……」

「向うもそんなことはありえないと言張ったらしいの。とうとうけんか別れになったらしくて、飼い主ときたら、もうあのカジユクには絶対頼まないぞって、プリプリ怒りながら帰って来たわ。カジユクなんて大嫌だから丁度良かったわ」

僕は驚くことの連続で、せっかくお土産を持って来たことさえすっかり忘れていました。が、アンナの出産祝いしようと思いついて、食べ物することに気付きました。

「アンナ、実はね。僕のご主人のうちに今日大パーティが開かれたんだ。これまでご主人一家がポーランドでお世話になった人を残らずお呼びして日本料理をめしあがっていたところ。だから僕もポーランドに来てお世話になった仲間の動物たちにも是非とも御馳走を食べて貰おうと思って、ほらこのバスケットに入れてこれまであちこち配ってきたんだ。アンナにもずいぶんお世話になったのでお礼のつもりで今日は来たんだよ。そうしたら、なんと、僕の子供が六匹も生まれている。でも、丁度良かったね。アンナの出産のお祝いと子供たちの誕生祝いを兼ねて今から僕らのパーティを開こうよ」

「忘れてはいけないわ、お互いにはじめてお父さんとお母さんになったお祝い。でも遠いところをわざわざ日本のお料理を持って来てくれるなんて嬉しいわ。この子たちには日本の血が交っているんだから、私が日本料理を食べて、日本料理の味のするお乳をあげればきつとあなたみたいに素敵な犬になれるわねさあそれではお祝いのパーティを始めましょう」

アンナは、僕が持っていた日本料理が気に入ったようです。鶏のからあげも、とんかつも、マグロのサシミもたちまちペロリと食べてしまいました。

「赤ちゃんにお乳をあげるせいかこの頃とても食欲旺盛なの。私少し太ったかしら」

食べおわると、アンナは子犬たちにお乳をあげ始めました。

「クンクンクン、くんくんくん」

子犬たちは、上になったり下になったり、大騒ぎしながらちくびを奪いあいます。そのうちめいめい自分のちくびを見付けて、

「ゴックン、ゴックン」

美味しそうに飲み始めました。アンナも気持ちよさそうな顔をしています。もう堂々たる母犬です。この前あった時は、娘っぽい雌犬だったのに、赤ちゃんができただけで、どこから見ても一人前の母犬に変身しているのですから、驚きです。そういう自分は父犬に相応しく変身しているのでしょうか。でもたった今知っただけではそれほど簡単に変身出来るものではありません。ただ、心のおくふかくから、ゆっくりと生きていくことへの自信が湧きあがって来るのを感じます。それが血管の中に入り、心臓から体の隅々に向けてドキドキツと音をたてて流れ始めたのがわかります。

僕はもう一人前の雄犬なんだ。どんなことにいくわしても負けずにやるぞ。この子供たちのためにも僕は
お父さんらしく立派に生きなければならぬんだ。そう思うともりもりとファイトが沸きあがって来ます。お
そらくポーランドでの生活にはいろんな困難が待構えているに違いありませんが勇気を持つてあたって行こ
う。僕は心の底でかたく決心しました。

今日は僕にとつて本当に記念すべき日になりました。僕はみんなを、抱締めてあげたくなくて寢床の中
に入りこみ、体を押付けました。子犬たちも体をすり寄せて来ます。なんというぬくもりでしょう。お乳の甘
酸っぱい匂い。子犬だった頃が懐かしく思いだされます。本当に目の中に入れてもいたくないほど可愛い
です。

そういえば、まだ小さなひろしくんをだきながらご主人が、

——子を持つて知る親の恩

ということわざをつぶやいていたのを思い出しました。ご主人や奥さんのニコちゃんやひろしくんに対す
る気持ちが良くわかるような気がします。僕にも子供つて親が自分の命に代えても大切にしたい存在である
ことが今納得出来たのです。

やがて、お乳をお腹いっぱいすって満足したのか、六匹の子犬たちは、アンナと僕の間でスヤスヤと可愛
い寝息をたてて眠りにつきました。アンナも、口元に幸せそうな笑みを浮かべて、静かに寝息をたて始めま
した。

僕もしばらく、僕の家族と一緒に安らかな夢路を辿ることにしましょう。

阿部 毅一郎（あべきいちろう）

1940 年 1 月 5 日生 長崎県出身

1963 年 東京大学法学部卒、同年通商産業省入省

1989 年 札幌通商産業局長を最後に退官、同年民間企業に就職、現在に至る。

○ 著書

1984 年 『日本的システムの総点検』（秋光 翔 名義）通商産業調査会

1990 年 『文化としての日本的経営』（秋光 翔 名義）中央経済社

○ 編著

1983 年 『どう変わる国際経済と日本』通商産業調査会

○ 論文

1989 年 『強硬論と日本の自己主張』（時評賞受賞）

○ 作詞

1960 年 東京大学第一応援歌『闘魂は』

○ ホームページ

「阿部毅一郎のお楽しみコーナー」

<http://www.linkclub.or.jp/akybe/>

○ Eメール

akybe@air.linkclub.or.jp

チビクロの冒険

2002 年 9 月 1 日 発行

著 者 ―― 阿部毅一郎

発行者 ―― 田中久雄

発行所 ―― 株式会社 **かんぼう**

大阪市西区江戸堀 1 丁目 2 番 14 号（〒550-0002）

電話.....(06)6443-2171 / FAX.....(06)6443-2175

印刷 / 製本.....株式会社 淀川工技社
